

奇譚ワラス



5 特大号

奇譚ワラス



1114.28.005

1114.28.005

マニアの方は必ず一本をコレクションして下さい。
頒価 一部 五百円 (送料五十円)
美術コロタイプ印刷 各葉解説入
全部未発表特写の女体緊縛写真

内容
猿ぐつわ 紐と目 脚地責
雁字指目 観 念 子 虫
機 台 床の置物 鞭 打
目の線 滑車吊 高手小手
縄 くさり エビ責

美しき縛しめ

九人の緊縛モデルを駆使して完全した緊縛フォトの圧巻 未発表の秘作集
代表的な縛りポーズ三十二態

32態
詳細な説明はKK通信第一三三号に
「責め写真ははしいが、印刷版に焼けたものは高くて困ると、おへしやる方は極く鮮明なコロタイプ印刷のアルバムをお求め下さい」
と並んできつと着るもの胸をわくくさせることでしょうか 全く未発表の秘作集
美術コロタイプ印刷、アルバム装釘
頒価 一部 五百円 (送料五十円)

晴雨 美人乱舞

伊藤晴雨先生著並面菊版和装
美本 定価 四〇〇円 二四

図版目次
▲人体時計 ▲天国の女 ▲美人坊 ▲島山崎のこれぞ美 九個のこれぞ美 ▲美女のなやみ ▲崩れたる女 ▲鉄砲責にされる女 ▲火葬場裏側 ▲佛々に抱かれた美女 ▲死神につかれた女 ▲特別附録 昭和十一年中行事上二ヶ月 外特別附録として先人未発表の貴重な春画文庫五章十九項に亘って詳説す 晴雨ファンに必也

● 浣腸フォト三態 第一集 第三集
キヤビネ判 各三枚一組 三百円

● 浣腸責め三態 第一集 第三集
キヤビネ判 各三枚一組 三百円

● 浣腸と縛りを併用したフォト、即ち足は足の自由を奪って身動き出来ない状態のまゝ無理に浣腸されようとする被縛者、施術者の待つ浣腸器は情欲なく通ってゆく 浣腸責めの最も出でた目撃者は、苦悶を感ずる浣腸のルッポへあててゆく

華麗な責めの色刷面貼
横トシ豪華美本、各葉説明文句入
三条春彦画 (部三百円) (送料四十円)

内容
一、山法師と静御前 五、八頁 屏おしの最期
二、女スリと岡引き 六、新撰組と女奴
三、從君と千姫 七、上野左衛門と勝元
四、大公方と侍女 八、小紫と忠臣本

「御申込みは迅速と御実をみる際
書房代理部へ
御申込次第早速重荷の上迄
送申上げます
代金引替は送料が高くなります
ので、必ず前金でお願いいたします」
曙書房代理部

奇譚クラブ臨時増刊号
サテイブラッケイズ作 吾妻新訳
アリスの人生学校
一冊 百円 (送料共)

美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く
雲々五百枚に亘る傑作口絵、挿絵
カット多数挿入

女体縛り悦虐姿態集

川端多奈子嬢
ベテラン多奈子嬢の
定評あるフォト

第一集、第二集
各(手札型七枚一組)三百円
村田那美子嬢
純情型の清新なしぼり
手札型五枚一組二百円
伊吹真佐子嬢
豊満な肉体に強烈なしぼり
手札型五枚一組二百円

急襲

手札型十五枚
一組五百円

モデル (杉英美嬢)
連続十五枚続きで女が縛られる
迄の過程を描いた最優秀作

台上の殉教者

キヤビネ判二枚一組二百円
モデル (杉、村田、坂口嬢)

全部卓絶した未発表の特写真ばかりです。
価格は全部送料共です。どうぞ多少に拘らず御申込み下さい。
女体縛りの詳細説明はKK通信第二十三号にあります。

吊り3態特選集

モデル (川端多奈子嬢)
キヤビネ判 各三枚一組五百円

第一集、第三集
第二集、第四集
二女連縛集
(中宮綾子、並川トミ嬢)
手札型六枚一組三百円
椅子責め五態
モデル (伊吹真佐子嬢)
キヤビネ判 五枚一組五百円

磔

(キヤビネ判)

第一組 二枚一組 三百円
第二組 一枚組 百円
モデル (村田那美子嬢)

半吊り二態

モデル (村田、坂田嬢)
キヤビネ判二枚一組二百円

女体各種趣向縛り写真

各組一組 (キヤビネ判) 三枚 一組 三百円

- ※ 三人得意のポーズ
モデル (村田、坂口、杉嬢)
- ※ 水辺水責め三態
モデル (萩千恵子嬢)
- ※ 悦虐遊戯三態
モデル (坂口、杉二嬢)
- ※ 後手高手小手二百体
モデル (伊吹真佐子嬢)
- ※ レインコート3態
モデル (萩千恵子嬢)
- ※ 溪流の飛魚
モデル (村田那美子嬢)
- ※ 高手小手三態
モデル (木田雅子嬢)
- ※ 制服の女学生
モデル (雲井久子嬢)
- ※ 野外全裸の縛り
モデル (村田那美子嬢)
- ※ 猪吊り3態
モデル (萩千恵子嬢)
- ※ 猿ぐつわ三態
モデル (浅野末乃嬢)
- ※ 三人得意のポーズ
モデル (萩千恵子嬢)
- ※ 蠟燭責め3態
モデル (坂口、村田、二嬢)
- ※ 腰巻縛り3態
モデル (萩千恵子嬢)
- ※ 梯子責め三態
モデル (伊吹真佐子嬢)
- ※ ナイロン女体縛り
モデル (杉英美嬢)
- ※ 鞭打ち三態
モデル (杉英美嬢)
- ※ 三嬢連縛棒吊り
モデル (杉、村田、坂口、三嬢)
- ※ 基盤責め三態
モデル (雲井久子嬢)
- ※ 灸責め三態
モデル (杉英美嬢)
- ※ 女が女を責める
モデル (坂口、杉、二嬢)
- ※ 縛りの特選
モデル (伊吹真佐子嬢)

モデル嬢 股間縛り競艶

各組（キヤビネ判）
三枚一組 三百円

問題の股間縛り、各嬢競艶、縛りマニアの絶体に見逃すことの出来ない珍品

中富綾子嬢 三態

純情可憐、芳紀正に十七才の乙女、無垢の肌に喰い込んだ痛々しい縄目

杉 芙美嬢 三態

昨年十二月号の口絵に掲載して大好評を得た作品

萩 千恵子嬢 三態

乳房を出すのさえ恥しがらる萩嬢を觀念させた股しぼり

伊吹真佐子嬢 三態

豊満な肉体をタテに喰い込ませる股間しぼりの縄目 縄

坂口利子嬢 五態

キヤビネ判 五枚一組 五百円

十数態の中から最も強烈な股間縛りの代表作を選ぶ、股間縛りを流行させた問題の作品も含んだ特別品揃い

女性切腹擬態写真

○女性切腹姿態写真○

各（手札型六枚一組）三百円

初めて試みた女性切腹の好評作

第一集（三人のモデルによる各態）
第二集（裸体着衣共代表的各態）

○真刀を用いた女性切腹写真

手札型六枚一組 三百円

真刀が白い腹部の肌へグサリと刺さる思わずゾクリとする真迫した切腹フォト

○血紅使用の女性切腹写真

各（手札型六枚一組）三百円

血紅によって女性切腹の様相の経過を示した珍しい文獻的なフォト

第一集 第二集

○女性切腹シリーズ写真

連続八枚続き（順を追うたもの）

キヤビネ判 八枚一組 六百元

○女性切腹「立腹」写真

手札型 三枚一組 二百円

傑作・マゾ・フォト

春日ルミ嬢構成
各組 キヤビネ判 三枚一組 三百円

足舐三態

A、椅子に腰掛けたルミ嬢が男の口の中へ足を入れてい。B、クロロズ・アツブ、C、男が足を持つて舐めようとしている。

足蹴三態

A、ハイヒールで頭を蹴る、B、蹴り倒される男、C、後手に縛られた男が、思うままに頭を蹴られている。

凌辱三態

男性をケダモノのように足下に踏みこみ、喜ぶルミ嬢の得意のポーズの中で特にマニアの好む凌辱の姿態

人間椅子三態

A、胸の上へ灰皿を置いて女王様の休息の椅子となっている、B、人間ソファ、C、女王様の膝下に屈伏するドレイ

犬の折檻三態

A、芸を仕込まれるワン公、B、女主人を背にするワン公、C、首環とクサリで仕込まれる。

人間馬三態

A、乗馬ズボンに馬靴の女に股がられて拍車を加えられる、B、鞭の苛責、C、乗馬の訓練、

マゾ・フォトのベッド・シーン
キヤビネ判 4枚1組 400円

一、馬乗り 二、首締め 三、押え込み 四、足台



奇譚クラブ白五月特別増大号の目次

「白面鬼」

残虐なる女性達

明治年間の新聞記者

結々、女性切腹断想

アブ追求三十年の回顧

林弓志雄
藤見郁雄
白金紅次男

竹谷十三作

森本愛造・沢

吾妻新

田谷敦生

土屋淑人

山田正実

血染の毛綱

幽囚十ヶ月

さいいたふう

アブ・ホート談義

ボクの責め方

悪魔

奈落の欲情

「呪い塚」縁起

現代マゾヒズム芸術時評

あわれ誠一郎

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

映画小説

れい子素描集

(控之ノートより)

滝れ子画



緑に包まれて

〔本誌特写〕

陽は真上から照らしていたが、林の中はうす暗かった。
ケーブル一枚を纏っただけの那美子嬢は観念の眼を閉じて
素直に後手に縛られた。

村田那美子嬢





モデル 萩 千恵子



萩 千恵子嬢

緊
縛
ポ
ー
ズ
集

村田那美子嬢

腰
卷



紐による幻想

くびれ

川辺砂登子嬢

光沢

中富綾子嬢





「どうだい、この坐り心地は？」

ハイ、恐れいました。
謹んで貴女のシモべとな
ります。

春日ルミ嬢 「何をそこでブッブッ言ってるの、こんなポーズでお客さんに会
うなんて、考えただけでも愉快ネ」





「動くんじやないッ」

ストッキングで後手に縛られ、犬の首輪をつけられた小沼正三の哀れな恰好、

春日ルミ嬢 「じたばたすると、ハイヒールでその馬鹿面を蹴り上げてやるヨ」

馬乗り

春伊 日吹 二嬢名コンビ 写真

全く、これは勇ましい、誰か、この下敷きにしてほしいという希望者はいませんか。





後手を合せて縛る、草の芽がお腹にさゝって痛いといってもきゝません。

縄は胸へ二巻、三巻と締められてゆく、起き上ろうとするのを押さえつける





頭をお尻で押えつけられては、いくら足をバタバタさせても追いつきません。
縄尻を始末すると、ぐっと乗りかゝって猿ぐつわをかませます。



真刀を用いた切腹擬態

これは本当に斬れる短刀、然し弾力性のある乙女の肌は、刃をそっと押し当てた位では、突き刺さりそうにもありません。



生きた沓台

「私がい、というまで、そうして、じっと
しているんだヨ」

春日ルミ嬢、湖田平雄



靴下を
お穿かせする。



美 禪

お腰を脱ぐ (色は赤)



組上の魚

残虐なる女性達画集

森本愛造提供



(1) 女主人
(Seine Herrin)



(2) 残忍
(Grausamkeit)



(3) ドミナの膝下
(Er Kniet Zu ihrem Fü Ben)



(4) 従順な奴隷
(Der Gede mütige Sklave)



(6) 鞭を持っておいで
("Hol' der Peitsche!")



(5) 残忍 (その二)
(Grausamkeit)



(8) 女主人と奴隷
(Die Herrin und die Sklave)



(7) 雄姿
(Herrische Schönheit)

桃源境

伊吹真佐子嬢



笞のあと

「さあ、それを穿いたらサツサと仕事場へ行くんだ。怠けるとまたこれだぞ」やっとな門まで辿りついた黒人の奴隷女は、目に玉のような涙を浮かべながら、笞を持って仁王立になった白人の顔を見上げた。

畔亭数久・画





ボクを裏切った恋人

「たった、これぼちで口止料か、いずれは社長夫人ともなろうっていうお前のごとじやないか、もう少し出せないのか？」

北原純子・画

ダルマとファッションモデル

「フツフ、、、八頭身の美人様も、こうなったらダルマと同じさ、先に悲鳴を上げた方が負けとするかね、アッハ、、、ア」

北原純子・画



拷問図絵

滝れい子・画

(A) 机の

上にギョッと

足先がつく

位に後手を吊り上げて竹

刀で尻を叩く。

(B) 仰向けにした口か

ら無理矢理水を飲ませる

(C) 指と指の間へエン

ピツを挟んで、握りしめ

て苦痛を与える。

(D) 縛りつけられて身動きも

出来ない女の身体に火をつけた

新聞紙を当てがって肌を焼く。

舟橋聖一氏作

「娼婦の手帖」より



思想犯を取調べる 特高刑事の

C



D



妾宅で

杉原虹児・画

「えい、じれったい。今日は妾、本当に怒ってんのよ。何時もの遊びとは違うわよ」





介錯無用

杉原虹児・画

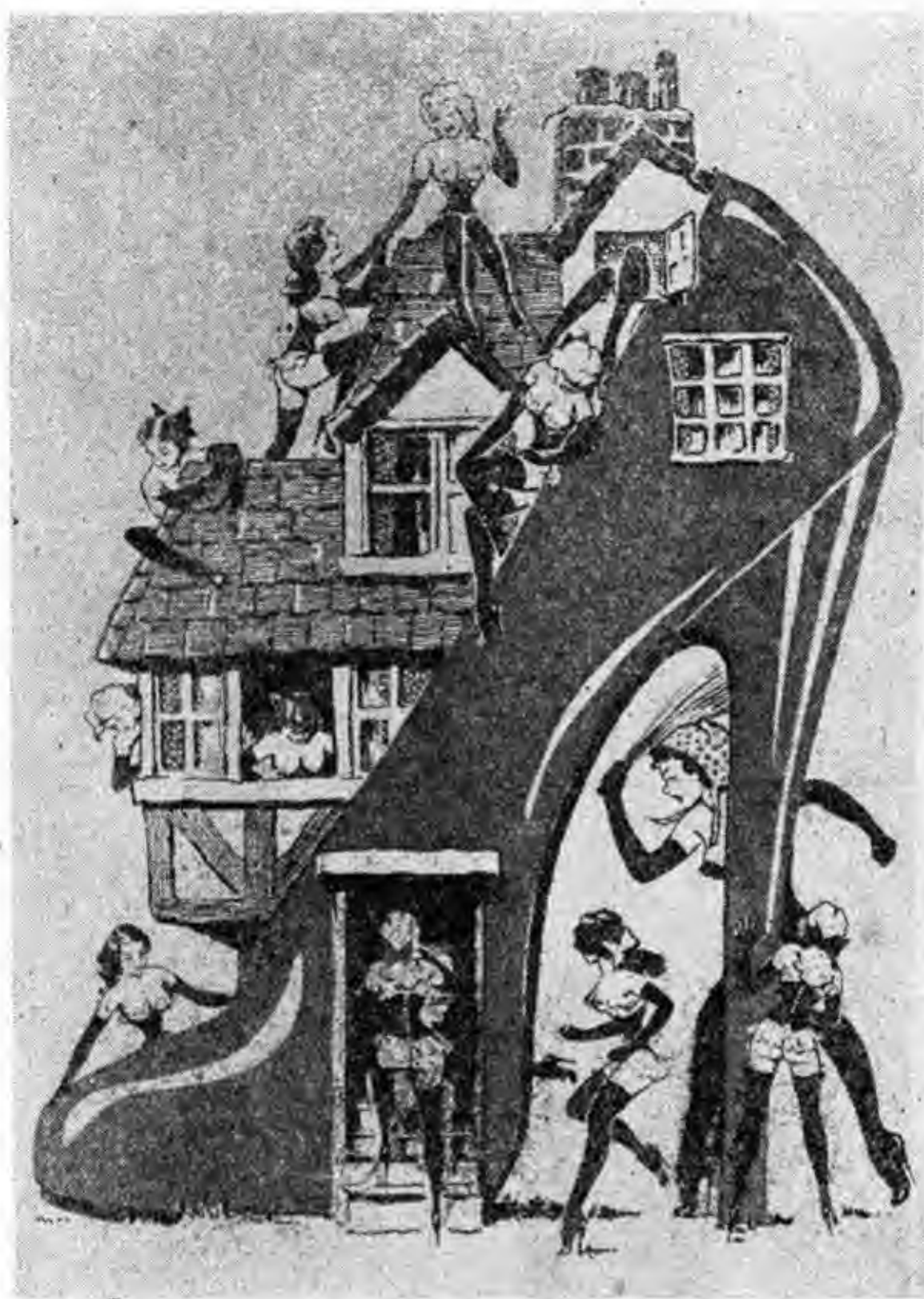
「ど、どうか、この儘死なせて……」見るに見兼ねて、にじり寄る
検視に、苦しい息の下から歎願した。

水責め
奴隷市

地下の密室に囚じ込められた美女は刻々と迫る水嵩に恐怖の眼をとじていた。
世界各国から誘拐されてきた若い女たちは奴隷商人たちの手で商品として売られてゆく。

依田精二・画





ハイヒールの学校 (アメリカ雑誌BIZARREの表紙より)

文化人の文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1955年 5月特大号

(第九巻 第五号 通刊第八十号)

巻頭論稿

自らの問題として

倒錯研究の新展開を讀んで

林 弓 志 雄



(一)

前月号の、成瀬亮氏の『倒錯研究の新展開』は、その題名に恥じず、多くの示唆と新味をもって迫るものがあつた。

それにも拘らず、読後、私の心に一抹の寂寥さが感じられるのはどうしたことであろうか。読み返すうちに、それが成瀬氏の

立場にあることが諒解された。

成瀬氏の論説は、正鵠を得ている点においても、数多くの引例においても、また構成においても、実に円満な常識が働いていることが強く印象されたのである。

したがって、氏は『現代に生きるものの悩み』の共通性を謳いはしたが、『倒錯する者の悩み』については、殆んどかえりみ

られるところがなかった。

要するに成瀬氏は、冷静なる傍觀者的立場から、倒錯研究を學術的に論じておられるようであるが、そして、そのことは、また重要な社会的、學問的意義をもつものではあるけれど、私の読後感としては、ハツキリ申して、物足りないの、一語に尽きよう。

成瀬氏の、このような一般論的立場に対して、私は、倒錯者自らの問題として、倒錯の研究に呼応したいと思うのである。

さて、成瀬氏は倒錯の本体及び正常と異常の限界について

『では、なにが正常で何が異常なのか……誰にもよくわからない、と答えるのが正しいであります』

といい、また

『正常と異常の差は、行為そのものではなく、その行為と環境と条件によるものだということがハッキリしてくるようです……この一番大切なことを、今まで指摘した論説は不幸にして私がはじめてかも知れませんが』

と極めて自負に満ちた態度で論破しておられるのである。私は、この成瀬氏の所論に反駁するのではなく、ここに自らの問題という基点から、成瀬氏の所論と、全然異ったカラーの見解を述べてみたい。

成瀬氏の説は、R・ミヘールズの、性の世界は境界線の世界であるという解釈と軌を一にするもので、性の謎は、正常と異常をアイマイにするというのであるが、私

はこの点で、私なりの仮説の定義をまず下しておきたい。即ち

正常とは、倒錯せずにおれる者のことであり、異常とは、倒錯せずにはおれない者のことである。——と。

(二)

問題は、倒錯せずにはおれない者の側にあるので、倒錯的情緒が、成瀬氏の云われるように、『人間には誰にだって多少の倒錯傾向がある』という普遍性も、倒錯せずにおれる者にとっては、むしろ問題外である。それは恰度、芸術心は多少なりとも誰にでもあるが、芸術せずにおれる者にとつては、生命の糧としての価値を持たないのと同断であろう。

『私は倒錯せずにはおられない』という、ぎりぎりの血の叫びや、狂わんばかりの魂の激しい嘆きを訴える人の心には、妖しい生命の神秘がひそむのではないかとさえ思われるのであるが、成瀬氏はこの問題について、特に同性愛の素因と心理の項で「それが、果して、現在社会の圧迫によるものなのか、それとも、あくまで個人その

ものの性本能の抑圧から招来されるものなのか」といい、

「心理的かつ後天的倒錯ということになります」

と結論づけておられる。

倒錯が、心理的かつ後天的だとする理論の根拠についても、私には多少異論はあるが、そもそも、倒錯せずにはおれない、ということとは、肉体的、精神的素因でなくてはならない。

例えば、受動的同性愛者のすべては、内分泌の比重が、女性ホルモンの方が優っているという事実だけをとり上げてみても、肉体上の素因に触れることができるのである。

肉体上の素因については、現在未だ明らかにされておらないものもあるだろうが、この肉体上の神秘さは、外見上は成瀬氏の言われる通り、肉体的にも機能的にも完全な男性であるだけに探り出し難いものがあるだろう。

ホルモン産生の比重は残念ながら現代医学では計ることはできないが、しかし、四肢の柔軟さ腰部曲線の優美さ受動感覚の繊

細さなどの諸点から診査して、女性ホルモンの過剰を指摘することは可能である。(男でも女でも、両性ホルモンが分泌していることは説明するまでもないだろう)

そこで注意すべきことは、同性愛者において、受動的な者は、その一生を通じて、ソドミアの傾向が持続されるということであって、俗に言う男色家なる者に限っては、一時的な好奇癖から、そうなる者もあるということである。

同性愛者の場合、アクティヴとパッシヴに区分するが、実は、その真性な者は殆んど移行型であることも知っておく必要がある。

さて、私はここで、精神的素質について述べねばならないだろう。

倒錯心理というものは、真実の意味では、人間の気質の一つとして見るべきものだと思うのである。後天的な環境や条件にのみよって発現するものでも、導き出されるものでもないようである。

性格は後天的に造られるが、気質は先天的である。とする説が正しいと認められるのなら、倒錯は肉体以前のものでなければならぬ。

ばならない。

事実において、倒錯する者は、この先天的な気質なるが故に、それを内因的な業として、痛切な、苦悩を味つてもいるのである。変えることのできない人間の定めとして、悦び、もたえ、苦しみ通しているのである。

仮りに倒錯が「心理的かつ後天的」なものとするならば、ヒロポン患者並に、矯正院でも設けて、環境と条件を是正すれば、或は、地上から一掃できるかも知れない。

だが——私達の倒錯の気質は、いかなる権威を以てしても、剥奪したり、変更させたりすることは不可能なことである。

(三)

倒錯は背徳か。この問題は、こゝに至つてまったく噴飯に価するもので、倒錯は気質であるから、背徳とか罪悪とかの道義的な物尺で計ることのできないことは明白である。

フエティシズム、マゾヒズム、サディズム、同性愛——そのどれ一つをとってみても背徳だの、罪悪だのに相当するものはない。

い。

仮りに、私とSが同性愛を愉しもうと、私がA女に鞭で撃たれようと、彼女を縛つて悦ぼうと、道徳に反するということは言えない。

しかしながら、一般に、倒錯する者を変態性慾者と呼んで、指弾し軽べつするところの、慣習道徳との間に、避け難い対立があり、眼に見えぬ迫害を蒙っていることは事実である。

その迫害から逃れ出ようとするために、私たちは、ある時には日蔭者のような、心理的ヒケ目を感じてもいる。

そして、さらに重要なことは、自己の内面的道徳との間に、重苦しい相剋を感じているということである。なぜならば、倒錯せずにはおれぬ自分と、生活全体のバランスを保つために、不断に深刻な心の葛藤を演じなければならぬからである。

ここで成瀬氏の言われる「本態と変態の差は、行為そのものでなく、その行為と環境と条件による」という説を意味してみたと思う。

この論法は、生長の家の谷口氏の好んで

用うるもので、つまり谷口氏に言わせると「性行為それ自体は善でも悪でもなく自然であるが、その相手の人、時、所を間違えると罪にもなり不道德にもなる」ところなのである。姦通だの、強姦だの、少女姦など、みな、人、時、所の分別のつかぬために起った犯罪であり、不道德であけるわだが、成瀬氏の言われる、環境、条件とは同義語であろう。

なるほど、倒錯者にとっては、余程環境と条件に配慮を要すると思われるし、その戒めもあたにはできないが、しかし、そのことは、倒錯であろうと正常であろうと、社会生活を営む者のすべてが自戒すべき倫理であって、格別に、倒錯者にそれを言い聞かせようとする成瀬氏の態度は頗る奇怪なことと云わねばならない。

明らかに言って、私は甚だ不快なものを覚えるのであって、釈然とせぬものが心に残るのである。

先にも私は、倒錯する者には、全生活とのバランス上の苦悩があると言った。しかし、その苦悩は、私達の近代的教養によって、きびしく倒錯情緒が不断に抑制され、

規範され、純化されるところから生れてくることに思い到らねばならない。

「それに較べて、反社会的な——背徳的な性行為（犯罪的な集団暴行や、強姦、少女姦などを含めて）は、もとより倒錯とは何の関るところもないが、統計的に言って正常な性感覚を持つ者が、社会的な原因や、その無知からくるところの逸脱によって惹き起しているのである。

この問題については、今少し多岐に亘つての意見を述べたいが、先に倒錯者の人間的苦悩に触れて行きたい。

そもそも、宗教にしても芸術にしても、それが深い人間の本性から発露するがために、苦悩を通して真理に近づくこととするのだが、倒錯もまた、性の享樂（ワタリエーシヨウ）であり耽美ではあるが、人間の本性から流露するものであって、負える十字架の苦悩は決して生優しくはない。

ならばこそ、倒錯と人生に思いをひそめて、懊悩することは、倒錯者のひとり往くべき道であるかも知れない。

こうした、人間の良心に刻み込まれた苦悩は、成瀬氏の言う心象や素因だけの究明

で事足りぬことは云うまでもあるまい。

成瀬氏は、芥川文学の「好色」についての解説をかねて「私の言う『倒錯行為を営むに到る素因と心象の追求』とは、こういう芥川文学に見られるものを指しておりま

す」と言っておられるが、この作中の平仲は、決して異常者でも倒錯者でもない、と断っておられるように、よし、愛情生活の中で倒錯らしいものが匂ったとしても、倒錯者のそれとは、似て非なるものである。倒錯者の道は、そう云ったところにあるのではなく、むしろ、ジャン・ジュネの「泥棒日記」のように、そしてジュネの全作品を通じてみられるように、孤独で、妖しい倒錯者ジュネ自身の骨を刻むような、文学的精進によって歩みつけた道こそ——私たちが自信の道であると思う。

言い換えると、私たちは。その内奥（うち）にもっている倒錯と、全生活のバランスとの釣り合いや、現実とのギャップや、慣習道徳（モラル）との深刻な対立、摩擦の中で、いかに耐え、いかに生き抜くかということ、倒錯研究の新展開の課題とすべきであり、倒錯研究を人生問題として真剣に取り上げてい

かねばならないと思うのである。

でなければ、およそ、倒錯研究の意義が単なる好事家の趣味には迎合されるだろうが、私達にとっては、生命なき空^{そら}ごとしか感じられないのである。

〔四〕

成瀬氏も、その論文中に倫理や風紀の点から「ムリな取締りはやるべきではありません」

と言っておられるが、むろん、本誌の如き特異の性格をもっている文化誌を、道徳的美名の下に弾圧されるようなことがあれば、それはフアツショの再出現だと非難もされようし、また——私たちが人生上の価値を本誌に見出しているという絶対的な支持を想えば、みだりに、無理解のために文化的悲劇を招来してはならぬのであり、文化社会の健康のためにも本誌の意義を昂めることに意を用うべきである……と私達は衷心願って已まない。

そのために、不当なる倒錯者へのいくつかの濡衣を干さなければならぬだろう。このことは倒錯者とは何か、の一般的疑問

や、現在行われている偏見への是正のために、そして倒錯者自らのために、今後もその努力を怠ってはならないと思う。

私は次の諸点について少しばかり、その意味での見解を述べたい。

私達は世俗的な好色家でない。成瀬氏は、デカダンス派の文学を解説して「どうやら、デカダンス派文学の特徴は倒錯趣味の本質とピッタリ一致するようでありまして……」

と述べておられるが、私はとんでもないことだと思う。官能的刺激に酔い痴れて、酒色の墮落の中に人生を混迷させている、世紀末的な現象としての官能主義と、倒錯の本質は全然異っていると思う。

その証拠に、私達はデカダンスな風潮に（文学論は別とする）激しい嫌悪の感情を抱いているものである。例えば、現代風俗の表象とも言われる「売春街」の実体に対して、そこで、好色家共がくり展げている性慾解放の姿態は、倒錯とは似ても似つかぬ愚劣なものばかりである。好色家共はそこで少女の肉体を探し廻っている。そして「ある薬品で子宮筋を緊縮させた女」を

抱いて少女姦の妄想を満悦したり、アルパイト嬢と称する売春婦にうつつを抜かしたり、愚にもつかない卑俗、ワイセツの濁った性の泥沼に這いつくばっているのだ。こんないやらしい醜悪さ……倒錯の情緒が一緒であるなどとは、錯覚も甚だしいと言う外はない。倒錯への陶醉には、決して動物性の好色で割り切ることのできない、綾なものが匂っているのである。それは、本誌に現われる倒錯文学が、いみじくも示してくれているのである。

私達は危険分子ではない。ここでいう危険分子とは、出歯亀的な者を指すのだ。彼らは野獣のように、自己の劣情を満足するために手段を選ばない、そのために、強姦傷害などの、忌むべき犯罪をすら起すのである。

彼らには、性の深い欲び、哀しさ、耽美という文化的感度がない、春情した劣情の遂行だけがあるのだ。

恐るべき性的無知、悲しむべき教養の欠除、人格の喪失である。かかる輩と、倒錯者を混同する社会の非常識には痛憤するばかりである。

屢々問題になる少女姦についても、倒錯者への濡衣はひどいものがある。少女姦といえど変態倒錯者の仕業だと、取締当局も思い、新聞記者もそう書き、世評もこれに頷くのである。なんという偏見だ。

強姦者は倒錯でも何でも無い、通常の間である、彼らの目的は劣情の満足である。少女には隙が多いということ、少女特有の性魅力（孔子もいつている。男女七才で席を同うせず……と）の誘惑、そして抵抗が殆んどない、などの条件が、強姦者をして少女に毒牙を磨かしめる結果となるのである。

それと最近の集団強姦は、たしかに時代的性格だと思える、これらの強姦者は、決して倒錯者ではない。倒錯者は犯罪とは縁の遠い存在である。

残酷なる殺害 バラバラ事件とか、生首事件とか、リンチとか、一連のグロテスクな探偵小説的事件も、よく性的サディズムと混同される。

彼らの多くは、性慾に關係のない破カイ心理をもっているものであって、性的サディズムとは全然異分子である。

私たちのサディズムは、性の享樂であって、成瀬氏の指摘されたように「異常なる愛情行為」に過ぎず、少しも兇悪は認められないのだ。

文化社会の平和と秩序の攪乱者は、私達の側にはない。むしろ、政治それ自身の中に、社会自身の中に、そうだ、デカダンスと貧困の中にこそあるだろう。

〔五〕

最後に、自らの問題として、二、三の倒錯心理について、私の疑問を卒直に披瀝して、成瀬氏や広く読者各位の御教示に俟ちたい。

成瀬氏は同性愛問題について「パッシブの側にまわる男性が、本来堪え忍び難い疼痛であるべきなのに、そうした倒錯行為を悦び……という事実は一体どう解釈していいのでしょうか」と言われ「われわれをひどく悩ませます」と疑問を投げかけておられる。

そこで私は想うのだが、男性の直腸を、女性のヴァジナに代替させることは、男性同性愛の性行為として見られるが、しかし

決してその全部ではないのではないか。

或は、成瀬氏はここである種の先入観的な誤解に捉われておられるのではないかと思う。実際面で、同性愛者が、必ずしも男女のその如く不可欠に、そうした行為をしているのであろうか。私はそう思わない。

疼痛も伴わないで、アクティブ側もパッシブ側も、充分に満足できるテクニクがあるということは知っておかなくてはならないだろう。（断っておくが男娼の用うる常套のあれではない）

したがって「直腸の刺戟」のマニヤには、男もあれば女もある、それに堪えられる体質と、そうでない体質もあって、マニヤは堪えられる体質の人々であらう。

と言うのは、外人には Paedicationmuli-ism の風があつて、それを強要して、ひどい裂傷を負わせ、失神させた例も沢山ある。その反対に、女性であつて、しきりにそのことを求める人もあつて、局所の疼痛は堪えられないほど激甚なものではなく、充分刺戟の興奮を味わうことができると告白している。

同性愛の場合、パッシヴ側の男性が、激痛に泣きながら、呻きながら、恋しい男に身を捧げる心情には、愛にすべてを捧げつくす、あのマゾヒズムな情感が漂っているように思える。

だが、こうした疼痛を伴う行為が、日常に繰り返されることは、必ず、肉体的疾患を起させるに違いない。

したがって——必ず、そこには限界というものがあるべきだ。つまり疾患を予防するための方法が、代償的に用意されていることは想像に難くない。

将来、こうした性行為に変遷があると思うし、形態のテクニクの変化もあることだと私は信じているが、これについて、なお、私の疑問とするのは、直腸刺戟の己み難い願望だけで同性愛に耽る者があるだろうか……と言うことである。

以上、私は成瀬氏の論説を読んでの所感を極めて雑把に羅列したが、すでに紙数の限度が来たので、急いで結論的なことを言わせて頂こう。

成瀬氏は、今や日本の異色ある文献雑誌

としての本誌に、「きびしい科学的メスを以て、倒錯行為を鋭く追求し、徹底的に解剖せよ」という意味の希望を述べて、それが、倒錯研究の新展開の視野であると示唆された。

この成瀬氏の主張に私は異議なく賛成したい。たしかに、それは本誌にとって半面の使命であるからだ。

だが、他の半面の使命は、倒錯者の人生問題の解決、その人間的苦悩の救い、と言うことであることを私はここに「自らの問題」して論じたのである。

かくて、本誌が、文化的意義の純化向上と、高いモラルの昂揚に多大の貢献をされることを衷心より期待して擲筆したい。

(三〇、一、二五)

煙草 畔亭数久画・(京都・R大生アイデア)



アブ軽評論

たのしむべしアブ・セックス

藤 見 郁

或る会社の、せまいオフィスの中。
机と椅子がぎっしりと並べられて、せまい
部屋は尚更せまい。

女の事務員が椅子から立って部屋の外へ出
ようとする。大方、トイレットへでも行くの
だろう。

「すみません、一寸通して頂戴」

男の社員達の坐っている椅子が行儀わるく
うしろの壁際まで押しつけられ、若い社員は
上役のいないのを幸いに、だらしなく机の上
に足を二本のせて休息という風景。

「ねえ、お願い、一寸通してよ」

男の社員は意地がわるい。

「どうぞ」

と云いながら、壁に寄りかけた身を起そう
としない。

「どうぞと云っても身体を起して椅子をひい
てくれなければ通れやしないじゃないの」

「どうぞ前をお通り。僕の足をまたいでもい
いから」

その足は二本とも机の上に橋渡しになって
いて、スカートの身ではとてもまたげるもの
ではない。

「ねえ、意地悪しないで通してよウ……」

「どうぞ遠慮なく前をまたいで通り給え」

他の男の社員たちはこの情景を面白そうに
ニヤニヤ笑いながら眺めている。

まだうら若い女事務員は、男達に注視され

て恥かし気に身をうねらせ困っている。その
くせ、本気になって怒りもしないのだ。男に
からかわれているのが嬉しいようににもみえ
る。どこにでも見られる、男の軽いサディズ
ム風景である。

○

変態だとか、変質者だとか、さもおのれは
常人で、性に關しては至極淡泊のようにみせ
かけている人間はよくその辺に多いけれど
も、さてその真実はどうか。

そもそも人間というものは複雑な動物であ
る。その複雑な動物が、大昔に作った道徳と
か規律とかを現代の人間にあてはめようと躍
起になるから、複雑な人間性が余計複雑にな
る。

人間の性質というものは百人が百様、千人
が千様に違う。したがって性のたのしみ方と
いうものも百人が全部違う。もし、それが全
部型にはまったように同じものだったら、こ
の世の中はなんと味気なく、つまらないもの
になるだろう。

しかし、かつてのあのいまわしい時代の修
身の教科書の如く、非人間的な聖人を育成す
ることに興味をもつ人々が又えらくなりはじ
めたから、うかうかとしては居られない。戦

争をはじめようとする人が一番先に準備するのが、性の弾圧というやつだ。しかし、どんなに弾圧しても、人間の身心の中には、生きている限り、性は燃え続けて絶えることはないのだ。

○

あこがれの男装の麗人が、さっそうと舞台へ登場する。シルクハットを手に、タキシードをすらりと着こなし、客席に微笑む。すると一時に喚声が高まる。「キヤア」とも「ワア」ともつかない、一種異様な声が、客席の何百人かの乙女たちの咽喉から発するのである。

スターがエプロンステージを一周する時、たとえ一寸なりとも近くへ寄らんと、客席の娘たちはかぶりつきへ突進する。夢中で舞台の上へ手をさしのべて踊っているスターのズボンをつかむ、引っ張る、叩く。或いは感きわまって、ワンワン声あげて泣き出す。

門外漢には、どうみても普通の風景ではない。ラブノーマルではある。

しかし、ラブノーマル結構。歪められた世相の性のはけ口が彼女らの喚声にある。権力や法律が彼女らの喚声を押えても、やがてはそれが別の形の喚声となって、何処からか燃

えだすものだ。

同性である歌劇のスターの楽屋へ押しかけるファン。スターが鼻をかむ。その鼻紙を捨てると、早速拾い上げて後生大切にハンドバッグへしまい込む娘。舞台靴を素早くスカートの下へかくし込むファン。靴そのものが欲しいわけではない。あこがれの人の足の汗と埃と体臭の香が残る靴だから欲しいのだ。

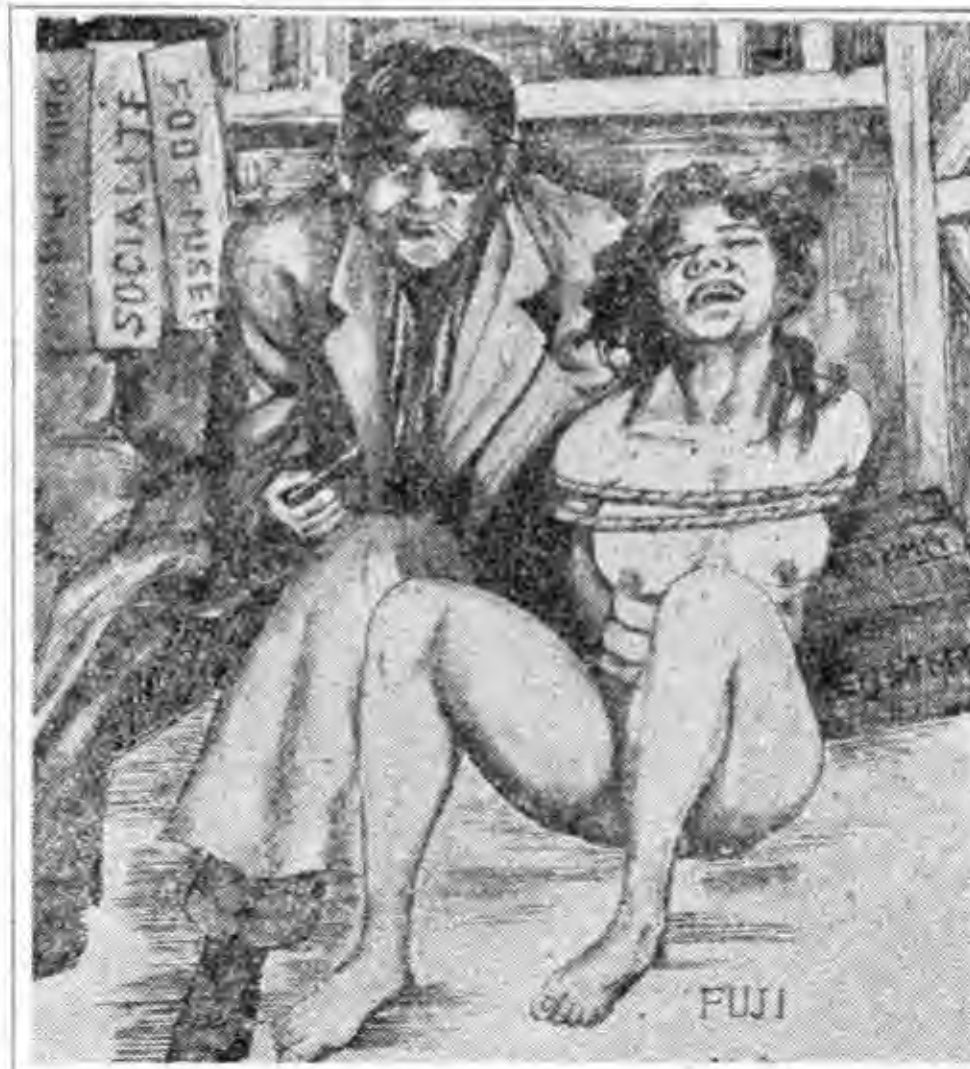
スターが菓子を食べる。半分食って下へ置くとすぐ一人のファンの手が伸びて、アッという間にそれを食べてしまう。腹が空いているわけではない。スターの唾液のついた食物を自分の胃の腑へ収めたいからだ。

この程度のラブノーマル風景はどこにでもみられ、誰でも知っている。だからもう珍らしくない。珍らしくなくなると、人はラブを愛すると思わなくなる。

人質

藤木仙治

ウフフ、ハ、さあ俺を捕えてみろ、俺のそばへ寄ってみろ、このコルトが、この人質の女の胸へ火を吐くぞ、娘の命が欲しければ黙ってひきさがれ、俺を逃がせ、そうすればこの女の命だけは助けてやるぜ……。



或るエロ新聞の記事にこんなことが載っていた。

ストリップショウの踊り子たちのゴシップ

である。

熱心な客が一人居て、踊り子のパタフライを欲しくてたまらず、古いのをゆずってくれと、申し出たそうである。そのストリップパーも面白い娘で、その客があまり熱心なので、遂にゆずってやったそうである。

最後の接吻

藤木仙治

手首を前に縛られた女が脂汗を流しながら床を這い、恋しい男にじり寄る。廃屋の黄昏、塵を透す光線、二人の背後にせよら笑うビストルを握った悪魔、椅子に縛りつけられた男と、息も絶え絶えにリンチを受けた女との、火のように熱い最後の接吻。

(ミツキ・スピレーン原作映画「指紋なき男」より)



そのゴシップを書いた記者は、その客をヘンタイ呼ばわりしていた。

その記事を、四、五人の男達の前で面白げに読み聞かせた人間も、

「世の中にはヘンタイが居るね」

と、わらった。聞いていた四、五人の男も

相槌をうってわ

らったが、案外

そのゴシップの

中の男を羨む者

も居たかも知れ

ない。他人に知

れないで、そっ

とももらえるもの

なら俺も一つも

らってみたい。

その位の好奇心

は、ことを好む

成年の男子なら

大抵あるだろ

う。又、あって

もさして不思議

ではないだろ

う。

そういう話を

すると眉をひそめる人間が居る。そういう人間に限って心の中では何を考えているか知れたものではない。

人間がワイ談にうつつをぬかしている時ほど無邪気で、天真らんまんて愛すべき状態にある時はない。

○

エロというものはたのしいものだ。大学教授も、首相も、乞食も、サラリーマンも、女性代議士も、それぞれ性生活を営む。それが人間の重要な勤めだ。我々の一挙手一投足みんなそれぞれエロにつながっている。

戦後日本は解放されて、性というものが罪悪視されなくなったが、それはまだやはり観念的なもので、実際には、まだひどい前時代的な面が沢山ある。我々はそんなことには負けずに、もっと性のたのしみ方を研究するのだ。他人に危害を加えない程度に、おのおの変った性の生活のたのしむべきだ。

おせっかいな奴が、よけいな口ばしを入れたら、「君はエチケットを知らないね」と、冷笑してやることだ。

働くときにはしっかり働き、働いたあとのたのしみ方に、他人の指図など受けたらたまらない。

(了)

き も の シ リ ー ズ

『ベ ス 単^{たん} 行^{あん} 脚^{ぎや}』

白 金 紅 次

私が係長になって三年目。

『ねエ、たまにはあたし達の写真も撮るとき
たいわネエ……』

と敏江から催促されたのが一つのきっかけで、神田の写真機屋のショウウィンドの片隅に半分塵に埋れた中古品を買ったのが、年も迫る暮れの或る日だった。メーカーとか性能などと云う七面倒くさい事は旋盤工上りの私には少々苦手で、只写ればいいんだろう位に高をくくって、工場の休みを利用して撮っては見たものの

『嫌よ、こんな恰好は……ちやんとした時に
して頂戴よ……』

と女房が文句をならべる時に限って帯から
上がなかったり、

『ようし、澄しているよ……』

と狙らったやつがぼけてみたり、兎も角ろくな写真は撮れなかったのは、今考えてみると焦点の癖に、と苦笑を禁じ得ない位にらくだった。そうこうするうちに、世帯を持つて五年目の正月が仮住いのうどん屋の離れにも公平に訪れて来たが、子供一人を中心のんびりした正月気分は

『ねエ、今年の恵方は東の方だから成田山で
もお詣りに行ったら』

と御注進あつても、まさか羽織袴で罷り出

る程の余裕は相も変らずない。

『どうだい、正月気分出してお前も一張羅着て見ろよ、向島の叔父にも年賀に一寸位顔を出すんだらうに』

『えゝ、一日位は粧かして上げてもいいゝわ、こんな時に貴方の写真機が役立つのよ、あんまり上手じゃないけれど……』はよくぞ女房学を心得たもので、正月二日、工員家族にふさわしく化けるだけは化けては見たものの、子供を抱き、型の通りの年賀廻りは頗る平凡であつた。

肩から如何にも高級カメラここに在りと半分見せて歩く今の世の中と違って、在るか無

いか判らぬ小箱みたいな写真機を手に提げて、たゞシャッターを押せば何か写るカメラは気が楽なものである。明るいうちに年賀を済まして帰る途中忍ばずの池の端に出た。たゞさえ長閑な正月は、万歳や鳳上げに加えて今日だけは野郎も混じる羽根つきで、通りは美しく賑やかだ。

『奇麗ねエ、アレ芸者衆でしよ、裾模様の紋付きで、下谷の妓さん達か知ら、大きな幸四郎の羽子板でやってるわ。』

と敏江がそばから突つゝくのを見逃す亭主でもあるまいものを、女の敏感で眼くばせしたのがそもそもこのネタ病み付の初めとなつたのはお目出度い限りであつたのだが。

『勇敢にそばに行きなさいよ、男の癖に心臓強いんでしよ、ほら、あそこを撮るのよ、かまわないわよ、駄目？ 撮つたの？ 心細いのね。』

何しろ上からのぞきこむ一種四方の凸面ガラス玉のフアインダーにお奇麗処の姐さんの動態はいくらお目出度い正月だからと云つてそう易々撮まる処の騒ぎではない。おまけにクロームと云うフィルムだったから相手が速いと、とても追っ付けない。敏江の助けだちを片方の耳で聴いてチラリ相手を見、又チラ

リカメラをのぞく、いや早やお寒いのに冷汗をかいてともかくその場は終つた。

序いでだから病み付第一頁の現像印画を御披露すると、高島田が揺れてるのは我慢するとして、サッーと羽子板を振つた芸妓某さんの腰から下が開いて鹿の子絞りの長襦袢の左前が後ろに捲くれ、印画だから黒く撮つてはいるが、真紅の蹴出しが二三条の襷目も鮮かに真一文字に翳えり肉付きのいいふくら脛に白足袋が割合鮮明に撮れているのには『よく撮れているじやないの、傑作よ。』と敏江が賞めてくれた程の上出来、もつともこんなものは一枚ぐらいなもので、あとの三四枚は何が何かさっぱり判つたものではなかつた。

五枚に一枚位は撮れる自信は、取敢えず早速すずらん亭のかおる嬢から始まつて酒で浮かれるお忍びの姐さんにまで及んだが、会社のおえら方や役人衆と違つて、常勤の工員風勢はそう思う時に相手を呼び出して撮つてやろうなんて暇があるう訳けはさらさらなく、たまの休みは銭湯で一週間の垢を落して横になりたいたいのが勢一杯である。それが係長となつたのが運の分れ目、週の半分は会社の用で外をほつき歩かなければならない、だから嫌でも病み付きに毛が生えて来ることになつ

た。

『いいから途中で遊んでいらつしやい、精々観てあげるわ、どんな女の人撮るか楽しみよ、その内貴方好みの姿をしてあげる。うんと腕を磨いていらつしやい、大丈夫、あんたの女房ですもの、上手に妬いてあげるわよ』と分不相応の中級月給取り気分でここに及んで告白じみるがうれしい小市民風景の一つであつたろう。

設計通りの品物を納めて帰る途中よく銀座の松屋の露路を通る。その四月初めの突風は今でも恐らく変るまいと思うが、その頃は往さ来るさの都人士の半分は婦人でその殆んどが和服、きもの姿であつたからピンクや紅の裾を取られて戸迷いする浮世絵姿は珍らしくなかつたものである。『銀座の突風』と見出し文句で夕刊三面紙を飾る新聞社のカメラマンの蔭にかくれて、私のベス単が蛇腹を開く頃そのおこぼれが写るのは当然だとしても、もともと出たとこ勝負のスナップだから松屋の横町日本橋のたもと、浅草仲見世の入口、などは助平根性がなくとも見棄難い場所だった、かも知れない。

『前から風が吹いていたのね、これ、桃割れが可哀いそうに、あら、これ何処？ お嫁さ

ん泣きそうな顔してるわ、上野でしょ、広小路に向って歩いていくとこね、お婆さんのお伴はいいけどお嫁さん、振袖がちぎれそう、よく撮れてるわね、そうね、こんななの、後から撮ってあげなさいよ、裾がこんなにまくれて、でも裾除けがびったり脚に着いていてよかったこと、前から？ 随分ね、感心致しました、あなたのお腕前は……』

が怪し気な敏江の批評なら、『何よ、これ、助平ね、こんな許り撮ってたまにはあたしの外出行位は写すものよ、だから紅さんは眼が離せないのよ……』

は女給かおる氏の御説教でもあった。

『だから、この間の、ほら捕手が大勢来たときあったでしょ、屋根伝いにさ、直江よ、あれ何んたつけ、その妾が逃げるでしょ、白縮緬の腰巻をヒラヒラさせて……そんなの、紅さん好きなんでしょ、あんた許りじやないわ、先ん達っても、飛鳥山でお花見や

ったのよ、あたし達勿論行ったわよ、そしてかけっこね、皆んな女給さん達ばかりだから面倒くさいって裾をはしよって王子行の電車通りまで山から、かけっこしたの、そしたら新聞社の人がいきなり飛び出して写真に撮ったのよ。夕刊に出たわ、あたしが酔っぱらいを避けて右脚を思い切りあげる処に、お園ちゃん、知ってるでしょ、ガード下の女給さん、その人がお腰しなんぞ蹴散らかして崖下に飛



び込もうとする処も、嫌やあーね、あんな写真、恥ずかしいいったらありやしない、お客さんが冷かすのよ、もう少しして……。助平ねエ……男の人って』

その男の一人が、買い立てのベス単を振廻して運悪く写ったのが女の腰から下ばかりだと云って苦情を申立てられても釈明する訳には行かないが、いわゆる事実が印画となって証明しているからいつでも始末が悪いのである。

処がたゞ始末が悪いと云っているうちに彼奴のカメラはよく写るぜ、いつの間にあんな事を奴始めやがったのか、隅に置けんぞと同僚達から噂さが立ち始めたのには大いに弱った。こうなるとカメラは有難迷惑で『ねエ、係長さんから撮って貰ったの……』だの『いつか、娘が撮って戴いて……』と結構、仕事のあい間に邪魔話が入って

『おい、敏江、もう当分蔵つとくぜ、あっちからもこっちからも撮って呉れって、飛ん

だ貧乏くじだぜ、このカメラは』

『いいからじやんじやん写すのよ、フィルムは安いんでしょ、九十銭？あんまり安くはないけど、でも写真帳残っていいわよ、若いうちが花だって、あたし？ いいわ特別サービスしてあげる、でもいつかのデパートの見世物みたいの、あんななの困るでしょ。嫌やねエ、でも、たまには家庭サービスってあるわネエ、ええいつでも、

お好みの時に、ホホ、でも動くわよ、人形じやないんだから、我慢して頂戴、それはそうと忘れてしまいました、今日ね、お隣りの炭屋さんのお神さんから頼まれて……四谷の芸者さんのものですって、正田総絞りの長襦袢の仕立、何んでもお披露目に使うんですって、そんなに眼を大きくしなくってもいいわよ、内職に縫ってあげてもいいでしょ、馬鹿ねエまあ、奇麗だから見て御覧なさいよ……』

金に飽かして、鼻の下を人一倍長くし、一本になる芸者に百円近い大金を投出す旦那は何処のどいつか知らないが、廻り廻ってその



仕立が工員風勢の家の中へ飛び込もうとは思いがけないことだけに結構世の中はいつの時代ながら皮肉なものである。ひよっとすると潮来で長襦袢を捲った報いかも知れない。そのうちに花に浮かれて桜で飲んで四月も終る頃、

『いつかの芸者さんのもの、どう、奇麗でしょ、大柄か知ら、これに二枚重ねの紋付着て博多献上の帯でも締めたら、きつと惚れ惚れするわねエ、お披露目って御挨拶の事でしょ、一寸羨ましい気がするけど、あたしだったら、すぐ呼んで頂けるか知ら、ううん、違わうわよ』

『だからさ、敏丸とか敏千代姐さんとか云われたいんだろ、お神さんで悪るかったナア、俺れなら、お披露目も糞も……』

『あら、縫ったばかりよ、無茶しないで、どうするの？

嫌や嫌や、そんな、皺になったら、よして、だってよ皆さんのものを、ひる間よ、今は、嫌よ、寒いから、やめてったら、どうするの？ 困るわ、解きますったら、じゃ、一寸、寸法を見るだけよ、我儘なお馬鹿さん』

これだから敏江と世帯を持った週一回の休みはこたえられないと云うもの。『こうでしょ、いゝか知ら、あたしの仕立方、古い伊達締めで悪いけど、お島田がないのが玉にきず、と仰言りたいんでしょ、似合うかしら、まるで龍宮城の乙姫さんが豆鉄砲を食ったようよ、おかしい？ よく見てよ、

こんななの、男の人がくわしいんですって、何探していらっしやるの、ねエ、普断着じや勿体ないわネ、こんな上等を、坐って、どうするの、眼をつぶれて……めかくして、あ

なたに見て頂こうと思って、いやいや、どうなさるの、痛いわ、もう少しゆるめてよ、お好きね、ひる間から、誰か来るといけ……、あゝ痛い、もういいでしょ、あたしはいいいけ



ど、この仕立物大丈夫？ 傷めないでよ。』
たとえ九尺二間の離れ屋に音もなく降りそぐ春の雨が無情であろうとも、好きで飛び込んで来た世話女房が仕立上りの借り着に海

棠の露とばかり、両手をくぐられた姿は、比類なき一幅の、否それにも優る我が手中の玉と愛恋いや増す生美人と、いとしさがこみ上げて来たのは、いつもながらであらうけれど……。

『どうだいこの締め工合は、さしもの敏ちやん観念仕候也か、判ったよ、いゝ仕立方だよ、びったり、女もよければ長襦袢も上等だ、序いでにそのまゝ仰向けに倒れて御覧、写真撮ってあげる、じゃその襖に寄りかゝって御覧、そう、膝が固いね、お芝居やってるつもりで……いゝじゃないか、少々ひらいちやったって、上が芸者で下がお神さんだ、もう少し右のひざをひいて、それで写るだろう、あっと、駄目だ。もう一寸明る方、向いて呉れ、赤いのは真黒く写るんだからさ、左ひざを思い切って立てゝ御覧よ、大丈夫写らない、それでいゝだろう、こっち向いて。』

笑っちゃ駄目だの、泣きべそをかけたの子供を寝かしつけての、ひる間のベス単行脚は千金に優る私達夫婦のオアシスでもあったのである。

その秘かなるオアシスが事ある毎に次第に発展して、春は歌舞伎座の表看板雪姫の前に

敏江を立てて入りもしない癖に観劇したようなネガを撮ったり、恥ずかしいなんて今更、よと赤い腰巻一枚姿の正身正明の裸で盥の行水は夏らしい家庭風俗で好ましかつたが、一尺位の処は結構写るからこれ持って御覽』に『嫌やあーね、あなたのような、これでもいいんでしょ』と薄日の差し込むお勝手に裾をはしよって食事のおかずを煮る敏江の手に、松茸を握らせたのである。なかでも白一色の雪の明け方は人一倍早く起きる女房が、『あなた来て御覧なさいよ、大雪よ、まあさつきから掻いているんだけど、仲々道がつかないのよ』

とこけつまろびつ真紅の下着の雪に汚れるのをかまわず立働く横姿、チャンスとばかり、駄目だ、お尻向けちやっちゃ、雪でもバツと投げた処をやれよッ、と女仁王よろしく大の字にふんまえた処を撮るうちは無難だったが『離れからうどんやの本屋に出る本戸の一本松に両手を後ろにして立って御覧』から雲行きが怪くなり『雪の上に一寸でいいから坐って御覧』となつては盗見する人がいないからいいようなものの『浦里って本当に可哀そうねえ、想いつめた女の一念って強いもんだわ、だってあなた一寸くゝられた丈で雪

の上でお小水したんですもの』は御愛嬌だ。私は由来、女の裸姿は好まない、それは裸が嫌やだからと云うのではない、裸の内にギスギスのキリギリス、つまり、やせ型お腹ベツチャンコ、骨皮筋子嬢姐さん女が案外多いからである。

同僚と、会社の例の慰安旅行で鬼怒川に行った時、四五人の飲助が『おい、こいつと狐拳をやるから撮って呉れ』に勢いついてつい百燭光の大広間でホイッ、ヤア、ソラッ、と始まる。野郎の細帯、宿屋の丹前、浴衣、自前のふんどしは光り映えもしない代物だが、ちよつと粧かした姐さん方は毎度のことながら男に取っちゃ興味深々、『この帯、いゝわ、負けたんだから、その代り旦那の方覚悟してらっしゃいよ、あら、また負け、嫌だわ、ハイハイ』に洩々大柄模様の桜紋ちらしの真紅な長襦袢姿と変る、伊達巻位の処で助かる勝負が伊達巻までとると当の相手側の剣幕はどうしてどうして鼻の穴をふくらししての熱戦。

『とうとうあたしを裸になさるつもりねエ、負けるもんか、ふんどしまで脱ってやるから』と島田ふりふり大乱戦も空しく、あらどうしよう、ひどいわと派手な長襦袢が肩から

滑るとおだやかでなくなる。ホホ、女一匹なぶりものになさるのね、ソラハッ……あたしの負け？ まだ肌襦袢がありますわよッと、どう、女は要塞堅固だからまだ大丈夫、さあこいッ、とあら、ずるいわよ、旦那さんの方よ、そんなのないわよ、じや脱げばいいんでしょ、どうせ芸者は、もうお腰一枚よ、最後の一戦、そらッ、ハッよう、裸同志の熱戦だ、応援してやれよと廻りの同僚、座興がもろにエロッぽく盛上つて、こうなると『おいッ写真だ写真だ、ええとこ撮れるぞ』と催促がやかましい。

『写っても写らなくてもええじやないか、バ香頭張るんだぞ』と大広間の片隅は、かなえのる壺がわき返る大騒ぎ……とどのつまりが、

『こいつ、月経帯締めてやがる、頑張るはずだよ、おいカメラマン、何処行っただッ、ええとこええとこ、嫌だ？ チャンスじやないか、撮るんだよ、早いとこ』

処がいけません、大体この姐さんが長襦袢と肩から滑り落して真紅なお腰一枚になる途端にひどく幻滅の悲哀を感じたものである。『とても性に合わんからかんべんしてくれ』と尾ばを巻いて逃げ出す私の丹前の裾をつ

かんで『おい、御兩人、相々傘の無理心中だ』と『おいよせよ』『あら裸のあたしを、皆さん何なさるのよ』とそこら辺りの帯紐かき集めて手足を縛り合せて、歓声あがる。着物きていればどうやら

色気が保てたのに、萎びた茄子みたいなお乳房をぶらさげ、カサカサの女骸骨を抱いちや、いくら相手傘の同僚先生とても堪るまい、あとはどうなったか判らないが何んでも寄ってたかって御兩人をお歳暮の鮭見たいに、広間のかもいから吊りさげたと云うが、何れにせよお色気は絶対肉体美が伴わなくちや駄目だと深く肝に銘じたのである。だから、下手な安カメラを振り廻す旅行会だの祝賀会だのと云ったお奇麗どこ御参加の折は、手を出して御覧、こうかい、君の身体は？じや、一つ行こうじやないかと誘いの矢を向けることにしている。ところが工場唯一の野暮助野

郎の杉本が向島の桜見物の帰り途、持前の茶目っ氣を出し過ぎて、柿元の待合に沈没した時は往生した、虫の居処が悪く瘡に触った事を女が云ったのが事の発端で、



『畜生ッふざけやがって、小生意気になめる気だなあ、肴が足らなきや手前達の身体で沢山だ、指一本しやぶったってこっちとら飲めるんだ、サア、さっさと帯を解いた解いた』

『まあこの人本気だよ、真つびる間から何よ…』

反駁する芸妓の裾を持って後ろにどうーとひっくり返す。さらさらと帯が脱れてキリキリと書けば捕物じみるが、大将大機嫌でとうとう二人とも派手な長襦袢のまゝ、腰紐で御丁寧にも縛られて了った…。

『どうだい、これでも、まだ文句が云いたいかい？ この肴はいゝが、こいつは妊みっこの豚みたいだなあ、いゝ旦那の汁でも食べ過ぎたんだろ、何んだい、この腹は。鳴りの悪い肉鰻頭みたいな太鼓腹しやがって、大体姐さんって云う柄はナア中肉中背柳にもたれて倒れネエ位がいゝんだぞ、見ろッ、手前の膝っ小

僧、土台合わネエじやないか、さあ二人共窓の所に行った行った、写真師がたとと美人さんに撮ってあげるよ、とき、馬鹿野郎、泣きべそかく奴があるかい。それとも泣きつぶりが足らんのならもう一丁、締めたるか、撮るぞ、チャン

チャンあとでお女将に見せてお賽銭貰ってやる、顔をあげて、前なんかちったあ、あけたってかまわないじやないか、そんな処は写りやせん』

と云う始末で小便芸者を撮ったのが縁となり、中肉中背の姐さんと至極懇意になったのは、あとあとのために便利で、大いに慰めたが杉本がこつちへ来いと例の太っちよの女の縄尻を曳いた途端、もろに倒れてピンクのネルの挟み合せが緩るんだものだから、バラリとずり落ちて、命令によって構えていたカメラのシャッターを押すと同時に偉大なる太鼓腹が閃めいた時は驚いた。何んのこととはい、縛られた常の花(相撲力士)が丁髷を島田に替えて、臍から下を開陳したのと同じで折角の四畳半の責め遊戯が肉饅のため、いやこりや凄えやあ、まるで牝豚、此処で女は



太る丈けを以ってたゞ貴しとせずと再び覺つたのである。ところが、お馴染女給かおる先生は太っちよでも肉に艶があるから得である。南京街で樽の中に人拐らいたよと突込んで以来、

『紅さんの捕縛はあつさりしてるから近頃不感症になつて来たわ、同じくゝるならギユウギユウに縛るものよ、少々ならあたしの脂肪分で、はね返してやるから今度は思い切り泣かせて御覧なさい』

と派手に発展する。

『俺は癡り症だから有り余った脂肪は要らネエんだぞ、お前のボンと出たお腹に腹巻で沢山だ、裸に未練はないからその着物脱ぎな』とカフェー喫茶すゝらの電飾燈がすぐ眼の下に見える二階の隅っこで力を籠めて高小手にし、ゴロリ、或は不動の姿勢、観念坐



り、乃至はかん信股ぐぐりの格好でベス単のボックスに収めるのは収めたが、

『駄目駄目ほら、すぐぬげちやうわ、こゝんとこを二巻に縛るのよ、奥さんのつもりで、腋の下からあたしの両腕を捻じ上げて、しっかりしてよ、

人拐い処か広東市にも役立たないじやないの、それじゃ、そうよ、少々痛くって胸のとこ苦しいけどどうせ、女の人縛るんだったら、これ位するものよ、いゝと撮れた？

お腰し替えときやよかった、どう？ 飛鳥山の三面記事よりこくがあつて楽しいでしよう、納得ずみならあたしだって紅さんの云う通りに写されてもあげるわよ、お腹の出たところさえ我慢するんなら、いつでも、この耳かくしの髪？ こんなゝの、かまわないよ、君ちゃん(相棒の女給)に櫛あゝて貰えばすくよ、だから先んだつての活動(映画)みたいね、散々折檻されてさんばら髪に、立て矢の帯っていうの、その帯も解かれたようになつて後手にくゝられて矢絣の腰元が泣くところがあつたでしよ、あんなゝの生緩いわよ。『そうかなあ、あのときや、昔のおさむらい

さん、むごいことするって君が俺に文句云ったじゃないか、変れば変わるもんだ。」

『変ったのよ、心境の変化、お客さんのお仕込み、判った？』

は今でこそ行方不明のお嬢の発展的せりふの一駒だが、惜しいことにこのネガは後に記すネガと共に、この世にはないのが誠に残念である。

習うより慣れろの私のベスト単玉コダックカメラはこうして余暇から余暇をフルに使い、女から女へと渡りをつけての修業で、三冊目のアルバムを買わなくちやと敏江から云われるまでもなく乱写乱撃の落し児ネガは一寸開けても机の曳出しからはみ出しそうな位貯ったものである。しかし、場を踏んだ割に腕前は上らなかつたのは、工場長に聞くとレンズが暗くて高速シャッターがないためだそう。

『すると君、よかつたらこれ使い給えよ。』

と何処で聞いたか、御存知義太夫社長から直々にお声を賜った時には、この独逸製スーパーシックスで写したら必ずお見せ、と催促されるようで内心競々として、うやうやしくつかの間を拝借したのはよいが、あんまり明るくて上等だから、早速、飛んで行った向島

芸者の中肉中脊姐さんの顔の皺はおろか、着物のひだ一本一本が克明に写し出されて、ちよいと縛った後指が奈良の大仏の手のように鮮明に像になったのは、どうもカメラが上等でと社長の前に印画を出す訳には行かなかった。

吉原でおいらん覗って塩を撒かれたのもこのカメラである。玉の井の三角窓から蓋をどけてレンズを向けたら犬に噛みつかれたのもカメラのせいだ、社長の例の舞踊名取？令嬢が目出度く御縁あつて芳紀正にくらで晴れの婚礼式に随行を賜つたのもこの恐るべきスーパーシックスであつたが撮ってよく、写し易いこの高級カメラはひどく敏江を喜ばしたものである。しかし型が大きいだけに一本のフィルム代が一円二十銭と聞いて、止めて頂戴と来たときにはつくづく工員身分を惜げなく思う反面、女房敏江のあからさまを思う存分撮つときたい念願が消えたようで、いつもなら

『まあ奇麗な花嫁さん、社長さんも奥様も笑つていらつしやる……』

と賞める声が経済上聞かれないのは残念だが仕方がない。

『いゝわよ、腕前は上ったんだから、サア、

この骨董カメラで撮ってよ、大丈夫写るんだから、今日はこのきものでどう？ 無尽で当ったお金であなたが選んだ長襦袢着てみるわ、思い切りお苛めになつても文句は申しません、敏江はあなたのたった一人の女房ですもの。』

によくしたもので、再びこの古色蒼然たる愛用ベス単コダックがその全力を挙げて、時の風俗絵巻を掴み取ったことは申すまでもないが、春によし夏はなおよし秋は破れ障子に陽を拝み、冬は燈下の責め絵の一作、笑つて泣いて、こゝえて縄と共に四季を楽しんだ迷画の数々、どうせフィルムは手に入らないんだからと、三度目の家の押入の片隅に放り込んだのを、大切なものだけを持って逃げて来たわよと、チラと見たのがベス単はおろか女房敏江と一蓮托生、永遠に還らざる物となつたのは悲痛の極みである。

焼跡に子供と共に灰を掻き廻し、天に向つて敏坊よと叫ぶ親子の姿はそれこそ悲しくも一幅の名画であつたろうに。

(きものシリーズ第九話 終り)

(滝 れい子画)

続
々

女性切腹断想

田 谷 敬 生

これから述べることは「女性切腹」云々と名づけるにはいさゝか不適当な内容かもしれないが、この内容を抽出した原泉が女性女腹例であるという点からこの題をつけることをおろしたくない。切腹小説や切腹幻想の中、切腹経過が真実と異なるのは当然であるが、その開きの程度がどれ位かという段になると必ずしもそれ程はつきりした認識が万人に持たれているとは限らない。著者の手許にある終戦時の印象に焼付けられたある時期の説明が詳しく他の時期は簡略であつて一切腹例から全般の経過の概要を掴むことはできないが、幾つかの似た例を綜合すれば、筋の通

つた経過をまとめ上げることができそうである。こうしてつくられたのが、以下に述べる「女性切腹経過」である。もちろん、これは「想定」であることは確かであるが、少くとも単に「理論的に考えた」ものでないことも確かである。従つてこゝには醜惡な面もかくさず述べてあることを御了承願いたい。

一、切腹の構え 前にものべたことがあるが、いかに鋭利な刀でもこれを腹壁に突入れるにはかなりの力を要する。元來腹壁（特に女性のそれ）は体壁の中でも最も柔軟で弾力性に富む上、これに痛みが加わると腹筋の緊張の変化が起つて陥没状態になりなるべく

刺戟の加わるのをさけ様とする働きがある。従つて刀の鋭利なものを用いても、突入れる力がよわいか又は腹壁がたるんでいれば、なかなか表皮を突通すことは難しいものである。多くの切腹例において、膝を揃えて正座し、胸を張り呼吸を止めて下腹に力を入れる、いわゆる「臍下丹田に氣力を込める」とか「リキむ」という準備状態があり、立腹の場合には両脚を大きく開いて踏張り柱その他の支えにもたれかゝつて、刀を突立てる際倒れぬようにしているようである。支えなしの立腹や座つても背を円めたり横座りしたりすれば腹壁の一部は始めから弛緩し、又は突立てた瞬間に構えが崩れたりして切腹は難しくなる。明記したものについて、切腹時の服装をみると、下腹部まで出した双肌ぬぎが多く、次で衣服の前を寬げたもの、下着のみの半裸、全裸の順になり、上半身裸体の者が大多数を占めていること、露出傾向の強いもの程切腹も凄烈なこと、陰股部が露出する虞があると思われるにも拘らず下着に腰巻が多いことなどが注目される。

二、刀の突入れ 正座にしろ立腹にしろ刀を腹に突立てた瞬間体の状態は構えの時とはかなり異ってくる様である。すなわち刀が腹に突入れられると同時に腹筋は痛みのため

強く収縮し、腹部は板状に陥没し女子では特に脂肪の多い下腹のみが稍々膨隆し、体は少し前傾する。今まで切腹絵や写真ではこの点が必要しもはつきりしていなかったため、腹に刀をあてゝいるのか突立てたのかの区別のつかぬものが多い。切腹者の表情はもちろん、この点も是非明瞭に表現してほしいものである。

立派な切腹が行われた例では刀の握り方にも細心な注意が払われている。例えば一寸の深さに引廻したい場合、刀の切先一寸を残して布で包み布の先端を右手で握り、この右拳が腹壁に当るまで突込むというやり方である。こうすれば力一杯突込んで深く入りすぎる憂がなく、以後も左で力を込めて押しながら常に右拳を腹皮に接しつゝ引廻せばよいわけである。短かい懐剣ならばとにかく、九寸五分や脇差の柄とか刀身の半ばを握ってしかも適当な深さに加減して突立てるなどということは、

常人には至難なことであろう。刀が途中で深く入りすぎて引廻しかねたり刀がすべって抜けたりするのは、握り方と構えの配慮の不足が一因であると見られる。これも切腹図絵に



において注意すべきことである。

三、引廻しの動作 一般に刀を突立てる場合、左手で刃先をもっていることが多いから、左手は刀を突入れるの中へ押す役に当たっている。しかし傷が深い場合は両手で刃先を握り両手で引廻すものもある。ごく浅い場合は別として、普通女子では一気に右脇壺まで引廻せるものはきわめて少く、苦痛のため一、二度は力が止り、右手で引廻すため斜め右上りにジクザクの弧を描くことが多い。

傷の深さが五分以内であればそれによつて起る苦痛は疼痛に限られる。その程度はもちろん切腹者によつて著しい差があるが、未遂者の報告によつてきわめて惨烈という程のものではないらしい。I氏の告白によれば、二三分の深さで片手引きに引廻した後、はつきり切口を見る余裕があったという。しかし、切先が腹腔に入り大腸が溢出したり、又は腸を引出したり

すると、痛みとは別に、胸苦しい、めまいがする。吐氣がするというような苦悶の症状が現れる。かくして、一般に女性の場合、刀を深く入れて引廻そうとすれば、苦悶のため体は前傾し体を起そうとするため頭部から腕部へかけて強く反り返るようになる。衣服の前がはだけて屢々下腹や大腿を暴露するのは苦痛のため体を動かすことの外に、前傾した体を倒すまいとするため両膝を次第に外方へ開いて平衡を保とうとする努力のためと想像される。

前にも一度ふれたことがあるが、刃が腹中に深く入っても、引廻しの動作の最中には腸は露出しないものである。何者、柔軟な腹壁は引廻しの途中では当然右方に引張られ切創が緊張するため、刀を止め或はこれを抜取り苦痛のため大きく息を吐くなどの際腹圧によって押出されるものである。なお腹壁が完全に切断されたからといって必ずしも腸が出るとも限らない。腹壁と腸管塊の間には網膜というノレンのような膜があり、これが破れないと障壁となって腸の溢出を妨げる場合もある。

この項に直接つながりはないかも知れないが、こゝで妊婦の切腹にちよつと触れてみよう。

う。妊娠後半期（五月以後）に入ると子宮は膨隆して腹壁に接しつゝ臍の高さから八月頃には心窩部あたりまで達し腹囲は臍の高さが最大になる。この時期の切腹例は、某氏から御教示いただいた一例（未遂）しか知らないが次のような特徴が想像される。

(1) 重心の關係で体が後方へ反り前傾することがない。七―八月になると座位でも支柱にもたれなければ切腹後、後へ倒れる可能性が多い。

(2) 服装の点から一般女性のように下腹部を切ることは可能性が少く、上腹部を切らざるを得ないと思われる。一般女性では臍高で腹部が最小であり、腰骨のあたりで下着、着衣を緊縛すれば脱げ落ちることはない。しかるに妊娠後期では全く逆に臍高で腹囲が最大になるので臍下で着衣を緊縛しても容易に脱げてしまうはずである。全裸になる覚悟ならば格別、常識的には少し気のつく女性なら臍高で着衣をしめ、上腹部を切ることになるう。

(3) 一般に深く割腹しても腸が露出しない。これは子宮が腹壁に接し腸管を後方へ押しつけている点から当然首肯されることである。

例外的に心窩部を切った場合子宮後方の腸が溢出することがある。著者の知っている一例

もこの型である。

(4) 腹部が緊張して固いため、刀の突入れが容易であり、引廻しの途中からある程度切口が開くことが考えられる。

以上の点から妊娠中の女性の切腹を扱かう場合、小説、絵、写真のいづれにもせよ、特別の注意が必要であらう。

四、十文字腹 一文字切腹がごく浅い場合は別として、深さ一寸以上乃至腸露出の状態

で更に鳩尾から縦に切下すことは一文字腹に比し数倍の苦痛を伴うものである。何者一文字切腹により腹筋の大部分は断裂しいわゆる「腹に力を入れられない」状態になり、体を真直に保つ力は半減し、前述のように、体は前傾の度が強くなって行く。前傾の度がある程度以上に強くなればたとえ心窩部へは刀を突立てることができたとしても引下す力につれて体が立直すこと自体前へのめり下腹まで引下す力につれて体が前へのめり下腹まで引下すことは難しいであらう。激痛、シヨツクの脳貧血状態、腸溢出による悪心、胸内苦悶などの症状に打勝って身体を立直すこと自体がすでに困難なはずである。実見例において「体をグッと起し、腰を浮かせるようにして刀を押上げるような表現に接したが、実見

者としては何の気もなく書かれたものであるが、きわめて重要な描写というべく、一文字腹の時に刀を右へ、体を左にねじって引廻すのと同じく、十字腹の時に体を起して上へ押上げる（腰を浮かす）のと反対に刀を腕の伸びる限り押下げることによって完全な引下しを行うのは当然の方法と推論される。

正十文字腹に比し、鍵十字腹は、一度刀を引抜いて（深く突入れた場合はこれもなかなか困難である）鳩尾に押当てる動作が必要なく、刀を引上げる動作であるため体が前傾していても少しは可能であるという点で、やゝ負担が少いため、比較的用いられやすいと思われるが、著者の得た例ではこれに当るものは一例のみであった。

五、切腹後の経過　一文字乃至十文字腹を切り終った後、又は途中で力つきて何れも介錯なしに放置された場合どうなるかは誠にむづかしい問題である。記録が残るためには第三者が介在しなくてはならないが、第三者が居れば苦悶を見かねて介錯する（戦時）か又は手当する（平時）はずであり、放置された状態が記録に残る可能性はまずない。しかし断片的な叙述をつなぎ合して大体の経過を推定してみよう。

深さ二―三分の切腹の場合は一文字でも十文字でも大して問題になるほどのものではない。中には疼痛のため、失神するものもあるが、冷静に耐えられるものも少くない。放置すれば局所血管の縮小と血の凝固のため自然止血し、たとえ失神しても化膿したり裸体のため肺炎でも起さぬ限り生命の危険はない。一文字腹で腸が露出しても場合によっては自然止血のためきわめて長く生きることもあるが、腸が露出すれば自然治癒はない。これに反して深い正十文字腹になると死は大体数時間内に確実に起る。これは縦十字により肝臓が切られ止血が起らないためで、失血に応じ意識がぼんやりし脈が細く呼吸が促迫し肩を動かし小鼻を張り口を開き、ヒュッヒュッと音をさせたり、シャクリ様の呼吸音を発して苦悶する。次で全身に大まかなけいれんが起り、これが次第に細かく強くなって頂点に達して絶命する。心臓や頸動脈を突き又は介錯があれば直に最後のけいれんに入るわけである。

全裸又はそれに近い例で絶命前一部の例で尿尿をもらしたという記述がある。縊死などの場合はけいれんの際の筋の緊張と腹圧のため尿尿をもらすことはあるが、腸の出たよう

な例では腹圧はかゝり得ないから、必発の徴候ではあるまい。着衣をつけた場合にはたとえあったとしても多くは看過されて記述されることは少ないはずである。

X X X

前にものべたように戦時の女性切腹例は一般に惨烈なものが多くのであるが、その原因の一つはそれらの女性が切腹についての科学的な知識を欠いていたことであると思う。切腹者の大部分は若年の農村女性で教養の程度が高くないまゝ、いわゆる講談調の切腹礼讃をすなおに信じたものではあるまいか。彼女らが惨烈な割腹を完遂できたのは、生恥をさらすまいとする極度の責任感と、実見記に出ているように彼女らが開拓できたえた頑丈な体軀をもっていたためであらう。おそらくこのような切腹は今後ほとんど跡を絶つにちがいない。

次に著者が興味深く感ずるのは、いわゆる切腹マニアの女性たちのもつ幻想の内容である。川合さん、賤機さん、瀬川さん、あるいは原桐さんなど、いずれも切腹の歴史観についてきわめて詳しいようであるが、失礼ながら医学的要素については若干の不足があるように思われる。従つてそれらの方々の切腹

観は大体において頭の中の切腹である。

たとえば原桐さんの切腹写真を取りあげてみても、十一月号のグラビア両頁上段のものはいずれも近來にないよい作と思われる（理由は上述の通り）のに、左頁下段のものは、脊を全くかきめ腹部が弛緩し刀の持ち方にも不足があり格段の劣作である（もちろん幻想



写真としての価値は全く別である）。このように図によって一貫性のないことは、反面現実にとらわれない自由な考えの表現が写真となったという得がたい利点がある。そうなる」と未収載の写真のときは全く予想できないことになり、これを分析することは切腹幻想の追究に大きなてがかりをあたえるのではなか

ろうか。同じことは川合さんについてもいえるであろう。近來の読者通信によると川合さんの写真を拝見することはまず絶望であろうが、原桐さんの未収載のものだけでも拝見できないものであろうか。おそらくそれは「奇ク」の切腹写真の進み方をきめる貴重な資料になるであろう。

なおこの稿を投ずるに当り、著者の最も心配することは、こうした資料のために読者の自由な切腹幻想の発展が抑制されはしないかということである。切腹の科学的考察にはまだまだ多くの問題がある。しかしそれはかなり専門的でこうした大衆雑誌には不向であると共に、今のべた心配から著者はこの種の事をこれで打切る考えである。切腹姿態図と切腹幻想図はあくまで別であり、切腹姿態図をつくるには現在の程度で充分と著者は考えている。

（後記）著者のこの稿に矛盾するような事実について御教示を下さることを希望します。切腹愛好者の方々の御意見も承りたいと存じます。原桐さんには別に編集部あて手紙を差上げました。お差支えなければ編集部へ御連絡下さい。

懸賞原稿 佳作第一席

白^{はく}面^{めん}鬼^き

竹 谷 十 三 作

〔一〕

風間新一郎は、会社でも、友人間でも、フェミニストとして知られて居た。会社一の美男子で、色白ではあるが理智的でキリッとした新一郎は、N放送局編成部切つての有能社員でもあった。最近、プロデューサーに変わつてからも、益々腕を振るい上司から可愛がられていた。大柄で、英国型の青年紳士と言つた彼のスタイルは、社内の若い女性の憧れの的でもあった。社内だけでなく、ドラマや物語に出演する無名の出演者、劇団の若い女等は、自分の出世のためばかりでなく、彼の御機嫌を一心にとる者も多かった。それだけに、男の同僚や男優の間には、嫉妬に似た反感も強かった。しかし、それは全く、表面に出ては来なかつたのだ。その理由は、今日、彼の人

気が余りある事ばかりでなく、彼の持つ放送技能や知識と言うものが、ぐっと押さえつけて居たのだ。三十二才の若さにしては、彼のプロデューサー振りは老練なものがあつた。

こうした彼だけに、中里清美は安心して居たのだ。それが、突然、半暴力的に半裸体され、アッと言う間に縛られたのだから驚いたのも無理はない。余りの事に清美は、言葉も出ず、新一郎の顔を睨んで居たが、次第に涙で目がかすんで来た。

「フフフ：君が、僕をどれだけ愛してるか試験してやるのさ……」

そう言つて新一郎は何時もの少しも変らぬ調子で、パイプを美味そうに吸つて居た。

清美が、新一郎を愛し出したのは、彼女が局に入つて半年程してからだったから、もう彼此一年近くなつた。内気な彼女としては、

自分の恋心を打ち開けるまでに、相当長い月日がかゝって居た。第一、女仲間で、誰もが新一郎の恋人のつもりで居る谷慶子と川村礼子の二人の先輩が居ては、新入局員の彼女等、自分の気持さえ話す相手もなかったのだ。

それが、こゝ一、二ヶ月で急に深くなってしまった。勿論、清美にしても、新一郎に妻の居る事は百も承知だった。これは、新一郎を愛する女性の全部が知って居る事実だった。

それだけでなく、新一郎が、大変な愛妻家である事も知られて居た。妻を大切にする男、妻を愛する男は、女性にとっては、何か安心出来、恋愛遊びの対象になった。

「妻は、二、三日里へ帰っているんだ。明日、遊びに来ないか」と昨日、新一郎から囁かれた時は、清美は言葉だけでなく「奥様に悪いわ」と何回も言いながら、結局、新一郎の誘いに乗って、彼の家に來てしまったのだ。放送の仕事をしている二人にとっては、珍らしく、夕方、別々に、局を抜け出して銀座で食事をして八時頃、郊外の彼の家にやって來たのだ。夫婦二人切りで子供も居ない彼の家はキチンと整頓されて居た。庭の広い小さな文化住宅である彼の家は、文字通り、楽しい吾家と言った感じだった。清美は、今迄、彼と外泊した事もあったが、彼の家に來たのは始めてだった。茶の間の横にある机の上には、美しい小さな人形が飾ってあった。

「まあ、可愛い人形」と清美は、思わず言う、新一郎は、ニヤニヤしながら「妻が作ったんだよ」と例によって、妻ノロを始めた。

九月と言うのに、この晩はむしむしと暑かった。ビールの酔いの出て來た清美は、ブラウスを脱ぎ、スカートだけの姿になった。娘

々した形のよい乳房のふくらみは、シユミーズの上からもハッキリと見えた。二十一の若さでありながら清美は、既に二人の男と関係して居た。一人は学生時代からの恋人山田と言う大学生であり、今一人は新一郎だった。彼女は心から新一郎を愛し、尊敬する様になつてから、急に山田との関係は切れてしまった。尤も、山田の方では今でも執拗に彼女を追ひ廻して居たが、清美の心は遠くに離れて行くばかりだった。彼女は新一郎と結婚しようとは思って居なかった、が身も心も彼に捧げて居た。それなのに、突然、あんなにも優しい新一郎が、何に怒ったと言うのでもなく、アツと言う間にシユミーズの肩を取り、何時持つて居たのか、紐で清美を後手に縛ってしまったのだ。驚ろきの鎮まった清美は、ゆっくりと言った。

「風間さん、何故、私をこんな事をするの」

「何故でもない。段々解るんだ。君が、僕の恋人としての資格があるか調べてやるのだ」

新一郎は手に持つて居たパイプを、彼女の恥しそうに震えている乳房のふくらみに押しつけた。

「アッ……いやよ！ 熱いわ……」と清美は、思わず小さく叫んだ。

「驚ろいたか！ こんなパイプは、熱くもなんともないんだぞ！ 本当の火をつけてやろうか！ 恋人の資格があるかないか、妻ならもっと激しい責苦に堪えねばならないのだ」

新一郎は、多少興奮した様に、早口で言つて、片方の手で、清美の裸の肩を力一杯に掴んだ。

「いや、いや！ 私を帰して！」清美は、美しい顔を怒りにゆがめて、強く言つた。

「勿論、帰してやるさ。僕は、暴漢じゃないからね。唯、君は本当

に僕が好きなら、当然この程度の事は我慢出来ると思ったのさ。どうだい？ 僕に責められる気はないかい？」

「いやです。私は、大嫌い！ 鬼！」

清美は、キッパリと言い切った。二人は、暫く睨み合って居た。今迄の甘い二人の会話とは全く違った、冷い沈黙だった。

「よし解った。どうぞ、お帰り下さい。」

新一郎は、そう言うのと、手早く紐を解いた。

清美は、縛られた手首をさすりながら、洋服をつけた。何か急に、淋しい気持ちになって、大きい黒い瞳が再び涙でかすんで来た。

「御免なさい。許して呉れる。さっきの言葉」

「いゝだよ。僕は、別に怒ってないよ。ハハハ……」

新一郎の顔には、何時もと同じ様な優しさが流れていた。

「冗談を本気になんかして……」

「いや、冗談じゃない。本気なのだ。鬼も角、もう遅くなるから帰えりたまえ！」

新一郎は、清美の言葉にかぶせる様に言った。新一郎の態度が、急に冷たくなった事は、清美にも解った。二人の間は、何か気まずいものがあった。

新一郎は清美を玄関に送り出して、暫く、立って見ている様だったが、茶間に帰えると細目に開いて居る戸棚の襖をガラッと開けた。

中には、妻の久子が全裸で、後手にされ、手足を縛られて入って居た。新一郎は、小柄な妻の肩に手をかけると部屋の真中に曳きずり出した。

「お帰りなさい」と不思議な事に、久子は普通の妻がする様に、平

凡な調子で言って、下から夫の顔を見上げた。

「どうだった、今日は」と新一郎の声も、意外に優しいのだ。

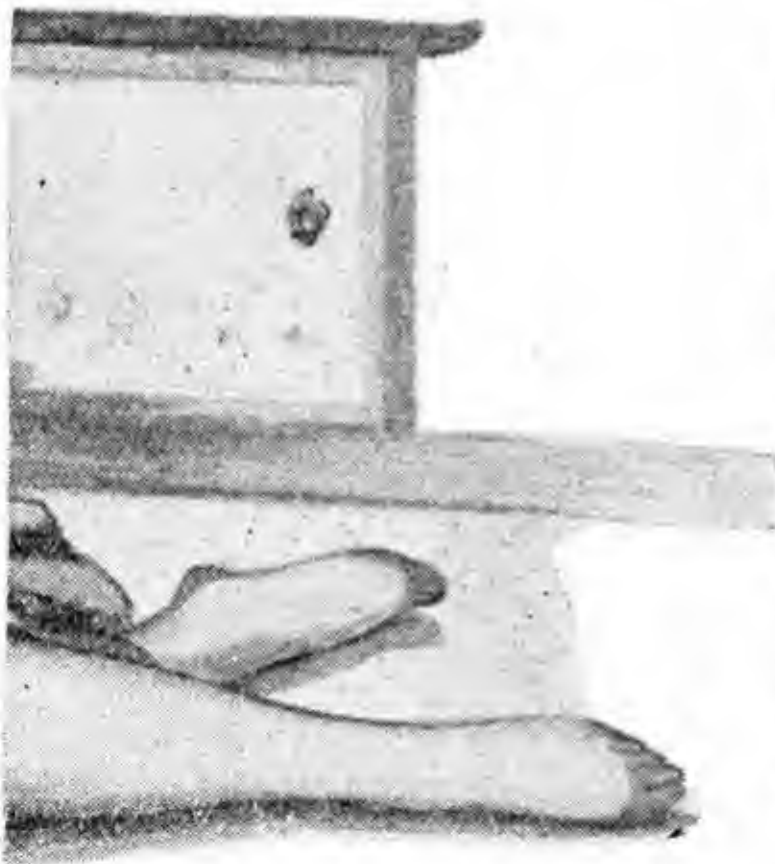
「お便所に行かせて、一日だもの、苦しかったわ……」と久子は、伸びたパーマの髪を振って、ニッと笑った。

「よし、行かせてやる」

新一郎は、一応妻の縛しめを解いてやった。久子は、不断着のスカートをつけると駆ける様にして部屋を出る背中に新一郎は、追いかけて命令した。

「酒の仕度をして来いよ。まだ、今夜は飲み足りないからな」

新一郎は洋服を脱ぎ、シャツとズボン下の姿で食卓にどっかと座った。愛用のパイプに煙草をつめて、ブカリブカリとやり出した。このパイプで、先刻、清美の乳房を驚した事を思い出して、ニヤリ



と、笑った。

間もなく、久子が、酒の仕度をして、半裸のまゝ坐った。

「おかゆは作って来なかったのか」と新一郎は酒をグツと飲んで言った。

「えゝ、めんどろなのだもの」

「一日、何も食べないと体に毒だぞ」「でも、今日で、もう、断食の刑は終りでしょう」久子は、子供供した顔に、コケティッシュな笑を浮べて、首を傾げて夫の方を見た。

「そうか、もう、三日間過ぎたか。しかし、今日は、本当に何一つ食べなかったのだろう。戸棚の中で、一日暮して居たんだから」

「えゝ、お腹のすくのは平気だったけど、暑かったのは、苦しかったわ。昼間に一杯、汗をかいちやった。フッフ…」

「何がおかしいのだい」

「だって、そのおかげで、御不浄に行かなくて済んだもの。割に苦しくなかったわ」

「フン、そうか。じゃ、今夜は、形罰の仕上げをしてやるか」

新一郎の目が、ギラリと輝いた。

「えゝ、……だけどあのお嬢さん、驚ろいたらしいわね。私の入ってた処から、顔が見えていたのよ」

「ハハハ…中里の奴。真ッ青になってたよ。大抵の女は、あの手で追っぱらうに限る」



「あの方、本当に、あなたが好きだったのでしよう」

「そうらしいね。今迄の女の子より体の立派な事は取り得さ……」

「私だって前は、あの人よりいゝ体だったわ」と久子は、独白の様に言つて、胸を張った。久子の乳房は、自慢するだけあって、片方は、処女のような丸味をもった美しい乳だったが、左の乳は、傷だらけで形もくずれて居た。

「何だお前でも嫉妬するのか」

「アッ嫉妬なんかしないわ。嫉妬なんてしたら、あなたの奥様は一日も動まりませんからね。第一、あなたが一番好きなのは、私だつて事を知ってるもの」久子は、長い睫毛の目をパチパチさせて言った。

「フン大変な自信さ。だが、それは本当だな。お前程、僕の拷問に堪える女は、金と太鼓で探しても居ないよ。どれ始めるか」と新一郎は、立ち上った

「ええ、その前に、お願いがあるの。明日でも、明後日でもいいから、又、二、三日、派出所を雇って、洗濯物やなんか、うんとあるの」

「よし、承知した。それに、今夜、お前が満点だったら、明後日の休みには遊びに出掛けよう。尤も、仕事の都合で休みが取れないかも知れないが……」

そう言うと、新一郎は、久子に優しく接吻をしてやった。二人の間で、責めが始まるともう、二人は愛し合ってる夫婦ではなく、暴君と女奴隷の関係になるのだった。二人の間では、いろいろの芝居の筋が用意されていた。

プロデューサーは、常に新一郎だった。久子は、不貞の妻の役になったり、愛妾になったりするのだ。久子の乳房が、片方は美しく、片方は傷だらけなものにも理由があった。二人の間で、こちらは、奴隷とされた妻の乳房、一方は、愛妾の乳房と言う風に決められていた。久子の小柄ではあるが、肉付きのよい体のすべての部分が、乳房と同じ方法で決められていた。新一郎は、最も惨虐な責めを行う時は、白い鬼の面をつけて行った。これは、一つには芝居気たっ

ぶりの彼の趣味でもあったが、今一つには、さすがの彼も、自分の行為を素顔でするのは、久子に不快な印象を残すと思ったからだ。この白い面を持ち出される時は、我慢強い久子も、相当の覚悟が必要だった。

今夜は、その面が持ち出されたのだ。三日間の断食の刑で、体のフラフラして居る久子は、ギョッとすると同時に、心の奥では何とも言えない嬉しさが湧き出て来るのだった。久子は、どんな拷問に合っても、決して、大声を出す心配がなかった。又、その間中、無抵抗で居た。尤も、芝居としての抵抗は、演技の続く限りやるのだった。

先ず、畳の上に広く、リノリウムが敷かれた。リノリウムには、古い血の跡が点々と残って居た。久子は、震えながら、夫の仕度の出来るのを待つ気分が、久子には、何とも言えない興奮を覚えさせるのだった。全裸の久子の手足に木の枷をつけると、リノリウムの上に俯伏にした。

「やい！ 貴様はどうしても間男の名を白状しないと云うのだな。今夜と言う今夜は、どうしても白状させるから覚悟しろ！」

仮面の新一郎は、含み声で言った。

「主人様、どうぞ、お許し下さい。私は決して、そんな事は致しません。どうぞ、お許し下さい……」

「フン問答無用だ！この体から聞いてやる」

新一郎は、久子の両の尻を撫で廻した。久子の尻は、何回もの拷問のため、既に、傷だらけだった。尤も、それは、大分日の経ったものだが、白い体の肉とは違って、皮膚全体が、変色して居た。

新一郎は、先ず、昔海軍で精神を入れ返えさせると云って尻を打

その釘抜きには、挟む所に櫛の
歯のようなキザくが両側につ
いていた。



った棒の様なものを持ち出し、力一杯に打ち据えた。
「ウッ！」と久子は、体全体で、その打撃を受け止めた。ブンと言
う様な低い音をして肉が鳴った。次々と打ち降される間に、久子の

は、蒼ざめて、苦痛に曲んでいた。
新一郎は、道具箱の中から、乳房を締めつける特別に作った釘抜
きを出した。これは木で作られ、挟む所は、櫛の歯の様に小さなギ

肉は、赤味をおびて来た。

「貴様の体は、もう、こんな事位
ではこたえないんだな」と新一は
棒を投げ出すと、今度は、二本ピ
ンと伸びてる久子の足の上に腰か
けて、拷問用具の入った箱から、太
い針を出した。そして、針で始め
は、チクリチクリと刺し入れた。

「ファッ！」と久子は、小さく叫
んで、身を震わせた、「許して……」

針は抜き取られると、又別の所
にズブリと刺された。針の穴から
血が浸み出て居た。

「ウウ……」と久子は、唇を噛ん
で我慢した。

「起きろ！ 今度は、乳房だ！」
白鬼面は、冷たく命令した。

血だらけの尻のまゝ、久子は起
きて足を投げ出したまゝ坐った。
手枷のついた両手は、上に上げた
まゝだった。久子の可愛らしい顔

ザギザが両側についていた。新一郎は、中腰で前から乳房に差し入れ、次第に力を入れて締め上げた。

「それでも、白状するか！」

「あゝ苦しい……もう、許して……」と身をもたえながらも、久子は、逆に、身をそらせて、苦痛を倍加させ様とした。

暫くして、面を取った新一郎は、久子の傷の手当を充分にしてやるのだった。

〔二〕

「駄目じゃないか 中里君！九州の分は、マザーを送ったら困るんじゃないか。こっちに残ってるリビートの分は、ノイズが入っているんだよ！」

スタジオから出て来た新一郎は、デスクでキニー・シートを書いて居た清美に大声で叱った。

「あれマザーだったんですか？」と驚ろいて清美は立ち上った。同僚の川村や谷の冷めたい嘲笑を頬に感じて、もう、涙ぐんでしまった。

「昨日や今日の人間じゃあるまいし、今、やっと発送で、マザーを押さえて来たんだ。スタジオが空いているから、直ぐ、一本、九州の分を取って呉れ給え！君は近頃、ボヤボヤしてるなあ……」

「ハイ……」

清美は、急いで、スタジオに駆けて行った。

又、飛び入りで技術人に嫌味を言われる事は覚悟だったが、それにしても、風間の態度は、あの日から、ガラリと変り、自分に事々につらく当る様に思えて仕方がなかった。

テープの複製を作りながら、清美は、うわの空だった。こんな事では、又、失敗すると自分の心に言いつけても、少しも心は放送内容に向かなかった。風間に言われる迄もなく、あの日から、清美は、仕事の上で失敗ばかりやっていた。同僚の女達の「ぞまみろ」と言った目が、益々彼女を苛々させた。あんなにも優しかった風間が、あの日から、他の女と同じ様に扱うのが、清美には堪えられなく淋しかったのだ。あの時、何故「いじめて下さい」と言わなかったと自分の心に叱ってもみた。今の様な注意だって、前なら必ず、人の居ない所で注意してくれたのに。風間さんは矢張、本当に怒っているのだと清美は信じていた。清美を悩ましている問題は、これだけでなかった。恋人だった山田謙吉、来年大学を出ると同時に、自己と結婚しようと、正式に両親に申し入れて来た事だ。しかも、両親も乗気で、話を進めている事だった。こうなると、今迄も相当に執拗に清美を追い廻していた山田は、公然と局に面会に来たり、家に入りたりするので、清美は、困りぬいていた。局に入らない前高校時代に、フットした事から山田と恋愛に落ち、火遊びの様な一夜を過ごした清美だったが、風間を知ってから、どうしても山田のニチャニチャした態度が好きになれなかった。

今日も夕方から山田と映画に行く事を約束してしまっただが、清美には、少しも楽しくもなかった。今夜は、風間は、どうせ、十一時までテストがあるので、会う事は出来ないのだから、時には映画を見る事もよいのだが、どうしても、清美は、そんな気持にはなれなかったのだ。あれから、風間と一度も、ゆっくり話した事がない。今夜は、テストの帰りに風間に会おうと決心した清美は、それまでの時間つぶしに山田と映画を見てもよいと気がついた。寧ろ、用も

ないのに局にブラブラして居ては、他の女達に何か言われるもどだと思つた。

山田は、×大の制服姿で訪ねて来た。清美は、嬉しそうな顔もせず、それでも余り怒った風もみせまいと努力して一緒に局を出た。食事をしながらも、ベラベラとスポーツの事、学校の事得意に話す山田の態度に、うんざりしながら、全然気のない返事をして居た。

「今夜は、遅くなるから家まで送って上げましょう」と何度も恩に着せる様に言う山田に、清美は、何と言つてことわろうかと、そればかり気にして居た。映画を見ていても、それが気になった。どうせ、どんな理由をつけても、執拗な山田の事では、一度擲つたら、逃げられないのだから、映画の間に、黙つて姿を消してやれと決心した。映画も終りに近づいた時、清美は、山田の耳に「一寸、御不浄に行つて来るわ」と言つて、急に身を立たせた。

山田は何か言いたそうだったが、映画に気を取られ黙つて居た。清美は、映画館を出たのは、九時二十分だった。こゝと局の間は、五分鐘もないのだ。十一時頃まで、どうして時間をつぶそうかと考えた。下手に、この辺に居ると、再び山田に発見されるので、銀座に出て時間をつぶす事にした。

十一時に近くなつて、局のあるビルディング街に戻つて来た。人影もなく、街燈が淋しげに舗道を映して居た。時々、通る人も、急ぎ足で過ぎて行つた。局に入るのは、どうかと思つたが、町をウロウロして居るとパンパンに間違えられそうに思えたので、清美は決心して、鎧扉に開けられた小さな入口からビルに入った。守衛が眠そうな目で「おや、また、何か用があるんですか」と不思議そうに

見た。「えゝ、忘れもの」と言つて、エレベーターの所まで行くと、丁度、ドラマの連中が降りて来る処だった。これは、まずいと清美は、御不浄に行く風をして、物陰に身を隠した。俳優連中はガヤガヤ話しながら帰つて行つた。清美は一層こゝで風間の降りて来るのを待とうと思つた。次のエレベーターも、俳優と技師の人々だった。一台のエレベーターしか動いていないので、清美は、又、待つた。若しか前に帰つてしまつたらと思つたが、プロデューサーが、俳優より先に帰る事は先ずないと経験で知つて居た。

三度目のエレベーターが降りて来た。思つた様に風間のグリーンが、背広姿が出て来た。清美が走り出そうとした時、ハッとした、谷慶子が一緒なのだ。

「風間さんと一緒に帰るのは何ヶ月振りね」と慶子のキンキンした声がした。風間は慶子のペップバーン型の髪に口をつけんばかりにして、何か囁いてた。

「ばかね……」と慶子が嬉しそうに笑つて、二人は腕を組みながら出て行つてしまつた。清美の足は重かつた。泣けて、泣けて、仕方がなかつた。

「谷 慶子の奴！」と清美は、何度も心で叫んだ。どうせ、今夜は風間の家へ行つても、新一郎は帰つていないかも知れない、と言つて、こんな遅く、淋しい郊外の家に帰える気もしなかつた。第一、夕方、家の方には、今夜、テストで遅くなるかも知れないから、お友達の下宿に泊ると言つて置いたので、今更、帰えると、今までの信用がなくなつてしまふのだった。清美は、腹立ちまぎれに、山田の下宿を訪ねて、今夜一晩暴れてやれと思つた。

彼の下宿は、都電で行けた。アパート風の彼の一室の戸を開けて

入った時、山田の驚きは、大変なものだった。「清美ちゃん、ど……どうしたの。さっき、姿が見えないので、とても心配しちゃった。」
「家に電話かけた？」清美がハッと気がついて咳込んで言った。
「ううん……」

「よかった。山田さん、好きよ……」

清美は、山田の体に抱きつくと、頬に接吻した。山田は、何かなんだか解らず頬の紅を手で撫でながら、それでも、嬉しそうにニヤニヤした。

「山田さん、今夜は、ジャンジャンお酒を飲んで遊びましょうよ」と清美は、山田を抱いたまゝ言った。

「酒か、酒は余りないんだよ。この前、買ったのが二合もあるかな……」

「いゝのよ、私、ウイスキーを買って来た……」

清美はポケット・ウイスキーを出して見せた。

「すげえーな。今日の清美ちゃん、どうかしてるな、先は、あんなに不機嫌なのに、今は……」

「御免なさい。その間に、私をうんといじめて、ね、お願い！」

と清美は、目を輝やかして言った。

「いやだな、僕は、女をいじめるなんて男じゃないよ。安心しないと山田が言った。

「お願い、私が、お願いするの。縄でギリギリ縛られたいの」

「お願いされても、僕には出来ないよ。それくらいなら、僕の方が清美ちゃんに責められたいんだ。」

「そんなのいやだわ、私を責めてよ」

二人は、こんな争いを長い事続けて居た。そして、どちらも最後

には、言い疲れと酒の酔で眠ってしまった。

翌日、清美が出勤してみると、谷慶子も済ました顔で働いて居た。勿論、風間は、例の如く、冗談を言って皆を笑わせたり、テキパキと仕事を進めて行くのだった。清美は、谷慶子の二の腕に紫色の丸い痣のあるのに気がついた。

「私、物干竿にぶつけて、こんな痣が出来てしまったわ。いやになるな」とわざと慶子は、皆に聞える様に言うのだった。しかし、その痣が何を意味してるかは、清美には、昨夜の二人の姿を見ただけでハッキリと解って居た。川村礼子も、解ったらしく、いやな顔をしていた。一番年上の礼子は、プリプリして清美や慶子に当り散らしていた。清美は、今日こそは風間に心の中の事を打開けたいと思つて機会を狙っていたが、機会は来なかった。四時頃になった時、仕事を片付け風間は大きなのびをして、部長に聞える様に言った。

「やれやれ、今日は休もうと思つたのに、四時まで引っぱられてしまった。もう、家内が迎えに来る頃だから、誰も僕の処に新しい仕事を持ってきて来ないで呉れ給え」

「ハハハ……又、奥さん孝行かね。風間君、駄目だよ。君の前にある電話がリンとなると希望は泡と消えるね」と風間を可愛がっている部長は、笑いながら言った。

「そ、そうなんですよ。スポンサーから、風間さんですかと来たら、もう、おしまいですよ」

廻りにいる者が皆笑つたが、清美と礼子は笑わなかった。丁度、その時、給仕が、「風間さん、奥様が御面会です」と言いに来た。給仕に遅れて久子が入って来た。新一郎の好みで、特に、コケテ

ツシユに化粧をし、唯でさえ大きい胸にパットを入れ、体にピッタリとした服を着た久子は、美しく目に立った。久子が、部長や顔馴染の局員と話をして居る間に、女の連中は、「さあ、リールを取っ



えねばならないのだ」と言った風間の言葉が思い出されたのだ。あんな事で逃げ出した自分には、風間の恋人になる資格はないのだ。一度、風間を男として知った自分は、恋人の資格を失う事は悲しか

て、各社廻りをして来よう」とかそれぞれ席を立ててしまった。清美だけは、猫の様な鋭い目で、久子を見て居た。風間の妻を前は一度見たのだが、あの事があってから、別の目で眺める気がした。

「では、明日は、早朝から出勤しますから今日はこれにて御免」と新一郎は、久子の手を取るようにして部屋を出て行った。

「何しろ、フェミニストだから、呆れたものさ」とプロデュサーの吉田は半分嘲笑する様に言った。

「やくなやくな」と誰かが叫んだ。それだけで仕事の忙しい局員は、もう、各々の持ち場の事に気を取られ、風間夫婦の事は忘れてしまったが、清美は椅子の中で固くなって思い続けて居た。あんな可愛い奥さんをいじめるのかしら。

「妻なら、もっと激しい責苦に堪

った。谷慶子だって、あんな悲を作って来たのだから。よし、自分だって出来るのだ。思い切り責められてみよう。あの小柄な奥さんにだって負けるものか。清美は、部長の呼ぶ声も聞えない程に興奮して居た。

〔三〕

酒に酔って赤い顔で、床柱に寄りかかっている新一郎は、清美の真剣な哀願に考え込んでいた。

「君は莫迦だなあ。僕は、君の将来の事を考えて言ってるんだよ。この前の事も、君の恋心を思い止まらせ様と思ってした事だ。君は若くて、美しい。それにお嬢さんだ。僕は、文字通り、ジャキルとハイドなのだ。僕の本体を知っているのは、妻と君だけだ。君だってほんの入口しか知らないのだ。」

「私、莫迦でもいいです。風間さんの恋人の資格を下さい。思い切り責めて下さい。慶子さんの様な悲を体中につけて下さい。」

二人共手をつけない料理の乗った食卓を押しやって、清美は風間の方に、にじり寄って行った。

「口では、誰でもそんな事を言うさ。責められると言う事は、本当に苦しい事なのだ。僕の妻の様な女でなければ、堪えられる生活ではないんだ」

「でも、慶子さんでも、礼子さんでも堪えてるのではありません」

「莫迦な。あんなのは責めではないよ。子供の遊びさ。僕と妻の生活なんて誰も知らないのだ。この前、君を呼んだ時、君が今少し、堪えられるんだったら、少しは秘密を見られたかも知れないが。……兎も角、今の話の通り、結婚を目の前にしている娘じやないか。」

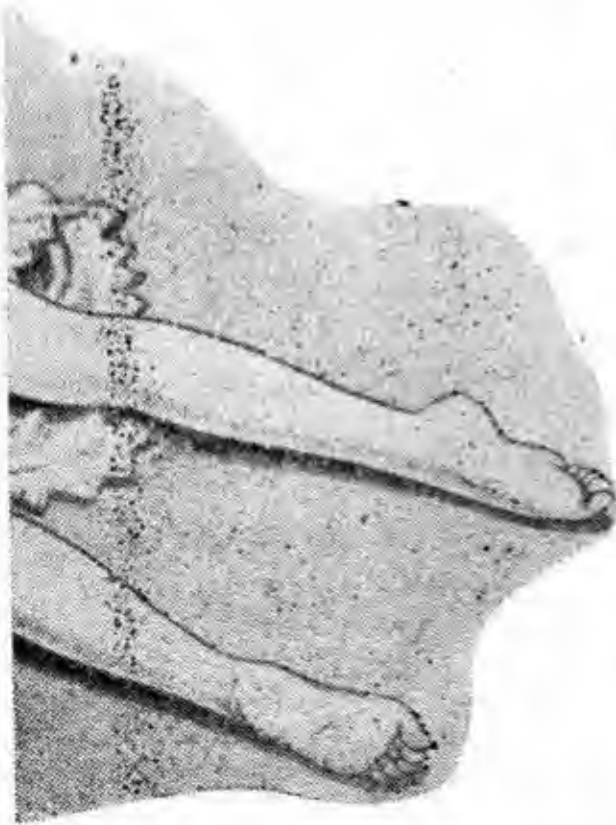
その青年と結婚して、よい奥様になり給え。僕が君を誘惑した事は忘れるんだね。」

新一郎は、最後の言葉を冷然と言い放ったのだ。

「いやです、私は、あなたに責められたいのです。お願いです。清美は、涙を浮べて何度も言った。腕組みをして居た新一郎は、遂に清美の手を優しく取って言った。

「それは、よくない事だよ。僕は、君を愛して居る。これは本当だ。だが、僕の本当の恋人や妻には、君はなれないのだ。なる事は悪い事だ。こんなに言っても、君は解らないのなら、最後の手段として、僕等の夫婦生活を見せてやろう。見るだけで、君は、気を失うかも知れないぜ」

その夜、新一郎は、再び清美を連れて家に帰って来た。久子は以前にもこうしたことがあったので、直感で、すべてを知って居



た。久子は、早速、有り合せのもので酒の席を作った。勿論、清美も、今話した事については一言も喋らなかつた。三人の間の会話は平凡なものだった。

「兎も角、今夜は遅いから、中里君は、泊っていらっしやい」とニヤリと笑って新一郎が言った。

「家が狭いので……」と言いながら、隣の何時も、夫婦の床を取る六畳に、清美の床をひいた。清美は、胸のときどきする思いで、一人床に入った。わざとしたのだろう、茶の間との間の襖が、一寸程開いたままになっていた。酒のため眠くなるのを我慢して、清美は暗い室内で目を開けていた。

夫婦は始めぼそぼそと低声で話して居た。暫くして「もう、お客様はおやすみだろう。そろそろ、我々も寝るかな……」と新一郎が立ち上ったらしい。間もなく、バチリと隣の電気が消されたのには、清美はガッカリした。今夜の約束を忘れたのかしらと清美は思った。と……暗の中から、低い声が聞えて来た。

「どうだ！ 痛いかな！」と男の声だった。「ハイ……」と女の声がした。「これでもか……」「ハ……ハイ……」「よし、お仕置をしてやる！ 起きろ！」と低いが力強い声がした。清美は床の中で、自分の鼓動の音が聞えはしないかと心配になった。バチリと再び、茶間が明るくなった。戸棚を開ける音や人の立ち居の音が聞えた。

「ウッウッ……ア」と言う唸り声と深い呼吸の音がした。清美は、もう我慢出来ず、床から俯い出ると、襖の隙間から覗いた。わざと自分に見よい様に、奥さんは、全裸にされ後手に縛られて坐って居た。キチンと坐らされた両の太腿には、大きな灸を据えられて居た。新一郎は、後から、奥さんの髪を掴み、片手で左の乳を力一杯



握りつぶしているのだった。

「これでも、貴様は、俺の女房で居たいのか」と新一郎は憎々しうに言うのだった。

「ハ……ハイ……」と久子は、髪を引かれ目を吊り上げて苦しそうに言った。

「よし、待て、もっと苦しめてやる。俺には、好きな女がいくらでも居るんだからな。貴様の様な女は責め殺してもいいのだ」

新一郎は、力一杯、久子を足蹴にして、戸棚から、なにかを出した。久子は蹴られて体が倒れたが、又キチンと坐り直した。清美はよく見ると、奥さんは薄い洗濯板の様なものゝ上に坐って居るのだった。新一郎が向き直ったのを見て、清美は、アッと叫ぶところだった。真白な気味の悪い鬼の面をつけて居たからだ。新一郎は、二本の三角の棒を出すと、奥さんの坐って居る折り曲げた足の間に差し入れた。勿論、久子が腰をあげて、棒の入る様にした。そして、再び、棒と足を固く縛りつけた。清美は興奮しながら、眺め続けた。新一郎は、再び立って、今度は、前よりも太い短い棒が五分程の間を空けて結びついてるものを持ち出した。そして、これを太腿の上に置くと、奥さんの後に廻り、自分の体の重みをかけ、前半身を押し曲げて、後手の腕と首から、その棒の板についた鉤とを固く綱で縛りつけた。そして、全身の重みで、上から押しつけた。

「ウウウ……」と久子は苦しそうに唸った。

「どうだ、これでも別れないか……」

「ウッ……わ……わかれ……ません……」

清美は自分が胸を責められる様な思ひだった。それが済むと、今度は、再び棒は取られ、もう、ぐったりとした久子の体を床の上に仰向けして、新一郎は腹部に馬乗りになり、片手で肩を押さえ、一方の手で、久子の左の乳房を鷲掴みして曳きちぎる様にした。その度に、久子は唸き続けた。新一郎が乳房から手を離れた時、明るい

電燈の下で傷だらけの変形した左の乳房に、清美はやっと気がついた。それはこんもりと盛り上った右の乳房とは別人の乳の様に違って居た。黒い乳首だけが、莫迦に尖っていて、それも、曲つていている様に思えた。全体にふくらみも少なくだらりと横に垂れているのだった。それだけでなく、よく見ると、小さな黒い穴がポツポツと開いて居た。新一郎は、今度は、手に洋服のブラシの様なものを持って、これで、乳房を叩き始めた。

「もう、許して、御主人様」と低く呻く様に久子が言った。新一郎は黙って叩き続けた。

そのブラシは普通の毛でなく、針金の様に固い毛で出来るらしかった。見る見る左の乳房から肩にかけ赤くなつて来た。そして乳房からは、血がにじみ出て居た。

「まだ許さんぞ」と仮面の新一郎は、ブラシで叩く手をやめると、今度、片足を取って膝頭が、細い胴につけ、太腿の裏を彼の足で押さえ、膝から上を前に手でぐいぐいと押したのだ。

「く……苦しい……ウーウ……」と人の呻きともつかない変な声で久子は泣き叫ぶのだった。清美の方に向けた久子の顔には、一杯の玉の汗をかいて居た。目は血走り、唇はゆがんで居た、清美は余りの事には固く動かず、唯、呼吸が止りそうになった。

拷問は次から次と続いた。久子が気を失ったかと思うと、注射薬が打たれた。毛の焼けるいやな臭いに、清美は吐きそうになって来た。足の小指が焼かれるのを見た時、清美は、もう気を失った様に襖の所に倒れてしまったのだ。そしてそのまま酒の酔が出て、朝まで知らなかった。

朝、起きてみると、自分はキチンと床の中に居た。昨夜の悪夢を

思い出して、ゾツとした。

「もう、お目覚め？ 局にお出になるのなら、もうお起きになる時間ですわ」

と久子が起しに來た。清美は久子の顔を見るのが怖ろしかった。しかし、久子は、平気で朗らかに話しかけて来るのだった。蒼白い顔は、元気がなく、時々、痛いところがある様に顔をしかめる他は別に、何時と変った所がなく、可愛らしい奥さんだった。唯、今日は洋服でなく、着物を着て居た。清美は、久子の胸を見た。感じのよい柄の青色の着物の胸は、ふっくらとして居た。

「ホホホ……何を御覧になつてゐるの。私のお乳？ 清美さんとおっしゃったわね。貴女は、お若いお嬢様なのだから、風間の様な男は思い切らねば駄目よ。私の片方のお乳は、本当じやないのよ。」と久子はニツと笑った。清美は、何も言わないで黙って下を向いた。

「風間……怖ろしい男よ……」と言いかけた時、風間が、部屋の外から「おい、早く、食事の仕度をしてくれよ。今日は、忙しいんだぞ。録音を取りに行くんだからな……」と大声で言った。

食事をして、二人で家を出た。久子は、バラのからんだ垣根から手を振って居た。駅まで歩きながら、二人は無言だった。清美は、遂に堪えられずに口を切った。

「私には、とても奥様の様に堪えられないわ……」

「君は、矢張、見たんだね。僕等の生活を」

二人は、立ち止って顔を見合せた。

「ええ、怖い方ね、……でも、私、見た事は、誰にでも言わない……」

「フフ……言ってもいいよ。誰も信用しないだろう。妻が告白しな

い限りは。僕は、妻以外を本当に愛せない理由が解つたろう……」

清美は、それには答えず、口の中で、「怖い人、でも、私も……」と呟やいた。

「私、人生の素晴らしい勉強をさせて貰ったわ。愛情に対しても、考え直してみる。風間さん、本当に有難とう……」

と清美は、泣きたい気持ちで言った。

「僕は、君からお礼を言われる様な事はして居ないよ。又、見学したいなら、来るさ。尤も、今度は、僕の方でことわるかも知れないが。何故なら……君を責めたい気持ちになりそうだから……」

風間は、駅前で英字新聞を買うと、もう、電車の中では何も言わなかった。

それから一ヶ月して、清美は、局をやめて、山田と結婚するため家事の見習いを始めた。その後、清美の気持は、どう変わって行くかは、今の所、誰にも解らない。本人でさえ解らないのだから。唯、風間に対する愛情は、前と少しも変わって居ない様だから、彼女の結婚が、平凡に行くとは思われなかった。

一方風間夫婦の生活は、例によって例の如く、夜と昼、表と裏では、全く違った暮し向きが続けられて居るのだった。

(終)

Das Grausame Weib

Dr. Yohannes R. Birlinger

△殘虐なる女性達△

—1901年刊行の独文絵入単行本より—

森本愛造・訳



僧院での懲戒教育の後で、この著者は間もなくヴキーン市の市民館の女教師になる事が出来たのだが、彼女は自分の嗜好が満たされないのに不満を感じて、間もなく、巴里に行った。丁度巴里には彼女の叔母に当る人（父の妹）が男女の生徒達の監督をしていた。其の人は、尼僧で、すでに僧院長の地位に居るのだったから、巴里へついてすぐに彼女はそ

の僧院の女助手になる事が出来た。彼女の日記は、このフランスの僧院での規律について次の様に述べている。

「私のすぐ上の地位にある尼僧は四十才位の人で、色々と私に教育上の仕事を与え、説明してくるのでした。そうして、其の結果、間もなく私はその尼僧の採用していた興味ある教育の方法と、常に峻厳に身を持しているこの人に対して尊敬の念を抱く様になったのです。この尼僧はマリイ・テレズと云って、六才から十三才までの五〇人の子供達を受持っていました。私はマリイの助教師であつたので、細かな点に至るまで、彼女の方法に従わねばなりません。その教育の最大の眼目は、生徒に対する容赦のない厳しさと、公正を尊ぶという事でした。子供が、当り前の才能しか持っていない場合、マリイの方法は特にその効果を發揮するのでした。私達は子供達のどんな些細な誤ちに対しても、厳しい罰を与えました。けれど子供達は其の罰の怖さに、滅多に誤ちを犯さないのでした。

こうした体罰の時、私は何時も同席しなければなりません。そうして、マリイ・テレズの行なつた鞭打刑は美的で、享樂的でした。彼女は熟達した技術を持っていましたので、体罰を実施した日から、何日もの間、私の脳裡にその情景の刺激的な印象が深く刻

まれるのでした。或る日、十才になる女の子が友達のノートを一冊取ったという事件が起りました。本人は否定して、自分の持っているノートの由来を種々と申し立てるのでしたが、それは明らかに嘘でした。マリイ・テレズは勿論この娘に鞭打罰を課したのでした。

私は、その娘を押えつけている役目を引き受けました。放課後、私達は娘を懲戒室に引きずり込みました。その部屋には一つの箱型の戸棚がありました。マリイは、近づいている享楽への期待で、息を弾ませ、手を昂奮に震わせ乍らその戸棚を開きました。其処には、尼僧達が肉と官能の誘惑から身を守るために屢々用いられていた各種の道具が一つ宛大切に架けてあるものでした。さまざまの大きさの革鞭、「九本の尾を持った猫」、棒策、苦しみを与える為に幾つもの結び目を持った縄、籐笞、水の中につけてある細く軟かい枝を束ねた白樺笞等がそれでした。

【訳者註、この部分は鞭打に関して屢々用いられる幾つもの道具が挙げられており、尙且これらについて正確な訳語が殆んど見当らないので、以前に沼氏が手帖に云われた通り、読者が他の鞭撻小説や風俗研究書を原書で読む場合、大きな誤りを犯す可能性が有ると思

うので、こゝに特に独乙語で、原本に出てきた通りの原語を挙げておく。

Λ Lieden-und-Riemenpeitschen, in allen

Grössen und stücken; Chats à neuf(9)

queues; Ruten für Geisselungen;

Stick mit grossen Knoten für Kastai-

ngen;

Rohrstöcke; Eirkenruten.Λ 以上】

私が驚いて見ていると彼女は一瞬のためらいをも見せずにならから一本の白樺の笞を取り上げて私に無造作にそれを握らせました。マリイは哀れな娘に向って云いました。

『お前は、人の物を盗んだ上に嘘をついたのだよ。其の上、こうやって罰を受ける事になってさえ、まだ白状をしないのかい？』

『よろしい。お前は改心する為に十回笞を受けるのです。笞を受けますね？ そう、それなら、私を笞で叩き直して下さい』と云いなさい。』

娘は泣き乍ら手を重ねて云うのでした。

『どうか笞を受けさせて下さい。』

私は自分の出る番だという事が判りました

『貴女は盗みを犯しましたね？』

『はい。』

『貴女は嘘を吐きましたね？』

『はい。』

『貴女は何故誤ちをすぐに改めようとしなかったのですか？』

『私は恥かしかったのです。』

マリイ・テレズは声を励まして娘に云いました。

『さあ、これからお前はもっと恥かしい目に遭うのです。罪のない肉体が、悪で固まった心の為に痛い目にあうのだよ。』

娘は義務的に下着を脱ぎ、懲戒用に作ってあった椅子の上に縦にうつ伏せるのでした。この子は、こういうお仕置きに慣れ切っている様でした。マリイ・テレズは近寄って、スカートを背中の上までさっとまくり上げました。

『十回も笞を当てゝ貰えば、少しは効き目がある事でしょうよ。』と云って、私の方に、目配せするのでした。私は昂奮に身体がうずくのを感じ乍ら、第一の笞を振り上げて、露わにされたお尻に思い切り打ち下ろしました。やがて、笞打ちが終ると、娘は「笞打って貰ったお礼」を云って出て行くのでした。

こうした風景は、まさしく、世界大戦の始まる、一寸前の事だったのである。これらの尼僧達——一人はフランスの、一人はドイツ

の——が、答打ちに当って、相互に鞭打愛好癖を持つ人間特有の昂奮を示して居ながら、法的、社会的、又道徳的に、一つも衝突しなかった事は、一にこれらの昂奮や、その原因を被虐者である子供達に気取られなかったという事(2)のみ原因していると思われる。この様に、カディベックの鞭打信徒としての傾向は、少女時代から起っている。そうして、こうした体験は、後に至って、もっとはっきりした形で現れてくる彼女の鞭打愛好に拍車を加える事になった。

教育者としての婦人達が持っていたこの様な傾向は、有名なヴィーン市のサディスティン訴訟に、彼女が主要な被告として出廷したとき、はっきりと、誤解の余地なく、一般公衆の前に呈示されたといつてよからう。

一九二二年から翌年にかけて、ヴィーン市の裁判所が、彼女の行跡に注意して、警告を与えたとき、彼女の意見は、警告と全く反対のものであった。彼女は、ヴィーンで多くの生徒を集めて、個人的な授業を行っていたが彼女の恣意に由来するこうした体罰による教育は、香ばしい結果を得る事は出来なかったにも拘らず、或る親達の間では、彼女は有能な女教師としての声名を得ていた。教育者と

しての有利な条件、即ち、「厳格さ」を彼女が持っていた事も一つの原因ではあるが、それよりも、云う事を聞かない手に負えない子供を彼女が進んで引き受けた事にも拠るのである。彼女にとってみれば、こういう子供こそ、懲戒の機会も多く、両親からはっきりと答打ちによる懲戒権の委託をうける事が出来たからというのが真相であろう。私達が、如何に好意的に見ようとしても、彼女自身が再三に涉って新聞紙上に出した広告は、私達の仮定を確信に変えてゆくのである。

その広告は、子供達へでなく、成人のマゾヒスト達の依頼や、鞭打視虐の愛好者を対象とするものだったからである。彼女は同性愛々好者であったので、彼等と性的な関係は認められないが、子供達の懲戒の時、其等の男達が必らず、種々な口実をつけ、其の場に同席したかったのである。彼等は、その慾望を充たす為に、貧しい子供達に学費を出してやって、彼女の許へ通わせるのだった。彼等の中には貧しい戦争孤児の中四才から十才に至るまでの何人かを、無理に彼女の許へ住込ませた。彼女は毎土曜日、挨拶に来るこれらの子供達を答や鞭で愛撫したのだった。そして同時に次の一週間の中に学ぶには余りにも難

かしい課題を与えるのであった。見物人達はこうして彼等の慾望を充たす機会を作った。彼等の中の或る者は答打つ為に白痴の子を彼女に与えた。恐らく、限度を超えた懲戒も、こういう子供なら、口外しないと思ったのであろう。子供達はいつもその体罰の対象となる罪を犯してすぐに罰せられるのではなかった。いつも、相当の時間を経てから、教師の膝の上に横たえられて、棒や答を与えられるのであった。打撃は常に緩慢に裸にされた尻の上に打ち下ろされた。こうした幾つもの要点は、処罰者の巧妙な加虐本能の満足が如何に、計画的、且技巧的に行われたかを想像するに足りるのである。

こうした答刑に於てその見物人達の一人はいつも答打の終わった後、昂奮に身をふるわせ乍ら、肘掛椅子に坐って紙巻煙草をくゆらせている彼女の前にひざまづいて、その股間に頭を押しつけたりするのであった。こうしてこの女教師は何年もの間、鞭打の熱情的な快感を味った。視虐や被虐の愛好者達は、その年月の間、常に機会を捉えてその満足を得ていたのだった。そして、遂に、一九二三年の十二月、清掃婦ケラアは、カディベックの許に預けられていたその娘グレエテを伴って

少年裁判所に姿を現わし、女教師を、少年少女虐待の科で告発したのである。当局は、血のにじんだ尻を確認した。ケラアは、娘が再三脱走したが、其の都度連れ戻され、仕置きをうけたこと、娘が、二度と女教師の家へ帰りがらないこと等を述べた。続いて行われた自宅捜索で、カディヴェックの家からは、多くの鞭や笞、棒、ステッキが発見され、⁽⁶⁾インスブルックに住んでいた某画家から彼女に宛てたサディズム愛好の内容を持った手紙等が押収された。この為め、女教師は拘留され、起訴されたのである。

拘禁中に、女教師は、一つの手記を発表したが、その内容は、彼女のこうした性的な傾向について、興味あるものである。即ち、第一に男に対して、その性が単に子供を作る為にしか必要のないものとし、⁽⁷⁾(同性愛「サフィズム」) 妙な考え方であるが、其れ故に、母性を人間価値の最高と考え、従って母性と性慾とが奇妙に交錯して、母体子供の間の相互感情に強い性的な愛情と感覚とを確信していたのである。彼女は、少年達を鞭打し、懲戒した事を認めたが、その懲戒は、無意味に与えられたものではなく、相当の理由があった事を強調している。而も、彼女が鞭打に際し

て、明らかに性的昂奮を示していた事を認めている。要するに、彼女は、性的な愛好故に教育の主要な方法として、笞打を課し、ひいては、笞や鞭を除いて教育は存在しないとまで考えたのであった。そうして、こうした体罰を性的愛好の故に実行する事が社会的法律制的な制裁をうける事を知らなかった。彼女はこうして、控訴審で服罪し、五年の重禁錮を宣告され、一九二五年末、恩赦によって釈放された。

併し、私(『著者ビルリッゲル博士』)は、女性の鞭打加虐においての病的な悪癖についての記述を、一応この「教育者としての女性」についての章を以って、終りたいと思う。

私は、これまでに列挙した多くの記録に基づいて、女性の加虐鞭打の性的愛好は、決して病的に稀なものではなく、環境によっては、いつでも、容易に発動する、一般的な本能であり、エーベルハルトに従えば、それが、母性本能から由来するものであるという事に関して、充分な説明をしたと考える。これまでに述べた実例の適不適は別として、結論的に、女性の加虐鞭打の愛好者は、男性に於ける受動鞭打の愛好者と同じく、甚だ数多いものであるという事に判っきりした反証を述べるこ

とは不可能だと信じている。(第三章終)

訳者註、甚だ、ミス・プリントが多いので、

大変申し訳なく思っている。そこで、これからは各所に現われる、地名、人名等の固有名詞の原綴を一括してみようと思う。数字はいつも、其の回の始めから、123、、、という風にして、次回は又123、、と始めることに御注意願いたす。

(1) マリイ・テレス(人名) Marie Therèse.

(2) カディヴェック(前出) Kadivec.

(3) サディスティン(女サディスト) Sadistin.

(4) ケラア (人名) Keller.

(5) グレエテ (人名) Grethe.

(6) インスブルック(地名) Innsbruck.

(7) サフィズム Saphismus. <Sapho.

(8) エーベルハルト(人名性科学者) Eberhardt.

次章は、第四章『女主人と奴僕、奴婢』
「DIE FRAU und DAS GESINDE」である。
以上

晴雨私稿

血染の毛綱 (五)

伊藤晴雨

日本結髪史という、最近出版された書物をまだ見て居ないので、どういう日本髪の説明をして居るかを知らないが、中将姫の雪責が単なる伝説であるか、或は芝居でのみ見るものであるか、それは別に穿鑿する人も居るだろうから、私は暫らく中将姫の雪責を實在のものとして考える事とすると、当時の服装が唐装に近く、頭髪は唐輪（からわ）の様な結び方である。芝居の方では喝食（かしき）という髪で、俗にいう下げ髪である。特に中将姫の場合には頭髪の戦慄に依って責の感じを出す為に、特別に髪を沢山に髪に植え、髪の長さも亦、それに相当して居る。最近の中将姫は肉色の無地に黒い髪を振り乱して責められ、縛られずに叩かれるが、昔の中将姫は吹き輪という、芝居道にお定まりの髪に、赤地に菊の縫い取りのある振袖で縛って打たれものであるが、中将姫が親世音の申し児であるという所から理窟にこだわって縛らない事にしたのは、腰元の桐の谷が自分の補襦を脱いで、枝折木戸越しに姫に投げてやる仕草がある為に、縛られない事にしたのかも知れないが、先代中村歌右エ門の若い頃は縛られて居たと思う。中将姫の被縛問題の可否は別として、扱実説（？）の方の結髪では、ま

だ元結がなかったと思われる時代に結び上げられた極めて自然な頭髪は、責めに依って自然に解け乱れて、劇道でいう「総さばき」即ち（かしき）の形になる。この様式（最近の中将姫）は大阪の文楽にも取り込まれて居ると思う。

扱、そうした天平、承平の昔は暫く描いて責の絵として取り上げられる時代物（歴史画）の髪は元和慶長頃からが面白くもあり、責の文献としても亦顕著なものがあると思う。仮令ば切支丹迫害史の中に出てくる、長崎丸山の遊女の髪は当時オランダの風俗を交えて、前髪の処に鍔を当てゝいるのは現代のパーマネットと同じであり、揚げ巻風に束ねた宝髻式の髻は印度の仏像を思わせる。セイロン島などの寺院の壁画乃至はレリーフなどに見る女の髪形に酷似して居るので、茲にも外来の結髪を日本に取り入れた時の流行が窺われるこうした形の髪が責に依って其形式美を壊された時は、更に日本本来の形に帰って、鎌倉時代の静御前などの取り上げた束ね髪の乱れた時と同じ形に還元するのであろう。

現代演劇用の「かつら」で此髪を結う場合には演劇の形式上、遠方から見る為の必要上から稍誇張しなければならぬ事を「かつら」

の髪の毛の制限から鬘の裏面に「紺土佐」(こ

田鬘が出て来たが、細い鬘の形になって来た



んどうさ)という紙を鬘附け油で張りつけて、二分された鬘の形を整えているが実際の場合には張り紙などは用いず、自然の頭髪を其乞撫み上げて、そうして自分の頭髪で鬘を巻き附けたものに過ぎなかったから、責められる女が、此髪を振り廻して苦悶したり、身体を動かせば容易に髪は解けて乱れたに違いない。

明治廿一年頃の、月岡芳年が描いたやまと新聞の附録「倭歌島物語」

の表紙面に、遊女歌島の責場の画があつて、髪は乱れてサバキになって居る。其時代が慶長であるから江戸の初期で、遊廊が出来た計りの遊女の風俗を描いている。此歌島の責場は芝居では立兵庫の鬘でなく「カラ毛」の潰し島田となって居るのは、見た目本位の旧劇の約束から来て居るので、実際の風俗とは違っている

ので、之は役者も作者も承知の上である。其後になって承応から明暦となり、延宝天和の頃になって女の鬘は油で固める様になって、割筭や島

ので責場に之を応用したならば鬘附け油で固めた髪は乱れても凄惨味は少いであろう。其後の元祿頃の大阪の黒表紙(今ならば芝居の絵本筋書)を見ると、責場の女も髪を振り乱したものは少く、もし有りとするれば当時の狂言作者の創意から来る幽霊である。話が少し横に外れるけれども、責場に全然無関係でないから書く事にするが、当時の脚本によると其頃の幽霊は現代、或は最近のその如く(シヨウゴ)という鼠の着附けで皿屋敷のお菊が責め殺されて井戸へ切り込まれ、後に天井から宙乗りになって鉄山の傘へ舞い下る例の「トカゲ」の形の様な形式でなく、最初は傾城の形で出て物語の色もようになり、傾城の髪をバラバラにして、それから邸の悪人共の企みを殿様に打ち明けてドロドロで消えるという一定の型があった相で、こうした事は前記の黒表紙の狂言本にも画が出ているので、責場と散し髪の関係がよく判るのである。

逆説すれば、宝永の頃に流行した「バイ鬘」という鬘は主として新吉原の遊女が結んだ鬘で、これは後に天明頃の燈籠鬘(とうろうびん)の頃まで遊女が結んだのが、後に民間(?)に流れて寛政度になって仇ッぽい女や下層社会の女房などが好んで結んだ達磨返(

だるまがえし)又は(シレッタ結び)などに変形したのでは無からうかと私考する。

古代は長髪を以て美人とした事は紀州に残った髪長姫の伝説を甫めとして新著聞集の中に髪の毛の薄いので所夫に愛想を尽かされた醜婦が、彼女の髪の毛の多いのを妬んだという話もある位で、岡山騒動の大立物お筆の方が魚屋の娘で、岡山の殿様に見染められたが禿頭病であった為、島田鬘のかつらを冠っては殿へ出たという話があるが、これは余りに大嘘で、維新前の「かつら」は現代の様な精巧なかつらは無いから、毎晩殿様と同衾する際に「かつら」を冠った儘お伽をする事など出来る訳のものでは無いから、これは講釈師のヨタと見て然る可きで、岡山騒動の中には奥方の裸体踊りという皮肉な一種の責め場があるから、序を以て記しておくのである。

昔の大名や江戸城の中で、御殿女中が結った片はずしという鬘は色気のない鬘だが、責める方の髪としてはいゝ形で、芝居でこれが最も有効に応用されているのは「吉田御殿招振袖」(よしだごてんまねぐふりそで)坂崎出羽守と千姫の事を描いた狂言で作者は勝彦蔵であったかと思う。これは山本有三氏の(坂崎出羽守)より廿余年も前に出来た芝居で

ある。竹尾という腰元が千姫の嫉妬で惨酷に責められる場がある。(いゝなづけ)の所夫の小間物屋の与七という男が誤って吉田御殿へ呼び込まれ、千姫の寵を受けている内、此邸へ来た男は散々姫のおもちゃになった揚句の果てに古井戸に斬り込まれるから、今の内に逃げろと勤めるのを意地の悪い老女に立聞きをされて、与七と共に責められるのを大久保彦左エ門が助けるという筋で、其前に坂崎出羽守が切腹の件りがあるが、大阪出来の狂言丈けに此頃はメツタに上演されない。「片はずし」で縛られて居る美しい女の画は、老女村岡(やまと新聞の錦絵附録)と春陽堂発行の「みやこのはな」明治初期の文芸叢書の中の絵島の揚り屋の画位なもので、大抵片はずしという髪は敵き役にはまって居る様だ。

徳川時代、千代田城中で五節句(一月、三月、五月、七月、九月)の祝儀として奥女中の結う「おすべらかし」用の長かもじは五尺と定めてある、此髪を入れる為に、かもじ函が用意され、



又此長かもじを結ぶ女の髻には紫ちりめんの「服紗」

たるま返し



という布が髪の手へ掛けられるので式日は長髪の女が揃っていて頗る美しかったそうである。勿論、五節句の祝日に責場などの行われる筈はないが、若し此服飾で責の実演をやったら素晴らしい事であろう。

「あの縛られた姿を見よ、雨を帯びたる海棠の」云々と云い「人には一つの癖あるもの」といって暗に被縛主義の讚美者である旧劇祇園祭礼信仰記の内、金閣寺に出て来る松永弾正は奇クの愛読者であるに違いない親の敵と弾正に斬り附ける雪姫を桜の木に縛り附けて楽しんで暮を閉み乍ら雪姫の姿を眺めて北叟笑んでいる弾正は、好漢愛すべき男で、此雪姫の髪は屢説する如く、劇界で云う俗称十能（じゆうのう）正しくは吹輪という髷であって、維新前大名の奥方や姫君の結んだ髪である。吹輪にも十能形と細い吹輪の二種あって後者は中年増が結んだもので、髷の中央に白紙を巻いて髪の乱れを防いで居た。此髪は「かもめづ」といって「たば」が鷗の羽根の如く飛び出

している。此結髪の形は相当永く命脈があったらしく、享保以後安永頃までの絵に盛んに出てくる。其例として女今川（おんないまがわ）「女子用百科辞典とでも云うべきか」などの挿絵に用いられて居る。

此頃の女が劇しい責に遇ったら、髪の誇張が少いから徳川末期に見る如き「髪は乱れて櫛は飛び」といった様な形容詞は出ないと思うが、下って天明期になると女の髪は異常な誇張が行われ、髷は大きく、髪は燈籠髷と云う形式を生じた。これは江戸風俗の片鱗であって、女が頭髪を洗って垢脂を止めないという伊達から出発しているもので、多くの女の中には髪をすかして虫の刺青をしたものさえあった（男も同様）というから責の場合には髪の手が乱れ易く、髪をふくらませる為に用うる（びんはり）という銅の針金で作った道具は責めの材料に使用された事であろう。

次いで文化文政頃になって来ると、女の髪形は甚だしく発達して、髷は大きくなり、髪は道具も複雑を極めて来る様になって、吉原の遊女などは特殊な形式と誇張が行われる様になって、こうした形が歌舞伎の舞台に影響して来た事は争われない。

歌舞伎の舞台から、更に市中の女に移って

天保以後は全く従来の簡素であつたものが華美となり、複雑となつて明治に及んだと見ても差支えないと思われるので、水野越前の天保の改革は簪は一本に限るとか、簪の長さは何寸以上は禁じるとかいう厳密な規定を設けても、永年に亘つて発達した婦女の髪と服装は一片の法令では禁止し得なかつた。「洗い髪」や「水髪」という女の形式美が発達したのも天保以後であつたと思われる。「水髪」の特色は芸者と客の関係から来たものである事は嘗て書いた事があるから省略するが、天保以後、島田髷は大きくなって、島田髷の髷入れという物が出来て、妙齡な婦女が自分の髪を自分で結う事が出来る様になつたのは、結髪史の上に著しい変化で、此髷入れという道具は明治時代になつて西洋文化が輸入され、束髪が進入して来てから自然消滅になつてしまつた。

女が自分の髪丈で結髪しては誇張が不充分だといふので「入れ毛」即ち（かもじ）を用いたのは、結髪之美を最高のものとして櫛や簪を補助としたに過ぎないので、明治時代になつてから髷の根（髷）が下つて前髪が細くなり、誇張された髪は引つ詰め様の反対に詰つて（たば）が長くなつて来たのは當時

の錦絵などを見てもよく判るであらう。

現在、風俗史料の貴重な材料となつて居る森戸錫太郎著、小林永濯画、吾妻余波（あずまなごり）上下二巻は稀世の珍書として挿絵画家の間に尊重され、岩田専太郎の「挿絵の描き方」（？）の中にも引用されてあるが、此書の中に当時の婦人の髪形が前方から見ると島田も丸髷も後ろへ隠れて見えないのは髷の根が低くなつた故だ、これは人情が浮薄になつたからだ、昔は髷の根が高かつた。古今人情の厚薄が之れを見ても判ると序文でフンガイして居るから、髪形の形が一時變つた事と思われるが明治卅年前後から三六、七年、即ち日露の戦捷後になつて再び女の髷の根は高くなり、島田髷や丸髷は異状な発達を來して前髪は宝珠形となり、完全に近い迄に女の結髪が発達したが、芝居も此影響を受けて女形の「かつら」に一大変革を來した、それは壮士芝居から一變した新派（新劇）が自然の演技に伴う自然の女形の「かつら」で現芸術院会員喜多村録郎の如きが卒先して不自然な旧俳優の用いた（旧グリ）と称する髪改良を試みた。それ迄の女形の前髪が小さかつたのを大きくしたり、引つめに結つた髷を横に張り出したり生え際の不自然を改良したり



いろいろな方法で自然に近い髪製作を試みたので、旧派の俳優も亦之れに追従せざるを得なくなつて来たのは争われない事実で、此頃から盛んに小芝居で行われた女の責場の「かつら」は自然に近い凄惨な演技が出来る様になったのは、責の研究資料は女の髪から取り附くべきであると私は考えているので、それが「過去の産物」であるとなひに拘らず責の沿革史として「髪のかわれ方」即ち責に依つて破壊される日本固有の結髪を研究して見たいと思ふのである。

「文七に踏まるな庭のかたつむり、其角」という句にある如く、人情噺の文七元結は実在の人物であり、文七の住んだと伝えられる港区麻布の文七の住居と伝えられる元結製造場の

「ローカル・レポート」

割 腹 自 殺

杉本昌三郎(長崎)

一月二十三日の長崎日日新聞に「割腹自殺神経衰弱の青年」という見出しで、左記の通り掲載されておりましたので全文を御紹介致します。

牛深市牛深町真浦漁業木田安宏さん(二一)は神経衰弱で静養中のところ二十二日

の跡は元祿時代の教訓として残っているが、元結が発達したのは元祿頃だとすれば、其以前には男女の髪は紐で結んだのかと思われるので「揚げ巻き」などの方法が主として一般に用いられたのではないかと思う。勿論、平元結(ひらもとゆい)などもあった事だろうそれに就いて思い出すのは芝居の雪責に使う紙の雪であるが、あの浦里の雪責や中将姫の雪責に使われる三角に切つて簀の子から降らせる紙の雪は元結に使う紙に限るのである。これは元結に使用する紙が特に風を切つて舞い落ちるので、三角に切るのは、高さ二間余の処からヒラ／＼と飛ぶのに効果があるからで——というより、元結の紙は雪責の劇にとって重要な役割を演じて居る訳である。但し昔

午後五時ごろ同町船津区坊主山で出刃庖丁で腹を切つて自殺をはかったが死にきれず苦しんでいるのを通行人が発見、同町八田外科にかつぎ込んだ。

しかし内臓が露出し出血多量のため同日午後十時ごろ死亡した。

の雪は三角だが、現在は三角や五角や丸いものもある、これは劇場の舞台が高くなつて、観客席の角度も多種多様になつた為である。維新前の芝居は背景(大遠見)の高さが九尺であつたものが、現在では十五尺以上になつて居り、二階に限定されて居た見物席が四階になつて居るという風に横にも横にも延びて居る舞台であるから、従つて雪も三角のみで無くなり、雪籠の寸法も昔と違つて舞台一杯に横に出来ているから雪も三種類、日本紙と洋紙と丸い雪と併用している。三種三様の雪は各自其紙の性能を発揮して、早く落ちるものと遅く落ちるものと粉雪の様に降るものとがあつて、照明と相俟つて最早昔の三角一点張りでは納らなくなつたのは、機械的には進歩しているが余韻は少なくなつて居る。

いろいろの雪責の咄は追つて書く事にして茲では髪概念的な説明に止めておく事にする。(つゞく)

【告知板】

○羽村京子さんの「A感覚の秘密」は続稿を頂ける筈でしたが都合により中絶しななければならぬ由、通信がありましたのでお断りしておきます。○次号予告通り大体忠実に掲載しておりますが、中には特殊の事情のため遅延或は中止になったりすることとがありますことをお詫び致します。

明治年間の新聞覚え書 (二)

吾妻新

禪をしめる (二・八・一五東京曙)

京都大宮通り松原下ル在の箔屋の妻は、病死した夫の五十日忌に近所を挨拶廻りして評判になった。四十九日の法事に餅や饅頭を配るのは昔からの慣習だが、彼女の配ってあるいたのは、茶碗一杯の白米と薪一本づつだった。だがそんなことはどうでもよいとして人々をおどろかしたのはその異様な姿である。彼女はまずキモノをすっかり脱ぎすてて短い肌襦袢一枚となり、夫が最後までしめていた古い越中禪をしめた。そのままの恰好で白昼往来をあるいたのである。

「此は良人の死したるを悲しみのあまり、心の狂いし者ならんといへり」と新聞は附記し

ているが、狂気だったとは断じていない。奇矯な姿をみれば、気が狂ったのだらうと噂するのは当然の常識的見解で、なんともいえないが、夫の使用した禪をという点に興味を持たれる読者があるかもしれないから、ここに掲げてみた。

女処女徴兵の風説 (三・四・八東京日々)

徴兵令発布のときに血税という文字を誤解して、生血を取られるのではないかと各地に騒動を起したことは有名な話だが、処女徴兵の風説はあまり知られていない。しかし実際にはここに報道された事実の他に、他の地方にもあったと推察される理由がある。だがそれに触れると話は複雑になるし、ここではた

だ東京日々新聞の記事だけを紹介しておく。

豊後国の国東郡、速見郡の両郡で、誰言うもなく徴兵令改正の噂がひろまった。それは男ばかりでなく、女も廿一才になる検査の上処女にかぎって兵役に徴集されるというのだ。しかもその理由は、各地方の鎮台(のちの師団)の兵卒の女房にするというのだから、民衆の驚きは一方でなかった。「総領娘のあるは俄に縁談に駆け廻り、嫁にやるのは能い口は無いかと捜しあるくもあり、中に甚だしきは、七才未満の女子に入れ毛をして丸鬚に結び鉄漿をつけさせて、是には立派な云い名づけの亭主が御座りますから近日婚禮しますと戸長さんの家へ吹聴に行くと云う大騒ぎ」を演じた。

いまから思えばバカげた風説だし、廿一才の処女を徴集するのに七才の少女に恐怖をもつのも矛盾しているが、これをただ文明開化の風通しのよくない地方の無知のせいに帰することはできない。大正十二年の関東震災当時、朝鮮人暴動のデマがどんな悲劇をひき起したかを考えてみればわかる。当時私は十五才だったが、井戸に毒薬を入れられると云われて子供心に恐怖をかんじ、抜身の日本刀を持って家の井戸傍にガンバるような愚劣なことをした。合理的に考えれば有りえないことを有りうるように思いこむのが風説の核心な



のである。明治十二年といえは西南の役から二年近くたったているが、藩閥政府にたいする不満と西郷生存伝説が高調に達した年であり、眼に見えぬ人心の動揺や不安は各地にひろまっていた。また一家の働き手を奪い取る徴兵制度への怨嗟や、兵營生活の恐怖は、軍国主義が根をおろした昭和年代とは比較にならないほどつよく、当時の新聞には脱走兵の事件や兵役逃れの方法が公然と掲載されていたほどだった。こうした社会的背景を念頭におけば、処女徴兵説がなんのために、どこから、どのような拡まりだしたかが想像できる

だろう。

それはともかく、一層おどろいたのは県庁だった。ただでさえ不人気な徴兵制度がこれをキツカケに反政府熱と結びついたらコトである。あわてて論達書を出し、巡査をくりだして事実無根であることを説いてまわったが、やっと嵐が収まったあとで思わぬ拾いものをしたのは独身の男だった。ひごろ女には縁なきをかこつ進中が、引手数多の選り取り次第というわけで、片っぱしから結婚にありついたというわけだ。「是は血税にはあらで穴税とおもひしならん」と、東京日々はシヤレのめしている。

仲よく妻を共有 (二・四・七朝野)

これはまた落語のような話。ただしその中に、当時の男性一偏倒の封建道徳と、性的オモチャとしか扱われない妻の暗澹たる地位が浮彫りされている。

遠州榛原郡荻間村の絹村五平(四一)は妻のカクと二人きりで、親も子もなく暮らしていたが、カクは去年五月の末に病死したので、炊事裁縫の不自由はもとより、空閑やうかたなく悶々としていた。そこで後妻を迎えようというわけで、同じ村の棟林伊平という男に

相談したところ、伊平の懇意で牛淵村に斎藤万吉の妹ミワ(三五)がちかごろ離縁となり、まだ決まった縁もないから話してみようということになった。当時のことだから交渉の相手はもちろん本人よりも兄の万吉である。さて申入れを行うと、兄の万吉にも異議はなく、それでは四月六日が最上吉日だから、その日に婚礼を行おうということになった。

ところが本人のミワにはその後すえは夫婦とまで約束を交すようになった男があった。荻間村の杉浦太吉(四五)である。降って湧いたような縁談話に胆をつぶした彼は、さっそく五平のところへ出かけて事情を打ち明け、俺が先口だからミワは渡せないと言ひ込んだ。だが五平にしてみれば、向うは密通、こっちは公然である。もう婚礼の期日まで定まったことだから今更ら破談することはできないと突っぱねた。

すったもんだの末、媒酌人の伊平を呼んで意見を聞くことになったが、この伊平の案がふるっていた。



「太吉さんの話だと当人同志が馴れあって夫婦約束をしたそうだが、西洋ではそういうことも沢山あるそうしだ、一概にいけないとは申せない。といって五平さんの縁組は天下晴れてきまったことだから、取り消すわけにはいかない。そこで、どうだろうね、いって二人で相持ちちいうことにしては」

「相持ちちって、どうするんです？」
「婚礼は日取りまできまつてゐるんだから、ミワさんは五幸どのの嫁御になる。しかし太吉さんは夫婦約束までしたのだから、ミワさんのからだは半分太吉さんのものだ。たとえば、月の上半分は五平さん、下半分の十五日は太吉さんのものにしたらどんなものだろう。もし妊娠して子供が生れたら、どちらでも顔の似ているほうを父親とさだめる。それがハッキリしないで母親のミワさんに似ているようだったら、二人で育てるということにしちやどうだい？」
呆れ返った話だが、それは名案だということになった。こうして本月

六日の婚礼式には五平太吉の兩人が平然と席につらなり、祝い酒をくみかわした。

さてそこまではよかったが、家に戻って五平がつくづく考えてみると、一カ月半分づつの約束で自分が最初の十五日を取ったとすれば、大の月は三十一日だから、太吉のほうが一日多くなる。これでは損だと気がつくともう矢も楯もたまらず、その夜の二時頃だというのに家をとびだし、太吉のところへ駆けつけた。

「………どん／＼戸を敲いて大音に、太吉さん／＼半月代りの約束は破談だ／＼というゆえ、何故だと聞くと、大の月は一日少ないからというので、太吉は笑いながら、アノ女は下十五日の内にいつも差支があると云へば、そんなら原案の通りにすべいとて、さっさと帰り去りしとは、言語道断とも抱腹絶倒とも申し様が有りませぬ」

妻子四人と全財産を人妻と交換

(一三・四・一三東京日々)

越後国古志郡栃尾の郷なる吉水村に、代々医者をする加藤儀庵(三九)という男があった。妻おちん(三五)との間に男女三人の子供もあって、何不自由のない暮しであ

る。しかも彼には先祖伝来の田畑もあり、小金を溜めて貸金までしていたから、村では羨まれる身分だった。

彼がよく往来する隣村の原村には、塩谷と名づける往来がある。その道傍にみすばらしい店が一軒あって、飴や駄菓などを売っている。主人は佐藤権松といって生来うだつの上らない男だが、妻のおよし(二五)が田舎にはまず見当らないような美しい女だった。儀庵は病家への往き帰りに、たまにはこの店に腰をおろして休むことがあったが、見れば見るほどおよしの容色に惹かれ、いつしか忘れがたいまでになった。或る日のこと、とうとう彼は権松にむかって、こんな相談を持ちかけた。

「簀から棒にこう云うとあんたは驚くだろうが、じつは拙者はずっと前からおよしどのに迷っている。といってもまだ心を打ち明けたわけではないし、ましてや手など出して覚えもないが、ものは相談、折り入って拙者の願いを聞いてはくれまいか。というのは、失礼ながらあんたは財産もなく株もなく、いわば水呑百姓のご身分、拙者はごぞんじのようにまず生活には困らぬだけのものを持っている。ただあんたが持っているのは奥さんだけ

だ。およし殿の容色は栃尾一郷に及ぶものがない。そこでどうだろう、拙者の持っている田畑山林家財、つまり財産全部をそっくりあんたに提供する。ただし女房子供も全部引き取ってもらうとして、あんたはこのボロ家におよしどのを附けて拙者に譲ってほしいのだから……」

あまりの突飛な話に、権松は冗談だろうと思って取り合わなかった。だが儀庵は大真面目で、その後も来るたびにおなじ話を持ち出すので、権松はしだいにこの奇妙な交換条件を考えこむようになった。なるほどおよしは近辺に鳴り響いた美貌の女、ハキために鶏だとか果報者だとか言われているから、医者が迷うのもムリはないかもしれぬ。また自分にしてみても、女房の餅肌に未練がないとは云わぬが、味わうだけは味わった今日、このまま抱きしめていたところで生涯貧乏から浮び上れる見込みはない。相手の云分さえ呑んでやれば明日から大家の旦那様になれるのだから、この取引に損はない筈だ。……

こうして奇怪な取引がきまった。それじゃあ後になってイザコザが起きぬようにと、妻女其他一式の交換の証文を中等学校の生徒に清書してもらい金沢村の渡辺某を証人として

印紙を貼って交換した。途中で邪魔が入ってはいけなからというので妻にはもちろん親戚にも内緒にし、ひそかに黄道吉日をえらんで、身代りのやり方でお互いの家にのりこんだ。つまり儀庵は家業の道具の薬籠一箇をたずさえて塩谷入の駄菓子屋に移り、権松はボロを着を晴着に着換えて吉水村の邸におもむいたのである。

この事件はたちまち知れわたり、親戚縁者はもとより、戸長や組合のものまでが駆けつけて、途方もないことだとさんざん説論したけれどもあとの祭りだった。証文を楯にとつて頑張られると、それを無効だと云える人間が一人もないのだ。水吞百姓の権松は生涯の玉のコシに乗ったつもりで腰を据えてしまつたし、塩谷入の店へ行ってみると、儀庵は筵屏風のかげに袱卓を敷いて座り、新しい女房を引きつけてその顔から眼を離さず、「本人同志が承諾しているのによけいなお世話だ」とうそぶいていたというのである。新聞はこの事実を長々と報じて、「風教地を払い人倫を乱すの咄々怪事というべし」と嘆じているが、いまのように法律問題にして解決しようという気配はさらにない。

この種の事件がけっして例外でなかったこ

とは、おなじ新聞の旧号に讃州の津島好松と大西由雄の妻女交換問題が報道されているのでもわかる。おそらく当時では、こうした野蛮な事件が公けになっても、当事者同志（この場合は夫だけだが）の合意ということがモノを云って示談の形となり、うやむやのうちに成立してしまつたものかと思われる。法律を具体的事実にあてはめて解釈する慣習の強い力のなかに、専制的な夫婦関係が当然のようには認められていた証拠である。妻という立場からいえば、どちらも品物のごとく扱われている。夫は物質ないし欲望の上でそれぞれ利益を得ただろうが、妻の得た利益はなにひとつないのだ。美しいおよしはいぜんとして貧乏世帯であり、ただ求めてもいなかった男に日夜弄ばれることになる。儀庵の妻おちんにしても、生活様式は変わらないのに、財産目当てに乗り込んできた男を旦那様として、三人の子供とともに仕えなければならぬ。このようなサディズム、救いのないサディズムは、愛しあふ夫婦の緊縛遊戯などとはまったくべつのカテゴリーにぞくする。

女装男子の鶏姦（四・三〇郵便報知）

茨城県土浦町の料理屋鰯原倉吉方に備われ

ていたお琴という少女が、その実は東京府士族の稲小登次、（二二六）という男だったことがバレた。彼は幼いころから鶏姦されることを好み、いつも女装していたことがわかったが、去る六日、同所の区裁判所で次のような判決をうけた。

其方儀幼少ノ時ヨリ屢々鶏姦セラレ、爾来因習為メニ殆ンド男子ノ情態ヲ失ヒタルニヨリ、居常女装シ因リテ婦女ナリト偽リ料理渡世鰯原倉吉方へ備ハレ中明治十四年二月二十一日夜、右倉吉方へ泊リ合セタル車夫染谷富次ノ寢床ニ忍込ミ、婦女同様ノ手段ヲ以テ鶏姦セシムル科、改定律令第二百六十六條ニ依リ士族ナルニ付破廉恥甚キヲ以テ論シ除族ノ上懲役九十日申付ル。

慶応四年以来、太政官布告が次から次と改廃され、法令も廃止されたり改定されたりしたものが多かったから、いま改定律令二百六十六條を調べている余裕がないが、特に鶏姦を罰する法令はないはずだから、これは「婦女同様ノ手段ヲ以テ」にひっかけた売淫刑であつたと思われる。なお除族というのは士族の籍を剥ぐことで、士族の体面ということとは

当時の量刑に公然と採り入れられていた。一方で平民が幕末以前の功績をならべたてて士族にしてもらいたいという運動はこの時代にもあったし、それがまだ認可された（たとえば明治十四年の山科の郷士百四人の新士族登録）位だから、士族の破廉恥は罪が重かったのである。

英国婦人丸裸にさる（四・五・三朝野）

横浜居留地のシャハンテル（この意味不明）の女主人ウリムは、一昨日買物に出た帰り道に人力車に乗った。ところが金を払わないので代金を請求したところが、あべこべに憤慨して車夫をなぐった。さあ、そうなると思が収まらない。たちまち西波止場に居合した仲間をかたrazって二十数人、彼女の家へ押しかけた。押問答の末にウリムを戸外にひきずりだそうとすると、彼女はいきなり庖丁をもって切りかかった。だが多勢に無勢で庖丁はもぎとられ、とうとう往来に引き出されてしまった。そして手取り足取り、裸にされかけた。

そこへ飛び出してきたのが同家に住んでいたアメリカ人である。彼は小刀を振り廻して躍りかかり、ウリムを救おうとした。アメ

リカ映画ならこれでハッピー・エンドだが、そうはいかない。アメリカ人が車夫たちに押しへだてられている一方で、悠々とウリムは剥き玉子にされてしまったのだ。

この騒ぎで車夫四人が負傷した。やがて巡査が駆けつけて仲に入り、やっと双方をなだめて事件は落着いた。

興味深いのは、これが地方の村の出来事ではなくて、横浜の外人居留地の出来事だったということである。横浜の車夫は当時でも片言の英語がしやべれた。外国人を客にするからである。商売上からも、彼等は外人を粗末にすることはできず、ましてや敵とすることはできなかった。それでも不正の行為にたいしてはこのような直接行動に出た敗戦後の植民地根性とは比較にならない。

歴史を調べればいくらでも



証明できることだが、大体白人崇拜などということは日本人の本性でも本質でもない。それは歴史的につくりだされるし、消滅もする。ある骨格皮膚をもつ国民が他民族はたいする感情は、変えることのできない肉体よりも、可変的な政治力によって影響をうけ、変化するものである。明治以前は問わないにしても、明治から現代までの歴史をみるだけでもその影響を分析することができる。明治初年、日露戦争、第一次大戦、第二次大戦、敗戦後の十年、そしてアジアの革命勢力がやっと多くの人々に認識されるようになりつつある現在および近い将来である。

明治初期の日本政府がいちばん頭を悩ましたのは、日本にくる白人をわが国民が軽蔑しないようにということだった。これは現代とまさに反対である。明治元年四月九日、政府は布令をもって、外国人を軽侮するなと戒めなければならなかった。治外法権撤廃、物質文明輸入のために、洋風を奨励讃美し、伝統的な習慣を打破することはやむをえないし、当然でもあったが、そのテンポを極度に早めて藩閥政府の基礎を固めること——で国民の利益という目的とは別箇に——に急であつたため、日本人の劣等感を助長したのであ

る。だからのちに引例するように、白人の横暴の実例はたくさんある。それをゆるしたのには、当時の政府の不可避的な政策の副産物だったわけだ。だが、徐々に推移する国民意識の動きや、その背景をみればわかるように、白人崇拜は本質的なものではなかった。そして政府の方針にもかかわらず、この頃までには至るところで白人軽蔑の事件が起り、当局者をハラ／＼させたものだった。

白木屋の暴行(四・二・四・東京目々)

またしても裸で恐れ入るが、明治十一年の例(前号記載)とおなじケースがこの年にもくりかえされている。呉服店が客に嫌疑をかけて裸にするという始末のわるい道楽である。

日本橋小網町一丁目荷物運送問屋木屋某の雇女鈴木さだ(二四)が、去る十日裁判所検事課へ告訴におよんだ。しらべてみると、彼女と同僚の松井ふさ(一五)と連れ立って、主人の子供を背負い、日本橋通一丁目の大村和吉郎(白木屋)の店へ先月十三日買物に出かけた。すると、品物がなくなったという疑いで番頭の吉住儀兵衛がふたりに二階にひっぱり上げ、娘たちはもとより背負っていた子

供まで丸裸にして(というのは子供だけ着せておいたのでは口実にならないからだ)、店じゅうのものが集まって笑い興じながら見物した。そのため子供は虫を起す騒ぎを起したが、さて肝心の品物はよそから出たという常套文句でケリになった。二人の娘は口惜しさと羞かしさで泣きながらこのことを主家と親戚に打ち明けたので、「いかにも女と侮どり無礼のみか残酷の致し方」と憤慨し、きびしく同店にかけあった。ところが白木屋では「シヤア／＼としたもので、」斯様なことは毎度でござる事と澄まして何時までも取合ぬよ」り」告訴したのだった。

「毎度ござる事」で明らかのように、強制ストリップは絶えずあった。そして大半は告訴せずに泣寝入りだったということがわかるのである。(未完)

【告知板】○編集部や読者係宛の御便りで誌上に掲載して困るものは「掲載禁止」通信を貰っていけない方は「通信無用」と附記して下さい。○住所を記入していても仮空のものである時は、その旨断り書きして下さい。○編集部宛の通信で第二回以上の分に住所の記入してないのがよくありますが、返信の都合上、差支えない限り書いておいて下さい。

映画随想

河村操

映画を観ることの楽しさは、度々本誌上に書かれている。しかし私達の楽しみをもう一つ満足さしてくれるような映画は仲々少ないのだ。もしも私が映画監督であるとして空想の羽を拡げてみよう。

○最近の海外芸能ニュースにオードリー・ヘップバーンの次回作は「テス」に決ったというのがあった。素晴らしいニュースだ。勿論、テスが最後に死刑に処せられる場面を想像してある。しかし原作では、テス処刑の場面は直接描写されておらず、テスが収容されている監獄の城頭高く、死刑終了を示す黒い旗が上げられたとのみ書いているから、映画でも原作に習うかも知れない。だが、私が作る

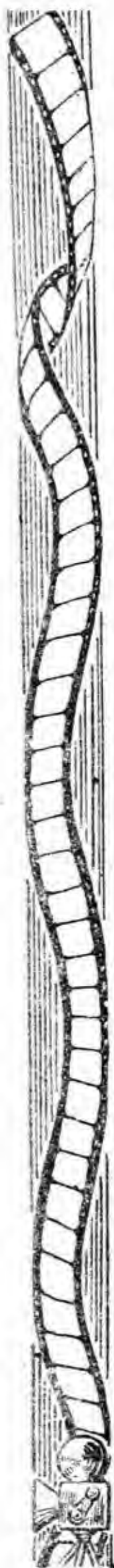
映画では、この場面はこんなことでは済まされない。原作の時代をとび越えて中世紀的になるかも知れぬが……。

先ず薄暗い地下牢の監獄にテス（オードリー・ヘップバーン）をつないでおく。衣服は白い囚衣だが、美しい身体の線を露わにするように工夫しなければならぬ。あの黒目がちの大きなひとみは、囚れた人の憂愁と諦観を湛えさせる。その美しいホッソリした首には鉄の首輪をはめ、太い鎖を胸元から床に垂れさす。両手首に手錠をキッチリはめ、両足にも足枷を喰い込まし床と繋ぐ。そのまゝ寝台に横にのびたヘップバーンの姿態を、カメラは鉄格子窓から覗き、斜上に前進しクロー

ズアップでまさぐる手の動き、もたえる素足を写し出す。

やがて処刑の時となる。扉が開かれ、黒衣を頭から被った執行人や看守が入ってくる。鎖から一旦開放されたヘップバーンはカメラに後向となって、両手を背後に廻され床縄で重ねた手首をしっかりと縛られる。更に縄尻はあの細い胴を一まわり締めつけて、背後で手首の縄とつながれる。この間牧師はヘップバーンの前に進み、天国への言葉を囁く。

カメラは彼女の斜後方に下り、うつむいて聞く顔が美しい。長くのびた縄尻をとられ、やがて彼女は房から歩み出て処刑場への長い道に行く。こゝでは彼女の姿態をあらゆる角



度から捕え、特にその表情を写す。これがテスの最期のシーンである。

○日本映画で同じような事を望むと、これもニュースとなっていたが、高橋お伝の映画化である。是非やってみたいものだが、今お伝をやる女優としては誰だろう。私は次の人々を望んでいる。

京マチ子、久我美子、山本富士子、淡島千景、浅茅しのぶ、一寸妙だが岡田マリ子等である。岡田マリ子は何よりもメーキャップを工夫しなければなるまい、しかしあの行動的な演技を生かして動きの多い映画をつくると面白いお伝になるような気がする。久我美子は小柄で引きしまった姿態を生かせば演技的には充分期待でき、風格あるお伝をつくりうるだろう。山本富士子はすべての動きを派手にして、歌舞伎様式化したお伝をつくるとよい。淡島、浅茅は当人の持味のまゝ生かせよう、京マチ子は本命だ。

ところで、いずれにしてもこれらの女優をしてお伝をやらせたいと云うのは勿論、最後の処刑の場を期待するからに外ならない。お伝については他の毒婦物以上に首斬り場の態度がどうであったという語り草が多い。その状況がよかったか悪かったかはどっちでもよ

いが、とにかくこのシーンは画面に出さねば意味がないのである。

京マチ子について、その持味がお伝適役のことは異論ないとして、もう一つの理由は彼女が未だ一度も縛られたことがなく、一度これをみたいという念願が大きいことは云うまでもない。彼女は手錠をはめられかゝったのが一度、縛られる筈を脚本変更で未遂になったことが一度あるだけだ。そこで愈々映画の最後のシーンとなる。

伝馬町牢獄のズラリと並ぶ牢格子を写しながらカメラは移動、低く下って牢入口を見下して止る。そこがお伝の牢前である。近づいて来る役人の足が場面に入って、一人の手が錠前をはずす。

「高橋伝、出ませい」
声がシーン外からかゝる。

開かれた格子口。

——間——

白い素足を獄衣の裾からチラつかせて牢の奥から女の膝下が現れる、ついとかがみ込んでズラリと外に出て牢前に立った気配。格子口が背後で閉される。

こゝで処刑を行う旨のセリフが入る。
ソレと合図がかゝると一人の役人の足が彼

女の背後にまわり、バラリと解かれた縄の端が床に垂れ、つゞいてビシ／＼とさばかれて女の上体をその一端が締め上げているのが予想される。やがて縛り終った縄尻をとられて「歩け」の声と共に女の足が進み出す。

カメラはそれにつれて移動しながら女の背後に廻りつゝ序々に上って行く。胸から上が写る時は斜後方からみる角度となる。白い獄衣の女は本縄、後手に高手小手に縛られている。顔はみせず、うなだれ気味に歩む姿をみせる。次でカメラを正面に向け、先導の役人を前方にきらしてお伝を正視、その歩みについて後方へバックする。

京マチ子であれば、あの美しい張切った肉



体を菱型にしっかり締めつける本縄姿と、囚れ人の憂愁になげく目が美しいだろう。久我美子ならノーブルな顔立ちとカモ鹿の様な姿態で宿命のお伝という毒婦を表現しようとする姿が美しさを示すだろうし、淡島千景なら花の生涯のたか女を再現するだろう。浅茅には知的な閃きをもつ女の虐げられる楽しさがある。山本富士子はあの大柄な身体をすこし太目の縄で本縄にしめつけるなら、素晴らしい残酷美をつくり上げるだろう。

処刑場へついて首の座に直るまで、カメラは前から後からタツブリこの美を写しだすのである。

○「指紋なき男」というスピレイン原作のサジズム映画があった。この中でヴィナスという役の女性が倉庫内に捕えられ、責められてスカートの裾も引きちぎれるあられもない姿で半死半生となって倒れている。両手は前で合わして手首を白い麻縄でキツチリ縛られ、ハイヒールの美しい両足首も同じように縛りあげられている。その姿のまゝで同じく囚えられている男の傍まで床を這って行く場面がある。縛られた両手を前に伸ばしては、みの虫のように一寸々這い進んで行くという思い切ったサジズム場面である。非常によかっ

たのだが、更にこれを完全なものにするためには、女の両手を後手に縛り上げねばならぬ。その上で床を這って男の傍まで行けと命ずるなら、苦痛は一段ときびしく楽しからうと思った。

○イングリット・

バーグマンが度々

ジャンヌを演じた

がると吾妻新氏が

書かれているの

を見て、成程と思

った。私も以前

から彼女がロッ

セリーニの映画

にひかれてロー

マに走ったこと

と、あのジャン

ヌ・ダークの映



あの長篇の後半、イギリス軍に捕えられて虐待され、処刑される迄に映画の重点がおかれたことは疑いない。バーグマンはこの後半で十二分に悦虐の姿態をさらしている。馬上に後手に縛られ、歓呼をあげてこれを迎える必要以上の夥しいイギリス軍兵士、その前に立つ彼女、しかもカメラは彼女の背後にまわって縛り合わされた両手を写し出している。万人の面前で恥しめられたというマゾヒス

トの悲願だ。つゞいて虜囚当初のジャンヌ。史料に見てもこゝでは比較的優遇されていた筈だが、バーグマンは足枷だけはチャンとつけ、その鎖のなるひびきを印象的に必要以上に聞かせるし、この姿で審問の場に引き出され、こゝでも又多数の観衆の前に立つのである。

移されて英軍のきびしい監視の下、古城の牢獄につながるが、ベッドにまで鎖をかけられた囚人となって、一夜不自由の身を起して神に祈る。邪推ついでに云えば、神々に祈るには両手を高く突き出さねばならず、その両手には手錠がはまっている。映画観衆に対して示す被虐者のマゾ的シエスチュアーである。この時の彼女の表情は、悦虐者のそれに外ならない。

又この当時、審問の席から監房に戻された彼女が、看守から手錠をはめられるところがある。カメラは正面に固定して、彼女がおと



なく看守のなすまゝに右手、左手と手錠をはめられて行くところを、始めから終りまで写すが、こんなことも、普通の映画作家ならやらないだろう。

最後の火刑の場については一度書かれたことがあるから触れないが、この映画に関する限り、手のつけようのない完全さでバーグマ

ンのマゾヒストは充分に満足されたに違いない。

○東映が美空ひばりで八百屋お七、白子屋お熊、お夏清十郎をとると発表したことがある。最後のものは別として、前二者はいずれもヒロインの処刑を含んでいるので、この企画は頽廃期の歌舞伎が若手人気俳優に責め場を演じさした如く、目下人気の女王であり、且色気も出て来た美空ひばりを責め場に引き出すつもりかと、その浪漫性に拍手を送ったが実際に出来上ったものは他愛もないものだった。同じ頃に伊藤大輔監督が岸恵子で八百屋お七をとるというニュースも出て、この方は大いに期待するに足る。伊藤はかつて高峰三枝子という女王を縛り、いままた第一線の人気女優岸恵子を縛ろうとしている。

八百屋お七は是非映画化したいものである岸や美空の外では北原三枝、若尾文子、安西郷子、青山京子等にやらしてみたい。いずれ

も持味ではないようだが、北原の分別くさゝ若尾の甘さ、安西の抜目なさ等を感じさゝぬよう演技指導をして、アプレ的行動性を第一にして動かすと、当人の知らぬ面白いお七となろう。青山京子等は未知数のたのしさがある。

映画のみせ所は勿論、白洲を引き廻しの場である。いずれの場でも彼女たちを本縄にキツチリ縛って、前後からその姿態を充分に見せることだ。女優を本縄に縛った映画というのは戦後では西条鮎子と花柳小菊しかないようだ。旧作再上映でエノケンのドングリ頓兵衛があり、高尾光子(?)清川虹子があった。このうちでは清川虹子が一番よかった。いずれも背面は見せず、縛り工合もいゝ加減のものだったが、清川は牢内で本縄に縛られていて正面写しで、あの豊満な身体を比較的良好に締め上げ、且表情がよかった。ドングリ頓兵衛は東宝で再映画化すると聞いている。かつての残酷美を再現するかどうか……。

○日本の女優でバグマンの様にマゾだなと思わす人は少い。しかし次の人々はその性格があるのではないかと、妄想を逞しくしてみよう。

喜多川千鶴。縛られている姿に当人が打ち

込んでいるものを感じさす。追撃三十騎での後手を高く上げた縛りは、本誌の口絵写真を見る感じだった。いつか映画館の中で彼女が一人で振袖狂女を観劇しているのを見かけたことがある。同映画では宮城野由美子が吊し責めにあう(もっともこの場で後手に縛られていた女は宮城野由美子ではなく、吹きかえの筈だ)このシーンで、私は喜多川千鶴の表情に注意したら、彼女は自分がこの映画に出演しなかったのを悔んでいるようだった。(へと私は邪推した)。

月丘千秋もマゾヒストだと思っている。彼女のデビュー当時は修道尼の如き清純さを感じたが、その後の映画での使われ方やニュースの断片を見ると、清純と汚濁が混雑しているものを感じる。又縛られている目に陶醉がある。姉の夢路が伝七シリーズで一度縛られた。黄金弁天では後手の縄を短刀で切るといふ、比較的長い縛りシーンがあったが、夢路は如何にも芝居をしている感じで、千秋が短いシーンにも示す陶醉というものはない。

乙羽信子はマゾヒストである。しかし所謂肉体の悦虐ではなく、精神的に自ら自己の精神に大きな負担をかけることに生甲斐を感じているようだ。精神的マゾヒストというのが

あるかどうか知らないが、例えばインドの苦行者のもつ精神だけをもっているようだ。どぶ、女の一生、夜明け前、縮図等での演技がそれを思わす。縮図で縛られた彼女の姿には芝居もなく陶醉もないが、極めて自然で内面的抵抗を感じさゝない。彼女は我が心にのみ呼びかけ呼びかけ盲目的に前進している人らしい。

三条美紀はギャング物で縛られる女優専門のように使われる。洋装の縛られ経験はおそらく一番だろう。しかし私は彼女をマゾだという自信はない。

浅茅しのぶは好きな人だ。彼女が東映と契約したというニュースをきいた。東映と契約するということは、縛られることを契約したも同然ではないか。

高千穂ひづる、田代百合子、千原しのぶ等殆ど毎映画といってよい。浅茅の聡明で清潔な美を愛する私は、今回の東映契約をきいて彼女が縛られたいという気持をもって、こころを知り、実に熱心なファンとなった。

(おわり)

(小田 潔・画)

幽 囚 十 月

春 田 一 郎

坪 内 篠・画

幽 囚 十 月

累進処遇令

受刑者の処遇を規定する法律に「累進処遇令」と云うのがある。全受刑者を一律に取扱わず、その能力や勤怠に依って処遇に段階をつけ、受刑者の努力に酬い、且つ励みをつけんとするものである。

私は五月初めに四級に進級した。考查を一通り終った訳である。三級以上の進級は八角に集合して、副看守長から申渡しがあるのであるが、四級は二舎の担当台の前に集合して、担当から申渡しをされる。四級になって

初めて本格的の受刑者となる訳である。「累進処遇令」に依って、受刑者は、一、二、三及び四級の四階級に分たれる。四級は受刑者中の最下級であって、発信、面会、共に一ヶ月一回許される。進級は素行、人物、能力、勤怠等色々の点から検討され、担当の看守から申請の上、進級会議で詮衡に依り決定されるもので、四級から三級への進級は普通、四ヶ月乃至八ヶ月はかゝるのである。三級から二級への進級は特進は別として、四級から三級への倍はかゝるのが普通である。二級から一級へも同様である。進級の期間は刑期の長

さに依っても相違があり、懲役五年以上の者は右より長くかゝり、懲役十五年以上は一層長くかゝるのである。三級になると発信面会が一ヶ月に二回となる。二級になると発信面会共に一週間一回に増えるのみならず、服装が変り、三級以下のガラ紡のスボンに青色のジャンパーと云う如何にも囚人らしい服装から、紺の詰襟の上下と云う普通人の服装に近くなり、履物もわら草履からゴム草履となる。そしてスボンにポケットが付く。二級は亦、便箋、万年筆、ペン、インク、封筒の購入が許される。一級は受刑者中の最上級であっ

て、進級は仲々むつかしく、且つ最も早くても刑務所へ入ってから二年はかゝるのである。一級は発信面会共に制限なく許され、下着・バンド・履物等に私物の使用を許される。

服装は私が入所した頃は白の詰襟の上下であったが、後に黒の上下に変わった。昔は一級の受刑者の中から特に選んで、「独歩」又は「監補」にしたそうであるが、それは廃止されていた。凡そ刑務所の中にあつては一級でも四級でも受刑者が動く所、之を戒護する看守が必ず付添い一人歩きは絶対に許されないのであるが、「独歩」となると鍵を預けられ一人歩きが許されるのである。「監補」と云うのは監督補助のことで、看守を扶けて輩下の受刑者の取締に任ずるもので、「用務者」の力を強くした様なものである。

形に現れた処遇の差異は右の様なものであるが、一級二級となると、どうしても職員扱いの方も緩やかになり、受刑生活に慣れて来ると相俟って、囚人と云う感じが段々薄くなつて来る。

以上の級別とは別に等工別がある。之は作業方面に於ける階級で、訓練工から始まり、四等工、三等工、二等工、一等工と昇進して行く。等工別は受刑者の身分関係には関係が

なく、賞与金（普通社会の賃金に当るものである）計算の標準となるものである。一級一等工が最高で、四級訓練工に至る。賞与金は等工は勿論、色々の点から評点して、計算せられるのであつて、最初は時代離れのした金額である。私が最初に貰った賞与金は一ヶ月八十銭であつた。それでも私が出所する時は賞与金の総額は五百円を超えていた。

反則をして懲罰を受けると級が降下する。

二級以下は一階級下るだけであるが、一級の者は二級降下して三級になる。一級のパリツとした制服を着て、黒線の入った帽子をかぶり（一級だけが帽子に黒線を巻くのである）皆から羨望の目で見られたのが、一朝反則を犯して三級に下ると、しおたれた青い囚衣姿に変わり、みすばらしい姿となるのである。一級から三級に下つた例は多数にあるが、最も印象に残っているのは近松さんの場合であつた。近松さんは小学教師と云う経歴を持つインテリで、温和なよい人であつた。近松さんは亦秀れた運動家で、何をやっても所内のトップを切り、運動会では必ず出る度に一等を取ると云う所内随一の運動家であつた。私が入所した時は近松さんは二級であつた。私達新入の者が運動の時間に運動場に出ると、近

松さんはよく私達の目の前で走る練習をしていた。私達はさうするその姿を羨しく眺めたものであつた。近松さんはやがて一級に昇進した。図書夫の首席として、さうする活躍を見せていた。受刑者で彼を知らない者はなく、謂わば、刑務所の名士であつた。

この近松さんが反則を犯したのである。何処で手に入れたか、アルコールを水に薄めて飲んだのが発覚したのであつた。当然、近松さんは懲罰を受け、三級に降下した。其後、近松さんが何処の工場へ行つたか、消息が分らなかつたが、或る日曜日、講堂で、他の受刑者の間に交つて、しよんぼりと座っているのを私は発見した。近松さんは小柄なやせた人なので、三級の青い囚衣を着たその後姿は寒々とした感じを与えた。近松さんは私に気が付いて、にっこりと笑つた。私が四級でつぎはぎだらけのジャンパーを着て運動場の片隅で日光浴をしている時、一級の服装も凛々しく運動の世話を焼いていたこの人は、今よれよれの青い囚衣を着て、既に二級になつていた私に、にっこりと笑いかけたのである。私は何かしら悲しい気持ちにおそわれたのであつた。

訓練工場

私も入所以来、次第に日が経って、訓練工場へ行く日が近付いて来た。受刑者が入所して、一通り考查を終了すると、必ず訓練工場へ入るのである。服役中どんな作業に従事するのかと云うことは受刑者にとっては最大の関心事であり、誰もが希望の職場に行きたいのは当然で、所属が決定する迄は非常に不安定な気持ちでいるものである。所属が決定されるには必ず訓練工場の過程を終了せねばならないのであるから、二舎の新入達の当面の目標は一日も早く訓練工場へ行くことなのである。訓練の期間は短くても一週間はかかり、而も訓練工場の収容人員は一回二十名程であるから、考查が終わっても訓練工場へ行く迄には相当の日数がかかるのである。凡そ受刑生活に於て最も苦しいのは訓練へ行く迄の待っている間である。肉体的に苦しいのではなく、精神的に苦しいのである。勿論まだ刑務所生活に慣れ切らぬことから来る苦しさもある。併し、訓練へ行く迄は「新入」だと云う卑下感と、一体何時になったら所属が本格的に決まるのであろうかと云う不安定感が苦しいのである。

訓練は最低一週間かゝるのであるが、前の回の訓練が終る頃となると、次の訓練の準備

が始まる。受刑者達は今度こそ自分の番ではないかと期待に胸を弾ませるのである。私も五月の中ば頃から、もう次かもう次かと期待していたのだが、なか／＼順番が廻って来なかった。そのうちに五月も過ぎ六月になった。六月の半ばが近付いても何時訓練に行けるのか見当が付かなかった。誰それは入所二十日目には訓練に行ったとか、誰はもう九十日も二舎に居るが、まだ訓練に行かないなど云う噂が耳に入ってくる。そうかと思うと特別の場合は訓練を経ずにすぐ作業についた例もあるなど云う噂も聞える。

そのうちには訓練に行けるだろう、之も運だと、あせらないで成行に委す他ないと思う様になった頃、用務者の奥田さんが扉を開いて、

「春田君。訓練に行く用意をして下さい」

と云ってくれた時はほっとして真実嬉しかった。それは入所してから六十五日目であった。思えば長い七房の生活であった。之で一先ず二舎を出ることが出来るのだと思うと嬉しかったが、二ヶ月の間、起居を共にした人々と別れるのも亦淋しいものであった。同じ房で長らく一緒に暮した受刑者同志には矢張り非常な親しさを覚えるものである。私が七

房へ入った時の顔触れとは殆ど半分以上変っているのであるが、同房の親しみ、特に新入時代の親しみは又格別である。刑務所に於ては職場が変わると、居房も亦必ず変わる。布団、食器、私物等全財産を抱えて移るのである。刑務所に於ては受刑者同志の交通は禁ぜられていたので、一旦房を出ると、今迄同じ房で起居を共にした人々とは殆ど再び会う機会はなく、僅かに運動場などで偶然会うことがあるに過ぎないのである。

中食が済むと、新しい訓練生達は布団、食器、石けん箱、タオル、ちり紙等を抱え、房の前に差してある名札(メイサツ)を外して二舎の薄暗い廊下に並んだ。受刑者が転属する時、元の職場から新しい職場へ連れて行くことを専任に担当している看守がある。私達は二舎担当の看守から、この看守に引継がれる。連れ出し担当の看守は私達を整列させ、番号を取った後、訓練中宿泊すべき房の番号と番席(一房に例えば十人の受刑者が居れば番席一番席から十番まで席順が決められるのである。古い者や級の上の者から順次に番席が決まるのであって、寝る場所及び食事をする時の順序も普通この番席順に並ぶのである)を読んで聞かせる。私は二舎二階三十二房の

受刑者 轉居する 時の図



五番席であった。之が終ると持物の検査があつて、布団其他を抱えて二舎階上に行き、夫々の房に持物をおさめて、それから愈々訓練工場へ行くのである。訓練工場は二舎のはず

れにある狭く細長い部屋であった。私達はそこで連出し担当の看守から訓練工場担当の看守に引渡された。先ず氏名点呼があり、用務者の栢本さん、衛生夫の広川さんに紹介され

席が決められた。訓練工場の入口に近い一隅には担当台と用務者机があり、他の一隅には作業台や截断器が据え付けられて、用紙が山と積まれていた。之等の間の真中には白木の机が二列に並べられ、わらで作った円座が人数だけ置いてあつた。銘々の席のうしろには名札が下げられた。

席につくと、さっそく担当の看守から

「訓練工場は今後受刑者が色々の工場に所属して作業に従事するに付いて必要なしきたり、作法、心構えなどは是非心得て居らねばならぬことを訓練する所である。諸君は既に二舎の新入とは違ふのだから、日常の起居動作及び作業に於て厳重に規則を守るは勿論のこと、今回の訓練生は優秀であると云う折紙を付けられる様に努力してほしい」

と云う意味の訓辞があつた。

担当台の背後の壁には受刑者の心得を個条

書にした紙が貼ってある。心得書には「受刑者は所内の規則を厳重に守るべき」ことや、「受刑者は所長を父とし、担任担当を母として一家の如く融和し、反省と修養に努むべき」こと、「勤労の尊さを知るべき」こと其他がこま／＼と書き並べてあるのである。

私達の前に並べられた机の上には仕事の材料である用紙と、三人に一個位の割合で糊の皿が刷毛を添えて置いてある。訓練工場では当時、作業として封筒や袋貼りをやっていたのである。用務者の栢本さんは袋の貼り方を私達に教えてくれる。袋を拡げた形に截断してある紙を三、四十枚宛机の上に置き、端をにじらせて糊を付け、ボール紙の型をあて、折っては貼って行くのであるが、何でもない仕事の様に見えて、いざ実際にやってみると仲々うまく貼れないものである。看守や用務者は一人々々について手を取って教えて廻っている。

その間に衛生夫の広川さんは糊を作るために焔炉に火を起した。紙片を丸めて焔炉に入れ、マツチで火を付ける。こんなことは何も書く迄もないありふれた手順なのであるが、二舎で長く暮した私達にとってマツチでさへも珍らしかったのである。二舎に於ては絶対

に火の気を見ることが出来ない。マツチで火を付けられた紙片が燃え上った時、私は焔の美しさに寧ろ呆然として目を見張った。火と云うものから遠ざかって二ヶ月余り、私達は火を忘れていたのだった。それが突然焔に接して、驚きと云うか、喜びと云うか、私は曾て火を之程美しいと感じたことはなかった。思えば火は人間特有の物である。動物は火を知らず、火を恐れる。併し、人間にとっては火は親しみを感じさせる。本能的に火がなつかしいのである。二ヶ月振で火を見た喜びは本能的の喜びであったのである。

訓練工場は、他の本格的な工場の予科である。小規模ながらしきたりはすべて本工場のミニチュアになっている。例えば便所へ行く時である。二舎に於ては房の中に便所があるから問題はないが、訓練工場に於ては隣接する第四工場へ行かねばならない。担当台の横に幅五寸、長さ一尺五寸程の木札が七、八枚掛っている。その中の二枚は「大便の証」残りの数枚には「小便の証」と書いてある。

便所に行く時は自分の席へ立上って、「担当さん。便所お願いします」と云う。看守が「はい」とか「よし」とか答えると、席を離れて、大便なら「大便の証」、小便なら

「小便の証」を持って、四工場の便所に行き、入口の釘に之を掛けて、用便し、済めば再び木札を持って帰り、元の所に掛けて置くのである。小便所は普通のと変りはないが、変っているのは大便所で、扉が普通の扉を横に二つに切った様な背の低い扉で、用便中之を閉めると肩から上が外から見える様になっているのである。

四時頃、「糊付け罷め」の号令がかかる。新しく用紙に糊を付けるのを止めて、貼りかけたものを貼ってしまい、出来上った袋を五十枚宛重ねて紙の帯を巻く。栢本さんがその日の仕上高を一人々々聞いて廻り帳面に付けると「作業罷め」の号令がかかる。衛生夫の広川さんが紙屑をはき出すと、私達から当番が二人宛出て、糊皿と刷毛とを洗い、机の上を拭く。もうこの時分には部屋の外へ炊場から食事を運んで来ている。二舎に於ては舎房で作業もし、食事もしたのであるが、工場に於ては日曜日以外は工場で食事をするのである。仕事の跡片付が済むと、栢本さんと広川さんとで食事を部屋に運び込んで配食をする。栢本さんが皿に盛る飯や器に分けたお菜をから順に手送って行くのである。全部に食事が行渡るのを待って、看守が「黙禱」の

号令をかける。私達は暫く黙禱して、「直れ」の号令と共に一齊に「頂きます」と挨拶をして箸を取るのである。二舎時代は配食され次第勝手に箸を取ったが、工場に於ては流石に規則正しいので気持がよい。大体たべ終る頃を見計って、看守が「休め」と

号令をかける。食事中は正座しているのであるが、この号令と共に「頂きました」と挨拶して足をくずしてもよいのである。「御馳走様」とは云わずに「頂きました」と挨拶する所が交っている。食事が済んで暫くすると、看守が二、三人やって来て「検身用意」の号令がかかる。刑務所の生活に検身はつきものである。朝夕の工場の出入り、運動時間のあと、必ずこの検身がある。検身を免除せられているのは一級の受刑者だけである。工場の物品を持出さないか、房から物を持って出ていないか、反則物資を持っていないか、連絡の手紙などを持っていないか等を検身で調べないのである。

昔は寒中でも襦袢まで取ってしまい、足を上げたり、手を上げたりして検身を受けたそうであるが、現在は上着とズボンのボタンを外し、タオルを手に持ち、帽子を脱ぐだけである。検身が済むと、各自自由に二舎階上の

舎房に帰り、あとは二舎と同じく就寝までの二時間を思い／＼に過すのである。

就寝、起床共に二舎に於けると同じ時刻である。六時に起床すると、洗顔し部屋掃除をする。私が入所した頃と異なり、六月一日



から清掃の採点制度が実施せられていたの
で、掃除は厳重になっていたのである。布団
は丸で板を積んだ様に端をきちんと揃えて積
み、棚の私物や本を整然と並べ、ガラスに曇
りのない様にふき、そして洗面器やかん、
雑布などを所定の場所に置き、扱その上で、
あん巻を以て床板がびか／＼光る程にするの
である。十時から十一時頃までの間に部長が
二人と用務者が各房毎に廻って、清掃振を検
査し「優」「良」「可」「不可」の四通りの
採点をするのである。そして夫々の採点を白
い字で書いた小さな札を扉の上に吊る。採点
は優が十点、良が七点、可が五点、不可はマ
イナス五点である。之を毎月、各房毎に合計
し、一ヶ月の平均点が九点以上になった房は
清掃の優秀舎房として、翌月の最初の教誨
の時、表彰され賞として吊り鏡を一ヶ月間貸
与せられる。翌月の成績が平均九点以下に下
ればこの鏡は返却せねばならないが、三ヶ月
間引継いで表彰を受けた房にはこの鏡が与え
られるのである。

訓練中は清掃の検査が特に嚴重だと云うの
で、私達は極めて念入りに掃除をした。七時
半頃になると「出房」と云う号令がかかる。
房を出て訓練工場に行き、検身を受けて、部

屋に入る。机の間に二列に並び、交替で壁に
貼られた「誓」と「受刑者の心得」を音読す
る。それが終わると、朝食である。二舎に於て
は「増汁」即ち味噌汁の追加分は数日に一回
の割でしか廻って来ないが、訓練工場では殆
ど毎朝「増汁」があるのには驚いた。二舎に
於ては配食は用務者などがやってくれるが、
食べたあと片付けは各房でやる。反之、工場
に於ては配食も跡仕末もすべてその係、訓練
工場では広川さんがやってくれて、私達は唯
据膳を食べるだけなのである。

朝食が済んで暫くすると、「作業始め」の
号令がかかる、私達は袋貼りを始めるのであ
る。私達の貼ったのは長封筒、菓子袋、薬袋
等であった。一日の仕上高は最低の者で三、
四百枚、最高の者で、千二百枚位であった。
訓練工場には別に運動時間と云うのはなく
て、中食後一時迄、中庭に出て軽い体操をし
たり、自由に日光浴をしたりするのである。

私達と同期の訓練生の中で、最も特異な存
在は平田さんと云う中老年人であった。中老人
と云ってもまだ四十五、六才であるが、大き
な疵のある頭は半分以上が白く、態度
も物腰も老人じみていた。この平田さんは後
に発狂して病舎に収容されることになるので

あるが、訓練時代から確かに普通ではなかつ
た。何かぼそ／＼ひとり言を云い乍ら袋を貼
っているのはよいが、糊付けも何も彼も無茶
苦茶で、糊しろが一寸以上の部分や糊の全然
ついていない部分もあり、之を無理に貼るの
だから、歪つた袋ばかり出来上ってしまった。
最初は看守も栢本さんも親切に教えていた
が、どうにもならないので、匙を投げてしま
い、平田さんだけは作業免除となった。

「平田、作業をやめたのなら、五等飯にして
いゝか」とからかうと、平田さんは真剣な表
情をして、

「担当さん、そら困りますがな。誰も仕事を
やめようと思つて、やめたのやあらへん。担
当さんがやめろて云うから仕事しやへんの
や。その上御飯まで減らされては往生や」と
答えて皆を大笑いさせた。この「往生した」
と云うのは平田さんの口癖で、二言目には
「往生した」とやっていた。

「袋、真直に貼らな、いかん云うたかて、こ
れでちやんと貼つてまんがな。往生やな」
「御飯がまだ残つてゐるのに、おかずがなくな
つてしもた。往生した」

と云う工合に使うのである。
平田さんは遊ばして置くとフラ／＼部屋を

出て行くことがある。看守がいくら注意しても馬耳東風である。或時も隣接する第四工場へ行き、何か悪いことをしたとみえて、四工場担当の看守に引曳られて帰って来た。一つ二つなぐられたらしく、頬を押え乍ら、「往生した。往生した」を連発していた。

平田さんの自慢の種は戦時中、戦争に大ッぴらに反対し、憲兵隊へ召喚されたが、隊長の前で堂々と所信を披瀝し、遂に隊長に兜を脱がせたと云う話である。

「わしは戦争に反対やったんや。民主主義の世の中がいつかは来ることがちゃんと分っていたのや。勝てる戦争でも、戦争することは悪い。負けると分っている戦争をするのは悪いだけでなく、馬鹿や。それに負けているなら居ると国民に教えなあかん。今頃、竹槍なんてばくち打ちのけんかでも使えへん。……と憲兵の前で教えてやったんや。そうすると憲兵はそれに違いないと、わしに賛成しよったさかい威張って帰って来たんや」

休憩時間、木蔭に腰を下して、この老囚はボソ／＼と自慢話をするのであった。憲兵隊では平田さんを召喚したものゝ、余りにも奇想天外のことを口走るの、狂人として釈放したのであろう。平田さんはその話の筋が変

っている割に、その表現方法にインテリ臭い所がある。聞くと、或る専門学校を中途まで行ったとのことであった。

この様にして、訓練工場の生活は一日一日と経って行った。やがて訓練の終了する日が来た。六月下旬であった。朝、作業をやっていると、科学分類課の部長がやって来て、訓練中、何を習ったか云う様なことを、私とはか二、三人の者に聞いて、それから銘々の特技を聞いた。訓練生は夫々左官だったとか、大工の経験があるとか、ミシンを三年やった、とか答える。併し之が事実でない場合がある。之を刑務所では「ハッター」と称す

るのであるが、特技があると、早くよい職場に廻して貰えるので、ハッターを言うことが多いのである。だから、板一枚切ってすぐ鋸の歯をめちや／＼にした大工が出たり、ボビンと云う名前すら知らぬミシン工が生れたりするのである。

午後、訓練工場担当の看守から一応の訓辞があり、私達は再び、連れ出しの看守に連れられて、布団其他全財産を抱え、二舎二階の廊下に整列した。私達の内には直ぐ工場に行く者はなく、一応全員が「二舎預け」になるのだそうだった。再び帰る二舎は、私は十一房の三番席であった。

(未完)

絵と写真のアイデアを募集

本誌に発表する口絵に關してのサジ、マゾ、切腹、浣腸等の内容や代理部の分譲写真、或はアルバム、画帖、等について、こういった構図やポーズ、又は趣向で作成してほしいといった御希望がございましたら、何卒御遠慮なく編集部宛御申越し下さい。口絵について特に画家に名差して御希望がありましたら転送いたします。

貴方の考案されたアイデアによって誌上を飾り、又は、分譲品中に加えたいと思います。アイデアは出来るだけ詳細の説明と共に、なるべく略図の添付をお願いいたします。但し、場合によっては文章だけでも結構です。

採用の分、並に優秀なる企画に對しましては、写真又は画稿を差し上げます。(企画係)

性への考察

—Mへの手紙第一信への附言—



二 俣 志 津 子

「Mへの手紙」について、Mから、沼氏に対

する部分は私にも不明であり、飛躍している
のではないかと、云う短信をいただいた。

また、沼氏も同様に思って、小利しい難難

め。と、微笑笑しているかもしれないので、
この点を述べることから論理を展開してみたい
と思う。ただ、断っておきたいのは、「M
への手紙」にもあるように、私は全く無一物
の状態で文献も資料も持合せていないので、
これから書くことは私の思索にかかるもので
あり、この文の責任はすべて私が背負うもの
である。と同時に、多少杜撰なところもある
と思う。指摘し教導願いたい。

「Mへの手紙」に於ける沼氏への部分は、奇
譚クラブ三十年一月号「あるマゾヒストの手
帖から」一九九頁の

——被征服種族が奴隷として使役されてから
後に始めて、同一の運命が動物の上にも降り
かかりはじめたものであって、多くの人の考
えたがるように、決してその逆であったので
はない——（傍点志津子）

沼氏は、右の観点に立って、アリアン人（
白人）の有色人種に対する優位、クロマニヨ
ン人のネアンデルタール人支配、ひいては、
有色人種のマゾヒスティックな傾向を論じて
いる。がこれは明らかに誤りである。最初に
被征服者が奴隷として使役された。と、言う
のであるならば、私には異議はない。千年以
上昔のことを詳述し断言することは殆んど不

可能である。私達は、ただ、僅かな、とぼしい遺蹟や出土器等によって考証するに止どまり、……であつたであらう。としか言えない。ただ、私はモルガンの古代社会に対する研究を高く評価する。と言って私は論をモルガンの研究から引出そうと言うのではない。私は沼氏の推論のずれを指摘するに止どめたくペンを執つたのである。沼氏の言われる白色人種の有色人種に対する優位、その位置付けからの理論には私は承服し難い。この問題は他のテーマも含まれているが、論点を「最初に犁を引いたものは……」に絞りたい。

私は、「最初に犁を引いたものは、同種族内の弱者、なかんずく、異性であつたであらう」と言いたい。沼氏は、同号二〇七頁に於て、「この説は白人に於けるマゾヒズムを説明するための臆説であるが一般に高等人と劣等人の混血として私達の場合にも類推出来る考え方である……」と言つておられる。沼氏の理論によつて私達が戸迷うのは、いわゆる劣等人種の見付からなかった間、高等人種は犁を引かなかつたのか、と言う点と、白色人種内に於けるマゾヒズムを如何に説明するか。と、言うことである。これは、沼氏のこの号に現われた理論では論拠が薄弱である。

では、志津子、お前の論拠は？ と、問われた時、今、志津子は資料を提出することは出来ない。しかし、反論するのに論拠なしに弁じることは、言論の暴力であり、よた者の喚きに等しい。「Mへの手紙」に於て、私が沼氏の問題に首を突込まなかつたのは、充分に論証出来なかつたからであるが、Mからクエッションマークを投げつけられた、今となつては、裸のまま矢面に立たざるを得ない。

私は、「最初に犁を引いたのは、女性である。」との観点に立つのが最も妥当であると考え。

二

人類には「男」も「女」も居ない。これは決して目新しい言葉ではなく、医学的にも証明されている事実である。世の中には、男性的状態と女性的状態があるのみであつて、僅かな肉体の部分的特徴によつて、区別することは妥当ではない。男性的資質を多く持った女性、女性的資質を多く持った男性達をさえ肉体の一部、ことに生殖器の特徴によつて区別し、男、女、と呼んでいる。そして、彼女と彼女は残酷に運命付けられる。男、女は、

最も便利な人間判断の基準のようであつて、最も冷酷非情な言葉である。私は、「男」「女」と言う言葉を軽々しく使うべきではないと思つてゐる。やはり便法として「女性」「男性」と当面使いたい。そして、その「女性」の中にはいわゆる「男」も含み、「男性」の中には「女」も含まれているべきである。最も執拗に、精密に、丹念に調査したであろう女性生殖器に男性生殖器の退化した形を諸氏は認めるであらう。また男性の胸に乳線のこんせきがあることも医学的に証明されている。ここに於てそれ等を詳論するのは本題ではない。

私は、あらゆるものを男性と女性との分野に分けてみたい。

たとえば、動物に於ては、牛、馬、山羊、等は女性的範ちゅうに入る。それにひきかえて、虎、ライオン等は男性的な分野に置かれる。仕事について言えば、炊事、育児、清掃等は女性的な仕事であり、狩猟、戦争等は男性的任務である。アマゾンの女達が乳房を切るのは必然性をもつていふと言えよう。このように分類することは読者諸兄姉に任せるとして、母権制度時代の男達は、多分に女性的資質をそのうちに持っていたであらうことが

推測出来る。古代社会では、モルガンも言っているように、他種族の捕虜は殺してしまっているのである。それは犁もなかった時代である。その時代に於て、同種族内の仕事の分野が全く平等であつたとは言えない。それは、人間が生殖作用を行うために自ずからその位置があるように、仕事の分担は、男性行為と女性的行為に分岐していた筈である。

誰かが犁を引かねばならない。そして、奴隷が居ない場合、同種族内の女性的資質を多く内に持っている人間が犁を引いた。その人間がいわゆる男の場合も女の場合もあったであらう。強者は飢えれば弱者を実際に喰べてさえしうのである。秘史でもリヨウ奇書でもなく「米国史」を読んでもみると、開拓者夫婦の夫は、妻を殺して塩漬にして食べて飢をしのいでいたことが書かれてある。

つまり、女性的資質は本質的にマゾヒズムの傾向を持っていると云うことを私は言いたいのであって、沼氏は更に一歩突込んで、性の面からマゾヒズムを述べるべきではなかったのではなからうか。と私は「Mへの手紙」で言いかけてやめたのである。主観の問題ではあるが、更にもう一つ、同号二〇七頁の「……………そして、もし、クロマニヨン人の異

性と性的関係が生じたとすれば、それが強者への卑屈な服従や、崇拜に近い尊敬感などと強く結合していただろうことも想像に難くない。」とは、マゾヒストの想像（ごめんなさい。）である。

性関係に於て、男性が如何に女性を崇拜し畏敬しようとも、ある瞬間、男性は女性の尊厳、畏敬など認めないものである。自己しかいや、自己からも解脱し、絶対者となる。その瞬間に於ては、奴隷、犬馬の如き状態の者であろうとも征服者であり小宇宙である。ましてや沼氏の言われるように野性の動物に近い人間は性の本能の歡喜のために、女主人の存在など認めなかったと想像される。つまり沼氏の想像は観念的である、マゾヒストの観念の所産である。女性が性の慾望に衝かれた時は、身を投出すものである。武装を解除し、虚栄も羞恥もなげうつものである。また、性行為に於て、女性の位置、（女性が性の慾望に捉われて上位置をとることは稀であると考えることが妥当である。何故ならば性行為は最も女性的行為であり、女性は常に受動的で、その行為そのものが女性の上位置は不適当である）及び感覚、快感の速度からも常に被征服者を意識せしめられる。その絶頂

時に於て、女性は小宇宙、絶対者とはならず、崩潰してしまふのである。女性が女である限り、よし当処、上位置に位置しても、その位置を保ち得ないことを附言しよう。

三

「Mへの手紙」の中に於ける沼氏への行文に右の小文を附加して次に進みたい。

笠置俊郎氏が「倒錯の英雄、織田信長」の中で、その時代にはソドミーは社会通念であつたろう。と、述べられている。これは不用意にもらした言葉であるかもしれないが、重要な要素を含んでいる言葉である。つまり、時代の傾向性は当然誰かの手によって論求されねばならぬ問題である。今迄これについては論じられていないのではないかと思うが、これは根本問題であり、これを無視して、倫理やモラルを論じて、また倒錯を正当づけようとしても、理論は空転するばかりである。

廿世紀は、世界各国を通じて、男性が女性的資質を多く含み、女性が男性的資質を多く持ちつつある時代である。ここに於て、女性のうちにある男性的資質が婦人解放を叫び

男性のうちにある女性的資質が共産主義をと
なえ、この結合の上になった妙なコントラス
トの解放運動がある。中国の共産主義化はソ
ビエト同盟のそれよりも確固としたものにな
り、中国はやがてその主導権を握るであろ
う。何故ならば、中国の民族はユダヤ人につ
いて女性的資質を多く含んだ民族であるから
である。そして、女性の本質的に共産主義的
である。現代の矛盾と混乱はここにある。古
い倫理、モラルは滅びねばならない。私達は
今、その過渡期に位置して浮動している。マ
ゾヒストの男性が更に多くなるであろうこと

欽義先生医学相談欄

◎御遠慮なく御相談下さい◎

一、相談文は出来るだけ詳細にデータ
御記入の上、読者係宛御送り下さい。
質問者の秘密は厳守し、絶対他へ洩ら
すような事はありません。

一、相談文及び回答は漸次誌上に掲載い
たします。用紙はどんなものでも結構
です。都合悪き時は住所氏名を明記さ
れなくとも構いません。

は明らかである。日本に於ても共産主義運動
の拡大は防ぎ難いであろう。共産主義運動と
婦人解放運動とは根本的に対立すべき要素を
含んでいる。マキアベリによって両運動が辛
くもなひまぜられて進行している状態である
が、今そのことを論じるのが主旨ではない。

在来の性に関する社会通念は打破されねば
ならない。またすべきであり、奇譚クラブの
位置がここにあるのである。Mは「ぼくは地
獄へ行く人間だ。」と、いつか言ったことが
あるが、それは古い観念に引っかけかっている
証拠であり、地獄へ行きたければ勝手に行け
ばいいので、Mが地獄の入口でうろうろした
ら、古い観念に足がらみになっている男など
志津子が行って、突とばして地獄へ入れてや
る。そこで鬼のモード・フォトでも撮るがい
い。志津子は天国へ行くのだ。男や女を縛る
ことを罪悪だなどと思っていない。

倒錯が現代の性の本流であるとするならば
そこに於て身を処すべきである。Mこそ、現
代の潮流の方向を指向すべき位置を占めなが
ら、殊勝らしく地獄へ行く。などと言うのだ
から可愛いところがある。と、共に歯掻ゆ
くもなるのである。

どうも横道にそれそうである。

私は、現在、あらゆる事象が破壊と建設の
過渡期にある。と改めて言いたい。そして奇
譚クラブの位置と方向が大体確定したのでは
ないかと思う。時にはマンネリズムに陥り時
には陳腐になっても、大局を見失なわなけれ
ば消滅することはない。否、天国への昇華の
道が開けている、と言いたい。私はこの意味
に於て、私自身は精神的にも健康であると自
認しているのである。新しいモラル、倫理に
ついての理論は別の機会にゆずりたい。

千年も万年も後の将来のことなど、私達は
考える必要がない。私達の将来とは、せいぜ
い私達の子供の時代までで、それ以上考える
のは徒勞である。徒勞するよりも、私達は現
在を悔いなく生きるべきである。そのため
は自からの血も流そう。私達は、明日死ぬか
しれないのである。ならば今日を悔いなく生
きよう。朝に行きして夕べに悔いるようなこ
とをしてはならぬ。悔いない。これが志津子
の信条である。サドとかマゾとかの問題では
ない。私の信条を支えているものが人間に対
する愛であることを附言してペンを擱く。

附記。

いずれ、「中性期論」を書きたいと思っ
ています。

アブ追及三十年の回顧



女

の

禪

山田正美

妻と同郷人で私の勤務先とも仕事の上で密接な関係のあるA君が、さる素封家の令嬢と結婚したのは昭和二十八年の秋で、私達は友人としての間柄からその披露宴に招待される事になった。

是非共夫婦揃って来て欲しいとの話で、妻は勿論日頃親しいA君の新妻の顔を一刻も早く見度くてたまらないらしいし、兎に角当日は子供を近所の他家へ預け、旁々留守中の事

を頼んでさて仕度にかゝったのが四時頃。

妻の美智子は特別御念の入った化粧をして訪問着に着かえ始めた。長じゆばんの襟をかき合せている処へ私は急に思いついて禪用の晒木綿を持ち出した。美智子の面上に羞恥の色が閃めいた。こんな場合、私の顔からわざと視線をそらせる癖がある。

「どうだい？」

簡単な問いかけにに応じて美智子は唇に薄笑いを浮かべ乍ら私の意志を受理していた。

實際変てこな秘密の多い私等夫婦の日常でも、美智子が禪を締めて外出した事は稀れであるし、わけても晴れがましい公式の宴会に夫婦の性生活と直結の関係のある、此の種の

倒錯的な秘密を服装の下に匿して持ち込むなぞと云う事は全く初めての経験である。

此のような何か新らしい刺激のある冒険を試みる時、私の要望を受け入れる美智子の態度は、大体三つの段階に分ける事が出来るがその各段階ごとに、私は我が妻乍ら彼女の心理に驚嘆せざるを得ないのである。即ちその最初の段階では「彼女の私に対する柔順さ」に驚ろき、次の段階では「呼び覚されて行く彼女自身の変態性」に驚ろき、第三段階に至ってはその「大胆さ」にむしろ呆然とさせられるものがある。

美智子は恰もそうする事が当然であるかの如く、一旦羞恥を通り越すと今度は平氣の平

左でズロースを脱ぎ捨て、無言の儘十六尺の晒木綿をキリキリと股間に締め始めた。流石に外出する時は、相撲用の褌は分厚いので用いられない。それでも晒木綿を擦り捻って股間へ噛み込ませる事はいつもの通りである。

「そんなに強く捻り込んで大丈夫かい？」

「大丈夫よ」

「へえ。腹や背中のところが出つ張って、スタイルが悪くならなければいゝがね」

私はわざと心配顔を作って見せる。

「スタイルなんかどうでもいいゝじゃありませんか。あらゝ気持！」

美智子は腰を伸ばしたり股を開いたりして図太い態度で感触を味わって見る。余った相当長い部分はブラジャーの上まで適当に巻き上げ、女やぐざ「やらずのお美智」が出来上がる。此れは褌を締めた妻に対して私がつけた仇名である。

「短刀は？」

「へえ、挿して行くのかい？」

「止しましょうか」

「止さなくてもいいけれど、着物を着た時

具合が悪くないかね……」

と云い乍ら私も刃渡り六寸の白鞘を取り出す。此れは真物で柄の箇処に私の手彫りで

「やらずのお美智」と彫り込んである。

結局美智子はそれを両乳房の間に挿し込んで、その上から訪問着を着て紋付の女羽織を重ねた訳である。さてそうなると五尺〇八分十四貫の彼女の体格は、身体中のどの部分でも女性一般の標準より太い事は確かで、私の気にした褌も短刀も外見では殆んど目立たない。どこから見ても三十才前後の奥様然として見えるので幾分安心したものだ。

愈々家をあとにしてバスの座席に並んで腰を下ろすと若干のスリルを感じさせられる。

縁儀のよい話ではないが、此のバスが若し途中で衝突転覆でもして、美智子が病院に担ぎ込まれ、医者や看護婦に取り囲まれたベッドの上で、万一にも「やらずのお美智」が曝露したとしたらどんなものであろう。負傷の全治した時を以て今度は脳病院へ入れるかどうか問題となる事うけ合いである。でなければ此の温厚なる会社員山田正実氏は、飛んでもない女とばく師兼女暴力団員、やらずのお美智なる物凄い妖婦を妻としていた事になる訳だ。

A君の結婚披露宴の会場は、京都の中心地、木屋町通りにあるF亭の二階広間である。

此の宴会の模様を詳述すると、筆者の正体

が近親者の間で露見する恐れが多分にある。何しろ「奇譚クラブ」は意外な処に隠れた読者を有している雑誌だから、此の夜同席した四十余名の招待客の中にもこっそりと奇譚クラブの密読を楽しむ厄介な手合が、一人もないとは絶対に保証出来ぬ話だ。にも拘わらず私は当夜のいきさつを或る程度書いて見たい誘惑を感じている。

披露宴は盛大に開かれた。

先ず仲人が砕けた態度で挨拶した後、新郎新婦を末座に紹介すると、新郎A君は「御多忙中を私の為態々御来駕を賜わり厚く御礼申上げます。粗末なおもてなしではありますけどうかお気持だけでも、御ゆるりとくつろいで一夕をお過ごし下さい」と云った型通りの口上を述べ、それから初々しい新婦と共々お銚子を持ち廻って接待に努めた。成る可く余談は略すとして、さて酔いが大分廻りかけた頃、A君の加入している商業組合の役員で、私も以前から面識のあるN氏が

「結婚生活に対するA君の決意と抱負を伺い度い」と云い出した。

「そこで四角張ったA君は末座に起立して、さて何を云うかと思つたら此んな意味の事を述べたものだ。」

「今宵、特に御夫婦お揃いでお招きした山田さん夫妻こそは、実に私の理想とする結婚生活を営んで居られます。山田さんの御家庭に於ては夫婦は互いに眼と眼を見合わせるだけで意志が通じ合うらしいのです。つまり以心伝心の会話が出来る。うそではない。私は山田夫人美智子さんと同郷人である関係もあって、夫妻のいずれとも親しい訳で、従ってその御家庭に於ける御様子を拝見する機会も多いのであるが、此の点に就いては全く敬服しているであります。勿論先輩諸氏の中にも山田さんのみならず、斯様な実例は多いものかも知れませんが、要するに夫婦となり、偕老同穴を誓い異体同心の愛情と理解の交流する生活に依って、人生の幸福を期するならば、実に夫婦間に於て似心伝心の会話が出来るところまでゆかねば駄目だと思います。私は山田さんの口から美智子さんに対する不満を伺った事が一度もないし、又反対に美智子さんから夫に対する不平も聞いた事がない。実に愛情そのものゝ中に住んで居られるとか考えられない。恐らく山田さん夫妻の間では今日まで夫婦喧嘩など云うようなものは一度も起らないし、又今後も起るまいと思えます。以上の理由に依って私としては絶好の

お手本がある訳で、従って私の結婚生活の理想と云うものは一言に説明出来る。言うなれば山田さん御夫婦を真似る事、即ち此れであります。」

うわあ、パチ／＼。

まあ読者諸兄姉よ。御推察願ひ度い。好漢A君の此の言たるや如何に私の顔面から火を

発せしめるに充分であつたかを……。

私の右隣りにそれ迄はイケ酒々と済ましていた流石のやらずのお美智も、此処に至って俯向いた顔が容易にあがらず、既に数杯を傾けた廻り加減も手伝って、朱泥に塗れた人形首の如く成り果てる始末だった。その上、「では若夫婦の参考に供する為、山田さんに



夫婦仲円満の秘訣を公開して頂き度い」

とN氏が云い出し、面白半分の拍手喝采と来てはもうイケません。余り恐縮ばかりし過ぎると座を白けさせる結果になるし、ちらと美智子に視線をやり乍ら、兎に角立ち上ったものゝ、突嗟にうまい文句が出て来ない。まさか真っ正直に「やらずのお美智」や「女覆面」「女武者」との、あの狂態をブチまける訳にはいかないし、それ等の事柄を秘して置いて何か気のきいた演説が出来ないものかと考えた挙句、斯う云う意味の事を述べたと覚えてゐる。

「A君が私達を仲のよい夫婦の標本のように考えて居られたとは実に意外である。成る程そう云われて見ると私等は余り夫婦喧嘩をしないかのように思われる点もあるが、実はしよっちゆう秘密でやっているのである。但し此れは云わば私達の間だけで合意の上の馴れ合いの夫婦喧嘩であって、最初からどちらが勝つかあらかじめ定めて置いて開始するのである。此んな拵えものゝ夫婦喧嘩であるから私が勝とうが負けようが、又家内が勝とうが負けようがどうでもよいのであって、最初は私が勝つ予定で始めても喧嘩の最中に勝つよりも負ける方が面白くなれば何も云わずに負

けて仕舞う。家内もよく心得ていて無言のうちには鮮やかに予定が変更される。此の呼吸が喧嘩以外の事柄にも影響して居り、先程A君のお言葉にあった通りに似心伝心で会話が出来るかの如く思われたのかも知れない。つまり私等夫婦は此のうその喧嘩をやるおかげでそれが一種の中和作用を及ぼし、決定的な本物の喧嘩が発生するのを未前に防止しているらしいのである。此処で御注意願ひ度いのは此のうその夫婦喧嘩と云うものが如何に面白いかと云う事であって、實際やり始めたら止められないくらいのものだ。従って私等夫婦が本物の喧嘩もせず幸福であるとしたら、それは此の面白いうそ喧嘩を共に享樂した結果の偶然の所産に過ぎない。私に云わせればA君こそ温厚な人格者であり、然も近代的な好男子である。A君が結婚するとすればその相手の女性はどうな人であろうかと、私等夫婦の間でもそれは興味深い話題であつたが、はからずも今宵の盛宴に末席を汚し、さて花嫁を眼前にして成る程と感嘆している。実に花嫁はすくすくと伸びた若竹の如き女性であつて、その挙止動作のうちにも心根の正しい人である事が判る位だし、私の家内の如く無暗に鼻ばかり高い顔ではなく、実に均整のとれ

た端麗な美人である。私なんぞは此れから先A君の御家庭を訪問する度びに、あてやかな新妻振りに眼の保養が出来ると思つて今から喜こんで居る次第である。然し乍ら人生は長いもので波乱起伏も一再ならず待ち受けている事であろうが、A君御夫婦の場合は既に自然が幸いしている。私等夫婦の円満さが偶然の所産であるとしたら、それはA君御夫婦の円満さに前以てあやかっていた訳である。更にA君の場合此の幸運に輪をかけた条件として、夫婦共に性格上の美点がある。A君は若年乍ら商店経営の才に秀で、花嫁が又内助の勞を惜まざるに於てはその前途の多幸なる推して知るべきである。結論を申せば私達夫婦の如きはA君にとっては何ら模範とするに足らない。むしろ私達こそ此れから示すA君夫妻の建設的明朗性を手本としなければなるまいと思ふ。最後に多幸なる新夫婦の前途を祝して乾杯を致し度いと思ふ。」

此処で満座一齊に杯を上げてくれたので、うまく胡麻化したつもりで尻を下ろして仕舞つた。此の演説を前半だけで終つたら恐らく「そのうその夫婦喧嘩とは如何なる要領でやるのか、具体的に知り度いから幸い夫人同伴の此の際ちよつと実演して見せてくれ」なん

ぞと云う突拍手もない追究的要求が、誰かの口から飛び出したかも知れない。いずれにせよ「喧嘩云々」の説明の辺りでは、美智子がハラハラと心配した事は確かである。

座はそれから益々賑わい、高砂を喰る人、都々逸をやる人、酒興今や酣々となつた。

すると突然美智子が何か小声で私にささやいた。騒がしくてよく聞こえない。「何んだ？」と問い返したら、

「しびれて来た」と云うのである。

此の場合、山田夫人美智子さんが云うのなら、長い正座に堪えかねて脚の関節が「しびれて来た」のであるが、やらずのお美智が云うのなれば、晒の褌が喰い込んで腰や股の筋肉が「しびれて来た」と云う意味である。恐らく後者の場合であろうと私は解釈したが更にもう一つ考えられる事は「しびれる」と云う言葉の持つ官能的な印象であつて、やらずのお美智がその扮装のおかげで刺戟される事極点に達し、「気持ち」が「アレ」して来た場合をも想像し得るのである。全く以て、「似心伝心」どころではなく、そのいずれとも私が判じかねているうちに、やらずのお美智は山田美智子夫人の皮を被つて、まんさん躊躇たる足どりどころかへ姿を消してしまつた。後で

聞いたらず先ず便所へ行き、それから着崩れを直す為には別室を拝借とか何んとか云つて、空部屋を借り、神経に重荷を背負わせている可愛さ余つて憎さ百倍の褌を解き外そうと思つた。ところが若し解き外せば風呂敷も用意して来ていない現在、十六尺の晒木綿と六寸の七首を如何にして持ち運ぶかいさゝか問題である。「えゝ仕様がなない」とばかりその儘締め直して来たんだそうだ。

子供の事が気がゝりだから、と云うのを理由に、早や目に宴席を辞したのは八時頃だったと覚えてゐる。少し歩いて見ようと河原町通りへ出て、四条の交叉点を北へ人混みを縫つて行く。

何しろ兩人とも浮世の苦勞をちよつと忘れる程度に酔いが廻り、宴会場での滑稽感が肚の底に残つても居り、久し振りに子供なしのアベックで、その上広い世間に夫婦だけのエロチックなアブノーマルな秘密を、現に持ち歩いてゐると云う訳だから、おこがましい話だが行き交う美装の紳士淑女も、交通巡査もタクシーの運転手も、しまいにはネオンサインの字句迄が皆馬鹿に見えた。

美智子は恥かし氣に私の体にびったりと寄り添い、私以外に此の世で頼りになる男性は

一人もいないと云わぬばかりの風情であつたし、又私も此の世で美智子程の可憐な、純情な、柔順な、そしておきやんな、魅力に富む鼻や容貌を持った、無上に愛しい女は何処を探しても見当たらないと云う思いだつた。イヤ失礼。失礼は兎に角、とるにも足らぬ山田正実夫妻の生活にも、河原町通りの総べての風景が、さながら彼等兩人の為のみに存在するかのような夜が、長くわびしい人生に一度ぐらい訪れたとしても、決して釈尊やイエス様が怒る事もあるまい。

「ホテルなんかの気分はどうだろうね。近頃若い連中の間で大分ハヤつてゐるらしいが」「あら。貴男もそんな事を考えていたのだ。だけど、そんなお金があつたら御馳走でも買って矢張り家へ帰りましょうよ。貴男は何処かでビールを口直しに飲んでいらつしやい。あたしも少しぐらい頂き度いわ」

あゝ此の京都の文化的な繁華街、河原町の舗道を歩む三十才近い肉感的な人妻が、訪問着の下に男も及ばぬ晒木綿の褌を締め込み、乳房の間に物騒な短刀を呑んでいようとは誰が予想し得ようか。

【註】私達夫婦のうその夫婦喧嘩とは、新年号所載「夫婦の倒錯遊戯」を御参照下さい。

懸賞入選作品 第四席

—汗について—

おしめカバー

みずしま・まもる



——いゝ子だからね、はい、あんよを揚げ
て、そうく、ほらね、もうすぐだよ、だめ
くそんなに脚を締めちや、もっとひらいて
そう、そうね、おりこうだね。すぐ済みます
よ、すんだらパイパイあげようね、はい、じ
っとして、動いちゃ駄目だよ、ほーらおしま
い——

これは口に出して云ったわけではありません
ん。三平は、そんなことを考えながら妙子に
おしめをあてゝいるのです。妙子の浴衣をほ
どいて作った、おしめが股の間に三、四枚あ
てがわれました。

更に尻の方から腰
を包んで三枚ほど
あてられます。そ
の上をゴム引羽二
重の茶のオシメカ
バーで手際よく包
んでゆきます。両
の太股のつけねを
ピッタリとゴム紐
が喰い込みます。
普通は釦で閉じる
所を股のつけねか
ら腹部を這って、

二つのチャックが腰までを、そのおしめカバ
ーの前後を縫い合せました。均整の取れた妙
子の体はこゝに及んで急に醜くふくれ上りま
した。幾枚ものおしめを巻きつけたその臀部
は茶色のおしめカバーに緊めつけられて滑稽
なまでにふくれ上っています。更にそのおし
めカバーは股間の部分を袋の様に腹下に垂れ
下るように作られていたのです。

透明のビニールで作られた「赤ちゃん着」
をつけた妙子は両手を頭の後ろに緊縛されて
いました。赤ん坊は自分の手でおしめカバー
を外せないのです。赤ん坊は自分の手で便所
の戸を開けてはならないのです。両手の拇指
を頭の後でしっかりと細い革紐で縛り、更に
それを一束の髪の毛に結びつけてあります。
はげしい羞恥で真赤になった妙子は、然し
手で顔をかくす術もありません。

——ホーラ、パイくだよ——

三平はオレンジジュースを瓶のまゝ無抵抗
の妙子の口にあてがいます。黄色い液体は否
応なしにゴクゴクと喉を通り過ぎます。

——もっとほしいの、それじゃ、ホーラー
三平は二本目も無理矢理にのませてしま
いました。口からあふれた黄色い液体がタラタ
ラとビニールの「赤ちゃん着」にこぼれ落ち



ます。

——それじゃおとなしくしてゐるんだよ、行つて来るからね——

三平は妙子の足先も手と同じ様に両方の拇指をしかりと結び合わせるとはだけているビニールの「赤ちゃん着」をきちんと合わせ布団の上にねかせると会社へ出かけて行きました。

——どこへ行くの、何時頃帰るの——

妙子は思わず声をかけ様としました。然し赤ん坊は口をきいてはいけません。妙子の口の中には一はやく拳大のスポンジが押し込められ、その上を細いゴム紐が喰しぼる齒を割つては、から耳の下を首の後ろでしかりとしめつけられていたのです。

そのまゝ三時間程たちました。

外は上天気のようにですが雨戸はたてられたまゝで、六〇Wの電燈がわびしく室内を照し出しています。

「今日ワー、魚徳ですが」

お勝手口で魚屋の声がします。

——しまった——妙子は血の逆流するのを覚えしました。

「チワー、お留守ですか、奥さん」

妙子はすっかり慌てました。然し縛られた両手はいたずらに自分の髪の毛をひっぱるだけでした。

——そうだ何処かへかくれなければ——

妙子は立上ろうと試みましたが。然し無惨にも不自由な足は長くひきずったビニールの「赤ちゃん着」の裾をふみつけてどうと転びました。

「コンチワー、今日は御用はありませんか」表では無心に魚徳の小僧が叫んでいます。

妙子はゴロ／＼と転がりました。この浅ましい姿を他人に見られたらどうしよう。何か云つて胡魔化そうにも口は嚴重にさるぐつわが噛ませられています。おしめをあてられ、異様なすきとおるビニールの「赤ちゃん着」をひきずって、而も手足を皮ひもで縛られている姿を人に見られたら。妙子はワナ／＼とふ

るえました。

——なんとかしなければ、なんとかしなければ——

妙子は転がりながら身をかくす場所をさがしました。そして洋服ダンスの扉が開いているのに気がつきました。縛られたまゝ虫のようにはって漸く洋服ダンスにたどりつきました。

リンリ、ン、

魚屋は今度は自転車のベルを鳴らして会図をしました。妙子は懸命になってその中に這いようと努力しました。然し悲しいかな縛られた両脚は全く思うように動いてくれません。又も「赤ちゃん着」の裾をふんどっとその場にぐずれてしまったのです。

然し良いあんばいに魚屋はあきらめて帰ったようです。あたりは又全く元の静けさに返りました。

妙子は不自然な形でうずくまったまゝもはや動こうとはしませんでした。身体一面吹き出た汗にビニールの「赤ちゃん着」はベタ／＼と裸身に吸いついておりました。額に流れる汗をあわれにも拭き取る術とてありません。

一難去った後、又新しい苦しみが妙子をお

そいました。今朝無理に飲まされたオレンジジュースの為でしょう、急に耐え難い尿意が自由のきかない妙子を責め始めたのです。おしめをあてられているのでそのまゝ垂れ流してもよいわけですが、(その為)に夫が股の間に幾重にもおしめをくくりつけ更にもれないようにゴム引のおしめカバーをあててくれたのです。——然し妙子は耐えました。

——あゝお便所へ行きたい、何とかしてお便所へゆきたい——

絶え間なく下腹部を刺戟する尿意に妙子はのたうち廻りました。然し所詮赤ん坊はお便所へは行けないのです。小水はおしめの中にたれ流さなければならぬのです。

——あーッ、アッ——

叫びはさるぐつわに遮られてうゝゝゝという呻きになりました。

——う、ううッ——

妙子は又しても新しい苦しみに転げ廻らなければなりません。バサ／＼バサバサツと転げ廻ると共に、ビニールの「赤ちゃん着」は音を立てます。

——ううッ、うゝ——

然し、所詮、生理的な排泄欲はいつまでも辛抱できるわけはありません。股間を包んだ

おしめは尿の為に濡れる運命にありました。

ジョッ、ジョッ——

ゴム引のおしめカバーの中で鈍い音がしました。今や妙子の必死の抵抗を押し切って、尿は無心にほとばしり出たのです。

幾重にも腰に巻きつけられたおしめはみる／＼うちにぬれてゆきました。暖い液体が股間からお尻を、更に背中の方まで腰を廻り腹部を浸してゆきます。おしめは、ある一定の量を吸い取るともはや役に立たなくなりました。然し尚もほとばしり出る尿は股間の袋を満しました。おしめカバーは妙子のわずかな動きによってもゴボ／＼、ゴボ／＼とあやしい音を立てました。

妙子はうつ伏して、顔をふとんに埋めて、尻を立てた奇異なポーズでじっとおしめを浸しおしめカバーを満して流れ出る尿を意識しました。おしめカバーは多量の尿を包んで意外に重く腰をしめつけました。

鉛の玉でも結びつけた様に重く尿をためた袋が下っていました。

「今日は——、何方かいらっしゃいませるか——」。

玄関で声がすると、そのまゝ声の主はすか／＼上り込んできた様子です。

私の下穿きを

(北海道の荒巻利夫さんに)

一 柳 ト シ



——うッうッ——

妙子はや力尽きてガバツとその場に打ち伏すと、ぼーっと意識を失いかけてました。妙子の汗の臭いに尿の幽かな臭気が入り混って部屋全体が妖しい匂いに満されていました。全身くまなく汗でぐっしょりぬれたビニールの「赤ちゃん着」が電燈の光にキラキラと輝いています。両手は痛々しく髪の毛にくっつきつけられ、更に両足を緊縛されて、自分の尿

ですっかりびしょ／＼になったおしめをくみつけられてうつ伏している妙子の姿は異様にも又あわれでもありました。

入ってきたのは夫の三平でした。妙子を慌てさせてやろうと玄關で一寸お芝居をしたわけです。今日は土曜日で半日なので早く帰ったというわけでした。

三平はうつ伏している妙子を抱き起すとやさしく唇を吸ってやりました。それからスポ

ンジのさる／＼つわを取り外すと今度は強く唇を吸います。妙子の両眼からこらえにこらえていた涙がどっと吹き出て三平のほ／＼を濡しました。

——いいの、いいの、ね、泣かないでいいの。おりこうだったね、さびしかったらうね。おなかすいたらうね、さあパイパイあげようね、一寸パイパイの前にお尻を見ようね。あッ濡れてる濡れてる。びっしょりだ。了、

二月号のフエチ通信で、「ズロースマニア」の貴方の悩みを知りました。私は娘がいつか奇クに書いたように「コルセットマニア」で小さなコルセットの中に自分を押し込めて満足しているものですので、貴方の悩みを充分に理解することが出来ません。女の汚れた下穿きに口づけしたい程の気持はとうてい私には分り兼ねますが、マニアとして欲しがられる気持だけは良く分ります。私とても始めはコルセットなど思いもかけず、燃える軀の処置に裸になって重いタンスの裏へ入り、壁とタンスにはさまれた経験もあります。で、お手紙を書く気持になった

のは、貴方の手記に「新しいのはさほど気がひかれない」「実物を今だに入手する事が出来ない」「洗濯物の干してある中にズロースやパンティ等が見当たると胸が躍る」「近頃は眺めるだけでは物足らず、手にとって気のすむ迄」等の文章があり、結局貴方は他人の下穿きを頼んでもらう積極性もない所から、洗濯寸前の物を盗むか、現在穿いている人から奪うかしかないでしょう。しかも私のコルセット癖と同じことで集め始めれば始める程新しい(別のと云う意)ものが欲しくなり、遂には社会秩序を乱すものとして法に触れるのではないかと大変心配し

たのであります。

そこで幸い私は下穿きについていさゝか他人と異った癖があり、貴方の欲せられていることと一致すると思ひますので、私の下穿きをお送りいたそうかと思ひ立ちました。

私は今年三十一才、五尺二寸五分、十四貫八百、女子高校三年の娘が一人。夫が私は十四才の時に戦死、以後新潟の別邸を頂いて附近の貸家の家賃で生計をたてています。皮製のコルセットを作り（勿論脊髄カリエスと云ふことにして靴屋に作らせている）それを自分に着、娘にも着せて満足している女です。

で下穿きですが、私は決して洗濯をいたしません、穿けるだけ穿いて捨てゝします。それから一日中同じ下穿きを穿いていると云ふことはほとんど無く、春夏秋冬に分けて日課表を作り一日に五回六回取替えます、一例として今用いているものをのせましょう。

朝（家事） 黒パンティ（二九年十二月買）

昼（買物） メンスバンド（二九年

三月）

夕（家事） 黒体育用パンティ（二九年八月）

夜（雑用） 白パンティ（二九年八月）

眠る時黒ズロース（二八年九月）

以上の如く取替えます、それも各々一、二時間位しか穿かないのです。あとの時間は何を？……云わずとコルセットなのです、一般のコルセットは布とゴム製ですが私の皮で乳房から股をおうう部分もあり、背の紐をしめると（勿論自分ではやれませんが）息も付けない程の苦しさです。だから右のように一日数回の休息としてコルセットを脱ぎ下穿きを取替えるのです、そこで汚れた下穿きを捨てずに貴方にお送りしようと思ひますが、娘の真砂子にも嫌がりませんが、この頃は毎日裸の上に乳当ても前当てもある海水着のようなコルセットを着せてその上に何にも着せずセーラー服を着せて学校に出してやっています。穿き古したズロースやパンティなら少しあります。私と違って白いものが好きで白ばかり穿いていますから、

お好み通り汚れの部分ははっきり変色して居りましょう。最初にお送りするのはメンスバンドです。

一番いたんで汚れたものと云うとこれでした。女学生用シーズンバンド、ビクトリヤ型、四百五十円の品で一年半ばかり毎日穿いたものです。この頃はコルセットを持たない頃でしたから緊迫感を求めて毎日穿いて居りました。買つて来たその夜ゴム紐をきつく取替えました。以来一年間七、八度取替えました。現在のものを二九年三月に求めてから、もう穿きませんので太股のゴム紐は延びたまゝです、貴方の股に合せておつめ下さい。それから腰の紐は新らしくてキツイですから大丈夫かと思ひますが貴方には少しゴムをつめ過ぎでありますのでキツ過ぎますから自己に應じて延ばして下さい。今私が穿いてみました所コルセットのせいで胸が蜂のようにくびれてきましたのでやゝゆるい位です、このメンスバンドから私を御想像下さい。

前に当るゴム布の部分は三重になつていましたが、毎日の使用で

一番下のゴム布は切れてしまひました。残りの二枚は直接私の肌にふれ通して来たもので、股の部分は薄赤色に変色して居ります、経血はこびり付くとかたくなつて困るのでオキシフルでふいて使うので今見た所経血のしみはないようです。ガーゼは捨てゝ居りますので……。お望みなら保存しておきます。ちなみに私は月のはじめ、大体四日間、極く少量、ガーゼは一日三回取替えます。娘は月の半ばで一週間、量は多く日本製のバンドは合わず、アメリカ製の、総ゴムのメンスバンドを用いています。

汚れとおっしゃいますが、何の汚れをお好みですか、おっしゃって下さい、尿の汚れでしたら娘の方の臭いが強く、分泌物は私の方が臭うようです。

この次は何をお送りしましょうか。

【編集部註、一柳さんから編集部へメンスバンド一着、送って来られております。荒巻さん御連絡下さい】

きいたふう

吾妻新

栗原 伸・画

思えば永い間かきつづけたものである。一昨年の三月からはじまって今日まで、ほとんど休んだことがない。偶にあるかもしれないが、その代り複数で掲載したこともあるから、平均すれば一カ月一篇以上になっている。よくまあ編集者も見棄てないものだと思うが、じぶんもよく図々しく、倦まずたゆまず書いたものだと思え返っている。これが普通の雑誌だったら決してそんな熱意は起らないのだが、本誌にかぎってそうでないところをみると、やはり私がアブノーマルだからなんだと思う。だから私は本誌に限って、求めに応じたくのではなく、かかせてもらっているのである。

こういう雑誌があるということは実際ののししいし、文字どおり意義がある。但し、一冊あればいいというのが、私の信念である。実は一年ほど前に、類似誌の編集長が私の友人を介して会いたいと申

しこんできた。私は絶対におことわりした。たとえ会っても原稿は書かないからとつけ加えた。友人は信義を守って、私の住所も教えなかった。これは勿体ぶるのでもなんでもなく、この種の雑誌は一種は是非必要だが、同類誌は要らないと信じているからだ。その編集長には会っていないのだから悪意も偏見も持ちようがないし、また事実持っていないのだけれど、友人には卒直に、KKがある以上他の類似誌は要らないばかりでなく害あって益がないから、手助けどころか、つぶしたいのだとハッキリ云った。

私は決して箕田さんからワイロも貰っていないし頼まれもしないが、事実そうなのだからしかたがない。理由は簡単である。二つ、いものはできっこないからだ。ところが私の知ったKKは実にいい雑誌だった。ハツタリやケレンがないし、実力以上を誇示しようと

しない。執筆陣は手固いし、反対派の（失礼！）沼氏にしても得がたい人である。しかも最初に箕田さんからもらった手紙には、煽情性を売物にしないまじめなアブノーマル研究資料誌として、あとに残るようなものに育ててゆきたい旨がかいてあった。事実その後経過をみれば、お世辞めきでこの意図は実行されているようだった。だとすれば、その編集方針だけ骨ぬきにして、口絵からカットから記事の組み方まで模倣し、甚だしきは畔亭画伯の絵をそっくりそのまま盗用し、ありもしない読者の投書で色をつけるような雑誌はなくなったほうがいいのである。否、積極的につぶすべきだ。第一、そんなキワもの雑誌の濫立は読者を害するだけでなく、取締り当局の心証をも害する。鎌で草を刈るとき刃にひっかかるのは、かならずしも雑草ばかりとはかぎらない。そんな不幸のないためにも良心的なものを一種だけ残して、まともに批判してもらったほうがいい。

幸いにこの願いは実現した。おかげで執筆者はこの舞台一本に筆を集中させることになるだろうし、読者もこれ一冊で足りるのだから負担も軽くなる。当局も美味増混同する必要がないから、やはり肩の荷が軽くなるだろう。

だが、なんにしても私は書きすぎたようだ。読者がウンザリしてはいしまいかと思うことがよくある。「感情教育」のときも、そんな調子がみえたらいつでも打ち切るから遠慮なく云ってほしい旨を編集者にお願ひしておいたが、こんどの「夜光島」にしても、なんとなく気がさして、もう少し続ける予定を切り上げてしまった。この点、私はあまり図々しくはない。しかし、なにかまだ書いてゆきたい気持はある。そのことはあとで触れるとして、今月は少し勝手

なおシヤベリをさせていたきたい。貴重な誌面だけれども、二年間に一度の息抜きだから、大眼に見てもらいたいのだ。

題して「きいたふう」という。きいたふうなことを、順序かまわず書くとする。

x

まず二俣志津子さん。あなたは三月号の「Mへの手紙」で「吾妻氏をライバルとして意識する」と書いたところが、Mなる人は「ライバル呼ばわり」という表現で批難している。ところが、私はM氏への遠慮でもあなたへのお世辞でもなく、そのライバルという言葉に共鳴し、賛成する。なぜかという、これはもうずっと前にMなる人に申し上げたが、私はあなたの愛読者だからだ。

そのいちばん確かなことは、私は本誌の昭和廿七年十二月号、つまり古川裕子さんの「囚衣」の掲載した号から保存していて、それ以前のものは持っていない。だが、よんだことはある。その中で、たった一つ、切り抜きを持っている。大版時代のもので、雑誌そのものは捨ててしまったから——現在ののような文献誌になるとは夢にも思わなかったもので——年代も号数もわからないが、「鬼兵衛刺青異譚」という小説だ。その作者が、二俣志津子さんなのである。

いま私はそのスクラップを左においてこれを書いているのだが、改めてよみ返しても三年前と同じ印象を受ける。傑作なのだ。当時私は、なぜこれだけのものを一般文学雑誌に発表しないで、こんな雑誌——Mさん怒らないで下さい、当時はそう思ったのです——に載せるのだろうと不審に感じた。たしかに筋はナマ易しくない。エゾの荒武者が捕虜の女を苛み、入墨する。力づくで敵将の娘を妻に

するが、裏切られると乳房を太矢に串ざしにし牛の背に縛りつけて追い落す。城内で凌辱される女達の悲鳴と呪咀に空耳を走らせながら鬼兵衛即ち黒鳥兵衛は、(またとあのよう

な女子にはめぐり会うまい)と心につぶやく。——だが私は一般文学誌に載ったろうと思う。なぜなら凄惨な筋でありながら、その描写にはいやらしさがなく、むしろ一種の香り高い妖気が漂っているからである。私は真実うまいと思った。そして切り抜いて保存する気になった。

その後、「悪の部屋」をよんでまた同じことを感じた。そして編集部に感想を書き送ったことがある。だから私の傾倒はずっとつづいているので、その作者からライバルと云われることはむしろ光栄である。



Mさんとの応答をみると、あなたは嘗ての会社員の生活から、放浪に入り、現在では物置に住んでいるそうだが、人生において体当りであるように、その作品も体当りである。ただ私はその生活と作品とを結びつけたり、現実生活から作品を逆算したりしたくはない。というのは、「鬼兵衛刺青異譚」と現在の作品とに、まったくおなじ肌触りをかんずるからだ。云い換えると、あの当時からすでに今日みるような、叩きつける切れ切れの鋭い文章に非情の魅力を感じさせたし、放浪後の現在それが荒んだ方向にむかっているとも思われない。たぶんあなたはブルジョア生活をしようと屋根裏に住も

うと、おなじように考え、書き、表現するだろう。それはあなたが正しい意味で（文学者）なのだという証拠である。

「大体、微温な同情なんて私は悪だと思っています。非情か熱情です」

「私は告白を書くまいと思う。あくまでも小説は小説であり、私の小説の中に出てくる二俣志津子は絶対に私ではないことを断っておきたいのです」

これ以上に正しい散文精神はない。

そこで私はずっと前に編集部に書き送ったことをくりかえしてあなたにお願いしたい。小説を書きなさい。どしどし書きなさい。不幸にして発表の舞台がKKだけでしたら、その間だけ読者の私は幸福である。見落す心配はないからだ。しかし暖房をとるため、じぶんの作品の掲載誌を破って燃すようなことだけはやめたほうがいい。かならずその作品を集めて役立たせるときがくると思うから。そのときはひとつ、私に序文でも書かせてもらいたいものである。

考えてみると、本誌には単行本にして出版したいものが相当にある。沼氏の手帖などもそうだし、二俣さんや古川さんのものもそう。他にもある。そして、ご注意ねがいたいのは私はそれらの出版価値をアブノーマルな狭い地帯だけに置いていないということだ。一般出版物として出す価値があるし、可能性もあると考えている。

論文以外のもの、たとえば二俣さんや古川さんのものについては特にそう云える。ご承知の方もあろうが、雑誌ジャーナリズムと出版ジャーナリズムとは範囲がちがうので、いまでは文芸雑誌の掲載小説が単行本に化けるといふ安易な考え方は通用しなくなりはじめている。「中央公論」から「小説新潮」までを含めて、それに書く

ことはもちろん無意義ではない。だが、昔のように絶対ではなくなった。それを絶対と思うのは頭が古いので、さっきの二俣さんについて感想とウラハラになるようだが、もし文芸雑誌にかくことをいまでも登龍門だと強調するなら、それはいわゆる文壇への登龍門にすぎない。ところが現在では、出版ジャーナリズムは新聞、ラジオ、映画ともむすびついているので、文壇との関係はその中の一つにすぎない。読者層はずっと拡大された。つまり、文壇と文学とのズレだ。このズレは将来もっと広がる筈である。

ただ猟奇趣味を売物にするならべつだが、二俣さんや古川さんのものはそうでないと思う。こういうシンの通った作品が本誌にだけ出て、没落した類似誌に出なかったことも興味があるが、とにかく文学的に真実なものなら、内容がどんなに特異なものでもかまわない。出版の可能性はある。古川さんのものなど、あまりに変わっているというかもしれないが、問題になった出版物は出てしまいうまではつねに△極端▽で△絶望的▽だった。私が訳そうとして大久保康雄に先きを起されてしまったラドクリフ・ホールの「寂しさの泉」なども、本国の英国では特殊すぎるほど特殊だったので、発禁の憂目にあった。だがヴァージニア・ウルフ等四十五人の作家が連名でそれに抗議を捲き起し、アメリカ版の出版者は序文でそのいきさつを述べて発禁にならぬよう、予防線を張っている。またハヴェロック・エリスは序文のなかで、この告白小説が心理学的・社会学的に大きな意義をもつことを強調している。これは、じぶんの意志や努力でどうにもならない先天的同性愛者の女性が、その苦悶を生々しく描いたものだが、古川さんの苦悶はけっしてそれに劣らないし、マゾヒストの心理と体験を赤裸々に掘り下げている点で、エリスの強

調した意義がそのまま適用されるだろうと思う。こまかな描写の問題は技術的に解決がつくし、発禁にもなるまい。もし起訴でもされたら、それこそチャタレイ裁判のように法廷斗争すればよろしい。そのときこそは私も弁護陣の一員に加わるだろう。

x

二俣さんが「藤人間」の挿画の誤りを指摘していられたから、私もじぶんの挿画について書こう。だが正直に云って、私の場合には栗原伸画伯にお礼を云う立場にある。

作者というものは、それがどんなくだらない作品でもイメージをもち、愛着を抱いている。だから挿画にはゼイタクな空想をもっている。画家にしてみれば迷惑な話だが、作者は勝手なイメージをえがいて、それに近ければ満足し、ちがっていると不満を抱く。だから伊藤晴雨氏のように、じぶんで挿画までかける人は幸福だ。

それで「感情教育」のときには、いろんな註文やら説明やらをつけて編集部に送った。定めし栗原さんはうるさかったことだろう。だが私にとっては、由紀のマスクとズボンの形は重大で、とても気になっていた。今だから云ってしまいが、ずっと前の号に「くすぐられるよろこび」という原稿がのっているが、その上のカットの、ズボンをはいて俯伏せに縛られている女は私の描いたものである。読者の一人が吾妻新ではないかという投書を寄せたが、文字どおりくすぐられる想いで私は頬被りしていた（原稿はちがいます、念のため）それを参考にくれるように、私は栗原さんにたのんだ。そのせいかどうか、由紀は私のイメージに非常に近かった。ただ、ズボンだけは非常にむつかしいので、ときどき、股引のようになっ

たり、反対にグブついたりしたことがある。あれは膝の上部―腿の途中までびったりして、膝から足首まではやや細めに、しかも緩やかでなければいけないのである。

章三郎のマスクは、由紀に頬を撲らせるところがいちばん気に入っている。但し、私のイメージにある章三郎はもっと瘦形である。その点では「夜光島」の健次郎は落第です。デブプリしすぎているし、第一、あの顔は憎たらしい。中年だから鼻の横に皺を入れたのだろうが、ちよっと幻滅だった。登枝は結構です。いや、結構でしょう？

でも、KKの画家はみんなヴェテランだから、縄の掛け方やポーズはよく心得ている。だから註文をつけるのはゼイタクな位だが、ほかの画家になるとまるっきりダメで、歯がゆい思いをしたことが度々ある。二三、打ち明け話をしよう。

新聞小説はごそんじのように毎日挿画が入る。だから挿画が読者にあたえるイメージの力はたいへんなもので、それだけ作者も無関心ではいられない。私の書いたのは意外に好評で、その新聞社始まって以来の成績だったとかで、半年の契約がずっと延長した。そのために季節は夏にかかったのだが、私はヒロインにずっとズボンを穿かせ通した。それも筋目のない労働ズボンだ。ふつうの新聞小説ならば、女主人公はまず流行の服装をするのがあたりまえだが、そんなことは一切無視した。女にズボンを穿かせるのは私の主張だからしかたがない。その点については読者の思惑などかまっていられないのである。

次に私は、縛る場面をいくつもつくりだした。新聞小説が楽しいのは、こういう我儘ができることだ。一度掲載したせば、なにを書

こうとこちの勝手である。いやなら掲載を打ち切るしかないが、それはよくよくのことである。私は副人物の女は裸体で数回縛ったが、ヒロインはズボンのまま縛り、猿轡をはめ、いくども呻かせた。それを救いだした人間がまた、すぐに縄を解こうとせず、口のきけない彼女に重大な約束を迫り、むりに承諾の返事をさせる。さて数回に亘るその場の挿画だが、はたして画家がそういうシーンを正直に描くか、逃げるか、すこぶる気になった。それでわざわざ画家の自宅まで出かけて、「こんどこれこの場面が廻ってくるから思いきって遠慮なく描いてほしい。ついては、君は女を縛った経験はないだろうから、これを参考にしたらどうか」と云って、「奇譚クラブ」のなるべく縛り画の多い号を一冊、貸してやった。

ところが、ヒロインが縛られてから解かれるまで、タツブリ四五回分はつづくのに、肝心の挿画は逃げるといのは、ヒロインの代りに暴漢や格闘をかいいたり、縛られている部分を他の人物で隠したりするのである。描きにくいときにやる常套手段だ。私は毎朝くる新聞をあけるたびに、不満がだんだん怒りに代るのをかんじた。よし、あくまで逃げ切ったら文句を云ってやろうと肚にきめていた。すると、やっと一回出た。救った男に詰問されて、口がきけずに困っているシーンである。猿轡をはめられ、うしろ手のままこちを向いて、起き上ろうと腕でからだを支えているポーズ。それはいいのだが、詰問する男の背中が手前に大きく描かれているので、ヒロインの構図はあまり大きくなく、しかも足の部分がかくれている。不満だったが、描くことは描いたのだから、違約だと云って怒ることはできない。

社に行ったとき、編集局長がいたので、つかまえて云った。

「新聞小説の『宮本武蔵』のとき、又八に誘拐されたお通の猿轡は画面一杯に出ていた。こんどの僕の場合なんか、すこし臆病すぎるねえ」

「若いからな、純情なんだよ」と彼は笑って云った。「でもね、社では評判なんだぜ。めったに小説なんかよまない社長が、あの女、いまにやられはしないかって、ハラハラしてた」

「やられたら小説は終っちゃうじゃないか」

大笑いしながら、そのとき私は、社長重役連が急に熱心によみだしたのは、あの緊縛シーンがあるからだということに鋭く感じた。また会計のきれいな娘が、気のせいかな妙な眼で私を見たことを覚えている。

もう一つの新聞小説でも私はヒロインを縛り、猿轡をはめた（こまった悪趣味だ！）。そのときの画家はちゃんと描いてくれたが、これは前とちがってリアルな描き方ではないので、べつの意味で感銘が薄かった。うまくゆかないものだ。だから私は、本誌の栗原さんに心から感謝している。イメージとの合致という点で比較にならないからだ。それに註文をつけたりするのには、甘えているのだ。

x

雑誌でもおなじような場面を扱ったことがある。この挿画も問題にならなかった。だがコッケイなことが一つある。猿轡という字が誤植になって、猿股となっていたことだ。全然関係のない言葉なら誤植とわかるが、これではかえって深刻な意味をもってしまふ。

こういうと或いは私がそんな小説ばかり書いていると想像する人があるかもしれないが、正反対だ。むしろ恋愛など一つも出てこな

いような固苦しいものが大半で、以上述べたようなものは例外にぞくする。もっとも不具者を扱ったのは二つあって、その一つは緊縛猿轡、ひどいサディズムの描写があるが、これにはハッキリしたモデルがあるので、私は義憤をもってそれをかいた。だから、私という人間はたしかにアブノーマルだが、書いているものは別である。

弁解してみたことはやめにして、こんどは映画の話をしたい。本誌でも口絵の写真や画は非常に大きな関心をもたれているし、「縛られた女優たち」の報告が人気を呼んでいるところからみても、視覚の重要さはみのがすことができない。私もそういう意味で映画を見ることがあるにはあるが、実はいくらも見えていない。というのは、忙しいせいもあるが、二分か三分の緊縛のためにくだらない映画を忍耐して見るのがどうにもやりきれないからだ。困ったことに、時代物などは特に愚劣なものが多い。しかもご承知のように、本誌の読者からみれば縛る場面そのものがダラシがない。

私が金を払って、どうしても見ようという気になるとすれば、ただ縛ったり猿轡をはめたりするだけでなく、その女がズボンを穿いている場合である。むしろそのほうが重大な条件となっている。だが、こういうものはめったにない。もちろん日本の時代劇にはないが、西部劇などにしても、ズボン、緊縛、猿轡と三拍子そろったものはなかなかない。もっともそんな映画をわざわざ見なくても実際に平和に楽しめるのだから、ムキになって探したこともないが。

しかし、もしも私の小説を映画化する場合にはどうだろう？ その場合にはどの女主人公も大抵ズボンを穿いているから問題ないわけだ。しかし、……しかしである。

実はさっき述べた新聞小説の映画化の話が起りかけたのである。

そのときシナリオライターがこんなことを言った。

「吾妻さん、このヒロインはズボンばかり穿いていますね」

「ええ、どうして？」

「変えちゃいけませんか」

「それはいろんな理由があるんだから、変えるわけにいかないですよ」

「しかし、映画はやっぱりキレイドコロを見せる必要があるんでね。もちろんズボンも穿かせるけど、たまにはスカートも穿かせなくっちゃ。さもないと華やかにならない」

そこで私はトウトウ数方言、女のズボンの魅力について述べ立てたが、奴さんにはある点以上どうしてもわからない。私は撫然として口をつぐみ、その話はうやむやになった。というのは、じぶんでシナリオを書こうと決心したからだ。

私は頑固かもしれない。が、その位の自由が通せなければ映画にだって面白くない。ましてその小説の場合は、ズボンという服装を通して生き生きした女の魅力を表現しようとしているのだし、それに対照する女にはチャンとスカートを穿かしているのだから、ヒロインは徹頭徹尾ズボンを脱がすわけにいかないのである。

よろしい、島崎雪子か有馬稲子かにズボンを穿かせて、まだ一般が気付かない、あたらしい魅力を発散させてやろう、というのが、今年のプランの一つである。ちようどこの春から映画製作にもタッチすることになるので、もし私のシナリオがダメなら専門家に書かせてもいい。とにかくズボンで押し通します。

縛って猿轡をはめるシーンは、もちろん立ち会って、いまだかつてないほどリアリステイックにやります。何度も何度もやり直して

原作者がタンノウするまで、最低一時間はそのままはっておく……これは冗談だが。

ボーヴォワールが「サドは有罪か」で、サドの再批判をこころみ



ている。いまこの興味ある本には触れないけれども、要するにサド自身のための弁護というよりも、実存主義のためにサドを利用しているかたちである。利用といっているければ買いかぶりだ。本多秋五がトルストイの家出の原因を、「わからない」と言ったのとおなじ意味で。

「ジュスチヌ」は私は好きなのだが、サドがいかに思想のためというより欲情のはけ口として書いたかは、そのしつこい描写のなかで我を忘れていふこと
でわかる。もっとも素朴な意味で、描写が行為の代償になっている。たとえば人里はなれた僧院で数カ月の永きにわたり、ジュスチヌが夜となく昼となく苛まれるところは、この一巻のもっとも陰惨な、それだけ彼の空想力が最高度に結晶している部分だが、そこで、縛られたジュスチヌがいつのまにか四つん這いになったりし

ている。これはサドがどの位熱して、どの位の早さで書きまくったかを、他のどんな資料よりもハッキリと私に教えてくれる。つまり酔っていたのだ。

抑制しがたい欲情のもう一つの点は、拷問や折檻の過度にあらわれている。わずかな過失で、鞭打が百、二百と加えられる。しかもそれを毎日倍加して、一週間までつづけるというのである。諸君、いくらになるか計算して下さい。

湿った谷間へ熱湯をつぎこんだり、針を刺したり、花火をつけたりして、人間のからだはどうなるか？ しかも、よわったことに、ジュスチーヌは、悲鳴をあげたり悶絶したりしても、翌日はジャンとしてまたあたらしい責苦を受ける。サドを満足させるために、ヒロインはこういう奇蹟を何百べんでも繰り返さなければならぬ。「ソドムの百二十日」ではもっと奇抜な方法、というよりも、どんなくでもない方法までもが、余すところなく採り入れられている。まるでテクニクの辞書でも編むような工合だ。そのために一つの場所、たとえば乳房なら乳房への攻撃について、他の箇所で述べたとおなじ方法がいくつも重複して語られる。完全を期するにはこうしなければならぬと言わんばかりに。下手な作家が知っている材料をなんでも詰め込もうとするのと同様、これは興奮させるよりも退屈させる。

これらが、似たりよったりの説教の繰返しと共に、サドの弱点であり、必然でもあった。ひとは彼の本をよむとびっくりして、悪魔の書と言ふけれども、その悪魔は今日では神通力を失っている。なるほど彼の考えだしたテクニクの種類は莫大で、博物館の観がある。しかし私たちはそれを知らないからでなく、知っても実際に

使えないから、用いないのだ。もし彼の述べたテクニクを全部使おうとすれば、一回で一コロのものが多から、犠牲者は何百人あっても足りない。サド自身けっして実行できなかった。つまり、現実生活にはありえない、空想の産物だということが明瞭である。だから、冷静に考えればサドの書物は無害なのだ。

「ジュスチーヌ」は木々高太郎氏の手で一部分訳され「三田文学」に数回連載された。尻切れとんぼになったのは氏が忙しいからで他に理由はない。氏の話によると、「ジュスチーヌ」をのせはじめてから雑誌は急激に売上部数を増したそう。だから、もし希望者が多ければ本誌に訳載することも考えられないことはない。ただしサドの著書は異本が多く、私のものと木々氏のものとはべつである。もちろん木々氏所有のものの方が信頼がおける。ただ完本抄本の区別ではない。たとえば木々版ではジュスチーヌが警察に拘引されるとき猿轡をはめられるが、私のにはない。山賊に弄ばれる描写で私のにあるものが木々版にはない。一方は純然たる三人称、一方は告白体になっている。

x

こんなことを言うと叱られるかもしれないが、本誌の寄稿をざっと眺めて、男性軍よりも女性軍のほうがずっと文章がうまい。例外はあるかもしれないが、平均するとその差は歴然という気がする。それともう一つ、最近の懸賞当選原稿をみると、サディズムよりマゾヒズムのものが多く、これはサディストよりマゾヒストが多いということにはならないので、作品としてサディズムには傑作が少いということになるのだろう。さらに発表の可能性という問題もあ

る。サディズムにはマゾヒズムの持たない制約がある。

とにかく、そう考えてくると、女性ⅡマゾヒズムⅡ巧さという関係が成立する。これはどうも自然のようだ。そういえば「囚衣」で私にシッヨークを与えた古川さんは申すにおよばず、二俣志津子さんにもマゾがある（氏はたぶんサドでもあるが）。「A感覚の秘密」で鮮やかな切れ味をみせた羽村さんもそうだ。男でも巧みな小説をかいた鬼山さんはマゾヒストである。ただしこれは男のマゾヒストは少い（私はそう信ずる）という意味で、どこまで例外でもある。次にまた、男のマゾヒストでも鬼山さんのように達者な文章をかく人は少いという意味でも例外である。（言うまでもなくここでは創作——告白をもふくめて——について話しているので、論文は問題にしない。理窟っぽいことは男は得意だが、それだけまたギロンの余地が多い。沼氏の「手帖」など、私の立場から言い出したらきりが無い）

そこで、マゾヒストの大半をしめる女性の文章がうまいということとは、本誌の女性執筆者がそろって文学的センスをもっていることにも、また男が妙なブライドやポーズで口ごもっているのに、女性陣は一齊に裸でぶつかっていることにもよるが、さらにマゾがサドよりも表現しやすい点にあると思うがどうだろうか。

大体、文学というものはじぶんを裸にする性質をもっている。ものをかく人間は程度の差こそあれ、その勇氣をもち、意識をもっている。だがサディストは、私みたいな平和論者でも、なまなかなハ文学精神Vぐらいでは告白しかねるものだ。じぶんに恥ずるのではない。そんな段階はとくに卒業している。結局は解きほぐすに由のない世間の圧力のためだ。その圧力がどんなものかは、マゾヒ

ズムとちがってサディズムには犯罪者めいた烙印を押されていることでわかるだろう。

なるほど、マゾもアブノーマルだという意味で、後ろめいた気持ちや思惑があるにちがいない。古川さんほどにもなれば、ちょっとやそとの勇氣では仮面を脱ぐこともできまい。しかし、とにかくにもマゾは他人を害さない。社会は警戒心をもたない。不正確な言葉だがかりに「苛める」という言葉をとってみると、苛めるのは不道德だが、苛められるのは無道德だ。語感のひびきからしてちがう。では現実にはどうか。新婚の夫または妻に、抓ってくれとか足を舐めさせてくれと言え、呆れるかもしれないが怒りはしないだろう。が、縛りたいと言え、恐れたり憤慨したりするかもしれない。この差を拡大すれば社会的な差となる。どんなに徹底したマゾヒズムを描いても、たぶん弾圧は受けないだろう。だがサディズムの描写には明瞭な限界がある。大胆になり、裸になることは、一定以上ゆるされないのだ。

次に、文学的に人を感動させるために、サディズムはマゾヒズムより不利である。

「彼は彼女を縛りました、鞭で打ちました」では話にならない。アソウ、それがどうしたんだいと言いたくなる。もっと心理を描け、心理を！ わかりました。「ヒシヒシと肌に食い入る縄目に、彼の胸は歓喜でワナワナふるえ」……どうもピンとこない。落第だ。歓喜がいけないのだ。幸福をえがくのは不幸をえがくよりずっとむづかしいという原則がここでも通用する。マゾヒストだって不幸じやないが、その快楽は舌を刺す苦よもぎの味、苦悩と入れ混った快楽である。だから深く、こまかく、描写しやすい。

大部分のサディズム小説が、性者の苦悩を描くのは心理的に自然である以上に、文学的に自然である。サドの「ジュスチヌ」も「ジュスチヌ」の受難という形で——心理描写としてはほとんど見るべきものがないが——かいている。サディストの心理を深く描くのは至難である。ここに、サディズム小説が千偏一律になる原因がある。

だがサディストの幸福を描いてはいけなからぬか。幸福はたして生ぬるいか。また生ぬるくみえたとしても、それが真実だったら正面からぶつかるのが文学ではないか。さらにそれは外界への抵抗という点で、マゾヒズムよりもずっと苛烈にならざるをえない。いままでの道德の概念のなかには、残酷らしさと残酷との区別が入っていないから、サディズムはその点で、他のどの分野よりも複雑なた



かいを強いられている。

私は「感情教育」で、合意の遊戯としてのサディズムを、あからい面から描こうと試みた。「夜光島」では、自由の極限状況におかれたサディストとマゾヒストが、どこまで解放されるか、されなからを描きたかった。どちらの場合も不満足に終わったが、もし読者に生ぬるい印象をあたえたとすれば、それは私の力が足りなかったで、方法のせいではないだろう。

だが、各人各様、自由なゆきかたはあるのだから、もっと盛にサディズム小説が現われてもいいはずだ。ちかごろ他の分野の進出に比して消極的にみえるのは、私だけの感じだろうか。適当な執筆者は足りないどころではない、たくさんいるのだから。たとえば「燐光」の久留木栄氏、「責苦」の竹谷十三氏などは、その作品とともにいつまでも忘れがたい。「錯乱の倫理」の近東規矩也氏、「赤につかれた男」の上村秀久雄氏「縛られた妻以前」の早川新二郎氏、「雌獣の手記」の近見啓氏、「色狼」の児島光氏、その他、数えればきりがなし。画文二刀流の才筆飛田良二氏や、キモノの分野を開拓している白金紅次氏などは現役といえるけれども、「奴隷妻」の片矢薫氏や「妓の影」の泉辰之助氏はどうしてしまったのか。昭和廿七年十二月号の丘正雪氏の「夕映え燕の教訓」などは、サディズムの心理にメスを入れた作品——小説ではないかもしれないが——として、特に異色があって印象に残っている。

だから、作者が少いのではない。作品が少いのだ。本誌で一つの傾向だけを強調するのは反対だが、いいものをかいた人たちが筆を折って沈黙しているのは、いかにも惜しい。

x

口絵で四馬氏がズボンを穿かせはじめたのを、だれよりも歓迎しているのは、おそらく私である。何万人の読者の一人がどう思おうと氏の意図に関係のないことはわかりきっているが、とにかくたのしい。ことに身体を縦に縛るのはスカートではできない。といって裸体はただ煽情的にみえるだけで、実際には曲のないものである。ただズボンはサブリナ式の完全密着型よりも、密着と余情の組み

合せを工夫してほしい。密着の魅力は膝から上にあるので、それ以下はヒタとシワが表情を出す。こういうズボンは通常モデルがないからあまり考えられないようだが、試みに一度つくってみれば、いかに女性の魅力が増すかがわかる。

話は飛ぶが、私はブルジョアの女が嫌いだ。したがって、当人がブルジョアかどうか知らないが、華美なみなりをした女を見ると、魅力が半減する。趣味に思想を持ち込もうとしているのではなく、趣味と思想の混同はいけないことだと思いつつ、どうにもならない私の性格なのである。

だからキツネの襟巻をしたり狭い腰巻みたいなスカートを穿いたハイヒールの女などをみると、どんな八頭身の美人でも軽蔑してしまふ。大体八頭身を美人の標準だと思ひこむのに私は大反対だが、とにかく金や地位や身分を鼻にかけている女を見ると、威圧どころか完全なケイベツしか起らない。その意味では、世間のいわゆるフエミニストと正反対である。

電車のなかで女を抓るいやらしい男のことは小説に書いたとおり私は見たのだが、もう一つ、省線電車でブルジョアの娘に妙な誘いをかけられたことがある。そのときほど私はじぶんの悲しき粗野を感じたことはない。

大塚に住んでいたころだから、もう戦時だったかと思う。最終に近い電車で、客はほとんどいなかった。冬で、私はオーバーの襟を立てて、寒々と脚を組んでいた。みるともなくみると、ドア一つ隔てた向い側の席に若い男女がいるが、娘はしきりにしゃべっているのに青年は俯向き勝ちである。ときどき周囲を気にしてそわそわ見廻している。その風采をみると、男は店員風だが、娘は実に豪奢な

キモノを着ている。女の言葉使いも傲慢である。直観的に私は、主家の娘と使用人のカケオチではあるまいかと空想していた。

すると、ある駅についたとたんに、男は何気ない様子で立ち上って、正にドアの閉じる瞬間に飛び下りてしまった。私はあっけに取られた。逃げたとししか云いようのない動作だった。私の空想は急に活発になった。——いよいよカケオチだ。この二人は恋人同志で、女のほうが積極的だったのだろう。それで思い切って家出ということになり、男は引きずられて蹤いてきたが、途中で恐ろしくなつて逃げ出したにそういない。

女は酔っていることがわかった。「おや」とか何とか云って窓にへばりついていたが、電車が動きだしてしばらくすると、諦めたように元の席に戻った。やがて「ちくしょう！」と皆に聞えるような声で叫んだと思うと、涙がぼろぼろ頬を流れ落ちた。

そこまではよかった。ガラ空きの夜更けの電車の、こよなき見世物だったから。ところが間もなく、こっちが見世物になる破目になった。

ふらふらと、娘は立ち上って歩きだした。どこへゆくのかと見ていると、まっすぐに車内を横切って私の隣りにどんと腰をおろしからだを寄り掛けてきた。

「ねえあんた、あたしと一緒に行こう」

「どこへさ？」

できるだけ冷静に云った。

「どこだっていいじゃないか。この次で降りよう」

「いまの男はどうしたんだね」

「かまやしない、あんな奴、薄情者、どうせはじめから分っていた

んだ。ね、あんたと遊ぼう。金は持ってるよ、ホラ！」

無難作にふところから出してみせたのが、十枚か、もっとあったか、全部百円札だ。私はおどろいた。当時の百円は優に一家を一カ月養うに足りる額である。

「君は親の家から飛び出してきたんだ、ね、凶星だろう。わるいことは云わないから、すぐ家へかえりたまえ。そんな大金をみせびらかせて、もし僕が妙な人間だったらどうする？ 君の言葉に乗るふりをして、どこか暗いところでその金を捲き上げるかもしれないんだぜ。家はどこだ？」

すると娘はじつと私の顔をみつめたが、なんともいえない傲慢な表情で——美しくもあったが——せせら笑った。

「へんなお説教しないでよ。私が大金を持ててなにが悪いのさ。欲しければみんなやるよ。あんたのような男とちがって、私はお金なんか苦勞したことないんだから」

相手が酔っているとわかっていても、この言葉は私を刺戟した。

「お金なんか苦勞したことはない」の一句で、同情めいた気持はすっとんでしまい、逆に激しい反感が湧き起った。そのとき彼女は私の腕を抱きこんで、「さあ、いこう」と強引にひっぱった。吊られて立ち上りかけた私の腋の下から、かかえていた本が三冊、バサリと落ちた。

「なにをするか、ブルジョア女め！」

云った瞬間に、娘の胸を突きとばしていた。しまったと思ったがあとの祭りである。彼女はいとも見事によろけていって、仰向けざまにひっくりかえった。その醜態は、描写しがたい。

この話は妻にも当分内緒にしていた。女に暴力をふるったと思わ

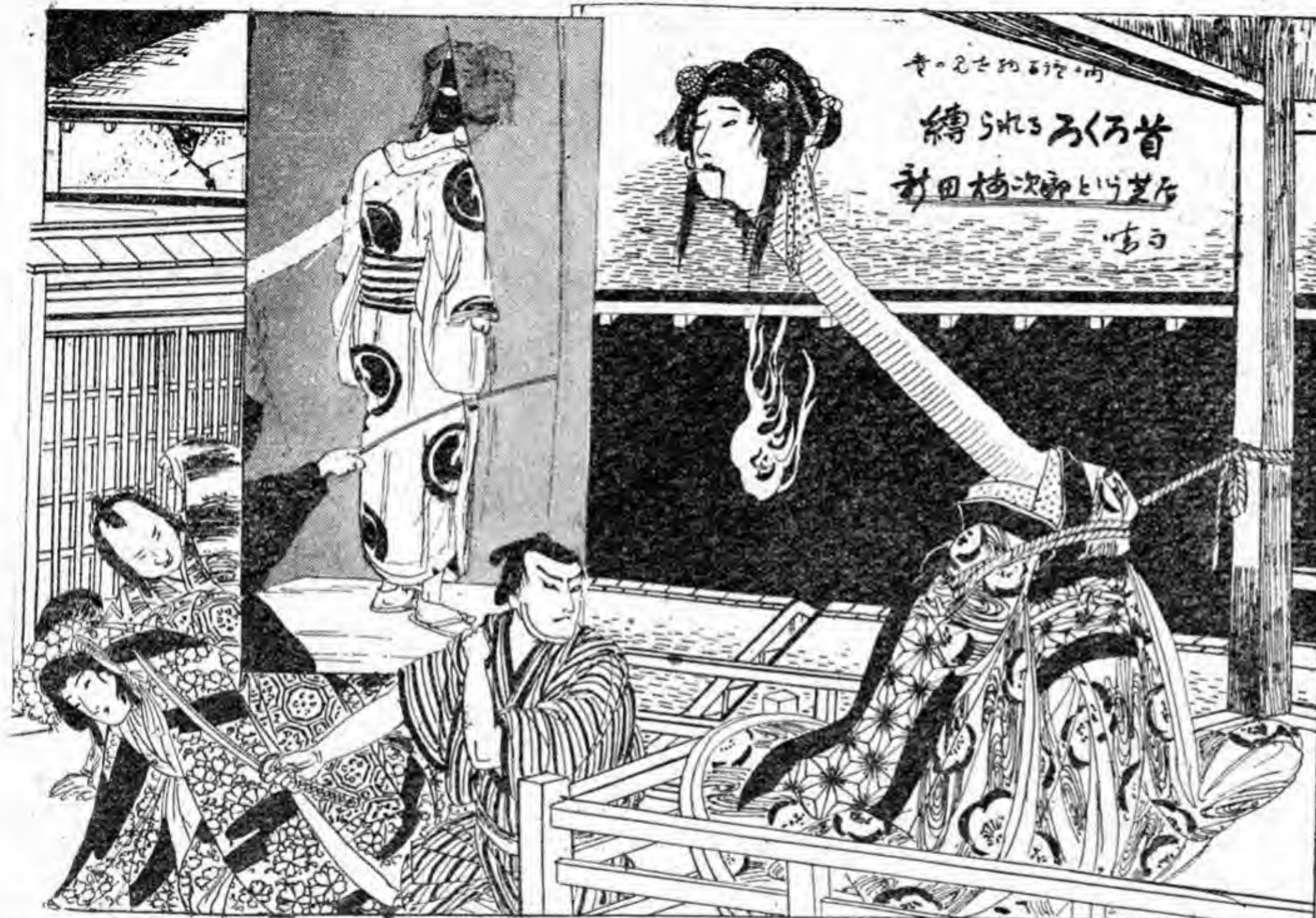
縛られるろくろ首

伊藤 晴雨

滅多に出た事のない狂言で、明治時代に市内の小劇場で演ぜられた「新田梅次郎」という名題の二番目狂言がある。私が見たのは浅草公園の宮戸座で、先代沢村訥子が浪人の新田梅次郎とその妹のおみわの二役を早替りで演じた。おみわが嫉妬に狂って恋人の後を追わんとするのを、柱に縛られて居るうちに一念がろくろ首になって男を追おうという、一寸曲事馬琴の「殺

生石五色島台」(せっしやうせきごしきのしまだい)に似た趣向の脚本であったと覚えている。男の後を追う女を縛っておくど、女の一念が炎々たる焰となって、縛られた女の縄を焼き切り女が縛めから免れて男の後を追うという趣向は此他にもいろいろあって、仮令ば「日高川入相蔵王」(ひだかがわいりあいざくら)安珍清姫芝居で渡の場の前の庄司館で安珍の後を追わんとする清姫が父の庄司の為に桜の木に縛られ乍ら、手が自由にならないので「恨みわび消えなん後も迷うとは浮身の果の烟りかも見よ」という歌を口文字で書いて居る内に一念が炎となって、縛られた清姫の縄を焼き切り、安珍を追いかける、其後の幕がいつも出る日高川の渡し場である。

寺・見・お・み・わ・の・内
縛られるろくろ首
新田梅次郎といふ芝居
あう



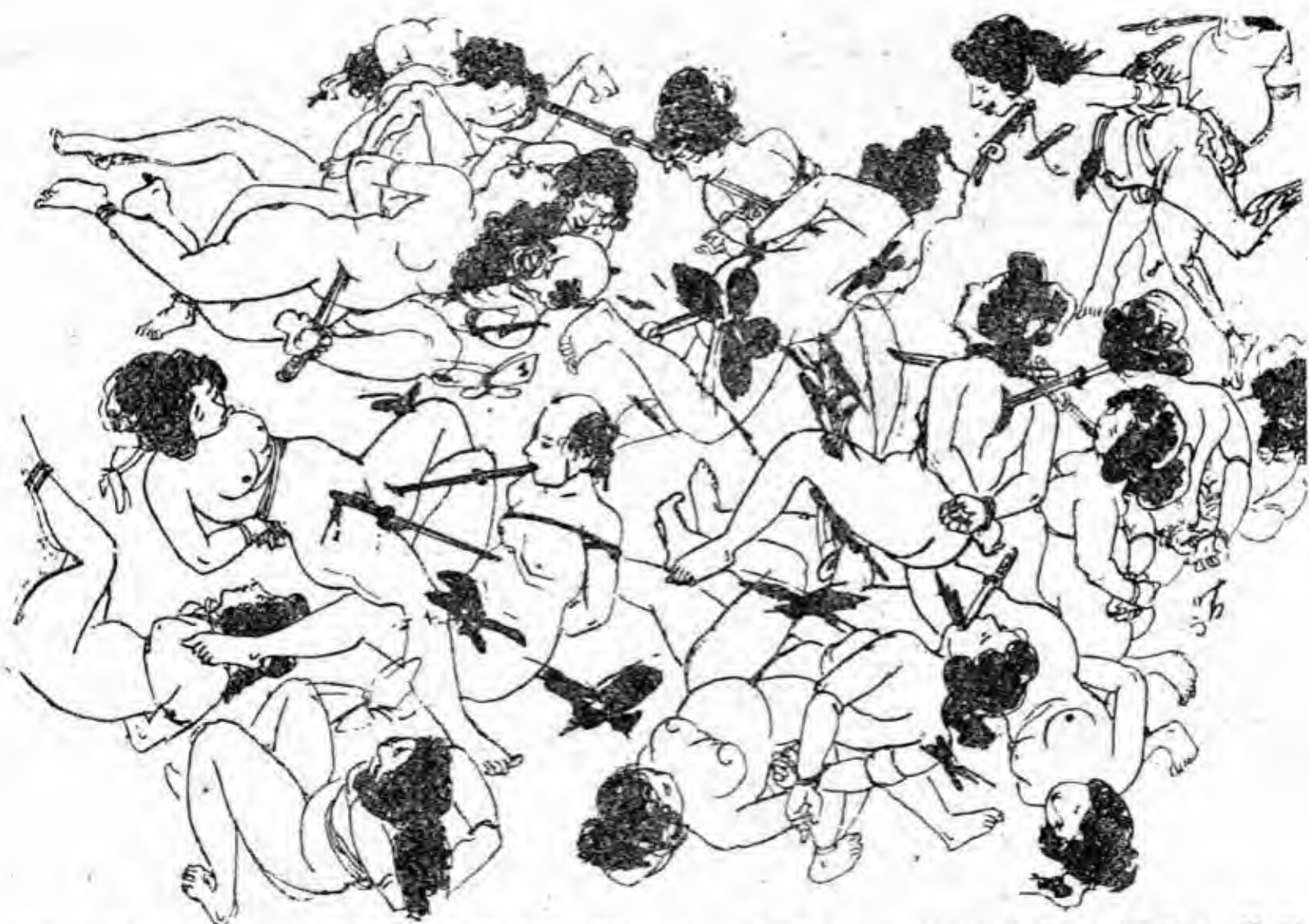
此庄司館とよく似ている新田梅次郎という芝居はろくろ首になって男の後を追うという怪奇的なヤマになっているが、これは芝居其物より見世物に近くろくろ首の趣向の如きは昔縁日で見かけた二人羽織に似た形式のろくろ首を狂言の中に応用したもので、一種の見世物であって、純正な芝居とは云えない。見世物のろくろ首はただ太鼓を叩いて、首が真ッ直に延びるだけであるが、芝居の方はやゝ複雑な方法で首が延びるので凄味がある。女を縛る事は責の一部であると思っ取り入れた迄であります。

新草双紙 血染の毛綱 伊藤 晴雨

(一) 美女楓を十五両の金で買った秤差しの男は村端れの岩窟を住居にしている独者の鍛冶屋に頼んで、残った足の鎖を切って貰った。



(二) 楓の夢はいろいろな残酷な目に遇っている夢になやまされて只ウツトリと男の為すが儘にされて居るより外仕方かなかった。自分は牢の中に入れられ鼠に身体中を噛まれて血塗れになる夢、空腹な夢、そうした夢が続いている。



(三) 一人が大勢の女になり大勢の女の中に男が交っている。そうした夢がそれからそれと続いている内に不図気が附くと自分縛られて居て駕に乗っている様に思われた。

(四) 秤差しという目明しを兼ねた職業は元来農家の繭を買いだしたり、絹糸を買い込むのが本職である。甲州では何時頃から廿四匁の絹糸を金一兩に換算したので、俗にいう「金に糸目をつけない」という言葉は甲州から出たのだという。又別の意味に於ては夙の糸目が甲州に限って廿四本ある(江戸の夙は十九本)から来た事だとも伝えられて居る。武



田信玄が上杉謙信に塩を送られる以前、岩塩を掘ったと伝えられる塩山(えんざん)は富士の松山で此山の麓にある礦泉宿は昔しの遊女屋を兼ねて居た、楓が駕に乗せられて此宿に送られてから身の毛もよだつ様な事が起った。

春の影

北原純子・画



春の暖かさが障子越しにうつる庭木の枝に眠むくなるような昼さがり、パチリパチリと碁石の音が閑かに聞えてく

る。部屋の中は、これはしたり、むツとするような女体の蒸れ香、彩筆はその雰囲気を描いて余すところがない。

北原純子さん推薦の辞

本誌が優秀なる悦唐画家を求めて久しく、こゝに北原純子さんを得たことを読者の皆さまと共に喜びます。好きで描きためた、習作画の数々を見ても、その天分の並々ならぬのを偲ばせると共に、今後本誌を舞台として活躍する前途に大きな期待を持てます。

彼女は美貌の淑やかなお嬢さん、抱く自分の夢を絵筆に托して、甘ったるいタツチの幻想を誌面一杯にふりまいて呉れることでしよう。その外体験記の執筆や座談会の出席画帖の執筆と、盛沢山の公約をして下さっているのです、読者の皆さまの暖かい御支持を彼女に代って願っておきます

(編集子)

絵物語

スチユアデスの夢

畔亭 数久・画

某国首都飛行場

乗客のサーピスを終って一番あとから旅客機を降り立った彼女は、突然現れた憲兵士官にピストルを突きつけられた。

「君、憲兵隊まで来て貰いたい。」

二

一言の取調べもなく石牢に抛り込まれた彼女は、そこで精悍な黒人看護婦から着衣の総てをはぎ取られた。勿論彼女は抵抗し



た。併し女は恐るべき怪力で彼女を赤兎の如く扱い、ほころび一つ作らず肌着から靴下まで脱がせると、泣き叫ぶ彼女を藪のようにたんねんに縛り上げてしまうのだった。

「男の看守が覗きにくるからね、お慈悲にしばらくシユミーズだけ貸しといてやるよ。着物から証拠が出なきや、今度は身体に聞くことになるから覚悟をしておいで。」

三

やがて彼女はレントゲン室に運ばれ異様な台の上に身動きならぬ様に取つけられた。強烈なX線が彼女の肉体を透過して特殊螢光板に彼女の骨格や肉臓の状態をまざまざと映し出した。技師は光線の害を恐れて嚴重な遮光服に身を固めている。

四

「ネリイ、あんな強い光線をかけられて、この人もう赤ちやんが出来ないわよ」
「赤ん坊どころか、命の問題だよ。さあ、浣腸だ。スージイ、その把手を釣にひっかけて頂戴。向う側も。」
「まあ、可哀そうに、この人、ほんとにスパイかしら。きれいな眼してるわ。」
「きれいな顔が恐いのさ。」

五

縛めを解かれても彼女は恥辱に震え、関



節の痛さにしばらくは俯伏せのまゝ身を起す力もなかった。それにも増して憤懣に耐えないのは牒報を容れたケースが便の中からつまみ出された事である。陥穽だ。





「この人、どうなるのでしょうか。」
 「殺してしまうのよ。」
 「まあ、可哀そうに……いつ？」
 「すぐよ。鉄砲の用意してるわ。」
 「でも、この人、まっ裸よ。着物は薬に漬かってるし、着られないのよ。」
 「いゝじゃないの、すぐ死んでしまふんだから。」
 「着物なんか要らないさ。」
 「残酷だわ。ひどいわ。いくらスパイだってー。」
 「とにかく、こゝにはスパイ用の着替えなんて用意してないんだから仕方がない。」



スージイといわれた看護婦は突然スカートをまくり上げて自分のパンティを脱ぎ棄てた。
 「まあ、何してるのよ。」
 「あたしのをあげるわ。せめてこれだけでも……。」
 「まあ驚いた。あんた、そんなものゝ予備を始終持つてるの？」
 「持っていないわ。」
 「じゃ、どうするのよ。」
 「今日一日位、このまゝでいゝわ。」

彼女は革紐で縛られると、小突かれ乍ら建物から戸外へ出た。燦々たる五月の陽が彼女の白い裸身を



照した。銃を肩にした十二人の射手が整列して待っている。広い野原を列を作って山裾の大樹の下へ来ると縄尻を持っている人相の悪い兵士がさゝやいた。

「おい、この穴へお前は埋められるんだぜ。男なら自分で掘



らせるんだがお前は女だからな。俺が掘ってやったんだぜ」

七

士官は彼女の腕をしっかりと縛り直し白紙に真紅のハートを描いた標的を取り出すと太い針で彼女の左の乳房に無

残にぎしツと音を立てて縫いつけた。唇をかんで彼女は痛みをこらえた。「目かくしだ。」

かくて彼女は覆うべき肌をあらわに、覆うべからざる両眼を開かれて、一言の抗弁をも許されず十二挺の銃口の前に立されてしまった。

八

「射テ」

士官の号令を耳にした瞬間、強烈な打撃を胸と腹に受けて彼女は二米ばかりもけし飛ばされた。肺も心臓も吐き出す様な鋭い悲鳴が口を吐いて出た。まつ逆さまに穴の中へ転落した。忽ちおびたどしい土が肉体の上に落ち被さって来た。盛り上った土をローラーが地ならしをする。土の下で彼女の身体が圧しつぶされる……。

「あゝ、くるしい……」

何のこと、それは彼女の一番の夢であった。頭から覆いかぶさった蒲団が……。

(終)

(村崎明案)

告白と手記と体験

懸賞募集

★賞金★

| | | | | |
|-----|---|-------|-----|-----|
| 優秀佳 | 作 | 一篇に付き | 三千円 | 若干篇 |
| | 作 | 一篇に付き | 二千円 | 若干篇 |
| | 作 | 一篇に付き | 一千円 | 若干篇 |

規定

- 一、枚数は一篇十枚から三十枚程度まで。
- 一、必ず未発表のものたること。
- 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記のこと、原稿の返却は致しかねます。
- 一、締切は定めませんが入選作品は最近号に発表します
- 一、賞金は入賞作品発表後一カ月以内に御送りします。

◇ポケット告白記の募集◇

- 一、上記の懸賞とは別に月例通り皆様の真実あふれた告白記を募っておりますから、どしどしお寄せ下さい。
- 一、文章の長短、用紙、書き方等一切御自由です。
- 一、投稿者の本名や其の他一切の個人的秘密に関する事項は厳重に秘匿いたします。誌上への発表は匿名で結構です。御安心してお寄せ下さい。
- 一、誌上へ掲載した分は掲載後相当謝礼を差し上げます
- 一、原稿は一切御返戻申し上げかねますが、係よりの連絡は出来る限り差し上げます。
- 一、原稿の御送付には開封の上第五種郵便百瓦迄八円にて御願ひします。

(編集部)

れるのがいやだったから。たしかに羞かしい。というよりも愚かな行為だった。私はそれほど傲慢な女に怒りをかんずるのである。

だからズボンにしても、筋目の通ったおしゃれズボンには魅力を感じない。むしろバスの車掌の制服などに惹かれる。それは女車掌のはたらく生活と結びついて、生き生きした、フレッシュな美を感じさせる。女工さんの場合もそうだ。六頭身だろうと七頭身だろうと、みんな美人にみえてくるからふしぎである。少くともおなじ女性がキモノ、スカート、おしゃれズボン、作業ズボンをまとった場合、作業ズボンのときがいちばん魅力がある。

それが汚れたズボンとなると、そろそろイデオロギイをはなれ

て怪しい趣味の世界に入ってくる。だからその場合は私の服装論は関係がない。私は興奮し、それをタネにして遊びたくなる。じつに困った性分だが、またじつに容易に平和に実現できるのだから、こんな楽しいことはない。

まだ話したいことはあるけれども、これ以上大切な誌面を費すことはゆるされない。きいたふうなことを書き散らしたについては、定めし異論も批評もあることと思う。甘受します。



懸賞〔告白と手記と体験〕入選

見世物とサデイズム

土屋 淑 人

よく、盛場の空地で薄汚れた天幕を張りめぐらして、通りに面した道端へ、赤や青の毒々しいのぼりを幾本も建て、あるのを見受けます。半裸の娘が獺猛そうな、ゴリラに抱かれて、悲鳴を上げているといったものや、首だけが美しい少女で、首から下は大蛇という様な、グロテスクな絵看板が所狭しとばかり掲げられてあり、木戸口では余り人相のよくない男や、婆さんが、大声をはり上げて、盛んに客寄せをやっております。

その内側からは、「ドンドン、グワン、グワン」と、太鼓やら銅鑼やらで大変な囃子、その囃子に混って、か細い女の声が、「アーイ」とか、「エイヤッ」とか聞えてくると私は、もう居ても立ってもいられなくなってしまい、夢中で財

布の口を開くと、見世物小屋の中へ、吸込まれてしまったものです。

常日頃、私は唯見世物という字句や、言葉を見たり又は耳にするだけでも、なんとなく甘酸っぱいような妖しい雰囲気の中へおし包まれてしまうのです。

委しいことは知りませんが、両国とか、讃岐の金刀比羅あたりへ、小屋掛けして「娘軽業」や「因果物」等を、一定の料金を取って大衆に観せた、所謂見世物というものの初りは江戸時代も、ずっと末期頃からではないかと思ひます。

当時は風紀云々、というような事も、左程やかましくなかったでしょうから、相当面白いものも観られたことゝ想像されますが、其の頃のことは斯道のベテラン伊藤晴雨先生や、



野村胡堂先生等から、既に度々紹介されていますので、読者の皆様も御想像がつくことと思います。

これは終戦後の、たしか昭和二十四、五年頃だったと、おぼえています。大阪の新世界、大山館（戦前在った映画館）の焼跡へ小屋掛けして、「女ターザン」と「不死身男」といふ見出しで演っているのを観たことがあります。女ターザンと称する、三十がっこの女が、懷中時計に付けてある位の鎖を自分の鼻の穴から咽喉の方へ通して、更に、その先端を口から出して、鼻と口とにのぞいている鎖の両端を交互に引張って見せるというようなことや、二尺程の生きた蛇を、これも同じように、鼻の穴から口へ通して、最後に蛇の首を喰い切って生血を吸うといった、グロテスクなものを演りました。

もう一人の「不死身男」の方は左の眼へ大きな眼帯をしておりましたが、昔の穴のあいた五銭白銅貨へ三尺位の細い紐を通して結ん、紐の先端をかたわらのバケツの柄にしばりつけてから、約二リットルばかりの水を入れます。

用意が出来ると、例の眼帯をとり外し（彼の左の眼は相当患んでおりました）手早く左の眼の上下を、押展げて、さっきの五銭白銅貨を眼の中へ挿入してしまします。

そして眼の上下からの圧力によって、水二リットル入りの、バケツを、釣り上げるといふ見世物でしたが



此れ等は何れも、可成り珍らしい部類に入る見世物で、奇クの二月号で鼻責めのことを書いておられた古田吉郎氏や眼帯マニアの、菅野朔郎氏あたりが御覧になれば、大変興味深いものがあつたろうと思います。

さて処變って、中国の見世物ともなれば、その惨酷さ、又は演ずる芸の悪どさに於て、言語に絶するものがあります。

私が日華事變に従軍中、あちらで観た見世物のことを、御紹介しようと思いますが、その前に一寸私が未だ中学生だった頃、祖父から聞かされた、中国の恐ろしいお話をしておき



ましよう。

大正十二、三年頃聞いた話ですが、当時の中国は打ち続く政治的混乱と、貧富の差の著るしさから、下層街へゆくと、日夜、街のあちこちで、人の命が金で取引されており、又赤ん坊を二人も三人も籠に入れて、天秤棒で担いで売り歩いて居る風景もさして珍らしくないということでした。

これらは、不義の子の処置に困ったのを貰ったり、捨子をひらったり、或は良家の綺麗そうな女の子を盗んだりなどして集めた子供達を、子無しの家庭や、その他いろんな目的のために子供の欲しい人々へそれぞれ売捌かれてゆくのです。

買われた先が普通の家庭なら、その子達は先ず幸福といわねばなりません、殆んどの場合、これらの憐れな子供達が大量に売り込まれてゆく先は、世界中で中国だけしかないといわれる、聞くも恐ろしい「畸形児製造処」だそうです。

此処では、こうして手に入れた男女の赤ん坊から十二、三才迄の子供を、その容貌、年齢、性別、その他、それぞれの身体条件に依り、最も惨酷な手段で、不自然極まる曲芸を仕込んだり、専門の外科医が居て、子供の身体各部を切り取ったり縫い付けたりして、兎に角此の世のものとは思えぬような、一箇の生きた化物を造り上げて、これを曲芸団や見世物師に、高額に売りつけるというのですが私は祖父から此の話を聞いた其の夜、大変興奮して仲々眠れなかったことを覚えております。

申し遅れましたが、私は相当なサディストなのですけれど

も、自分から相手に直接に触れて、サディスティックな行いをするということには少しも興味はなく、唯そのような話を聞いた、書物を読んだり、又は絵画を見た場合とかで、特に見世物を観たときが一番胸の高鳴りを覚えるようです。

だから従軍中（私の所属した部隊は岡山のA部隊といって当時北支では泣く子もだまるといわれた程勇名を轟かせたものです）幾度か此処へ書けないような残虐を経験しましたけれども、そんなときは、すぐ後で唯味気ない無惨さを感じるだけで、見世物を観たときのような、あの甘ったるい心の奥底からのうずきが起きてこないのです。

大分、話が横途へ外れましたが、それでは私が中国で観た珍しい見世物のお話を致しましょう。

昭和十三年五月の初め頃だったと思いますが、徐州攻撃にうつる直前、台児荘の戦いで、私は右手に負傷してしまっていて他の重軽傷者と共に後方の野戦病院へ送られました。

ところが其の頃、大陸の全戦線に亘って激戦が続いた為め何処の野戦病院も患者が溢れてどうにもなりませんので、私の様な比較的軽傷で自分で立ちふるまいの出来る者だけが、汽車で、更に後方の済南病院へ送られてゆきました。

駅から済南病院まで運ばれる途中、トラック上から見た市街の様子は実に素晴らしいものでした。事変中とはいえ、占領後既に幾月かを経過した済南の街は、全く生氣を取戻して大変な賑いでした。

最前線に於て、弾丸の下ばかり潜っていた私の眼に映った



エキゾチックな市街のたたずまいが、よく絵葉書等で見る、上海の繁華街でも通っているような錯覚を起すのでした。

そして此の賑やかな大通りを、一歩横に外れた裏街では、きつと恐ろしい殺人や、人身の売買等が行われているに相違ない。又私の求めるような不可思議な見世物も、演っていることだろう、出来ることなら、こゝに滞在在中に、そんな場面に行当り度いものだ、手の傷の痛みも忘れて、次から次へいろんな想像を巡らせておりました。

ところが此の病院で二週間程、治療を受けただけで突然、私は病状の関係で内地送還と決定されてしまいました。

あゝ、あれ程求めていた、中国の猟奇的場面や見世物を、遂に見すじまいで帰国してしまうのかと、がっかりしておりましたところ、はからずも、病院で我々の慰安の意味や看護兵達の無聊を慰さめるため、見世物、といっても、むしろ大道芸人のようなものを呼んできて、病棟前の広場で観せてくれました。私達が、ぐるりと大きな輪を造っているその中央に立って、中国語で何やら早口にしゃべり乍ら、銅羅をグワン打鳴らしている黒の中国服を着流している五十才前位の男、男の少し後へ、アンペラを敷いてその上で蛇味線を弾いている白髪の老婆、その横で膝の上へ大切そうに丸く包んだ二尺ばかりの布袋を抱えている額の前髪が可愛い十三、四才の少女、これだけが此の一行の顔ぶれなのです。

よく注意して見ると、少女の膝の上の布袋が、ときどき、グニャリ、グニャリ、動いているようでした。男は先ず、銅

羅を、アンペラの上に置きますと足元の抜味の青龍力（刃渡り尺二寸位）を、とってきて、大口を開くと共に、刃先をぐっと口の中へ差込み初めました。

最初の内は至って無造作な態度で演っておりましたが、刃先が咽喉から更に胃袋へ達する頃から、急に苦しそうな表情となり、多量の涎を流し、七八寸から約一尺位迄飲み込んだときはもう、極度の苦痛に身をよじらせ乍ら頻りに嘔吐を催おしますので、とても正視出来ませんでした。

それが終ると、次に男は少女が持っていた例の布袋を提げてきて、くるくると回転させ乍ら、上へ投げては宙どりをします。

何か珍らしい生物が入れてあるに相違ない、一時も早く、それを見せてくれないものかと気持が、いらいらして仕方がありません。やがて男は、袋の口の細い紐を解いて、中へ片手を入れて、ごそごそやっておりますが、徐々に袋の中を下へ押展げてゆきます………。

アッ！、意外、そこには立派に生きている若い男の首だけが、こちらを向いて笑っているではありませんか、その不気味さに一瞬、見物席は静かになったようでした。

全く考えも及ばないことです、僅か二尺足らずの袋の中へどうして大人の身体（否一寸法師の身体さえも）入りましょう？ しかもこれだけの首を養う為めには、どうしても胴体は必要です、そうとすれば袋の中へ残っている一尺余りのものが胴体なのだろうか？……

これだ！ 私は、はたと自分の膝を打ちました。

そうです、少年の頃、祖父から聞かされた話、中国には畸形児製造処が有るということをお思い出しました。おそらく彼は、未だ赤ん坊のとき、手足をその付根より切断され、胴体を特殊な箱に詰められ、首だけを外に出して胴体の発育を強度に抑制されつゝ幾年かを過してきたことでしょう。

それにしても、現在彼は何を考え、又何を望んでいるのでしょうか、案外、マゾヒスティックな境地に在って、大変満足しているのかも知れません。見物している私達のすぐ目の前を、袋ごと首を持って順々に一わたり見せてから、元どおり袋に納めて口を結えてアンペラの上へ置くと、今度は少女を呼び出しました。

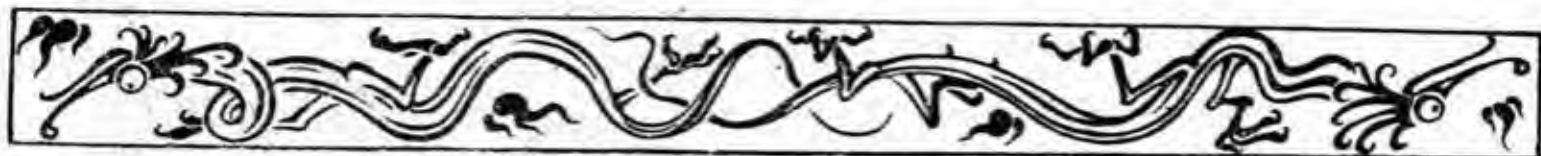
彼女は水色の上衣を着け、下は赤紫色のステテコのようなズボン、そしてそのズボンの裾から痛々しい程細い足首を見せて、黒縹子の沓を履いております。

身軽に前後へ、とんぼ返りをしたり、両股を真一文字に開いて地面へびったりついたり、上体を著るしく後へ曲げて股の間から前へ顔を出すというような、所謂、アクロバティックな芸を暫くのあいだ演っておりますが、不自然な体位を



とるので、短い上衣は、まくれ、ズボンはずり下って、腹部特に薄黒いくぼみをもった、可愛らしい臍が露出されてしまっているのは、とても心をひかれました。

やがて彼女が、地面へ両膝を折って、仰向に身を反らし、額と手の平で上体を支えて、丁度逆エビの体位をとると、件の男は、さも踏台か何かの上へでも上るように彼女の腹の上へ沓のまゝ立つのです。



一方の足は胸の上へ、もう一方の足は下腹部の上へ……、十六、七貫もあると思われる男の下で、未だ十五才に満たぬ少女は、苦しさで顔を真紅にし乍ら力んでおります。

更に男は、情容赦なく、腹の上で交互に足踏みを初め、彼女の身体をもくくちやにするのです。男の重みに堪え兼ねて何時の間にか彼女の腰も背も地面についてしまい、顔は横へねじ向けられ、此の世のものとは思えぬ表情で身悶えしています。

見物の兵隊達は皆、此の惨酷さに眉をひそめていたようですが、私はこれを観ながら可愛想と思う反面、もっともっと酷いこととして責めてやれと、心の奥で叫んでいたのです。これが終ると、彼女を抱き起し、そこへ立たせておいて男は、三尺程の棒と細引を持ち出してきて、彼女の両腕を後へ廻し腰の上のあたりへ棒を横にして当てがい、少し間隔をとって左右の手首を棒へ完全に縛りつけてしまいました。

彼女は、次にどのような責苦が待ち受けているかを知っているのでしょうか、既に観念の眼を閉じています。

男は彼女の前側から頭越しに手を伸ばすと件の棒を握み、大きく後へ迂回させ乍ら上へ引き上げます。彼女は逆手責の痛さに歯を喰いしばっておりましたが、頭の後まで上げられたとき、遂に逆手の限界がきたのでしょうか。顔面は蒼白となり、前蹲みに腰を折ってしまい両眼からは涙をぼろぼろと流しているのです。

然し猶も男はその手を緩めません。とうとう彼女の頭近く

まで引き上げてしまいました。

アッ！、脱臼！。

そうです、完全なる脱臼です。

彼女の肩からは、二本の腕が血管と筋肉と皮膚だけに依って連結されていることだろう。此の男の前には不可能という文字は通用しないのかとさえ思われます。

此の少女がこれを仕込めるためには、今日迄に幾度となく脱臼の苦痛を繰り返されたことであろうなどと、次から次へと回想しておりましたところ、急に私は異常な興奮をおぼえ体内のサディズムが何時もとは違う早さで身体中を駆け巡りはじめました。

そして、フラフラッ、と眩暈を感じると共に、自分が今、野外に居るということも、周囲に多くの兵隊達が居るということも忘れ果て、遂に、Ejaculation に達してしまいました。あまりにも強い、サディスチックな刺激に抗しきれなかったのです。

なんというお恥かしいことでしょう、私は、これまでに、数多くの見世物を観てきましたけれども、それを只観ているだけで、こゝまでに達したのは、これが最初の経験でした。其の儘立って居られなくなった私は、そっと見物席を、ぬけ出して、自分の病棟の方へ急ぐのでした。

(杉原虹児画)

(終)



ア ブ ホ ー ト 談 義

狩 井 麗 作

たまの日曜日、人を訪問する予定もない閑な時には、ふと押入れの大型トランクを引出して中を開いてみます。このトランクの中に私のコレクションが、ぎっしりつまっているわけです。勿論平常の時は、鍵をかけてあるしまだ私以外の人に見せた事もないのです。戦前のたあい、ない切抜きや、雑端なコレクションは戦災で焼却。現在のは、昭和二十四年頃から以後のものばかりです。一応内容の目録を御紹介致しますと。アルバム十二冊のアブホートです。枚数にして三百枚。他にバラ写真が百二十枚あります。この中で他から

求めたもの——之は主に通信販売による——は割に少く百枚程度、他は皆、私自身が撮影し、現像し、焼付けたものです。ただ残念なことには、前にも書いていますように、全くのアブ一年生が、心躍らせ失敗を重ねて作成したものばかりなので、系統立ったコレクションにはなっていませんし、又、写真技術もようやく現在中学生程度になった位です。奇ク誌上にあるような素晴らしい仕上げに至らない写真が多いことです。しかしこの拙劣なアブホートの中には、私自身汲めどもつきぬ感興があるのは、他の大方の諸兄姉と同じ

だろうと思います。このアルバムの中には、勿論奇ク発売の写真も大部収録しています。その対照の妖しさも亦格別です。奇ク発売のアブホートの推移、或いはモデル嬢の変化や素晴らしい雰囲気の出た写真等、私の作品と並べて貼る時、かえって面白い変化が出て、一層楽しいものとなるのです。

このような写真を私の部屋一杯に並べて、一枚一枚親しく手に取って見る事は、何と秘かな愉楽でしょう。心に抑圧された、アブ的欲情が何時しか昇華されて行きます。ここに、アブホート・コレクションの功德もある

のではないかと思います。そして、之は又、私自身の青春遍歴の第一歩ですし、哀しい想い出や、華やかな失敗の人生記録でもあるわけです。趣味と云うには、あまりに内部的なものでありますし、又人目をはばかるものではあります。私自身、今は、アブニストであることを喜びとし、一生これらの失敗や喜びを重ねて、コレクションを続けて行きたいと思っているのです。今日も亦皆さんに、私のコレクションの中から、発表して支障ない写真をえらび、資料としながら話を続けて行きますよう。

前に、ヌードスタジオでの撮影について話をしていました。誰か適当なモデルを選んで縛り写真をとらせて貰えるように、彼女と交渉を進める話です。根気と礼儀が不可欠である事を説明していました。確かにその通りです。特に現在のように廻転の早い世相では、メカニズム化された、ヌードスタジオで個人的交渉を持つ事は仲々容易ではありません。亦よし折角努力して仲良くなったにしても、ヌードモデルは、長くて一年、殆んど、半年以内に交替して行きますし、愛情の発展を伴わない、私の契約等は、スタジオを彼女が去ってしまったら、後は断ち切られるのが普通で

す。モデルさん達も、この社会から足を洗えば、あとは、プライベートな生活を持ちますし、その時迄に真にマゾ化している等の事は私の至らぬせいか、まだ一人も居ません。このような悪条件の中で、縛り写真を撮そうとするのですから、仲々大変です。やはり、性根からのアブニストでないと、こんな努力をしないと考えられます。一種の宿命的な徒労でもありましよう。

私が親しくなったモデル。K子として置きましょう。高校を卒業したばかり、とか言っていました。完全に美しい肢体の持主でした。割に大柄で適当にボリュームがあり、殊に処女の白くすべくした肌が清潔でした。私が、アブホートを撮そうと心がけて、間もない頃、或るスタジオで出合ったのです。運が良かったと言えそうなんです。私の求める気持が、常時強かったので、一寸したきっかけから、縛るようになった点、やはり求める強さが、道を開拓して行くと云えましよう。

私が奇クに初めて写真を発表しました昨年七月号所載のものを御存じでしたら、そのモデルの一人がK子です。最初マスクを持ち出して、白い清潔なマスクを当てて呉れるよう

頼んだのがきっかけでした。K子はふしぎそうにしていました。が、「マスクかけると、とっても魅力的だ」と真顔で頼み、「僕はマスクの清潔さが好きだ」と笑って見せると、案外快よく承知してくれました。二三枚撮し、間髪を入れず、眼帯を持ち出しました。私の用意が良いのに驚いていましたが、別に厭がらずに眼帯もはめて呉れたのです。丁度三五ミリカメラを持っていたので、「さあ、自分でいいように付けてごらん」と自由にまかせたまま、二米位離れて、彼女が、マスクを当て、眼帯をやり、く、そうに、それでいて興味を持って、はめている肢体を、四五枚、速写しました。ライカ版の威力は、こんな場合、完全に有意義です。全裸の美女が、真白いマスクと眼帯をはめてゆくポーズが、自然に撮せたわけです。この写真は、今でも、微笑ましく眺められます。私のアブホート撮影の第一歩だったので。そんな自然な遊びみたいな事から、K子の心も打ちとけて来たわけです。そしてこの方法は其後、他のモデルに対しても実行しました。マスクをはめたK子に、手を背後で組んでポーズさせました。そして、ハンカチで簡単に手首を縛ったのです。しかし、その日は、一応、それだけ

で撮影を終りました。後でカメラの整理をしながらK子に

「縛らせろなんて、変なこと言う人なんかあるかい？」

とたずねたら、思いがけなく、

「ええ、この前だったかしら、無理に縛られちゃって、こりこりしたわ」

との返事、之は困ったと思いつつも

「どんな風に縛られたの？」

と聞いてみると

「柱に逆立ちをさせて、足首や胴を柱に、くぐられ、十分間位も撮しているの、血が頭に下って、とっても苦しかったので、それ以後はその人断わっちゃうの」

との事。私以上に凄惨な奴がいるのに驚いたけれど、それじゃ全然駄目だと思った。そして

「そんなひどい事を初めっからやるなんて常識のない奴だな、断るのは当然だよ」

と大いに非難して話をしました。こんな打



(写真 A)

明け話から二人は、割に親しくなつたと思われまふ。帰途、K子の話から、彼女は、案外融通性があり、縛られたりすることに、そうひどい反撥をしないで許容する性質だと分つて、K子目的に通おうと心に決めたのです。

二三日して又スタジオに行きました。先客がありました。他のモデルを使わず、K子待ちました。そして細い白紐を持ち出して「今日は軽い縛り写真をとりたいと思うんだよ、簡単なポーズをして頂戴」

と初めから話をはっきり持ち出しました。そして彼女が、一寸心配そうにしたので「別に、ひどい事は絶対しないし、縛ること

か目的じゃなくて、君の魅力を引き立たせるためさ。それに、今日はプレゼントとしてストッキング持ってきたから、よかったら、はいてとらせてくれない」

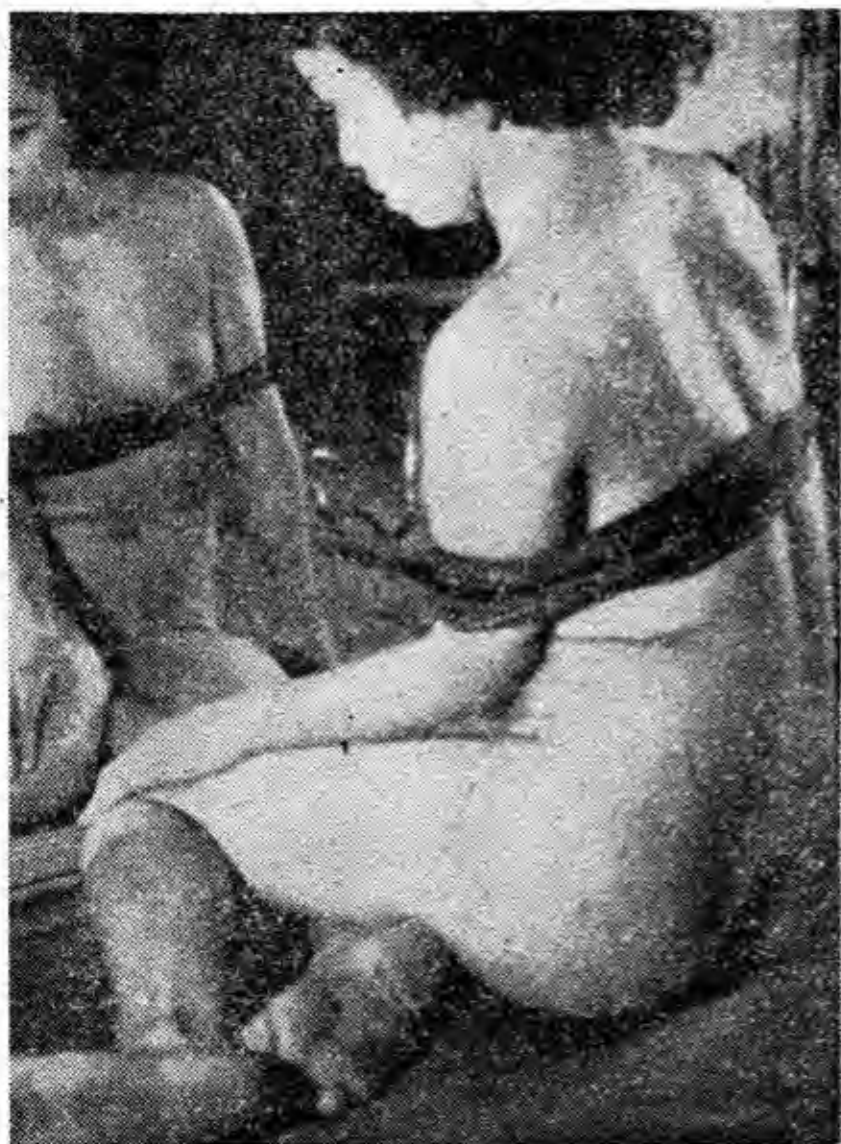
と新しいストッキングを出したのです。ストッキングは女性の必需品であり、やはり高価なぜいたく品です。

「向うのだから大きすぎるようだけど、君の長い足だったらぴったりと思ったので」

とつけ加え、無理にはかせました。K子だって、やはり欲しい品です。私が前後二三回の撮影で割に礼儀正しく、野心なんか持つ人間と思わなかったものでしょう、すなおに受

(写真 B)





(写真 C)

けて呉れた時は、全く汗びっしょりで胸をな
でおろしました。【写真A】が後手とストッ
キングをつけたものです。【写真B】は布紐
を全身に、キリキリと巻いた立ちポーズで、
この紐による肢体のアクセントは、K子のボ
リュームのあるヌードを一層美しく、ひき立
たせました。ただ残念なのは、ライトをつけ
忘れたため、やや露出不足となった事です。
しかし、縛り写真の美しさが、やっと達成さ
れた思いで、すっかり嬉しくなり何枚も撮し
ました。(註、下半身は編集部にてカットし

ました。)

其後四五回通ううちに、色々の緊縛へと進
んで行きました。しかし、スタジオの中では
どうしても、マスター達に気兼ねするし、他
のモデルや客の手前もあって、どうかして他
の場所で撮りたいと思うようになるのは当然
です。その前に、それを切り出すには、K子
に充分緊縛への理解と、そうされる事に馴ら
していなくては いけません。その為、私は
スタジオの中の大鏡を利用しました。K子の
身体を簡単に縛り、その姿を鏡に映して、彼

女に見せるのです。

初めは厭がる様子を
示しますが、珍ら
しい自分の姿と、や
はり何かしらないけ
ど妖しい魅力が感じ
られるらしく、次第
に真剣に鏡の中の自
分の縛られた肢体に
関心を持つようにな
ります。そうした場
合、私自身も、例え
ば、奇ク発売の割に
簡単な、そして美し

い緊縛の写真を見せて、どんなに、美しい雰
囲気が出るかを説明してやるわけです。K子
の場合は、まだ奇ク写真のない頃ですので、
絵を見せました。そして鏡に映った姿をカメ
ラに収めました。

【写真C・D・E】が、そうです。細い博多
織の紐で腕をギュッと縛り、初めは坐ったま
ま、あとで横に転がしてみました。坐った時
の縛りは、先ず普通の感じですが、一度横臥
させると、今迄と違い一度に妖しい雰囲気が出
ます。之はうつす方にもそうですが、縛ら
れた本人が、多分にそう感じる事が分りました。
これは一つの発見でした。この横に転が
すと云う事はそのモデルの平衡感覚が失われ
自由がひどく奪われることとなりますし、何
となく、悩ましい不自然さをも、かもし出す
と思われまゝ。写真の表情を知らんになれば
坐位肢体と横臥肢体の表情の変化がお分りにな
ると思います。

K子を撮影したのは其後三回位です。半月
位の間に、やっと緊縛写真に馴れる程度にな
り、私自身も前編の写真で示しましたような
二重撮影の失敗から脱しました。そのうち、
私の切なる希望がやっと実現しました。市内
のホテルの一室に、K子の公休日に落合い、



(写真D)

二時間の間、不自由なライト条件の下ではありましたが、思う存分撮影致しました。その写真の一部が奇ク二十九年九月号発表の写真の中で一部カットされて掲載されています。スタジオを離れての撮影になりますと、やはり、極限の写真がとりたくて、無理なポーズになりますので、ここには発表をさし控えておきましょう。折を見まして、それらをカットし直して発表させて頂きたいと思ひます。

このようにして折角、親しくなったK子も、一身上の都合で、モデルをやめ故郷に帰りましたので、とうとう、それなりに別れてしまいました。まことに残念至極ですが、深追いは、こんな場合、絶対に礼儀に反します。私もいさぎよくあきらめました。

次に半年位した後で、やはり市内の或るスタジオで別のモデルと親しくなる事が出来ました。K子程の美貌ではありませんし、身長も少し落ちますが、ボリニームの点と若々しさでは、前者と同格でした。このモデルについてもやはり、長い期間かゝって、緊縛の美しさへ馴らして行つたのです。しかし、K子と同じく、その珍らしさに興味を持つ程度で奇ク専属モデル嬢のように、本格的にマゾ化して行くと言うことは殆んどありませんでした。これは普通の素人の娘さんでは、仲々私達アブニストの夢を満足させて呉れる程マゾヒズム化しない事を示しました。う。だから、私達カメラマニアは一寸縛らせて呉れたからと言ってその女性が、すぐに、サジストの

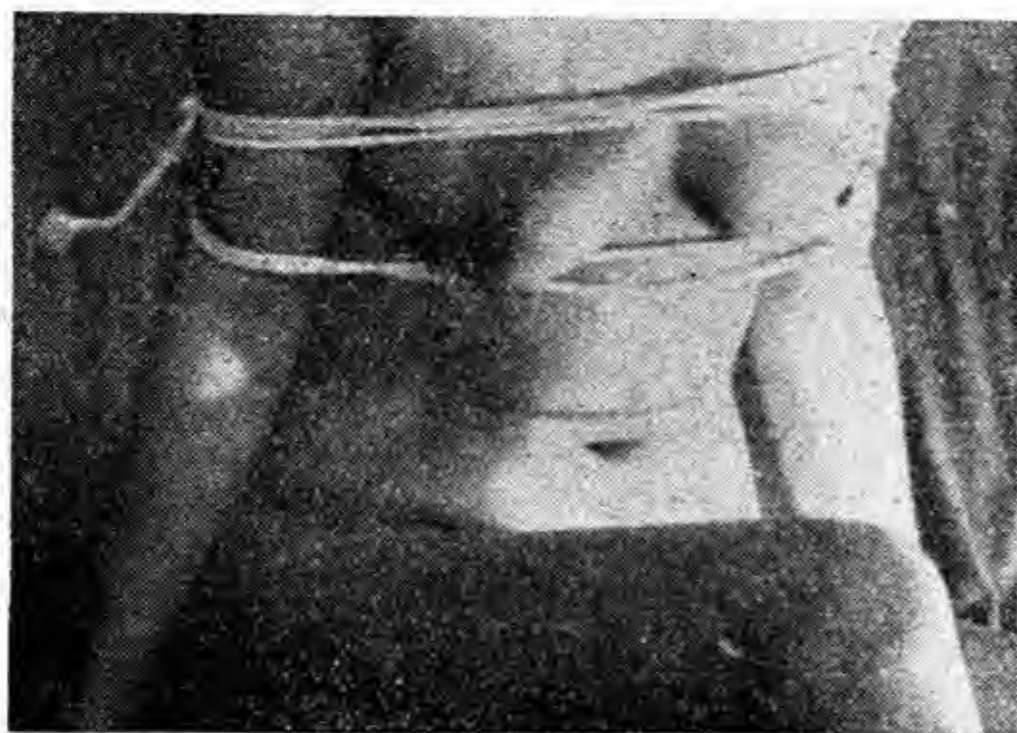


(写真E)

対象として、縛ってもよろしいと云うことにはならない、と云う事を充分に反省し慎しめていなくてはならないと思ひます。この点、奇ク誌上で活躍の、宝塚二三夫氏の「僕の責め方」で、十人以上の娘さんが、次々に、氏の責めに適するよう、マゾ化されて行く作品等を読むと、うらやましい、と感じると同時に、私の体験からは、現実性が薄いように考えられるのです。この点、ベテラン箕田氏に

御意見を伺いたいと思うものです。苦し、宝塚氏に、女性を自由にマゾ化出来る特殊技術がありましたら、是非その点を発表して頂きたいと願っています。

さて、次に、乳房の縛りについて、説明致したいと思います。ヒップを縛るのは、ヒップマニヤの私にとって最上の希望ですが、ヒ



(写真 F)

ップは、どうしても、女性のデリケートな部分を包含してしまいますので、やはり、初めからそこへ近づく事は、エロティックな誤解を受けざるを得ません。残念な事は、私自身、このような縛りを行うのは、単なるセックス的な興味から、やっているのではなく、性器等は殆んど問題外なのです。それにもかかわらず一般及び、モデル嬢すら、私が、あたかも、その場所を明らかにしたがつて、不自然なポーズを取らせるのではないかと、誤解をしてしまう事です。勿論、ヒップを、ぐっと明瞭に、ぬき出してしまいう時、必然的に、隠された部分が現われるのを、おしかく事は出来ません。しかし、それは、あくまで副次的なものに過ぎないのです。

以上のような事から、モデルにヒップ縛り殊に、私が九月号に発表し編集部で、カットされました股間縛り等は、とても、初めから求める方が、無理なのです。そこで、それに代る縛り、そして、サジストの性癖を或程度満たして呉れるのは、乳房の上からの縛りなのです。私も、この方法で、美しい乳房を、更に美しく、或時には、痛々しい程にさえ責めてみました。【写真 F・G・H】がそれです。



(写真 G)

【F】は、乳首を避けて、そのふくよかな、まるみを押し出すようにして縛って見たものです。二度目に親しくなったモデルの乳は、このように、実に若々しく、張りつつやがあ

(写真 H)



り素晴らしいものでした。彼女自身、裸身になった時、さも、いとしいように両手で、かかえるように、おおっているのを見ても、彼女が乳房を誇りにしていた事が分ります。

【G】の写真では、乳房の真上、乳首の上を白い紐で、ぐっと縛って見たものです。この写真は、部分引伸しをする前の全身ですから表情も、見て頂けると思います。その上、鏡を利用してのポーズで、面白いと思います。あきらめたようで、それでいて挑発して来そうな表情、特に、肢体の腰のひねった調子等

私としても好きな一枚です。乳首の上を縛る事は、或程度強く縛ってもいいようですし、モデルの感覚では、興奮さえ覚えるようでした。

次の【H】に移りましょう。これは前二枚と同じ種類のものです。が、乳房のふくらみに対する、縄の効果と、夢みるような、顔の表情が、特に印象的では

ないでしょうか。このように、乳房を主体にした縛りでしたら、一応モデルさんと親しくなれば、誰にも、実行出来ると思いますし、特別に、エロティックにも見られません。読者諸氏に、おすすり出来ると思います。

このモデルも、やはり六ヶ月位で、別れました。個別的撮影は、二回致しました。その折二回目、撮影後のフィルム現像の折、手違いから、全部駄目にしてしまったのは、かえす、がえすも残念至極でした。写真撮影から仕上げまで、誰にも見せられず一人で処理

するのは、仲々大変でしたが、やっと最近では、失敗をせずに、やる事が出来るようになりました。

さて、あまり、モデル遍歴ばかりでは、読者諸兄姉も、御たいくつと思いますので、私のとって、おきの体験談と内外不出の写真を目にかけたいと思います。

ヌードスタジオで見出すモデル嬢には、どうしても、職業意識が脱け切らず、こちらが深入りをしない限り、便利な面が大きいのですが、私のように、本質的アブニストに取っては、金で処理するモデルでは、どうしても緊縛責めの極致に迄、達するわけには行きません。いきおい、本質的なマゾ女性を探すより以外に方法はないわけです。しかし、広告を出して探すわけにゆかず、さればと云って何処を探すと云うあてもないのです。気ばかり焦っても目的は達せず、やはり永い忍耐の時間が必要なわけでしょう。

昭和二十八年の夏、偶然に出会った或る婦人こそ、私の求めていた対象でした。こちらには、Aと云う有名な火山があり、活火山として火口からは、物凄い噴煙が出ています。シーズン中の或る朝早く、この火口壁で、出会ったのがSと云う婦人です。彼女が持って

いる短い縄の切れ端から、思いがけない会話へと、そして彼女が縛られることを、私が縛る興味を、お互に抱いている事が分った時の喜びと驚き。全く奇蹟的な一致としか云えないようです。勿論S婦人は、人妻であり、割に富裕な暮らしをしている事は、すぐその時、分りましたが、生活の内面に於いて、どんなに苦しんでいるかは、後になって分ったのでした。その内面生活の遍歴については、稿を改めて書きたいと思います。ここでは、彼女S子として置きましょう。そのS子が、夫との不調和から別居している事、縛られる事を欲していたマゾヒストである事。しかも、稀にみる、ノブブルな美貌と、均齊のとれた肢体をしている事だけを、皆さんに報告するだけで、許して頂きたいと思います。悲しい事には、一夏だけの二人の交渉（勿論肉体的な交渉では決してないのです）だった事です。A山のホテルで、お互に自室のベッドに引取る迄の時間、二人は、本当に親しく近づきました。そして責めるための縛りについて、お互の意見を、少しずつ、おそろしく発表し合ったものです。そして日を改めて合う事を約して別れました。私の主義である、決して焦ってはいけない、非礼を働いてはいけないと

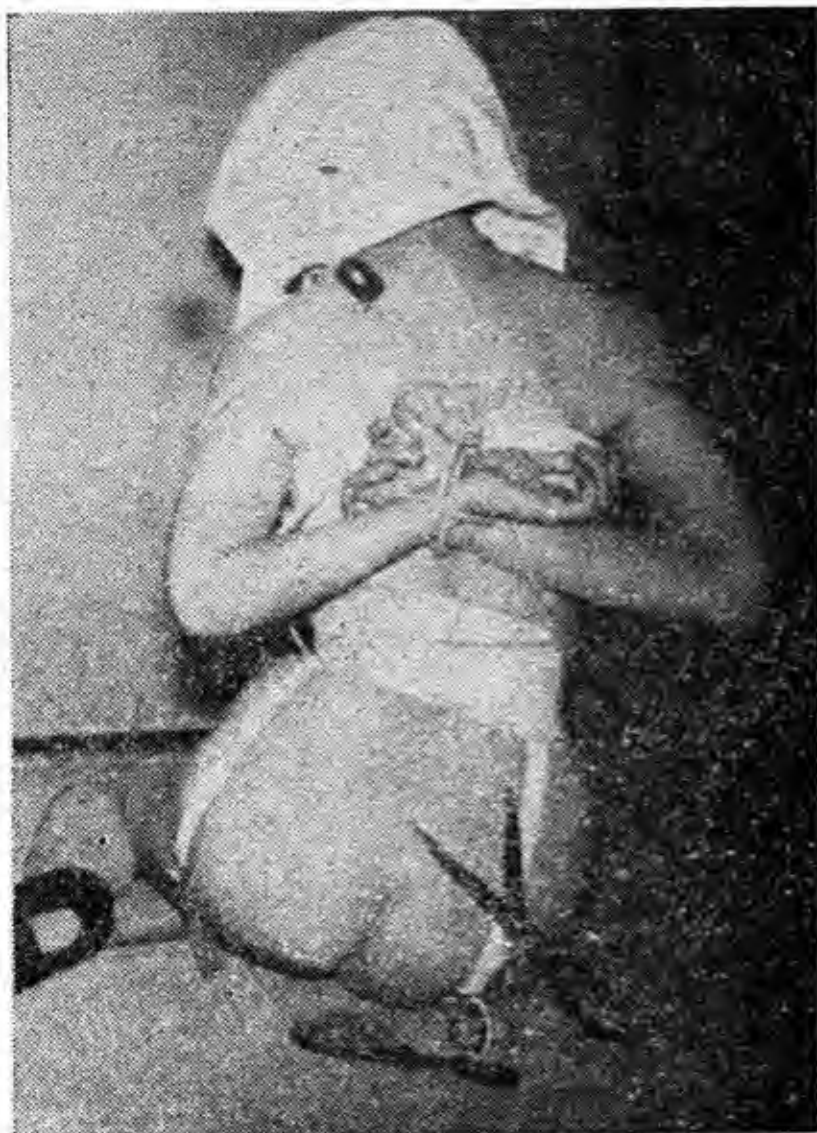
云う態度を守り続けました。会って二回目の写真が次に示すものです。【写真イ、ロ、ハ】の三枚です。この撮影の条件は、友人が休暇で帰っている下宿の一室を借り切り、ライトがないので、フラシユガンを使用。カメラはマミヤシックス。ガンは一番小さい球。絞五・六、五十分の一です。

第一回目に会った時は、とにかく二人共夢中で、体得した縛り方を、全部出し切る事も出来ず、とにかく、着衣の上から後手に縛り手でこづいたり、床に転がして、軽く鞭打ったりしましたが、やはり遠慮がありました。

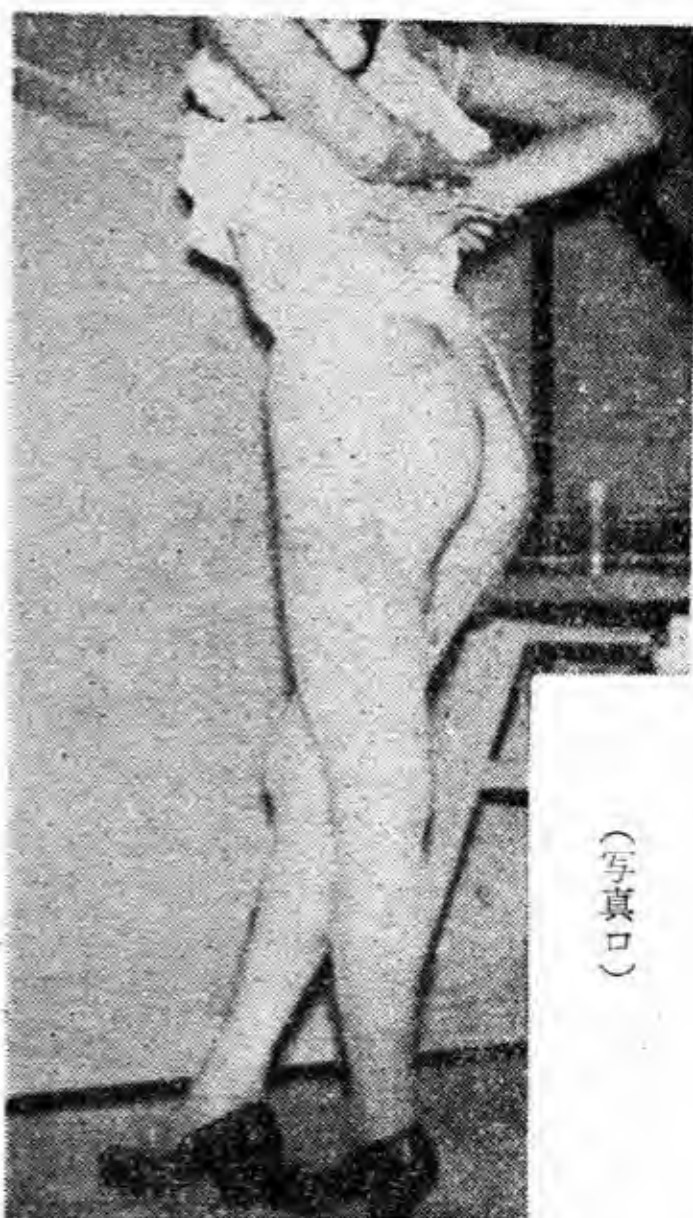
後で合意の上で、洋服を脱がしましたが、全裸には出来ませんでした。しかし、二回目に会った時は、もう二人共仮面を脱いでしまつて、思う存分のプレイを実行したわけです。

【イ】の写真は、ハイヒールをはいたままの彼女を後手に、ビニールの紐（洗濯物干し用）

で、きっちり縛ったのです。S子は、下着類をきちんと着けている人でしたし実に奇麗な皮膚でした。くびれたウエストにガートルをきゅっと締めつけ、大きく豊かなヒップが特別に、むっちりと見えるのでした。ヒップマニヤの私には、思いもかけない素晴らしい逸品で、ここを責める愉楽に耽ったのです。後手首の細さをごらん下さい。優美で実にデリケートな表情をしています。ヒップの大きい柔らかさに対して責めを行うと云う、残酷さを象徴するために裁縫バサミを立てかけて



(写真イ)



(写真ロ)

撮影しました。

【ロ】に移ります。ストッキングをはいて立ったS子。後手の縛りと、首縄、机上には、ソロバンと、コップ。コップの中の液体は、読者の御想像に任せます。このスタイルの美しさは、ヌードモデルに見られない新鮮さがあります。印画には、ストッキングの破れ目のはっきり見えるのですが、凸版写真では或いは、見えないかと心配ですが、この脚線美を私が、充分に責めた証拠が、この破れ目なのです。

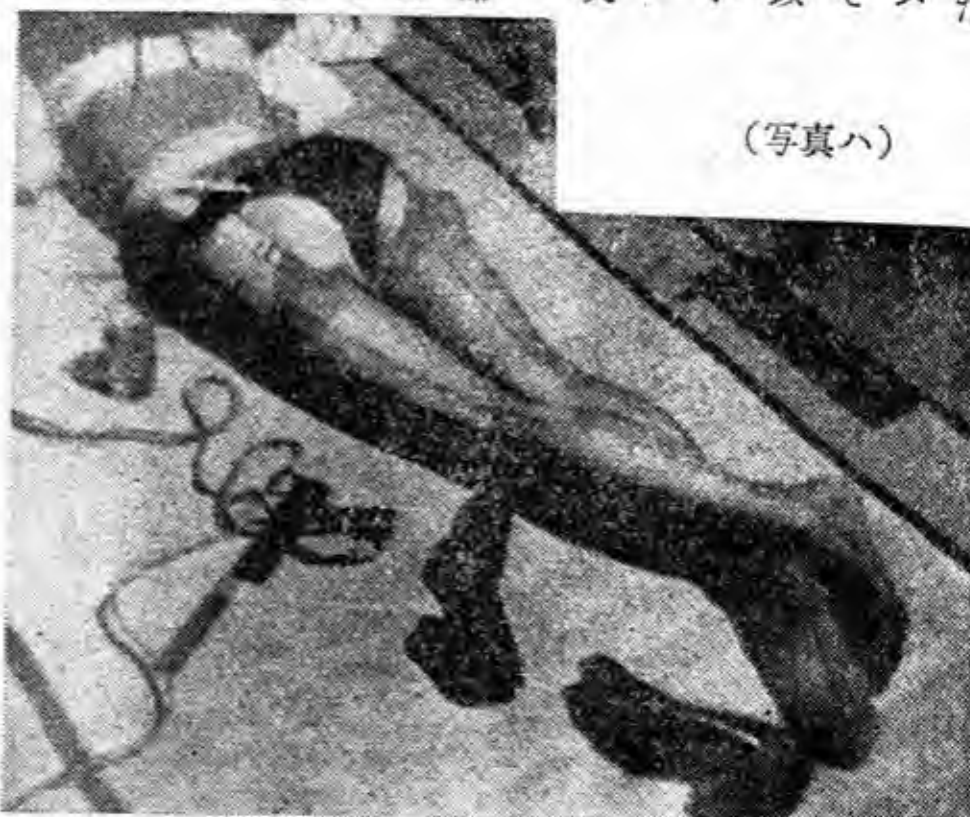
【ハ】之は、その日の責めの終末を物語ります。ぐったりと延びたS子。彼女の唇から、

吐息と苦しいかな
しみが、静かなス
スリ泣きになって
響いたのを、私以
外の誰も知らない
のです。

しかし、この美
しいS子と私も、
やはり別離の運命
にあった時、私は
本当に気が脱けて
行くように、悲観

したものです。或いは現在も、この悲しみが
続いていると言った方が、適当かも知れませ
ん。もともと二人のプレイを高度に進める事
が出来たかも知れないと考える時残念でたま
りません。奇ク誌上に、わざわざこの秘録写
真を公開するのも、一つは何処かの土地でS
子がこの写真を見出し、今一度再会が出来れ
ばと、はかない希望を持ったが為でもありま
した。読者の皆さんには、これらの写真の顔
がうつっていない点、御不満と思いますが、
S婦人の個人的問題を含んでいますのでお許
し願いたいと思います。

以上が、一応私のアブホート遍歴の手記で



(写真ハ)

す。別な写真資料については、又改めて書い
てみたいと思っています。

本項では、最後に素人でも簡単に出来る現
像、焼付等の処理について述べるつもりでし
たが、殆どの写真雑誌に詳しく出ていますの
で、編集部の指示に従って、省いておしまし
た。

×

×

×

(おわり)

私の体験記

女サデイストの手記

長瀬 昭子 画と文

つたない『私の体験記』が、はからずも三月号誌上に掲載されまして、本当に光栄に存じます。女性であり乍ら私程ひどいサジスチンは珍しいでしょうし、あまり珍しすぎて、作り話ではないかと疑われそうな気も致します。でも私としましてはありのまゝを、少しのつまみかくしも誇張もなく書いたつもりですし、今からも嘘は書きませんから、別段思い残すことは御座居ません。私には私なりの理窟がありますから、狂人とは思わないで下さいませ。

私は女性の美しい肉体を讚美致します。殊に女性の肉体に力が充滿して、緊張しきった

時程美しいものは他に類がないとさえ思います。スポーツに舞蹈に此の種の美しさは、絶えず表現されて居ります。でしたらもっと端的に美しい女性が肉弾相うつ格闘を演じたならば、此れ程美しいものが他にありませんか。女性美の極致はメトミにあると、私は信じて疑いません。此んな所に、私の満足感があるのではないでしょう。それに女性同志の格闘には女性特有の柔い感触がありますし勝った時の優越感も又格別です。私は、優しく淑かであるばかりに（私だって不断はそうですが）メトミの味を知らない世の女性の方々を、かえって気の毒に思う位なのです。前

置は此れ位にしまして、本文に入ることに致しましょう。

当地には銭湯と云うものが一軒もありません。と云いますと不審に思われる方がおありかも知れませんが、事情を知っていれば少しも不思議なことではありません。当地は炭礦地帯で会社の大きな共同浴場がありますのを会社以外の一般の人達まで利用していますし会社もサービスだと思って黙認していますので、たとえ銭湯が出来たにしても、金を払って銭湯に行く者は誰も居りません。そんなわけでは絶対に銭湯が出来ない道理なのです。

然し炭礦の共同浴場と云いますと、殺風景な薄暗い場所を想像されるかも知れませんが何うして何うして当地の炭礦は大手筋の大会社ですし、其れに浴場は未だ真新しいのですから、清潔なこと、設備のよいことは、小さな温泉場の浴場等は顔負けでしょう。広さは普通の銭湯の四倍はあり、浴槽も床も真白いタイル張り窓は広く明るく、此所に入りますとさながら大温泉場に來た様な錯覚さえ起きて参ります。勿論入場無料ですから、番台もなく番人も居りません。

ですから私の家には浴室はあるにはありますけれど、態々手間と燃料を使ってわかすよ

りは共同浴場を利用した方がずっと便利で経済的ですので、何時もタオルと石けんを持って出かけることにして居ります。午後になりますと此の広い浴場も相当混雑しますので、静かに入浴するのが好きな私は、成る可く人の少い午前中に一人で行くことにして居ります。こうしますと何うかした時には入る時から出るまでたった一人のこともあり、ほんとにゆっくりした気分になれますが、あまりお湯が豊富すぎてもったいない気持さえ致します。今からお話し申しますのは、そう云った静かな浴場内での出来事で御座居ます。

確かあれは去年の十月頃だったと思います。が、午前十一時頃の一番人の少ない時、私は何時もの通りゆったりと浴槽にひたって居りました。其の時私より先に来ていた奥さんらしい女が二人居りましたが、一人は直ぐに上って行きましたので、残りの一人と私とが残ったことになりました。私は手足を伸ばして充分温まってから浴槽を出て、入口とは反対側の床に座って身体を洗い初めました。途中で誰か又一人『ガラガラ』と界の硝子戸を開けて入って来た様でしたが、私は別段ふり向きもしませんでしたので、其の時は誰だか知りませんでした。しばらくしてからお湯をく

もうと思つてふりかえった時、浴槽につかっている其の女と顔が合つて、

『あら!』

『まあ!』

と同時に、思わず声が出てしまいます。何とそれが思いがけもなく洋子でした。洋子は『私の体験記』にも書きました様に、何ヶ月か前、私の家の二階に誘い上げて、無理無態に組み敷き散々いじめ抜いた可愛い女性なのです。其の後何うかした時には顔が合つて彼女は恥しそうに頬を赤らめるのでしたが、まさか此んな処で、しかも真裸でいきなり出合ふとは予期していませんでしたので思わず声が出たのでしよう。彼女もきつと同じ思いだったにちがいありません。でもまさか此所から直ぐ逃げ出すことも出来なかったでしようし、人前もありますので赤くなり乍ら努めて平静を装っている様子が私にもはっきり分りました。するといたずら心でも云いますか、何となく彼女をからかって見たい様な気持になり、直ぐに腰を上げて私も浴槽の中に入って行きます。そして態と彼女に話しかけて見ました。でも二人だけではありませんから変なことをしたり云つたりは勿論出来ません。誰でもが普通にかわす挨拶めいたものな

のです。彼女も内心では怒っていたのかも知れませんが、案外平気そうに私と応待しますので、かえって私の方が感心すると同時に拍子抜けがした様にも思います。やがて彼女は浴槽から出ると、さっきまで私が座っていた方の床に、かきみ込んで身体を洗い始めました。若い未婚の女性は入口の方を向いて洗うのを好まない傾向がある様です。

私は洋子の裸体は初めてですので、浴槽につかたまま、見るともなしに見て居りました。洋服を着た場合にすんなりしてスタイルがよいだけに、裸になるとふっくりした女性的魅力には幾分欠けている様にも見受けられますが、いかにも若々しい新鮮さがあふれてほんとに美しいと思いました。其の内、私より先に来ていた女は硝子戸を開けて脱衣場に出て行きます。後は私と洋子だけが広い浴室を占領しました。

ふと私は考えるのです。此処でもう一度洋子をいじめることが出来たら何んなにすばらしいでしよう。でもいくら何でも思いますが何うしても此の考が頭にこびりついてはなれません。入口の脱衣場の方は今、着物を着ている女が出て行ってしまえば大丈夫です。と云いますのは、浴室と脱衣場の間には



昭子画 No. 1

すり硝子の戸がびったりしま
っていますし、脱衣場と外に
出る出口との間にも同じ様な
硝子戸が立っていますから、
誰か脱衣場へ入ってくればい
やでもガラガラッと音がしま
す。それに脱衣場は、かすか
乍ら此所からでも硝子越しに
すけて見えますので、私には
すぐ分ります。外からのぞか
れる心配は絶対ありません。
でも洋子に声を出されば大
変です。板壁一つへだてた向
う側は男湯ですし、時折ザー
ッと云う音が聞える所を見ま
すと、誰かどきどき入ってい
るのでしよう。然し少し位声
が聞えても男が女湯に入っ
てくることは先ずありません
し、それに洋子だって恥しい
処を人に見られるのはいやで
しょうから、態々声を出すこ
とは無いに違ありません。で
も苦しまぎれに思わず叫び声
を出すことは考えられますの

で、あまりひどいことは出来ないでし
れど、大抵のことでしたら大丈夫と思いま
した。

そんなことを色々考えて居ります内、さ
き脱衣場へ出て行った女は着物を着終えたの
でしよう、下駄の音を残し乍ら出て行ってし
まいました。其の瞬間私は『今だ』と思いま
した。ぐずぐずしていて誰かどきどき入って
くれば二度と機会はありません。そう思うと
私は直ちに持っていたタオルを其の場に投げ
出す様に置いたまゝ、黙って洋子に近よ
りました。彼女は湯をザーッと肩からあび
て、石けんを流し終った所なのです。私が
近付くと、彼女もびっくりして、おびえた
様な表情を浮かべます。彼女もまさか
こんな処で何かさそれようとは、想像も
していませんでした。湯に上気して桜色に
艶々した彼女の頬が、殊の外愛らしく
眼にうつりました。

急に彼女の唇が動いて何か云わうと
します。私は小声で

『しっ！声を出しちゃだめ。向うに聞えたら
どうするの。見られたら大変だわ』

とまるで威圧でもする様に、さゝやきまし
た。洋子はハッとして顔色が変わります。其
の時の彼女の悲しそうな表情は今でも忘れま

ん。きつと声を出せないことが分って、のがれるすべがないとあきらめたのかも知れませんが。私は早速彼女の後にかみ込み、両手を肩にかけてぎゅっと引張り乍ら、仰向けに倒しました。彼女は意外に大人しく、大した抵抗もせずに私のするがまゝになっています。

そこで私は其の場に座ったまゝ両脚を伸ばして膝と膝の間に彼女の細そりした首をはさみ込みました。それから足先と足先をからませてしっかりとかなれない様に組み合せてから、両足に力を入れてぎゅっと伸ばします。自然私の膝の間がせまくなりますから、間にはさまれた洋子の喉が、ぐっと締めつけられます。此れは『女レスリング』と云う映画で覚えた手でした。洋子の顔は足の間にはさまれたまゝ、私の方を向いていますので、表情の変化がはっきり眺められます。

ぐうーと両足に力を入れて締めつけて行きますと、眉と眉の間に小さい溝が縦に刻まれ、眉がつり上って眼がとじます。そして形のよい唇がキュッと引きしまり次の瞬間には半開きになって、キッと食いしばった真白い歯が美しくのぞいてきます。それから静脈がかすかにふくれ上り顔が真赤に紅潮して、苦悶の形相と云うのは、此んなのを云うのでし

よう。同時に両腕がびくくと動き、すっきりした足が白いタイルの上を泳ぐ様に滑って、ふっくらした処女らしい乳房が苦しうにあえぎます。

『う……うッ』

と云うかすかな呻き声が、彼女の喉の奥からもれて参ります。あまり締めすぎて叫ばれては困りますので、それ位の処で足の力を抜き、『フウーッ』と一息二息つかせてから、又もう一度ぐうッと締め付けます。彼女の顔も前と同じ様に表情が変わります。でも美しい女性が喉を締められて苦しむ姿は、何と素晴らしいことでしょう。此んなせっぱつまった表情は他では絶対に見られません。

勿論、私は時々ふりかえって脱衣場に注意を向けましたが、幸なことに未だ誰も入ってくる様子はありません。それで私は彼女の首を足にはさみ込んだまゝ、此の責めを五度も六度もくりかえしました。それに二人とも真裸で此んなことをするのは此れが初めてです。タイル張りの固い床も最初の経験でしたので、何か新鮮な雰囲気は我を忘れてしまひそうになります。都合よく洋子は苦しみもがき乍らも大きい声は出しませんし、人さえ来なければ又違った責めをして見ようと思いま

したので、つま先を外して彼女の首を放してやりました。

彼女は髪振り乱したまゝ、ホッとした様に大きく息をしています。そして怨めしうなまなざしで私を見据え乍ら、急に振り放して逃げ様とするのでした。然し此れ位で許してやるわけには参りません。逃げ様とした為め私は尚更意地悪く彼女を引き寄せて、前のめりになった所を両手でぐっと首筋を押え付けました。彼女は肘をついて支え様としましたが、私が全身の重味をかけて押え込みますので、とうとうたまりかねうつぶせにつぶれます。私は彼女の頭の上の方から逆向きになつて押え付けていました。彼女は私の方から見て右の方に顔をねじむけ、片方の頬をタイルにすり付ける様な姿勢で押えられています。

私は彼女の姿勢を見ると、内心『しめた』と思います。素早く右足を開いて彼女の頭の上をまたぐ様に、急いで身体を前に進めました。そして私の股が丁度彼女の首の上まで来た時、べったり腰を下して逆馬乗りに跨りました。こうしますと彼女の上になっていた方の頬はぴったり私のお尻の下敷きになり、つぶしりした体重に顔が押しつぶされそうになって、さぞかし悲痛極まりない表情だったこ



と、思いますが、残念なことに今度は顔が見えませんでした。想像するより他はありません。彼女は苦痛に『うっ』とかすかな声を上げ乍ら、急に手足をばたばたさせ初めました。然しいくら抵抗されても、跳ね反される様なへまは致しません。そのまゝの姿勢で両膝を相手の肩にのせ、ぐいっとふみ付けると同時に、両腕をねじ上げる様にして腰のあたりに組み合わせ、手首をしっかり押え付けてしましました。こうなればどんなに暴れようとしても、上半身腰から上はびくともしませんが、足だけがやっとう動かせる程度なのです。彼女は身じろぎ一つ出来ないのを、時々びくっと動こうとします。

然し今日はパンティー一つつけない真裸ですから、

此うして見ると其の快さは格別でした。それに片頬だけにしても、洋子の可愛い顔をお尻に敷いた気持は、ほんとに何に例え様もあります。同性に対する優越感とでも云いましょうか、征服をなしとげた勝利感とでも云いましょうか、到底筆舌にはつくせない複雑な興奮にぞくぞくして参ります。

其の内しばらくすると彼女は抵抗しても駄目だと思いきらめたのでしよう。私に組み敷かれたまゝぐったりして、時々かすかな苦痛の声をもらすばかりになりました。

私は出来ることならこのまゝ何時までも続けていたい気がしましたが、そんなことが出来るはずはありません。思いなおして、今日は思いがけもなくこんな素晴らしい獲物を拾ったのですから、此れ位で許してやってもいいと考えました。でも此んな機会は又とありませんから、思い残すことのない様にうんといじめて置きたい慾望も湧いて参ります。

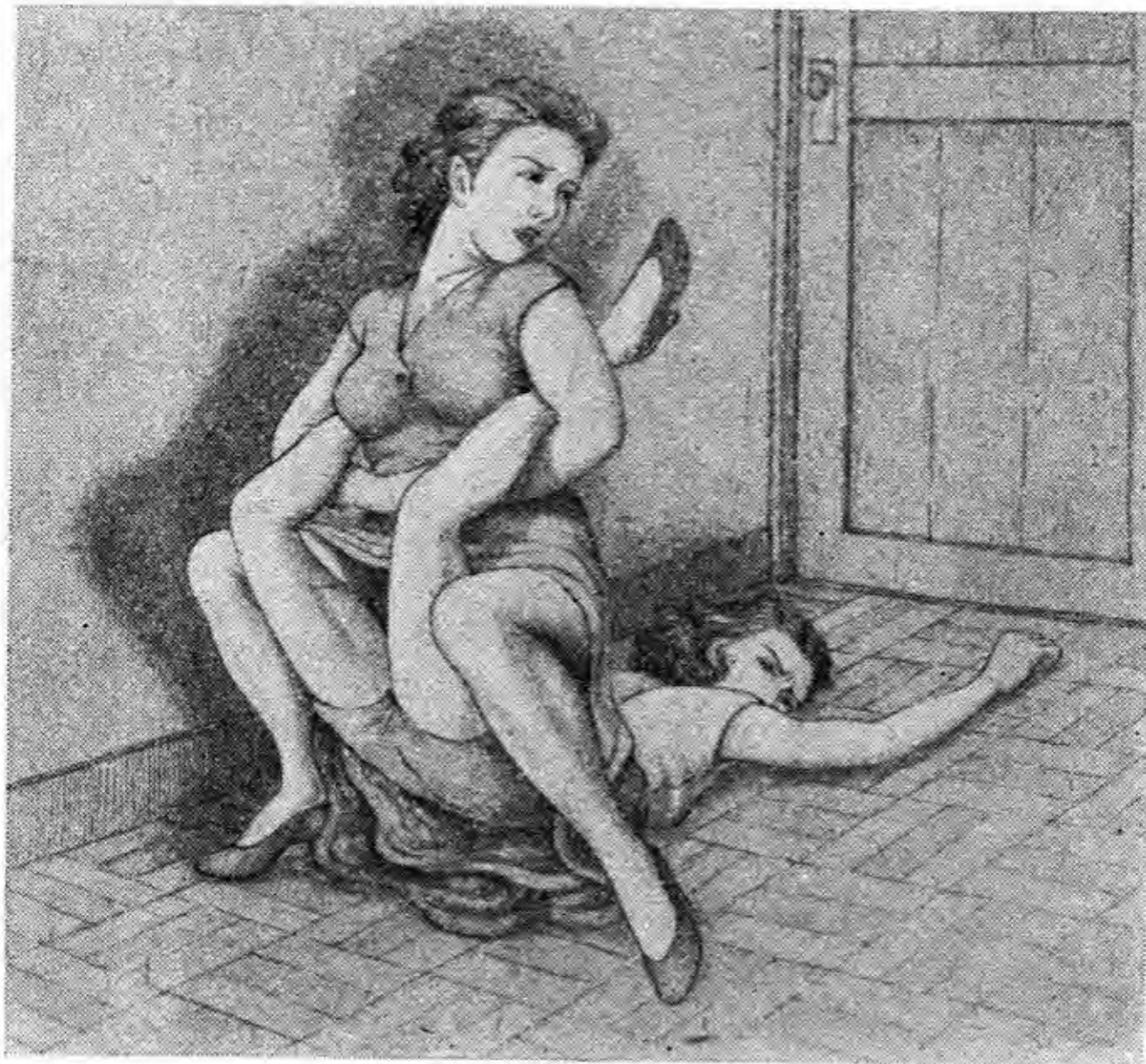
丁度其の時、硝子戸の開く音が小さく聞えましたので、私はハッと思いました。よく注意してみますと男湯の方でしたので、ホッとする思いでした。女湯の方は前と少しも変わりません。それをよいことにして、私は不断いっつもやって居ります責めを、最後にしてみた

くなりました。

そこで私は立上って向きを変え、うつぶせている彼女を仰向きに反転させます。彼女は案外されるがまゝになりました。

私は構わず彼女の胸の上に馬乗りに跨ると同時に、両方の手首をしっかりとつかんで、ぎゅっと力一ぱいタイル張りの床の上に八の字型に押え付けました。そしてしなやかな両腕を両方の膝でぐいっとふみ付けにしてから彼女の真赤になった顔を、太ももの間にきっちりさみ込んでしまします。彼女の右頬にはタイルの合せ目に押しつけられて出来た十字文字がはっきり浮んで痛々しい位にさっきの苦悶を物語っています。かわいそうな気持も致しましたが、気をとりなおしてぐいぐい全身の重味を股にかけ洋子の喉を締め付けて行きました。次第に彼女の顔は苦痛に歪み、満面朱をそゝいた様に充血して参ります。でも未だ悲鳴も出しませんし、泣き出し

も致しません。必死に歯を食いしばって苦しみに耐えている様子は健気でもあり此んな美しさは又とないと思いました。



此の前、洋子を組み敷いた時も、此れと寸分違わない責めを致しましたが、あの時は彼女もシユミーズをつけていましたし、私も短い乍らパンテイーをはいていま

したので、今日の方が満足感も快い感触もずっとすぐれていきます。彼女の丸いすべすべした顔から細そりした首へかけて、私の股がじかに押しつぶされますが、あまり残酷にも思われませんが、こうなればそんなことに構っては居られません。

膝にふみ敷かれてひくひく動こうとする洋子の腕の感触や、かすかに左右に顔をねじ向ける度に肌に伝わってくるくすぐったい感覚に、私はドキドキ胸を高鳴らせて、得も云われぬ気持にひたり乍ら、尚もじりじりと喉を締め上げていますと、丁度其の時、軽やかな下駄の音に続いて硝子戸を引き開ける音が聞えましたので、私はハッと我にかえりました。今度はまぎれもなくこちらの女湯の方からの

音でした。もう一刻も猶予は出来ません。私は大急ぎで腰を浮かし、洋子の顔の上をまたいで越え様とした時です。此処でもう一思いととっさに変な考えが浮んで参りました。

と云いますのは不断から私は一つの夢を持っています。それは美しい女性の顔をべったりお尻に敷いて見たいと云う慾望なのです。

さっき洋子の顔を一度敷くには敷きました、顔が横を向いていましたので片頬だけしか出来ません。私の夢はそんなのではなく、真上に向いている顔を上からべったり敷いて見たいのです。それもズロースやパンティー

をはいてではなく、真裸でそうするのが理想なのです。こうすると相手の顔は眼も鼻も唇もびったり私のお尻にふさがれて、其の上に全身の体重がまともにのしかかりますから、此れ以上の苦痛は又とありますまい。勿論息は全然出来ませんし声も出せません。それにもまして此んなことをされた女性の屈辱感は何ばかりでしょう。いやらしさ苦しきさみじめさに死ぬ程の思いをするかも知れません。反対に私の方は此れ程完全な勝利が又とありましょうか。最も美しい顔を一番いやらしいお尻に敷くことを考えますと、それだけでもむずむずして参ります。然し此れは単なる夢に

とどまって一度も実行したことはありませんでした。いざと云う時になりますと、いくら何でも気おくれがして、出来兼ねたのでしよう。

私は洋子を放そうとする瞬間、此う云ったことがびんと頭をかすめましたので、まゝよという気持になり前後の考えもなく、そのまゝ腰を下して彼女の顔をびったりお尻に敷いて見ました。時間にすればほんの二秒か三秒でした。時間が、彼女の顔は横を向くひまもなく、物の見事にお尻の下敷きになってしまいました。

『うう……』

と喉の奥からしぼり出す様なかな呻き声と同時に、彼女の死にも狂いにはき出す息で私の皮膚がかゝと熱くなるのを感じる、私は大急ぎで飛びのく様に彼女を放しました。洋子は起上る元氣もなく、せいせい喉を鳴らせ乍ら、ハッハッと肩をふるわせています。私は脱衣場に入って来た女に感付かれやしないかとははらしましたが、幸なことにととうとう分らずにすみしましたし、洋子もせい一ぱいの努力でかくし乍ら逃げる様に浴場から出て行きました。

私は、それまでも何人もの美しい女性を

組み敷いていじめて参りましたが、此の時程の満足感を満喫出来たのは始めてのことでした。恐らく一生最大の思い出として心の奥深く刻まれて行くことでしょう。

それにしても洋子には何の怨もありませんし、本当にお気の毒だったと何時も思っています。出来ることなら何んなことをしてでもつぐないをして上たい気持で一ぱいになります。

私も此のことがあってからは、前程女性をいじめたくてたまらない気持が幾分うすらいで参りました。何故か自分でもよく分りませんが、あんな恵まれた機会が二度と来ないことを思いあきらめて居るのかも知れません。でも洋子の顔をお尻に敷いた瞬間のことを思い浮べますと、心臓が高鳴り下腹のあたりがうずうずして来るのを見ますと、機会さえあればどんなことを仕出かすかも分りませんし、自分自身が恐しくなりません。もう二度とくりかすことのない様、心の中で念じ乍ら、つたない此の稿を終ることに致します。

(以上)

【伝言板】長瀬昭子さま、お手紙拝見しましたが、すでに製版済で間に合いませんでしたので悪しからず御諒承下さい。(編集部)

懸賞入選作品 第四席

『奈落の慾情』

沢井和雄

四馬孝・画

情欲の落奈

何もかも暗闇の時代に、本能に取りすがって人知れず狂気を追ったとしても、世の中が落着くに從って、何時のまにか腰を据えた安住の椅子から、昔の狂気をふり返ってみると、遙か彼方から漂ってくるものは夢のようなたのしさだけである。

戦争直後の暗闇、貧乏書生、それだけでもその男は、幻のとりことなるに充分だ。「こよない美にあこがれる詩人」と云う氣に直ぐなつて了える。ものを感じて了う青白さは、食ってゆくたくましさにおびえ、片隅で取りとめのない夢をむさぼる、そしてすべての生理を、片隅の夢に当てはめて了う。単なる「女肉への飢え」を「女神への渴仰」と自惚れさせて了う。

以下そんな頃の、そんな貧乏書生の詰らない脱線に過ぎないはなし……………。

x

x

x

浅草六区の復興は目覚ましかった。汚れた肌着のパン助が、生活の糧に唇だけをむやみに朱くしているのと同じように、ひしめき合うバラック建ての中に、美男美女の立ち並ぶ映画の絵看板は、派手な色どりで、行き交う人を圧倒していた。

生の悪げな職人、よれ／＼鞆の勤め人、チビタ下駄履きの蓮葉女、サボ学生、閑つぶしのボン引、浮浪者、そしてそれらの人々の懷を目当てに、安天ぶらの匂いが鼻をつき、呼び声、掛け声、広告塔の黄色い声が、耳をつんざくばかり。

長尾三郎は蠢く虫の一匹として六区街の人もみに混みれていた。社会の再生力は享樂の面で、最もたくましさを見せるらしい。この空虚な人々と、街の外側の色どりは何と対象的なことだろう。あの淀んだ瞳に、何をうつしたいのだろうか。空き腹を抱え、何を探してこんなに人が集まるのだろう。まるで死に物狂いで樂もうとし

ているようだ。そして己もそう。現実苦を忘れさせる豊香に恋がれうろついてみるのだが、いつもやっぱ反吐のように人間臭い匂いしか拾うことが出来ない。



けて、うすい乳首をふるわせながら、蛇使いの踊りででもあろうか低く暗い東洋的なリズムに合わせて踊りくねっている。男たちはめい／＼の夢をのせて、踊子たちの裸身を追っている。何に満足してか

長尾は、そんな風にひしめく人々と自分を、嘲りながら見るともなしに街と人を見比べて廻った。

国敗れて山河あり、だが人間の場合は……希望が失れれば本能だけが残る。何を求めても満されず、喘ぐ様な本能への飢えを、思い知らされるだけだ。

裸ショウの劇場の大看板が、若い長尾の本能を疼かせる。こんもりとした乳房と前を派手に掩ったほかは、うね／＼と続く肌の色、惜し気もなく伸びきった足の先、それらはエロというよりは、ギリ／＼の肉慾となって、長尾の胸に迫ってくる。

長尾はよろめく様に劇場に吸い込まれた。同じような男たちが、目ばかりギラつかせ、なかは蒸し風呂のように暑い。おんな。おんな。と軽く呟いて、歯ぐきの裏に溜った生温い唾を飲みながら、長尾は人波をわけて花道の傍へ進んだ。舞台では、まだうら若い三人の踊子が暗いブルーと艶かしいアムバーの光を受

踊子たちは、傲然と忍び笑いさえ漏らしている。それは、生活に汗して得た僅かな結晶を、バカげたことに使い果して、了う男たちを蔑んでいるかのようだ。

踊子たちの動きにつれて、強いスポットの光に浮き沈みしている無数の埃さえ、彼女たちの吐く息でもあるかのようになり、男たちはマスクもせずに、鼻をピク／＼させながら浴びていた。

やがて長尾も、花道の脇に席をみつ、踊子たちの通りすがりに殆ど真下から脚線を見られるようになった。

入れ交り立ち交り眩い踊りの中でも、並みいる男たちを、一際目立って翻弄したストリップパーがあつた。女盛りの熟れた乳房と、ずっしりと重そうな腰の曲線を、くっきりと舞台に浮かせ、うすい笑くぼと切れ長な目もとが、男たちを嘲笑しているように見えた。

ゆるいテンポの重いメロディーにのせて、たゆたうようにゆつたりと、からだをくねらせた挙句、彼女は花道にさしかゝつた。

「ねえ、あたし、たまになくなっちゃったの。誰か何とかしてエ」

女の甘え声が今迄の緊張にそぐわない。長尾は何故かがっかりとしている。

「そんな恐い顔止してよオ。ね。お兄さん。貴方なら抱いて下さるわね。」

女は長尾のすぐ後で、すねた様に声をかけた。まだ裸ショも草分けの頃なので、誰でもそうだったが、どぎつい女の近づきに、後の男はたじ／＼になった。

男の顔に女はすり寄る様に顔を寄せ、口説く真似をして見せた。

さすがに男は照れ臭がって横を向いて了うと、

「ちえっ、馬鹿にしてやがら、この助平おやじ」

いきなり女は、啖呵を浴びせると、こんどはふてくされた調子で腕を組んで、睨めつける様な目つきで、客席を見下しながら、花道を練り始めた。

長尾は首を女の動きにつれて曲げ、肘を花道の上に掛けて、女の中からだを見つめていた。真っ白な女の肌が長尾の真上を通りかけた時、臉を籠めた女の眼と、あこがれるような長尾のそれと、ぴたりとぶつかる、女は思いついたように長尾の肘をぽんと蹴った。

「あんた、何さ。あたしに文句でもあんの。そんなに肘を突っ張ってさ。誰も可愛がってくんないもんだから、あたしやくしゃ／＼してんだよ。まご／＼していると伸しちゃうわよ。」

ちよっと、道化て女はそう云うと、真向いに片膝をついた。男たちの視線が長尾に集ってくる。長尾もやっぱり凝視をためらって了う。

「かぶりつきに来てるからには、あんたもよっぽどね」

ニヤリとしかけると、女は揶揄い気味に、

「あんたが可愛がって呉れないんなら、あたしが可愛がったげる」

図に乗って、女は片足をあげると、長尾の首の後から大きく弧を描いて、反対側の椅子の肘かけに置き変えた、ちようど、女が上向きの長尾の顔を睨いだ格好になった。そして長尾の頭に手を掛ける、と、そのまゝ中腰に屈み始めた。

客席からは一齊に喚声が上り、前の方からは、皆振り向いて女の背中や尻を眺めている。

長尾はつと逃げそびれ、女のするまゝになつて両頬になよ／＼とした内腿の柔かみをかんじ、真赫になつてその間を見つめていた。頭がかあ／＼として全身が炎のようだ。女の内もゝは牛乳を流したよ

うにとろりと白く、股化粧の香りがくらくくと甘たるく鼻をつく。

頭上から濡れたような鼻に掛る女の声がひびき、すぐ前に緑地に朱色のバラをあしらったバタフライがくねくねとゆすれ、スポットが合わさるたびに、飾玉がダイヤのように輝いて、女の股は、ひとしお眩しさを増して来る。

「ねえ、かわいい坊や。首まで真赫にして、初心なくせに、こんなとこいやって来てさ。こうして可愛がったげるから、今日は大人に帰んのよ。どう。みなさん、羨しそうな顔しないでよ。よだれが落ちちゃいそうよ。あらこの子ったら、何よ。そんなにのどをぐくぐく鳴らしてさ。ませた子ね、どうして欲しいのよ。云って御覧」

女は長尾の顔を挟んだまゝ悪どく芝居している。

汗びっしりになった長尾は目の前がぼんやりして来た。そこら中に放り出しになった女の肉のかけらを無生に頬張ってみたい気がするがさすがにそうは行かない。気が違うことが出来るものなら、ピカ／＼光る皮を剥いで、じかに女の肌の匂いを嗅ぎ、舌のとどく限り舐めて味って見たい気がした。

「何よ。その小父さん。ニヤ／＼してないで度胸があったらこゝへ来たらどう。でもそんなつる／＼じや摺り場所がなくなつてこの人みたいにしてやれやしないわ」

毒舌で客席をどっと笑わせながら女は、

「さあ、あんたもずいぶん堪能したでしよ。もうおしまい。じや、今晚。ねっ」

と腿を放し、腰を伸ばすと、小さくなっている長尾を睨いだまゝウインクをして見せた。

それから幾つかの猥雑なコメディ―は長尾の耳に入らなかった。

顔を俯けたまゝ、頬に残った女の腿の匂いにあれこれと思いに沈んで了った。

すべてが否定される背徳の世に、確かな力強いものに、若い人々は生理的に飢えている。そしてそれが、パトリオティズムでもキリストでも赤でもよい。恋や詩でも結構、人のこしらえ上げた椅子にしがみついて、自分のものと思ひ込めれば、それは充分分裂しやすい精神の抵抗の根城にすることが出来る。

殆ど多くの素直な若者は、こんな椅子にしがみつく必要もなく、精神の分裂の恐れも知らず、流れに従って年を取り、時代も国も自分に關係がなくて居られ、平凡と云う幸福を何等の努力なしに克ち得て了う。

そして一部の血の熱い若者は、分裂しやすい精神を安定させるため、自分の不満足を、善悪とかヒューマニズムとか果ては恋愛で満足するものと思ひ込み、既に出来上った他人の椅子で、数年の放浪し勝ちの時代を過ぎ、結果は素直な若者と同じゴールに辿りつく。そしてパイプを燻らしながら、重役腹を揺って、「わしも若い頃は相当遊んだもんじやよ。」と満足げに笑う。自分自身を偽った罪の痛ささえ感ぜずに。

そして全く僅かの取残された「正常」から見て出来損いの若者たちは、毎日々々、顛倒しそうな精神を引っかぶり、発狂に戦きながら、どこかの安住の椅子にしがみつこうとする。

そしてどこでも——祖国愛、宗教、何とか主義、芸術とやら等々——蹴飛ばされ、うろつかされ、頭の空廻りを強制されて了う。そしてやっとのことで、どれかの椅子を掴まえて、精神の浮動しやすい年代を凌ぐ。弱いものは椅子から椅子へ飛んで廻っているう

ちに落伍し発狂して行く。
長尾も足掻き廻っている
一人である。そして型の如
く、生きる意慾もなければ
死ぬ勇氣もない。ついでに
生きているだけ。したいも
のは何もないと力んでいる
否定主義者のひとりであ
る。

だが、何もしたくない筈
の長尾のからだに、たしか
に脈打って有ってうもの
それが「女肉への飢え」だ。
そこを掘り下げてみれば、
何か賦活の力がよみがえっ
て来るかも知れない。

そうだ。おんなのからだ
を信ずることが、己の肯定
への第一歩だ。

花道の脇で、顔を埋め長尾は、強烈な女肉への飢えに胸を弾ませ
ながら、そこから新しい幸福を透視しているようにひとりで興奮し
ていた。

そのうちに幕になり、かぶりつきを狙う人の群に流されたまゝ、
長尾はぼんやりと廊下へ押し出された。

吸さしを小さな煙管に詰めて、大きく吐いた紫煙の息を辿ると、



灰色の壁に貼りつけた半紙が長尾の目に停った。
「道具方募集、面談」とあった。

「じゃあ山さん頼んだぜ。」支配人はそう云って舞台監督に長尾を
引渡した。

長収（ナガ・オサム）と変名した長尾は、事務部、照明部、舞台

部と引き廻され、最後に楽屋に引張って行かれた。

冷飯、ごむ裏、底のつぶれたズック、色んな履物で、むっとする埃の立った楽屋口で、山さんは立てつけの悪いくより戸を開きながら、

「ゆかりちゃん、楽屋ア」

と声を掛けた。

「山さん。ひどいよ、先刻の照明。きつ掛けが点で合いやしない。

おかげで受けがびったり減っちゃったじゃないか」

「そうでした、どうも」

「引っ叩いてやりたいよ。ほんとに」

「へえ、承知しました、それから、ゆかりちゃん、又済まねえがスチールなんですえ、今夜、頼みますぜ」

「ピン助かい」

踊子がくよりを開いたので、女が先刻のストリップパーであることがわかった。座長格らしく、山さんに文句を並べたてながら、ワンスらしい若い踊子にスパンコールをはずさせて汗を拭かせていた。

「いえ、なあに、アミイって本屋からんで、スチール・マンは何て奴でしたっけか」

「どうせエゲツないんだろ。ピン助と来た日にや、股倉に首突こんでまでポーズつけやがるんだから」

「大丈夫。あたしがそんな真似させやしませんよってんだ」

「だから」

「えへムムム」

山さんは何やら卑しく追従笑いすると、乳の拭き方が痛い、ゆかりはもう見向きもしないで、ワンスに小言を並べ立てている。

何か冒険的な土地に迷い込んだ時の様な、胸のときめきを感じながら、長尾が一わたり見廻すと、楽屋の中は、雑然と動き廻る人たちでむせ返るばかり。隅でギターを抱えている男、化粧前で何やら頬張っている踊子、それをねだっているらしい若いコメディアン。股化粧に余念のないひとりのまげた腰に、毒々しい色彩の羽の飾りつけが、狭い楽屋の空間を一層せばめている。

「あ、そうそう、この人、今度来た大道具さん。何てったっけ」

「長収です、よろしく」

変名のまゝ、頭を下げた長尾を、ゆかりはチラッと見かけたが、たった今、客席で愛想を振りまいた男とは思いついても見ない。

「で、ネームは」

「そう、まだでしたっけ、収ちゃんも面倒だし、長収か。じゃ、どうですこんなのは、おを取ってサムってのは」

「いゝね、便利じゃないか、そう決めとこ。」

「じゃ、あたしは板付きを見廻って来ますから、みんなにゆかりちゃんから引合してやって下さい。」

「あいよ。あ、フットの人にトチらない様に怒鳴っといってくれ、覚悟してなってね。」

二人の簡単な会話の間に、長尾は忽ち、変名からサムに下落して了った。

皆長尾に一瞥も掛けず、銘々に笑い興じている。新しい男がいようと、裸の女たちは身じろぎどころかまばたき一つしない。まるでそこらに不規則に張りめぐらした針金に掛った雑衣と同じにしか思わない風である。それらは若い長尾には眩い女の臭みばかり。色さまさまのバタフライ、スパンコール、うすもの、ブルマース、シユ

ミーズなど、穴のあいたうすい靴下の先が、海老の様に縮こまって煙草を噴いている男の、真赤に塗った鼻の真上にひらめいている。

長尾のすぐ脇の張り物を直したらしい楽屋口の把っ手の下に、三公、アマリ人ノ女ニ手ヲ出ストロクナコトハナイゾ、といったずら書きが棒を一本引いて消しかけたまゝになっている。

「南雲さん。出です。」

バタ／＼とつゝかけの音をたてゝ、ちょんちょこ帽の男が怒鳴った。

「えて子。タンバリン。」

カン高くワンサを叱るように云い捨てゝ、腰にふわつかせた黄色のうすぎれで、長尾の鼻先を軽く撫でながら、ゆかりは、そゝくさと出て行ってしまった。遂に誰も振り向かぬまゝ長尾は一座の隅の人となった。

舞台裏はせい一杯の人生であった。ものを考える閑もないせいか誰も朗かで、お互いに愛称で呼びあい、伝統の符牒で用語の煩を節していた。日がな一日、たゞその日だけの会話で明け暮れし、人の出入りは、入江の波の寄せ返すようにはかなく移しかった。どこから来たか、そしてどこへ行くのやら、誰も知らないし、聞きほじるものもない。よほど親しい間柄でさえ本名を知り合っていない。

そんな渡り鳥の群にも、階級だけは厳しかった。幹部の優越はすべての立居にまで及び、殊に座長格の南雲ゆかりともなれば、どんな我がまゝな命令でも殆ど絶対であった。

新入りの長尾などに自分の意志のあろり筈もなく、たゞ他人の間はぶきの仕事だけがあった。山さんに従って、道具の出し入れを手伝うほかは、殆どが俳優たちの雑用で、それには長尾のほかに、

少し足りなくて盗癖を噂されているえて子が使われるだけだった。

誰も旺盛な食欲を出番までに楽しんでるのだが、ゆかりもその例にもれなく、えて子に汗を拭かせながら、長尾に買わせたサンドイッチをちぎりちぎり文度をしたりした。出に間に合わなくなったりすると、「サム。上げるよ。」と食べかけをぐいと長尾の口に押込んで行く。勿論、楽屋人種には、リングの齧り廻しや、吸いさしの喫み廻しなどは、茶飯事であったが、ゆかりのそんな時の気持は、分けてやると云うより、狭い部屋には置き場もないし、ひねくれっ娘のえて子よりはサムを、ゴミ捨て代りに使い易いと思うようであった。

朱いゆかりの唾のついた食べかけを銜えながら、白い乳房を見上げるのにも「サム」は数日で慣れてしまった。客席の時のような激情は、手の届かない支配者のような乳房には起りよう筈もなかった。そのうちにゆかりは、サムに股化粧までさせるようになった。

誰もそんな事に平気でいるらしく、ゆかりの用に忙しい長尾を撮えて、小まちゃくれの売り出し娘が、

「よう。サム。靴下取ってエ。」と云いつけたりするが、年下の娘に気楽に「はい。」と返事が返えるほど、サムの階級の低さは楽屋で最たるものであった。

舞台の袖でも、素人のサムには、小道具の直しものぐらいが関の山で、時々踊子たちが通りかけに、

「サムちゃん。これ留めといて。」

と、ハイヒールの掛け金の修理を頼んで行く。ゆかりは、よく楽屋草履の花緒をすげさせた。

「もっと強くしめなきゃ駄目じゃないか。」

と切れのいゝ眉をひそめながら、足をにゆうっと突き出して見せる。サムは黙ってゆかりの足を、自分の膝に抱え込んで仕事を続ける。

そんな時もゆかりは足を預けたまゝ、サムなどは眼中にないかのように、山さんと極どいいちやつきを振舞って見せたりした。

そんな生活に慣れてゆくと、劇場を一步出た社会の渦は、旅立たふるさのように遠まっつて了う。もう自虐の裏から、こみ上げて来る叛逆も、静った長尾の血のなかには残っていなかった。たとえそれが最低の故であろうとも、競争のない平和が、浮動しやすかった精神を安めて呉れていた。いわば長尾の平和は、社会の沼の底に近い舞台裏の、そのまた汚滓に沈みきったところに醸されている平和なのだ。沼の底の雑魚たちにさえ、闘争の哀しさは纏っているのに、更に一段下の長尾は、その渦にふれずに済んでいられる。そして雑魚の立てた波のあおりの間に間に、底へ底へと淀んで行けばよいのだ。

ゆかりの踊りはタムバがよく受けた。忙しいリズムなので、勢よく舞台に飛び込んでゆくために、階段仕立ての張り物の裏に踏み台が用意されていた。

それを長尾がうっかり揃え忘れたとき、

「サム。踏み台。」

とゆかりのカン高い声が、とりわけ焦立たしげであったので、ハッとしたが楽団はもう前奏を始めている。サムの長尾はとっさに袖に飛んで行き、

「南雲さん、これ。」

と云って、板敷に四つ這いになって背中を見せた。

「ふゝゝゝ。」

ゆかりは面白そうに笑いながら、長尾の背にすっと乗った。きっかけまでの足踏みに、片方の足の裏で長尾の首すじをピタ／＼叩きながら、

「サム、こんど一遍舞台へ出してやろうかしら、こんな格好を本にしたら、きっと受けるよ。」とゆかりが褒めてくれた。

「そんなこと、先生に云わないで下さい。追ッ出されちゃうと行くところがないんです。何んとしても貴女にはトチらせませんから」哀れっぽく長尾は、下から女に頼んで見せた。

「ふゝゝゝ。いゝわ。黙っててあげる。その代り、サム。あたしの云う事を何でも聞くな。」

「はい。」

素直に首肯くと、長尾は、新しい主従の契りが結ばれたような喜びを、背中の中の重みにひそかに感じていた。

一月もたつと長尾は舞台係に廻された。

「奈落」と呼ばれる舞台の奥の穴に入って、プロムプターを勤めたり、フットや遠見のスイッチを調節する係りであった。コメディの時だけの仕事なので、合間には相変らず雑用をやった。

コメディは大体笑いとエロを織り交ぜて刺戟的な緊張をほごす目的の番組であったので、ゆかりの踊りにも自然軽快なものが選ばれた。それでも、引ッ込みの時に、バタフライを両手で抑えながら一わたり客席にあの悩殺的なスマイルを振りまくと、次のコメディアンがやりにくい程に、観客は顔を硬ばらせて了う。

芸人は誰でもそうだが、ゆかりも特別芸に対しては利己的で、客たちの受けを一手に集めて了いたい方なので、楽団や照明にうるさ

く注文立てをして、引込みの時にそれらの効果を低く暗い調子にするように云っていた。

芝居感覚などまるでなく、第一興味さえない長尾には、ゆかりの厳命も残念なことに自分のセンスになって来なかった。

フットのしぼり方が遅かった時終幕にのそくと這い上って来た長尾が、奈落から顔を出しかけると、待ち構えていたようにゆかりが、

「この、馬鹿野郎！」

と罵りざまに、黒靴の先で長尾の顎をしたゝかに蹴った。予期していなかっただけに、奈落の底にどんと逆もどりしてしまった長尾を、のぞき込む様にして、ゆかりは激しく浴せかけた。

「バカ、あれ位の切っ掛けが覚えられなくて、

照明なんかやれると思うのかい。私がバタを覗かせるんでお客がしーんとするんじゃないか。みせっ広げじや引込みがつきやしない。今日みたいに明るくされたんじゃないや滅茶々だよ。

仕様がなから、機転きかして踊りを交えたんじゃないか。あたしだからそれも出来るけど、他の子だった日にゃ恥っかきになっちゃうんだよ、お前なんざ、泥んこになつてりやいゝんだから解りやすまいけどね、あたし達は、伊達や粹興で踊ってんじゃないよ。人氣商売なんだよ。お客の受けがわるかったら、それだけ売れなくなっちゃうんだよ、いったい仕事を何と思つてんだ」

ゆかりは一息にまくしたてた自分の口振りに興奮をつのらせて、何かもぐぐと唇の先を震わせていた。うまい罵り文句が出て来な



いので、一層いまくしそうに顔を引つらしていたが、泥だけのサムの額がむやみに厭らしくなって、きっとした眼ざしになると、

「これでも、喰いやがれ。」

と怒鳴りつけて、首を振り上げるほど力一ぱいに、ペーっと音をたて、サムに顔を浴せかけた。

余りの権幕に、思わず真青になるほどに憶えながらも、顔にかゝったゆかりの痰がまるで生きもののように、ねっとりゆかりの体温を伝えるのを感じると、こんどは胸がどきどきと波打ち始め、更に苛烈な刺戟を期待して、暗いなかで、長尾は瞳をキラキラと輝かせていた。

山さんが驚いて飛んで来て、

「サム。出て来て早く謝んな。ゆかりちゃん、どうも済まねえ。何ね、打合せがしっくりしなかったんで。」

「おや、お前が謝る筋合いでもあるのかい。何をこの頃逆せ上ってやがんだい。あたしゃお前なんぞ揶揄い半分に。」

とゆかりが云いかけると、山さんは急におろくと、

「ゆかりちゃん、わかった。わかった。おれは何にも云わねえからよ。あんたの気の済む様にしなよ。」

と引込んで了う。

「ふん、色男振りやがって。」

とゆかりは、山さんの背中にも八ッ当りする始末だった。

やっと這い出した長尾が、ゆかりの足もとにひれ伏しながら、

「済みません。ぼんやりしてました。これから一生けんめいやりますから勘弁して下さい。」

と汚れた顔をべたべたと板敷にすりつけるのにゆかりの声は冷やかだった。

「サム公。いゝ加減にしとき。謝ったってダメだよ。あたしゃ今度

は先生に云って追ッ出しちまうからね。お前みたいな何処の馬の骨だか知れない愚図を誰が使うもんか。」

「許して、それだけは、どうぞ、それだけは許して下さい。こゝを離れたら……私は、それだけは。」

長尾は膝をがくがくさせながら、にじりよるように必死に頼んだ。唇がわなわなと震えて来た。

(以下次号へ)

文献的価値を高価に評価されております本誌を、何卒欠号のないよう皆さまの本箱へきれいにお揃え下さい。

奇譚クラブとKK通信の旧号在庫

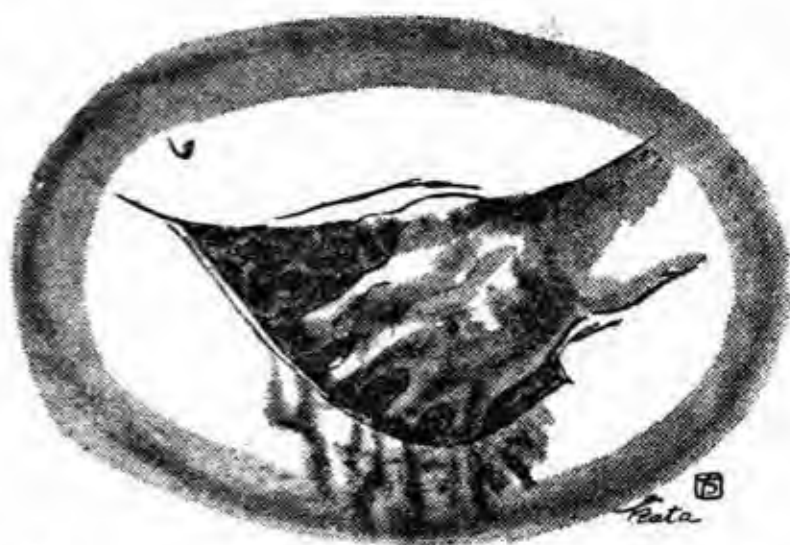
本誌のバックナンバーはお買い洩れの方々の為に、左記の通り在庫いたしておりますから、御入用の方は直接発行所へ御申込み下さい。尚、旧号の総目次は、新年号並に四月特大号誌上に四頁に亘って掲載してあります。内容の豊富を誇る本誌は、一回の休刊もなく、毎月確実に発行されておりますから、是非お揃え下さるよう御申込みをお待ちいたします。

○ 奇譚クラブ ○

昭和二十七年、十月号、十一月号(一部送共九十円)十二月号は売切、九月号以前も売切、昭和二十八年新年号より昭和二十九年九月号まで、各月号共在庫(一部送共百円)昭和二十九年十月特大号より昭和三十年四月特大号まで(各一部送共百四十円)六冊分以上まとめて御申込みの方へは景品贈呈いたします。

○ KK 通信 ○

第十五号より第二十三号まで各号在庫(一部送共二十円、六回分送共百円)KK通信は第二十三号迄にて廃刊になっております。



我が倒錯の系譜

「悩ましき切腹悲願」について

児 島 輝 彦

奇譚クラブのような雑誌を読み、その中に自分のと類似した手記告白などを見出した時の感激は何とも形容し難いものである。

自分の異常が甚しいものであればある程、精神的な救いは大きいものであると思う。

私が「切腹願望」などと云う世にも奇妙な執着を拙い筆で綴ってみたのも、自分の露出慾を満足させたいばかりでなく、若しや多くの読者の内に同じ傾向の人が一人位居るか知らんと云う淡い期待もあった訳である。

私の期待は裏切られなかった。御承知の如

く多くの同好者の赤裸々な叫びに答えられ、私も孤独に悩み続けた過去に較べて現在は幾分の慰めと安らぎを得た。

しかし乍ら、私という人間は何と複雑な性格の持主であることか。一人静かに沈思する時、私の内部には未だ報いらぬ他のもろもろの異常願望が表出を求めて号泣するのが聞えるのだ。

私はあの「悩ましき切腹悲願」の告白に続いて第二の告白をしなければならぬ。

偶々二十九年十二月号誌上に発表された青

葉氏の「脱衣症患者」を読んで、此の思いは一層掻立てられた。あの告白記は私の願望によく似ているが、また幾分異なる点もある。

私は独自の「裸体狂崇」に就いて最初に述べようと思う。

思春期——誰しも一度は通らねばならぬあの好奇と懷疑と悦びと怖れと光と影とに満ちた不可思議な時期に、私の心を捉えたのは自分を含めた同性の裸体であった。(切腹への興味はそれより数年前に始まっているのだが)私は同性の裸姿に激しい魅力を感じ始め、

自分が裸になったり、また友人の裸を見たりするのが、とても快く感ぜられた。(異性は当時の私にとって全くの異邦人に過ぎなかった) 私には殊に真夏の季節が待遠しかった。キラ／＼する陽光を浴びて上半身裸体になって跳回る体操の時間の楽しさ、黒猫褌一本になって波に戯れる海水浴の爽かさ、緑の木蔭で真裸になって体を拭く青年を垣間見る心の昂り、それ等は私の願望を僅かに満してくれた。しかし此の素晴らしい季節も束の間に過ぎ去ってしまう。

休みの日毎に、私は独り近郊の山中に分入り、人目を忍び衣服をすっかり脱いで真裸の快味を楽しむような事が多くなり、家に居ても一人留守番の夜など、姿見に一糸まとわぬ裸身を映して色々と体をくねらせ、腹切りのまねなどして、ナルシスの悦びに恍惚となつた。しかし此のような戯れには何か晴々しい暗さと後めたさが必ず伴っていた。

私は白昼の太陽の下で、多くの若人と一緒に真裸になって思う存分跳回りたい願望を秘めていたのである。一糸も着けぬ全裸体に油を塗り美事な肉体美を誇示しながら競技を行ったという古代ギリシヤの青年達の姿こそ私の憧れの的であった。

当時(昭和十二、三年頃)新聞で報道された諸外国の大らかな裸体主義運動は古代の夢を現代に再現したものととして、私にとり驚嘆と羨望の的であった。

「夏の休みは素裸で」という見出しのイギリスに於ける裸体生活運動、そこでは「男も女も一定の期間一糸も纏わぬ裸の生活」を楽しんでいた。(イギリスの此の種の運動に関しては「裸体礼讃」という訳書にその理論と実践が余す所無く述べられている。)

しかしこれは一般社会と隔絶した一郭で特定の会員が享受するという制約があり私の夢みる完全さではなかった。

(裸体生活はアメリカでも今盛んに行われているようで戦後公開されたエリジャンという記録映画を見た人は多いだろう。)

更に素晴しく私の理想に近かったのは、ドイツに於ける青年隊の若人達で、ヒットラー治下の此の国では、「山上の湖畔などでは幾多の青年男女が一糸も纏わずに嬉々としてスポーツを楽しんでいる」と報道されていた。

さんさんと降りそぐ夏の陽光を浴びて、逞しい白晢の裸身を躍動させて戯れる若人達の姿、自分もその中の一員となつて思う様に振舞う姿を想像すると堪らない気持になるの

であった。

裸体生活運動に就いては、欧米諸国で昨今も盛に行われている様子でその方面の雑誌で *Physical Beauty* という写真雑誌があるそうだが、見たいと思っているが未だその機会が無い。

我が国でも此の運動が行われたらと思うのだが、此の国のように肉体や裸身に関してやり切れない偏見が支配している所では望むのが無理であろう。

「切腹」の空想も快く私の血を沸かせてくれるものであったが、しかしそれは一種の暗さが必ず付きまといていたし何よりも余りに現実離れしている。我が空想劇場では華麗で凄惨な切腹劇が歌舞伎の名作の如く上演されていたが、その合間には新傾向の裸体劇が登場し、作者も観客も陰惨な気分から解放されて幾分ほっとした気持になった。

その内容は例えば次のようなものである。大都市の郊外、緑の樹木に囲まれた丘の上の明るい近代建築、これが我が〇〇裸体文化学院である。空想は、そこを訪れる雑誌記者の驚きに満ちた手記という形で展開される。

記者は先ず高さ数メートルの大理石全裸青年像を組合わせた校門の壮観に圧倒される。

正面より入って案内を乞うと一人の青年が現れたが驚いた事に彼は身に一糸も着けていないのである。直ちに応接室に通されるが此の裸の若者は、明るい微笑を浮かべながら、此の学校では職員も生徒も皆全裸体で、従って見学者も全裸体になる規則である旨を語る。

止むなく素ッ裸になった記者の前に、程なく此の学院の創立者で校長でもあるA氏がこれまた真裸で姿を現わした。A氏は著名な彫刻家で男性美礼讃者殊に臍の美を強調する人として有名であるが、古代ギリ

シャに源を発し西欧文明諸国に継承された肉体讃美が本校の創立精神で、全国民が裸体主義者となり健康にして偉大な民族となる事が終局の理想であると説いてくれる。此の学院の教育は一般教養科目の他大部分が体育と裸体美術が占めており、卒業生は体育美術の教師として裸体主義文化を全国に広める使命を持つ。その為に費用は一切学校側が負担するが、入学試験は厳重で肉体・頭脳容貌ともに卓越した美少年が選ばれる。記者は

色々の予備知識を受けて愈々学生達の真剣な学習の姿を見学することになる。芝生と黒土で美しく整理された校庭では今徒手体操が行われている。ずらりと並んだ裸々々、一糸も纏わぬアドニス如き美青年達が若々しい声を揃えて行ふ体操の壮観さ、豊かな胸、潑刺たる腰、そしてよく発達した四肢の逞しさ、男性美の極致だ。

一方では種々の陸上競技、マラソン中跳、棒高跳、円盤投等が行われており、裸の全身



を思い切り大空に躍らせる若人達の皮膚には淋漓たる汗が流れ、それが筋肉の動きを更に美しく輝かせ黒々とした体毛さえもキラキラと光って少しも汚い感は無いのである。また一方ではラグビー競技が開始されようとしている。あの激しいスポーツに全裸ではと気づかう記者の傍で、A氏は心配無用その為には私の考案したA式体操褌というものがあると云う。しかし青年達は一向それらしい物を着けている様子はない。傍に寄ってよく見ると

成程と感心した。それは合成樹脂で造られており全裸の自然美を妨げぬため無色透明なのであった。ホイッスルと共に展開された全裸の青年達の文字通り肉弾相搏つ激闘、汗に濡れた素肌がぶつかり折重なる爽快な男性美に記者は殆んど我を忘れて体を熱くして見守る。

その他、水泳、レスリング、相撲(褌をつけずにやるので殊に変った面白味がある)等あらゆるスポーツを見学した後、今度は教室の方に導かれる。美術の実習では生徒達が交互にモデ

ルとなり絵画彫刻写真等が製作されている。

やがて黄昏も迫り、彼は選ばれたる裸体文化の担い手達の潑刺たる姿に深い感銘を覚え乍ら立去るのである。

ベルリンオリンピックの記録映画「民族の祭典」は今でも記憶している方も多いかと思うがその初めの部分の画面は実に素晴らしいものであった。古代オリンピックの数々の遺跡が夢の如く展開され、続いてオリンピック競技者の著名な彫像が次々と現れては消えて行く。有名な円盤投の像が後向の姿から忽然と血

の通った柔い肉体に変わり滑らかに弧を画いて円盤を放る。正面に向直って全身を伸ばしたときの若々しい裸身の美事さ、殊に形の良いヘソを中心とした腹部の美しさは印象的であった。続いて豊かにうねる麦(?)の波に向い背向きの全裸の若人が、両脚を踏開き身を左右に振らせて手に持った何かを打振る姿が現れる。その背中から腰、腰から臀部、臀部から太腿へかけての筋肉の動きにも忘れ難い美



感を覚えた。それ等を見た時の驚きと悦びの大きかった事、大胆にも写し出されたそれ等の数分間の画面を見たくて、私は乏しい小使いを費して三度も映画館に入ったのである。

私は十五六才から二十才台の青春期の男性の肉体を女体にも勝る最高の美と信じているが、今でも印象的なのは中学の頃野外演習で兵舎に泊った時のことである。

日が演習場の広野の彼方に没せんとする頃

であった。若々しい新兵達が上半身裸体となって掛声勇ましく体操をやっているのが私の目に入った。二十才を越したばかりのしかも現役入隊の健康美あふれる青年達が何れも筋肉隆々たる若肌を汗にぬらして体操している。

それが夕日を受けてつやつやと光って躍動する筋肉の動きに私は不思議な美感を覚えて全身が熱くなる心地がした。

若い男性の裸体が汗にぬれて躍動する時こそ最高の芸術品が最大の美しさを示す瞬間だと思ふ。

軍隊についても一つ書留めて置きたい事がある。それは日本の過去に於ける徴兵検査の風習である。適齢となった青年達は嫌応なしに検査を受け、その結果彼の肉体について種々の評価を与えられてそれぞれの御奉公を命ぜられるのである。体の隅々まで余す所無く人目にさらされる恥しさに検査場から逃帰った無垢な青年の話も聞いた事がある。

しかし最も私の関心の的であったのは、検

査場によっては往々にして、大勢の壮丁達を最初から裸まで取らせて全裸にして集めて置き、口答的な試問までその姿で受けなければならぬという習慣であった。

確か昭和十五年頃の陸軍画報にも、そうした徴兵検査場の大きな写真が出ており、胸をときめかして見た記憶がある。また職業軍人を製造する陸士や海兵、さては幼年学校の入学検査も此のような方式で行われていたようで、中学時代、その試験を受けに行った学友からその模様を聞いたことがある。

私自身の徴兵検査の場合はそんな風なもので無く期待外れであったが、そんな光景を目の当りに見たらさぞ壮観極まるものであらうと思う。人生の花盛りとも云える満二十才の若者達が、逞しい内にも未だ少年の柔かさを秘めている美しい肉体をすっかり顕わしてズラリと並んでいる姿、恥しそうな顔を見せじと堅く口を結んで頬を染めている若々しい顔立直立不動の真裸の緊張美、これ等は軍国主義を警戒し再軍備に反対する私にとっても、ほのかな旧日本への郷愁をそよめるものである。また戦時中に流行したミソギにもやはり裸まで外して行うやり方があるそうだが、知っている方があったら詳細を教えて頂きたいと思

う。

巨匠ミケランジェロの製作にかゝる種々の男性裸像には私の好みに合うものが多いが、中でもダビデ像は実に素晴らしいもののようにある。(写真でしか見て居ないので)

写真と云えばヌードの方は女性と決っているのは何とも割切れない不満を覚えていた。しかし女性ヌードでもアンドレ・ド・ヴィンズの作品などで、裸女が森や野原で跳躍しているものには一種の魅力を感じるのは何故であろうか。恐らくこれは、一つにはモデルの四肢が伸々と発達しており、男性的とさえ云えるような肉体を所有しているのにも依るが、私の場合はどうも「大自然の中に躍動する全裸の若人」という組合せに限りない愛情を覚えるらしいのである。

大古、全裸体で山野を駆巡った祖先の血が私の身に流れていて此の不可思議な裸体狂崇となつてゐるのかも知れない。それから常にキチンと衣服を着けることを余儀なくされてゐる我々には、着物を皆脱棄して自由な裸になりたいたいという願望がひそんでいるに違いないし、子供が裸になると大悦びするのもこれと関連性があるようだ。

酒席で裸踊りを始めるくせのある人も、或

は此のような願望を発散させているのかも知れぬし、本人の方はさぞ爽快な気分になつてゐることであろう。

私が最近読んだ或る非公刊誌の次の一節は私を大いに昂奮させた露出的場面である。

——私が雇われている船主の息子である大学生が帰省した一日、幼友達二、三人と温泉宿で酒宴をした折、羽目を外して飲んだ果に彼はツと立上ると、いきなりシャツやパンツをぬぎ捨てて真裸の儘、朗々たる美声で「大軍突如風雨来ル」と白虎隊の詩を吟じ乍ら、剣舞を舞い初めたのです。元来美男子である此の大学生の均整のとれた裸体の武者振りは、皆から讃歎の拍手を得たのは当然で、偶然、すみっこの方に列席していた当時十五才の私はその桃色の肌と立派な男性器を飾る漆黒の陰毛とに魅せられて、全身しびれる様な感じになりました。(後略)

此の男性的悲壮美の溢れる勇姿に憧れて剣舞を習った彼は数年後、一人の美少年を恋し誘惑する手段としてその前で裸剣舞(真裸で白鉢巻を締めるだけの白虎隊の剣舞)をやつてのけ、美事に本懐を遂げるのである。

私はこれを読み乍ら思わず昂奮してしまつたが、全く素晴らしい事実であり、事実は小説

よりも奇なりというのは此のようなものをいうのであらう。

私の空想は新しい材料を得て更に高まって来る。それは西南戦争に敗れた薩摩の青年達でも良い。明るく晴れた南国の丘の上だ。その人数は奇しくも白虎隊と同じ十六人、今こゝに健児の最期を飾る奇抜な方法をあれこれと考えた末、はたと思ひ当った素晴らしい思ひつきに青年達の頬には会心の笑いが浮ぶ。

やがて展開される前代未聞の光景、見よ彼等は一齊に着て居るものを悉く脱ぎすて、真裸、身につけるものはたゞ一片額に締めた白鉢巻のみ、右手に抜持つ白刃、音吐朗々と白虎隊の詩を吟じ乍ら白昼、屋外集団裸体剣舞が始った。あたりに漲る男性美、悲壮美、裸体美、露出美、舞は次第に終りに近づいて行く。

一際高く、青年達が声張揚げて吟ずる声！「十有六人腹ヲ屠ツテ斃ル」その瞬間、逆さにされた白刃の先は銘々の手で、真裸の下腹部へ、ズブッ！ズブッ！と突込まれた！苦痛をこらえて臍の下二寸ばかりの高さをぶりぶりりと音を立て、掻切る壮烈さ、鮮血を青草の上に撒きちらし、薩摩健児の最後はこうぞと疵口から腸を手繰り出して地面に叩

きつけ折重って突俯す逞しき裸身、……

私の裸体狂崇の特異性は以上のように、野外で、しかも真昼間、大勢の若人と一緒に真裸になって戯れて見たいという願望なのである。要するに甚しい露出慾と誇示性が見られる。切腹願望にしても室内で人知れず自刃するとか、また衣の襟を僅かに寛げて切腹するという様なつまましいものとは丸で異り、多数の見ている処で、諸肌脱棄して腹の辺を充分に露出し下腹部も腿の附根までこれ見よがしに出して、勇士の切腹よく見て置けとばかりに、下腹部を深々と切開く、更に両腕を疵口にずぶずぶと突込んで腹部内臓をガバツと掻出すという凄惨なものである。（私に言わせると腸の出ないようなものは切腹の名に値しないだらしないものだ。）

私の露出願望は更につづいて来て入浴中又は就寝中を兇漢共に襲われて、真裸の姿で奮闘した末に、腹深々と十文字に掻破って腸をずるずると引出すような空想をすることもある。（昔は此のような実例もあったようである。録にもあるが現代ではとても望み得ない空想である。但し、支那事変の際、渾一本の姿で決死の架橋作業をやっていた工兵達が敵の重囲に陥り銃剣を銘々の腹に突立て、折重って

斃れた例があり、これは新聞に大々的に報道された。

以上述べたように私の願望は殆んど空想だけに留まっているが、ただ一つだけ恥しい経験がある。それは私が未だ二十才にも達しない向う見ずの年頃のことである。当時寮生活をしていた私は自分の真裸の姿を人目に晒した衝動を遂に抑え切れず、或る朝の事、往来から見える位置の窓を開き、全裸体になって外に背を向けて窓に腰をかけて待っていた。通行人が一人二人あったが気づかずに通過ぎてしまったので失望していると、やがて三人の中年婦人が何か話合い乍らやって来るのが見えた。それで今度は窓際にある机の前に立って上体を曲げ、丁度朝起きがけの青年が往来から見られているのに気づかず、机の上の物を取ろうとしているような姿勢で待っていた。（就寝時一糸纏わぬ裸になる習慣の人は往々にしてあるので）私の全裸の姿は往来から見える位置にあった。

胸躍らせて待受ける私の耳に何やら驚きの声が入り、続いて「わは、おは、おは、」と高笑いが聞えた。思わず頭を上げた私の眼に三人のおばさん達が指さしながら笑い合っている光景が映った。咄嗟に私は両手で前を



抑えて姿を隠したが一種異様な全身しびれるような感じであった。恐らく彼女達の眼には少年の不用意に演じたストリップとして映り好箇の話題となったであろうが、何んぞ知らんこれは一露出症者の意識的演技であったのだ。思えば若気の至りで二度と此の様な事はする気はない私の露出慾で特徴的なのは、他の多くの露出症者が肉体の特定部分を人目にさらすのを望んでいるのに対し、衣服を脱棄した真ッ裸の肉体の全部を見せる事に絶大の快感を覚える点である。

次に切腹に関して

もう一つの経験がある。私は今までに、色々の切腹画を人知れず画き続けて来たが、勿論これは私の切腹願望のはけ口である。従ってこれが亢じて来ると、多衆の面前で切腹したいと云う露出慾は、自分の画いた切腹絵を多数の人に見られると云うことにそのはけ口を見出す事になる。私が奇ク編集部に拙い絵をお送りするのも、これを多くの読者に見てもらい、それに依って恰も自分がそれ等の読者の前で切腹しているような気待になる為である。しかし私が一番希望しているのは、純真で感受性の強い思春期頃の美少年が私の絵を見て起すであろう反応を此の眼で見、此の耳で聞くことである。私は次のような犯罪を思い立った。

中学高校の生徒達が数多く乗る短区間折返しの列車がある。私は自分で画いた凄惨な彩色を施してある切腹図を一寸四方位に折畳みこれをポケットに忍ばせて早目に改札口を通る。そして座席の少年達の坐りそうな所にそれを落して置き、自分は近くの座席に腰を下し、わくわくする気持を静めて待っているのだ。やがて少年達がドヤドヤと乗込んで来て彼の座席に腰を下す。其の内の一人が紙片を見つけて拾いあげ何だろうと展げかゝる。他

の少年達も好奇の眼で覗き込む。その極彩色の切腹図が彼等の前に展げられたとたんに、「あー切腹だ!」「え?切腹だって?」「うわッ、すごい!」「腸が食み出してるぞ」「嫌だなア。」「血がこんなに出るのかなア。」「誰が画いたんだろう?」「こいつ、切腹しながら笑ってるぞ!」「凄いだねエ」「あ!こっちは男と男がキッスしてるや」等々の驚きに満ちた声が私の耳に入り、また彼等の興奮する様子が眼に映るであらう。そして恐らく私は頬がカッカと火照り胸は早鐘を打続け、居ても立ってもおられなくなるだろう。しかし私の数回の試みは失敗に終わった。

或る時は闇屋風の男の大きな荷物の下になり、或る時は醜い中年男の靴先で腰掛の下に蹴飛ばされてしまった。私の望むような少年がその場所に腰を下した事さえも無かった。

一度中年の無教育そうな女が拾い上げて展げて見たが、「うー氣持が悪い。」と一言吐きすてるように呟いて、くしやくしやに丸め窓外に放り棄ててしまった。私の丹誠した数枚の画も空しく埋れた。私は失望し、完全に打のめされ、後悔と自己嫌悪すら覚え、もはや此の様な愚かな試みはすまいと決心したの

であった。

私の裸体狂崇と露出慾は大体以上のようなものであるが、これに関連する様々な倒錯の系譜を簡単に遊べて見たい。

私の切腹幻想で二つの大きな条件があり、一は美少年との愛慾に絡るもので、他は君の為とか国の為とかの理由によるもので、此の例としては歴史上の様々の殉死追腹・村上義光・堺事件の勇士達・白虎隊・神風連・大東塾等のようなものである。君国の為に切腹するという事に絶大な快美感を得るなどと云えば誰しも私を封建的保守的な人間と思うだろうが、事實は正反対で日常生活では中々に進歩的であるし、封建的・逆コース的なものに右翼などは大嫌いだである。(支持政党は革新派の内でも左の方である)自分でも此の氣持は何とも不可解である。

切腹以外で私が大いに興奮するのは、落城等の際、城中の若武者が鎧を脱棄て上半身真裸で群る鎧武者を相手に髪振乱し血塗れになって奮戦する場面、彰義隊の若侍が稽古着に縞の袴で西国兵に取囲まれ斬死する場面、若侍が禪一本の姿で磔にされる場面、若侍と美少年侍が肌脱ぎになって気合諸共刺違える場面、美少年が磔柱にかけられそれを若殿が弓

で射る場面(此の場合的中心は臍で磔柱も腹のうしろの部分は何も無く矢が背中へ突抜けて飛出してしまふように作られている。)また木工用の丸鋸の刃を盤の上に二寸程出し其の上に腹ばいになったら丁度切腹と同じ様だろうと想像した事もある。

また額にキリリと締められた後鉢巻が何とも美しく感ぜられ切腹の真似をする場合は大い白晒の鉢巻を着ける事にしている。(戦争物の場合は日の丸鉢巻が良い)

青少年の禪姿にも大きな魅力を感じるし、また六尺禪をきりッとした締めた時の腰・下腹・股間の緊縛感切腹の悲壯感に似るものがある。但し私の禪についての関心は肉体が多く露出される点にあり、山口氏程に強い執着は無い。むしろ私は裸体の場合にきっちり腹を巻括った腹帯に激しい魅力を感じるもので、例えば十二月号の「百合子の冒険」の絵でヒロインが白布を腹に巻いて短刀を腹帯に挟んだ姿は魅力的であった。以前東洋史の教科書で禪に腹帯の姿で刀をかざした倭寇の絵を見て何となく憧れに似たものを感じたのを覚えている。時代小説などによく薩腹という事が出てくるが、「押肌脱げば血潮の腹帯」という形容に示されるように固く腹に巻いた晒布

が真赤に染っている美観も捨難いものである。

大分前に、講談本で腹切帯というものを讀んだ事があるが、如何なるものであろうか。形状・使用方法など知りたいものである。

自分も戦国時代に生れて落城の折などに群り寄せる敵勢を相手に大肌脱ぎや褌に腹巻という姿で黒髪振乱して奮戦した果に、腹をズブズブと掻割いて腸を手繰り出して死んだらどんなに快いであらうなどと想像すると、激しい感情を覚え堪らなくなってしまふ。

そして何時か讀んだ「切腹曼陀羅図」の中にもあったような「私は時代を誤って生れ

て来てしまったのだ」という詠歎にしみじみとした同感を覚えるのである。

最後に以上に述べた私の様々な倒錯の系譜を系統図として示して見ると次のような物になる。私独自の自己分析によるものだが別に説明は要しないだろう。

内因

ナルチ↓露出慾↓裸体狂崇↓褌・シズム↓同性々慾↓美少年趣味←腹帯サチズム↓自虐慾↓切腹願望←美少年との切腹心中刺違え願望

外因

フアシズム（追腹精神）↓切腹願望ヒロイズム（鉢巻精神）↓腹部性感→

註・フアシズムは広義のマゾヒズムであるまたヒロイズムは往々にして露出的ヒロイズムとなる。褌・腹巻・鉢巻の緊縛感切腹の悲壯感に通ずる。

以上で私の「第二の告白」を終る。以前掲載された「悩ましき切腹悲願」と併せて読めば私の倒錯心理の全貌は先ず余す所なく理解出来るかと思う。

私もこれで胸中のモヤモヤをすっかり吐き出してしまつて何かしらほつとした気持である。今後はなるべく冷静な観察者の立場に自己を置いて、切腹心理の一般論とか切腹の随筆のような物を書いて見たいと思つてゐる。



——質問歡迎——

欽義先生医学

相談欄

回答者

欽義先生

欽義先生様。

私は今年二十三才になります。家庭にあって主に家事裁縫に従事しております。昨年来貴誌を秘かに愛読して参りました。そしてこの欄を知り、自分の秘密を打明けて先生よりの診断を受けたいと思ひ、筆を執る決心を致しました。私は性格的には陰性で、第三者の方々からは穏和な方だと言う評判を聞いております、然し、これは単なる外見で皮相な観察に過ぎないと思つております。私は現在まで夜尿症が治りませ

ん。幼なかつた頃から小用が近くその為に学校に参りましても、長時間小用を我慢し辛抱することが出来ず、つい下着を濡してしまふことになるのでした。この為、長時間の会合などには不安で落着がなく、従つて普通のとときよりも多くお便所に立つと言う始末です。母は潔べきな性質で私の性格とは正反對で私が粗相すると激しく叱責しお尻をぶったりしました。その為には私は夜就寝時になりますと、今夜も洩らさないかしら？と言つた精神的な恐怖に襲われ、

仲々寝つかれず、寝つくと尿をもらしてしまふのです。

私のこつと言った夜尿癖が治らないのを知りますと、母はすべてをあきらめて愛情らしいものは私の心から去ってしまった様に思えます。次第に私は自己を他人からかくすようになり、完全に自己のからの中に入ってしまった。成長するにつれて劣等感が強まり、自己を被虐する様になりました。友達や他人から見れば私は随分しとやかに見えるかもしれせん。でもそれは外見だけであつて、他人の胸中までは透視することは不可能です。差しい病氣では結婚さえ出来ません。因果な病氣だと考え込んでしまいたくありません。私は神経質で余り肥満した方ではありませんが、身体は丈夫です。夜尿症は学校へ上ると自然に治るものだと言ふことですが、私の様に年のいった者は治らないのでしようか。就寝前には極力水分の摂取を控えていますか……。

知つたのですが、大阪藤本医療器KKで新しく出来たとか、住所が不明で照会が出来ないのですが会社の所が明らかでしたら報らせて頂きたいと思ひます。が有る様でしたら知らせて下さいませ。夜尿症を克服する基本的な事柄も同時に教下さいませ。

私の様な不幸な女性がこの世に居るのでしようか。楽しい青春も憂うつで夜の恐怖に襲われ、毎日を不安に暮している私に対して、先生よりの回答をお待ち致しております。何分書き足らぬ点もあることゝ存じます。その段はお許し願ひ度く存じます。この文が貴誌の主題に直接関係してない様な気が致しますが、その点了解して頂けるでしょうか。(木村秀子)

回答

夜尿症は、これを治療せねばなりません。即ち、尿道結石、膀胱結石と云う局所に石のたまる病氣がないか、又寄生虫、腎炎等がないかどうか、此の点に就て尿及糞便の検査を受ける事が必要です。生れつき尿道狭窄のある人が、局所の刺戟過敏症によつて夜尿を起す場合もあります。

次に、恐らく大部分の人が有する原因としては、神経夜尿であり、神経過敏な人が幼い頃ね小便をする。これを親が叱る、子供は大変恥かしく思う、斯う言つた繰り返しがすっかり子供を神経質にさせてしまつて、夜尿恐怖症に陥入ります。貴女の場合は此の神経性の夜尿症ではないかと思ひます。

勇氣をつけてあげましょう、有名な偉い人で夜尿症のあつた人々は沢山居ります。その中でも坂本竜馬、夏目漱石、幸田露伴などと言ふ偉い人々が夜尿症を持つて居たのです。たゞ少年時代にあつた夜尿症が、二十才位つゞいて居ると言ふ点に於て、少し貴女と異なるかも知れません。それは貴女が女であつて、人にも相談せず独り秘かに悩んで居るから癒らないのだと思ひます。斯く言う欽義先生も

小学三年生位迄、時々失敗して大変恥かしく思つた事もありました。私の母親は決して叱らなかつたし又恥かしめなかつたので、成長と共に自然消滅してしまひました。

次に専門的治療法は省略して自宅で出来る方法をお教へします。毎日午後、水分は余り取らないとか、就寝前放尿するとかは当然の事ですが、夕刻、或は就寝前に食塩を服用すると水分が腸内に誘引されます。又寝床の下半身を高め膀胱頸部の刺戟を少くする。ペッドは固くて薄いものを用いる。上布団を薄くし横向きにねる。その他全身皮膚の練磨、冷水摩擦、乾布摩擦等によつて健康の向上を図る。精神、神経症の治療をして貰うには組織療法など好ましいものです。

斯う言つた自宅療法に効果が無い場合は、本當に勇氣を出して専門医に診て頂きなさい。あやしげな民間療法などに頼らない事が大切で、又貴女の被虐症でも将来結婚生活に入られてからの問題とし、程度を越えない様に慎重を期して下さい。

告白

悪^{あく}癖^{へき}

榎 本 利 子

強 盗

朧月夜に、ほんのりと浮かび上った夜桜が夢の様な美しさで霞む、四月の或る暖かい宵の事でした。その日の夕刻、妾は久方振りに映画見物や買物に思わぬ時を費やし、さて帰途についた頃は、さすがに春の日もとっぷりと暮れ果て、もうすっかり暗くなった市立公園城山遊園地の細い道を、家路さして急いでいました。

石垣の上に鬱蒼と生い繁る樹木の中に、所々白い桜花が覗いて、梢を吹き抜ける生暖い夜風が時々二片三片とその小さい花びらを降

らせていました。馴れ切った道ですから、その間道を右に折れ、噴水の水が木の間漏れる星明りに細い白糸を噴き上げている小さい池のほとりを廻って、植込みを縫い、更に横手の背の低い生垣をくぐり抜けますと、そこは丁度此の公園の真裏に当り、妾の家には最も近い道でした。

と、その時、ふと前方の石垣添いの暗い道を、こちらに向いて一人の若い女が足音を乱して駆けて来たかと思うと、ぱっとスカートをまくり上げ、ズロースに手を掛け乍ら細い道端にしゃがみこみました。経験のある事ですから妾も咄嗟に傍の木陰に身を隠し、辱し

い思いをさせない様にじっと息を殺してその人の用の済むのを待ちました。やがて間もなく、かすかな衣摺れの音と共に立ち上ったらしい気配に、もう大丈夫だろうと、そっと身を乗り出した妾は思わずギョツとして立ちすくんでしまいました。

裾を直してから、ゆっくりと来た方向に二、三歩戻りかけたその女の人の前に、出し抜けに一人の若い男が立ちはだかったのです。おそらく人相を隠す為か色眼鏡をかけ、春だと云うのに目まで掩いそうな大きいガゼのマスクをしているのが星明りにも、はっきりと見られました。ゾツと背筋の寒くな

るのを覚え乍ら、今、眼の前に同性が、しかも女としての最大の危機に見舞われようとしているのを、救うは愚かどうする事も出来ない女の無力さが堪らない程歯痒く、只誰か男の人が通り合わせて呉れたらと徒らに周囲

を見廻すばかりでした。だが、時間外れの公園裏など滅多に人の通る筈はありません。勿論その女の人は恐怖の為に声も出ないのが離れて見ている妾にもよく感じられました。「おいっ、声を立てるとこれだぞ」



何か手に持っているのでしょうか。しかも明らかに作り声と判るダミ声、地獄の呼び声にも似て不気味に夜の空気を震わせます。「お願いノ乱暴だけはしないで——」

女はやっとそれだけ言うと、手にしていたハンドバッグを差し出していました。するといきなり男は、ぐいとその手を掴んで引き寄せたかと思うと、本能的に逃げようとする女の耳元に何か二言三言、口早やささやいたようでした。

「えっ」

一瞬ぎくっとした顔で女は、次にはじかれた様に一步下るとじっと男に視線を投げかけたまま、その両手は、しっかりと二つの胸をかき抱いていました。

(やっぱりそうだわ——) 女の本能として思わず自分も両手が胸の上に固く合わされ只、訳もなく膝の辺りの震えて来るのをどうする事も出来ない妾なのでした。

「早く脱げっ、ぐずぐずしていると……」短刀らしいものが、きらっと光って動きました。だが次の瞬間、女の口をついて出た意外な言葉に妾は、はっと思ひ当ると共に、それならばと思わずほっと救われた様な安堵感に、自分の胸を撫で下したのでし

た。

「でも、今、穿いているのはとっても汚れているの。辱しいから勘忍して——」

哀願する様な女の声が、静かな夜気に震えます。

「いゝんだ——早くしろっ」

陰に凄味を響かせて、男は辺りを警戒し乍ら詰めよります。

「本当に、もう今日で四日も取り替えていないから汚いのよ」

「うるさいっ、早くしないか」

「じゃア、きつと悪い事だけはしないで」

愈々逃れられぬところと観念してか、諦らめた様に女はついと一歩下ると、スカートの下に手を差し入れ、一気に穿いていたズロースを下し、素早く足を抜いてそれを男の前に差し出していたのです。

「有難うー」

案外男は大人しく、しかもそれ以上の要求も行為にも及ぶ事なく、嬉しそうにそれを受け取って、およそ盗人などには不似合な礼言葉まで残し、さつと身をひるがえして後の闇へ消え去って了ったのです。

その頃、妾の近所でも不思議な強盗の噂があちこちと聞かれていました。なんでも未だ

若いサラリーマン風の上品な男で、夜間一人歩きの若い女を人通りのない所で襲っては、その女の穿いているパンティやズロースなど下穿きを強奪し、不思議にその外の金品には絶対に手を出さないばかりか、唇ひとつ盗むでなく、勿論、女性としては一番怖れられている暴行等の野人的行為は一切しないと言う一種変わった変態強盗でした。尤も被害者の方でも別に大切なものを盗まれた訳でなく、又悪い事もされていないし、只、被害と言えば自分の穿いていた下穿一枚を失っただけですから、わざわざ警察にまで届ける様な事もなく、その儘に済まして了うのが普通なのでした。それにしても此の時、もう少し周囲が明るく、そして妾がもう少し度胸を決め落着いて彼の男を観察していたならば、妾はもっとも驚かなければならなかったでしょう。

恥かしき性癖



翌朝早く、玄関のベルが静かな空気を破って鳴りました。洗面所の鏡の前で半分梳きかけた頭をそのまゝピンで押さえて、応接に出た妾の前に「こう云う者です」と、差し出されたのは一通の警察手帳でした。思いがけな

い刑事の訪問に、妾は一寸どきまぎし乍らも意外に柔和なその中年の刑事の態度に、いさゝかほっとすると共に、全く心当りのない丈に不審な面持で坐布団をすゝめ、刑事の言葉を待ちました。

「早速で恐縮なんですが、実は……」

と刑事は一寸言葉を切って考えていたが、「昨夜、御主人はどちらへおいでになりましたか？」

と思ひ直した様に聞きました。相手が相手ですから（夫に何か……？）と思わずはっと不吉な予感と不安に急に胸の騒ぐのを覚えましたが、それでも努めて何気ない風を装って「そうですね。昨日夕刻に一度主人から、社用で遅くなるからとの電話がありましたのですけど用事が長引いたものか帰ってはいませんのですよ。でも、此の様な事は私の方では再三の事で、決して珍らしい事では御座居ませんの。ですから別に氣にも止めていなかったのですが、主人が何か……？」

妾は刑事の真意を図り兼ねて聞きました。だが刑事は、それには答えようとはせず、黙ったまま傍に持参していた紙包みを解いて「誠に失礼なんですが、此の品は奥様のものなのでしょうか？」

と、中の品物をひろげて妾の前に差し出したのです。何気なく目をやった妾は、次の瞬間それが何であるかを知って、思わず自分の顔の赤くなるのを覚えました。

「まあ—こんな恥かしいものを……」

それは一目でそれと判る女性の、それもキャパレやカフエー等の女給やダンサー達の玄人女が好んで着用するナイロン製の薄いパンティと今一つは普通の白いメリヤスのズ

ロースでした。しかも、いまわしい事にその両方共がひどく汚れているのです。勿論そのどちらもが妾のものではないばかりか、それこそ覚えもない品物なのですが、恥かしさには変りがありませんでした。だが、此の時の妾にはもう総べてが察しられました。すると刑事は妾の羞恥にどう勘違いをしたのか（尤もそれがかえって夫の為には良かったかも知れませんが）

「は、やっぱり奥さんの物でしたか。これはこれは、いやはや……」



と如何にも照れた様な複雑な笑いと一緒に訳の解らない一人合点をし乍ら

「いや—実は、昨夜深更に署の者が城山遊園地の暗がり、一人の男を挙動不審の理由で職務訪問をしたのです。ところが、当人の持っている鞆の中から、よく光った紙切ナイフと一緒に此の様な妙な物が飛び出して来ましたので、一応署まで同行を願った様な次第なので……それがお宅の御主人なのです。ところが御主人は奥さんのものだと言ひ張って頑として譲りませんし、念の為に、実は何ッ

た様な訳で……。でもよく解りました。早速御主人には帰って頂きますから」

煙草の火をつけて刑事が帰って行った後、妾は玄關に広げられた儘の誰が穿いた物とも知れない薄汚い下穿を見乍ら、思わずほんと深い嘆息をつかずにはいられませんでした。

妾が、夫、信一に恥かしい性癖行為のある事を知ったのは、昨年の秋も、もう終りに近い頃で、妾が彼と結婚をして丁度一ト月ばかり経ってからの事でした。

珍らしく暖かい日曜日で、午前中にごたごたとした家の雑事を取片付けて了った妾は、奥座敷に分厚い本を枕にゴロ寝をしている夫に薄い夏毛布を着せかけ、庭に面した縁先の長い寝椅子に、ゆっくりとくつろいだ気持で身を委ね、快よい午後のひとときを、久し振りの読書に費やしていました。裏庭から見える柿の木に百舌鳥がけたましく鳴いて銀杏の枯葉が美しい黄色に舞い落ちていました。そうしてどの位の時が経って行ったのか、いつしか読みかけの婦人雑誌が胸の上に伏せられて軽い眠りにおちていた妾はふと自分の足裏に異様なものを感じて目をさました。膝を組んだ右足の裏を、何か柔かく、しかも生温い気持の悪いものが這い廻るのです。気

味の悪い——夢路を破られて、幾分ぼんやりとしたうつろな眼をそっと足元に向けた妾は其処に、実に浅間しいとも哀れともいいようのない人間性を忘れた、それは畜生にも似た怪奇な行為に我を忘れて酔い耽る妖しい夫の姿を発見して、思わず驚きの声をあげる所でした。

妾が目をさましている事にも気付かないのか、足元にうずくまった夫の舌は、執ように妾の汚れた足裏から足指の間をと猫のように舐め廻して行きます。まあ何て汚いことを——妾は舐めている夫より舐められている自分の方が余程恥かしく、その不潔さには全く胸の悪くなる思いでした。だが、この時の妾には、それはねのけ突飛ばして夫にその嫌らしい行為を叱責し、たしなめる事は新婚間のない妻としてとても出来ないことでした。夫に大きな赤恥をかゝせる様な気がして、ついにその勇氣もなく、擦ったさを辛抱して眠っていかにも気付かなかった振りを装うのがせい一杯でした。

そして、そんな行為はずっとその後の就寝前の夜中にも見られ、時が経つにつれて益々烈しく、そして大胆さを加えて行くのでした。しかも、夫の奇行は実にそればかりにはとゞ

まりませんでした。

其の頃から夫はよく妾にガムを買って来ては噛むようすゝめました。そして妾がそのガムを噛み、やがて捨てるのを待って彼はそと妾にかくれ、妾の噛み捨てたそのガムを再び自分の口にするのでした。又、妾が不用意に裏庭などに吐いた痰や唾にも彼が背をまるめて自分の口を寄せて行く浅間しい姿を目にした事も一度や二度ではありませんでした。

十二月に入って間もなく、小さいが美しいタイル張りの内風呂が出来上りました。そしてその最初のお湯を沸かした夕暮、夫は男も女もないからと、妾に先に入るようすゝめるのでした。妾は女の身として、そんな事は出来ませんと、頑として応じませんでした。夫は何故か如何にも残念そうな顔で浴室に消えて行きましたが、これも決して妻を愛する夫の優しい心の表われと云うよりも、彼の持つ哀れな性癖の方が、はるかに強いものであったとは、其の時の妾には気のつかない事でした。

やがて、妾が浴室に連なった一畳ばかりの仕度部屋で帯を解き、脱ぎすてた下着一切を小さな乱れ籠に入れて、快よい湯につかったのは、夕食の後片づけも済んで後の事でした。

街の銭湯とは違って自分一人の遠慮のない浴室は、気まぐれに自由に伸びくると身体や脚を伸ばす事が出来ました。やがて身体も洗い終ってから、上り湯を使うその湯の未だ余りにも汚れていないのを見ると、妾はふと洗濯をして見る気になりました。タオルを絞って頭に巻きつけ、隣りの部屋に今自分の脱いで来た汚れ物を取りに行こうとして境目の中戸を引き開けた途端、妾はそこに又々唾棄したくなるような夫の情ない恥態を目にしなければなりませんでした。

何時の間に来ていたのか、夫は妾の脱いだ籠の中からズロースを引き出し、それを両手に拡げてその真中の丁度股の当たった汚れに自分の顔を埋め、妖しい行為に耽っていたのです。

「まあー」

「あっ」

一瞬、夫は飛び上らんばかりに、あわてゝ腰を浮かせようとするよりも早く、妾は今、自分が全裸である事も忘れて彼の側に走り寄っていました。

「馬鹿っ」

「馬鹿っ、阿呆っ、気違い、間抜けっ、恥知らず、人非人、ケダモノ、犬」

妾は、ありったけの罵言を浴びせ乍ら夫の手から邪慳に自分のズロースを取り上げ、その儘その端を掴んでビシビシと夫の顔を殴りつけていました。

愛情

その夜、妾はまんじりともせず夫の寝顔を眺めて一人深い考えに耽りました。純な童顔の未だ消えやらぬ上品な坊ちゃんタイプの夫のどこにあんな嫌らしい気持がひそんでいるのだろうか。夫の性もつ自分の夫、それは余りにも妾に残酷な事実でした。夢であって呉れゝば良い。だが、事実はどこまでも厳として事実なのです。このまゝでは長い将来に幸せな楽しい幸福な夫婦生活などは到底望めないのではなからうか。こんな生活を続けて行く事はお互いを段々と不幸の深淵につきやっているの外の何ものもないのではないだろうか。離婚、暗い影が悪魔のように妾の脳裡をかすめます。だが、次には妾は又あわてゝ自分で自分を強く打ち消していました。嫌だ嫌だ彼と別れるなんて、妾は彼を誰よりも愛している。いや愛したい。あれこれと一人長夜を悩み思案に暮れた末、ふと雷の様に真暗な妾の心にさしこんだ一条の光明、そうだ夫

の悪癖を直そう、彼にあの悪癖を忘れさせる事によって簡単に此の地獄にも似た悩みから解放されるばかりか、自分達夫婦の幸福は掴めるのではないか。夫からあの悪癖を抜きとる事だけで妾は幸せになれるのだ。そうだ。女の、妻の、妾の暖かい愛情でアブの世界に溺れる夫を救おう。そう心に決めることによって妾はいつしか快よい夢の世界へと誘い込まれていました。

翌日から妾は努めて夫に明るく朗らかな話題を用意し、出来る限りに楽しく愉快に振舞う様心掛け、同時に今までは気のつかなかった自分の使用済の鼻紙の処置に至るまで細く気を配り、勿論、自分の汚れ物などは穿き替えると一緒に洗濯し、決して不用意にも夫の目につく様な事のない様注意し、特に身体、足等は清潔な上にも清潔にし、夜は充分の用意をして、かりにも自分の不注意から再び夫の悪癖を誘い出す様な事のないよう努めたのでした。その甲斐あってか、正月が過ぎやがて梅が美しく匂い始める頃には、全く夫の異常は見られぬようになったのでした。あゝよかった、妾の努力が無駄でなかったばかりかこんなに短時間で報われたのだ。どうしてもっと早く気付かなかったのだろう。

だが、しかし此の妾の喜びは、余りにも愚かな、そして又余りにも浅墓な女の悲しい一人喜びに過ぎないものであった事は、それから僅か二ヶ月を得ずして、今、再び妾の前にこうした悲しい現実となって現われ、思い知らねばならなかったのです。

その夜、早目に夕食を済ませた妾は、改めて夫に詰問の口火を切りました。

「貴方は、やっぱりあんな嫌らしい事がやめられないのね。」

腹が立つよりも情けなくなって、つい涙声になるのを必死に堪え乍ら

「どうしてあんな馬鹿な真似をなさるの、貴方は汚いと云う事を御存じないの？」

「それに盗人の真似までして——此の間から妙な噂もまさかと思っていたのに、やっぱり貴方だったのね、見つかったらどうするつもりなのよ。どうして盗みまで仿いてあんな汚いものが欲しいの。一体あれは誰のものよ」

軽い嫉妬にも似た気持も手伝って、妾は思わず声を荒らげ庭の隅の方に乱暴にまゐるままに放り出してある、あの刑事が置いて行った汚れ物にあごをしやくったのです。だが夫は膝の上に広げた新聞に目を落したまゝ一言

も答えようとはしません。

「貴方っ、真面目に聞いているのっ」

妾は急に憎らしくなって、いきなりその新聞を引いたくると、邪慳にまゐるめて庭先に放



ってしまいました。その権幕に一寸驚いたのか夫はよう／＼に顔を上げて妾の方に目をやりましたが、又あわてゝ視線を外らせてしまいました。だがしかし、その次には消え入る

ような細い声が夫の口をもれていました。

「許して呉れ、利子、どうか許しておくれ。」

これが僕の悲しい病気なんだ。自分乍ら恥かしくて愛想をつかしているのだ。だが、僕には斯うせずにはいられないんだ。今夜こそは僕は隠さず君に打明けよう。僕はマゾヒストなのだ。とってもひどいマゾヒストなのだ。

僕は女性から殴られたいのだ。蹴飛ばして貰い度いのだ。無茶苦茶に辱しめられ虐めて欲しいのだ。僕は奴隷の生活に憧れているのだ。よ。女性に家畜のように酷き使われたいのだ。

おかしいだろう、だが君は優しい、余りにも優しい、優しい夫思いの妻だ。僕は感謝している。世間の男もきつと君の様な妻を求めているだろう。だが、僕は不満なんだ、僕は誰よりも君が好きだ、誰よりも愛しているよ。

だが不満なんだ、僕は君に叱って貰い度いのだ、君の下男の生活を送り度いのだ。でも君は、こんな僕でも夫としてよく仕えてくれる。

これは有難い事だが僕には嫌なんだ。笑ってくれ、軽蔑して呉れ、それで僕は、せめてこんな汚れ物にでも顔を埋めて悲しい空想の生活をして僅かに自分を慰さめて来たのだよ。だが最後に君はこれさえも僕から奪ってしまった。浅間しいと思う、恥かしいと思うよ。だ

がそう気の付いている自分が自分をどうする事も出来ないのだ。お願いだ。利子、僕をお前の奴隷にしてくれ、僕の女神となって哀れな此の僕を喜ばせておくれ」

人が聞けば気遣いと思ったかも知れません。

馬鹿々々しい滑けいな事を眉一つ動かさず涙さえ浮べて真剣に、しかも自分の妻の前に両手をついて哀願告白する哀れな夫、可愛想な夫、だが妾はそんな夫を嫌悪侮蔑する気持よ、はるかに彼を愛する心の方が強く、しかも大きかった。やはり彼を誰よりも恋し愛していたのかも知れない。何とかして彼をノーマルな幸せに喜びを知る夫にしよう。妾の愛と熱と努力で、きつと彼の心に根強く巣喰う悪魔を追い出してやろう。この妾の決心は、夫の恥を忘れ、男を捨て、切々と妻の前に告白し詫び、そして哀訴する哀れにも正直な姿を見て、愈々強く不動のものとなって行くのでした。

「そう——。そうだったの、妾ちっとも知らなかったのよ。御免なさいね。でもよく正直に言ってくれて嬉しいわ。実はね、妾、今まで如何にも恥かしいから、貴方には猫をかぶって隠していたのだけど、妾、本当は女のくせにとってもひどいサジストなの。驚いたで

しよう。嘘じゃなくてよ、本当の事なの。でも良かったわ。貴方がマゾヒストであったなんて夢みたい。愉快だわ。今夜は貴方が正直に打明けてくれたから、妾も本当の事を云うのよ。妾、実際男の人を殴ったり、足で蹴飛ばしたりして虐めてやるのが何よりも好きなの、男を思うまゝに辱しめてやるのって気持ちいいわ。思っただけでも堪らないの。どう怖い女でしょう。いゝわ、今晚から早速いじめてあげるわ。今から妾の奴隷におなり。でもね、最初に云っとくわ、妾は中途半端な事は嫌いよ。何事にも徹底したのが好きなの。それだけに妾のサジズムも決して人が考えているような甘たるい生易いものではないからそのつもりで貴方も完全なマゾヒストにおなり。途中で許して呉れたの、苦しいだのと弱音を吐いたりしたら承知しないから」

妾は先ず昼間からゆっくりと思案し考えていた計画を、実行に移してみるべくその第一歩を踏み出したのでした。

(次号へつづく)

(杉原虹児・画)

ボクの責め方

(エレヴェーター内女責めと)
久呉よし子水責めの巻

宝塚二二三夫

四馬孝・画

今回は晴雨調のクラシック乱れ髪型とは全く正反對の、超モダンスタイル折檻の話。エレヴェーターガール、市川みよ子(一九)の登場。デパートでは古顔。もっと他にいくらか可愛いもの、美しいのと沢山居る中に、ボクの常に云う噛みつきたい様な、又なめ廻したい様な、さては勿論、ひねりたい、ねじ上げたいと思ったのがこの娘なのである。簡単な言葉ではあるが、先ず噛みつきたい、なめたい様な肌のは仲々ないものである。

明け暮れと二、三週間もこのみよ子印象付のため、六階美術売場へを利用して通いつめ

新刊「歌劇」一冊で一応の言葉交換をキツカケで拾った娘である。エレガール・ユニフォームを着た職場姿は全く可愛い、ボチャボチャした所謂、職場美人の好例である。

ありふれた交際シーンや、簡単な責めのシーンは割愛して、この浮気篇の主題にペンを乗せる。それは因縁の雑誌「歌劇」に掲載される出来事で、いつかは宝塚へと約束はしていたもの、この八月の第一月曜の三日の事。宝塚へ、やはりデパートの正子を連れてレヴェー半分、あとはホテルへとの目的で大劇場前の大広間で物凄い出る人、入ろうとする人の

押し合いへし合いの大混雑にもまれもまれている真最中、ボクの胸に押されて来るうるさにフト目を落す。その目前、小柄な娘とも、五、六寸もの間で目と目とがピタリと合った瞬間、ボクもその娘も声こそ出さぬが、「アッ!」と口をあいて呼吸が止った。それが即ちみよ子であった。偶然というより、全く強烈な突然である。

そして次の瞬間、彼女のそばに若い青二才の男がついている事は言葉なく目をそらすみよ子の慌てた、そして「何も云わんといて」とばかりの哀願目付でよく判った。ボクも同



伴の正子の手前の方がよかった。正子とは二、三人離れていたもので、やきもち人一倍の正子の場合大助かりであった。そして又彼女にも知れずに一方的敗北で息の詰まる暫くであ

あった。それは混雑で動けぬためでもあった。その出合いからは、その日はみさ子の顔は見られなかった。そして正子と場外、第一ホ

テルでの責め遊戯は今発表の幕ではない。さて問題はその翌日である。

ボクの車は朝十時開店を待兼ねるようにDデパート西側ベープ脇でピタリ、サービス時代復活で、ドアボーイの出迎えも煩

わしく、西北隅の孤独エレヴェーターの前へ。まだB2からスタートしてない十時五分頃、センターエレヴェーター群へ廻って話してた通りみさ子の姿はなく、愈々彼女担当のエレヴェーターがその一基と確信して又元の所へ逆戻り、こゝばかりはガイドガールも配置していないし、各階のシャッターも首筋あたりの下はシャツトドアで、又六、七階はナシオープンルーフガーデンまで直通という絶好のもの、シャッターと開いたドア、スリッパと乗るボク。

「マァー」とばかり目を見張って、勿論他の客もないが規定の客待もせず、サァーッと扉が閉じて、すぐ滑り上る……。

「昨日は勘忍、悪く思わんといてネ」

「冗談じゃないよ、丸イカレだね」

「断りきれなかったのよう」

「だから……」

「キットあとで罰受けるワ」

「あたりまえだよ」

既にR天開けなくとも客の姿はなし、これも中央エレヴェーターの東側なら売場もあるが、この西側は更になし、ボクがみよ子の片手を掴みに寄ると、

「待って……」とハンドルを切って七階の空階まで降りしてストップすると、

「本縄勘忍してネ……」と先手を打って来る。

この箱の中では冷房も余りきかぬ温さ、グリーンに金粉まじりのラッカー、昼光色の天井の下、黄色いサッカー地に小さいフレアーのとった袖なしワンピースを、同色ボレロで抑え、後から見ればヨットの帆型の大きい背一杯の三角型の襟を垂れ、赤いサンダル靴というユニホームのみよ子の両腕は、既に後手にねじ上げられ、ボクの大型の麻のハンカチーフは手首に搦んでいる。

「唇も勘忍、キットあとで」

前かきみで小さくもがくみよ子。ピカピカ磨き上げた真鍮の一寸丸程の手摺へ一卷、かからのハンカチーフの縛り残りを、グイッと手首を吊り上げるように縛りつける小柄の彼

女は、將に吊り縛りの感ありて悲慘味万点。

「イイイッ！ 勘忍」

ボクの手はすぐ白いソックスと赤いサンダルを脱がしてハダシにする。

「勘忍、信じてエ、キット今日行くから」

全身半折、両手を吊り責めの如く後で十指開閉して、更に指先で手摺りをつかむように苦悶態。ハダシの足を爪立ってリノリュームを、ズルズルずり足掻く、足の指の苦悶状態はボクを一段と興奮さす。

さて、その一分か二分もない瞬間的な責めのスピードアップなら、あたりの情況も亦超モダンタイプの、これぞ近代文化によるモダン女責めの一表現とボクは自負したのであるが。みよ子の太腿部にチューッ！ と音を立てゝの吸付キッスは、キッスマークが目的である。そして手さぐりでハンカチーフの縄目を解く、ボクのいさゝかあわて方。「イイイッ」キッスマーク作りのおついでに一かぶり。

彼女もあわてゝソックスなしのサンダルを突掛けばきに履かんと、片手うしろへハンドルを切る。スーッと屋上ドアへ、客なし。そして一応ドアを開けるとB2へ急降下ナンストップの構え。こゝのエレヴェーター見かけはニュースタイルでも操作は旧式。ガール

のうしろにハンドルがあって、操作は後手構えで、両手を使うと全く腰縄縛られ方。ボクは彼女の片手もうしろへ廻さしてB2まで何十秒か、白い襟とボレロを捲ってわきのうしろの腕のつけ根のあたりへかぶりつき、キッスマーク作成へと一しきり。

「見えるワヨ、見えるワヨ」

一階毎にチラッチラッと光線の入る売場の見えかくれに気を病むみよ子。ブチューッと唇を離す音と、ザーッと開くB2階のドアと連続。あわてるように閉じる彼女。幸いコールブザーの鳴らぬので、又Rまでナンストップ。ボクの手は彼女の手を両手共後手にハンドルへ縛りつけた思い入れでスカートを捲ると、赤いマークは上出来。彼女もチラリと見て、

「マァー、よう云わんワ」

襟を持上げてうしろから覗くと、このマークの赤あざは今明日も怪しいという所、彼女には見えぬので「どう？」と聞く。

「二日も持たん」

「いやネエー」

R開扉、客なし。前のジュース売店の者が漸くピンを揃え出している。閉扉、降下。

「ジジイッ」とブザー。UP、B2サブ

からの客らしい。ボクよりも彼女が沈黙のうちに名残り惜しうに血走らした目でキラッとボクを見上げて握手すると、

「信じてネ、キット今日」

とB1でストップ。一応退出してあたりを見て、又待つてブザー。子供連れの客一組で昇って来たみよ子、乗り込むと壁の方向いてクスリッと笑う。一階からは又二人だけ。

ボクはこの短時間中にあった現実を考え浮べて、この一瞬、思いもよらぬ相違に自分自身でもアツケに取られる思いで、このボックス内と今更ながら職場意識にビチビチしたみよ子の姿を見比べる。四階から二、三人の客ボクは心をあとに六階で退却。

お粗末ながらモダンスタイル、エレヴェーター内女責めの一シーン。

次の姦通篇のナンバーワンは久呉よし子（二十三才）。ドーラン化粧をしたようなノッペリした小麦色の肌、あか抜けした特異なスタイル、中肉中背、双皮目の髪型、モダン美人である。

山科街道。ボクが多美子の館でのボクの小間使いとして転籍してから末子を積んでドライブ中、天智天皇陵の脇に止っているキヤデラックの新車が砂利敷にめり込んでいる

のを引き出してやったのが知り合った最初。同じO・O・D・Cの会員とわかり話は進んで行く。話の調子でその旦那はどうやら日本人でないと思っていたが、大阪OS劇場裏のW・R茶房のマスターと聞いてアアーン。コレア！とわかって……その女に対しぶつとれんびんの交互した感情がモクモク湧いて来たのが因縁のもと。

成程サンマードレスとは申せ、チャイニーズまがいのワンピースを着せられてるワイ。然し、タイツ一杯の裾の割目からニュッ、ニュッとする脛の肉付とサンダルの足首に巻付いた紐あみの赤い皮バンドも、ボクをすくなくから責めへの刺戟を与えたのも因果。ボクの乗せた末子も秘密保持に好都合と触手を延ばしたわけ。

さてもさて、この旦那、天智帝のマツエイとのたまわってこゝまで御参道だそうで、女の前では世の男性、ミラビリス的な嘘を口走るものである事よ。アナカシコ。御所所、浮いた浮いたの豪華服装は満点だが、身にシツクリ付いている点では同じ買われた娘でも、ボクの方の末子、十七才とは云え、レース折返えし純白襟のブラウスにナイロンタフタのフレアスカートはうるし塗り調にブライトブ

ラックで、スマートで素直であることよ。

そしてハイ、ハイと歯切れよい返事は、この旦那、余程気をひかれたと見えて、濁音のないテニオハ乱調でベチャクチャ末子相手に御商売柄、色とりどりの飲物揃えてのサービスも、自分の御先祖様の石垣に腰をかけてもバチは当らぬものらしい。おかげでボクはこれのお婆さんと意気投合する。ボクの商売は生来の失業者である事は、何人も認めるところと強弁して引かず。

大阪では危険と多美子の館をコッソリと知らして顔色を窺うと、双皮目がニッとずるそうに開閉する。「明日午後」と木の枝で土の上へ書くと、「ハイ」と仮名文字で。クスッと首を縮めるのは末子のハイ、ハイ口調を皮肉ったつもりらしい。すぐ目をしかめて黙り込むところ、この女相当の浮気者らしい。それともこの生活に何か不満があるのだろうか。真夏の午後の姦通相談。ニラミ合ったまゝこれが最後かとばかりのシリリングな、亦別なアバンチュールである。

さてその翌日は、多美子の奥之院であるボクの座敷。末子の小間使いで二人の対座。

「これは改めて、初めまして」
もうすっかり打解けて千日仲の観あるのは

先方のセミプロの心理作用であろう。今日の服装は浴衣に浴衣帯と云った、昨日の名誉挽回といった所。腰紐の端のピンクの色の房が帯の下からげの蔭からチラリと垂れているのが、早くもボクの責意識を高める。

「今日は国粹型ですネ」

「アラ、ひやかさないで頂戴」

「アハハハッ……」

末子がクリームを運んで来る。

「昨日は失礼しました。とても清潔な感じの方ネエ……」

紺のエヴァグレ折返えし白襟のワンピースが余計にその感じを出しているであろう。

「何、何、スゴイ腕白ガールです」

「ほんと？」

「そうだね」

「ハイ」

「末子もお上り、一緒に」

「ハイ」

「サ、ドーズ、お店のソフトクリームはスエーデンフリーザーですから、いいですね」

「妾し、お店のこと余り存じませんの」

「マスター、サービスオンリーですね、手をあげます」

「マァー、お止しになって」

とボクの上げた手首を掴んで降ろしに来る肌の触覚に、

「あなたの肌までソフトクリームですね」

と袖口より奥の腕を軽くひねる。これが受責めのベーステストの一つである。文句なしOK。

「お口のうまい事」

「末子さんは幸福そうネエ！」

「ハイ」

「イヤー、ボクの乱暴と悪趣味で可哀想ですよ」

「アラ、そうかしら？」

「エー、お天気具合では物凄いい目に合わされてネエ」

「この方には、その方が男性的でいいのでし

ようよ、キット」

「どうだい末子」

さすが末子「ハイ」と云い兼ねて、俯向いてクリーム一口だけ。

「ともかく折檻されるんだネ」

「ハイ」

「云ってみたい、ハハハ、、辱しいか……」

「アラ、ほんと？ あんた」

「ハイ」

「スグお縄頂戴だね」

「ハイ」

段々声が低くなる末子の方を向いた彼女、

「お縄頂戴って縛ること？」

「ハイ」と又消えかける声。

「ほんと？」とボクの方を向く、双皮目が一層大きく開くと、単なる驚きでなく、何か探究的な意志がひらめく彼女。

「勿論、御覧の通りですよ」と、うしろ向に倒れざま地袋から三、四枚の中判写真を取り出して彼女の前にホリ出す責めの写真。そーっと手にとる彼女、勿論、内容は末子をモデルの平凡な？ 責場写真。

「失礼します」と手をついた末子、こそばゆそうに皿を引上げて行く。

「ホントネエ、可哀想に……あの子ネ、冗談にしよう、チットモ苦しそうじゃない表情ですワ、ホントニひどい方ネエ、これなんかアラッとはとんど裸でスゴイ括られ方、こんな顔して痛くないのかしら、居眠りしてるようなノンビリした表情ネ」

続く一枚を何げなさそうに見ていた彼女、

「マッ！」と一声挙げると、パツとチャブ台の上へ裏向に伏せてしまって、「凄いいこと」と云って一寸頭をかしげて又、チラッとな女の表情を見直すと、暫くジッと見入って、又あ

わて伏せると、初めてボクの方を見て、
「ホントに凄いい事してあげるのネエ、だけど
あのお子の表情、何なの？」

所謂、女責めの苦痛が本能のアクメと同一
態である苦痛感である事が、どうも飲込めぬ
わけであろう。それは全裸、高手小手、首縄
そして股掛縄に足首縛りという、当然の終点
縛りの写真であるが、彼女には末子の陶醉感
の気抜けアクメ表情が、あの場合と同じであ
るとわかっていただけに、この時処女なれば
又開花近々なればその意味はわからぬが、さ
すが彼女には不可解感と好奇心が湧き始めた
と知った。ボクは愈々追込戦である。

「あんた女の表情がのみ込めんのでしょう」
「エ、」

さすが生活態からして、こうした場合は落
付いたもの。そして、

「もう沢山、あんまりひどい事してあげなさ
んな、わたし可哀想で見られないわ、何だ
か胸がドキドキして来て」

「それはネエ、悪趣味といえよそれまでなん
ですがネ、こうしたテクニクも亦、とても
楽しいことがあるんですよ」

「そうかしら」

「あなた、今の旦那さんのテクニクだけで

満足されてるんだったらボクは云いません」

「云って頂戴！ とてもひつこいの……」

「ごちそうさま、ハハハ、」

「茶化しちゃイヤッ！ 聞いて頂戴、いつも
いつも同じ事ばっかし」

「前戯とか後戯は？」

「何だかしらないが、アレ一本調子」

「イヤアノネ、あと、さきのテクニクは？
と聞いてるのだ」

「前には何んだかんだとするけれど、あとは
それっ切り」

「あなた、それで満足？」

「マアマアネエ、だけど後があっけないわ、
そう云えば前も、何にも感情がないもの、普
通にしていってトタンにですもの、でも仕方な
いわ、好き同志でないもの……」

「その意味とは又別に、アトモスファイアー
の事です」

「アトモス何とかって、何？」

「雰囲気、この場合にあてはめたら情緒の一
つですよ」

「そう、そんなものなんかとても」

「ハハハッ、簡単に処理出来て幸福ですネ」

「ですから聞いて頂戴ってお願いしてる。お
しえて頂戴、お願い！」

序々に本能帯へと浸透して来る彼女。

「あなたが見て可哀想で見ていられない事で
も、されてる方でも満足ならそれでいいでし
ょう」

「こんなにされて……そうかしら」

「顔が総てを物語ってるじゃないの？」

「わからないワ……」

「例えばキス一つするにしても」

と、つと延びた手は彼女の手首を掴んでう
しろ手にねじ廻しての、いつもながらナヴァ
ロキスへの基本型の抱擁にし、ボクの膝の
上への横抱き。そしてアッと言う間に唇の合
致、そして両手足組合わして高手小手に抱
きしめる。彼女、二言三言口ごもってあとは
すでに……。半身起して一息吐くと

「マア、スゴイ暴力型ネ」

とあきれたと、わざとらしい甘美を覆いか
くせぬ表情。悩ましい双皮目が鈍重に奥光り
するのは、さすが娘らしくない爛熟型。抱き
直して両手首をうしろで掴んだまゝで、目に
残っていたピンク色の腰紐を片手でほどこ
抜くと、一応は腰縄の略縛り。

「ホホホ、わたしも縛られるの？ 罪人
扱いネ」

「姦通予備罪だよ」

「アラ、ひどいわ、ホホホ、たしかに悪趣味なのネエ」

「ホントの悪趣味は本縄かけてからだヨ」

「じゃ、どうされるの？」

「どうされるたって、覚悟で来たんでしょ」

「ズバリネ、もう云いません」

浅黄水絞りの浴衣に麻縄で高手小手、首縄と縛り上げられたよし子女史。

「ホントに荷造りのようにして痛苦しいものネエ」

と、口先は冷静さを粧っているが、どうやら心の動きは止らぬ気配。

「わかる、からだがしまっているのが……」

「何だかわからないけど、スゴイ緊迫感ネエ、スゴいわ」

と好奇心と、異様な目をかざやかせてボクをじっと見入る。

「さあ、水責めだ！」

突然に彼女を引起こして立たす。既に足元もよろよろと御機



嫌さんである。

「どうなさるの」と、浴衣のからげも抜けて裾を引摺ってフラフラ立ちを、

「サ、行くんだ！」と、フニャフニャの尻を大きく掴みひねりして小突く、背中の十指は握りしめて拇指立ての嬉しい手つきである。

「誰か？」とふすまの前で立上る。

「御主人……」

「お入り……」

末子である。入った途端一寸目を見張ったが、すました顔付きでよし子に一寸会釈して

「お姉様がお食事のこと聞いてらっしゃって、おっしゃっています」

お姉様とは多美子のことである。

「ウン、まかす、お客様と一緒にだって、そしてすぐ風呂場へ行く」

「ハイ」と又二人に頭を下げる

と出て行く。さすがよし子真赤になってモジモジして、グツとつばのみ込むだけで一言もなし。ホツとしたように、

「辱かしいわ、このまゝで行くの、解いて下さらない？」と動こうとはせぬ。

「この位の事でこのものは驚かぬよ、ほんとなら素ッ裸で引きたてるんだが、人の奥様だと思つて遠慮してるんですよ、サ」

縄尻を一寸しめると、

「アッ、イイッ！ 奥様なんて勘忍して頂戴、イイッ」

「じゃ、よしちゃん？」

「ハイ、フフフ、」

ペタペタ内輪歩きは縄目打たれた女独特の素晴らしい哀憐調の姿である。こればかりはアブレもアバンも洋装も和装も年令もお構いなく、責められる女の統一した受虐美である。

エンジの単帯の伊達結びの上に確かと逆十字に縛り上げられた両手は握りしめてからもう時間が経っているの、肉の悶えの如くすでに空を掴むように十指が開いて、丁度御中元の水引がかゝったように蝶々型で、更に艶出しだけのマニキュアの爪が貝のようにピカピカ輝いている。そして麻縄は全く無惨絵そのものゝように首っ玉に巻きついている。大

変な贈物。

「どこまで？ こんな恰好で……」

いさゝか不安とジレて来たらしい。

「これもテクニクの一つだよ」

「大変なテクニクですわネエ」

「文句云わずに、サッ！」

と、又一つ小突いて渡り廊下の突当り左側ガラガラと開けるガラス障子で湯殿と知ったよし子、今更の如く逃げ込むように這り込むと、ハアッとして大きく一息ついて、

「閉めて頂戴ッ！」

口に出さぬが余程気をつまらせていたらしい。人妻とは云え責めへのフレッシュ感はおクを一寸嬉しがらせる。

「もう沢山……」とグンナリと坐ってしまふが、割れた裾前からはみ出す丸い膝小僧をかくす事もならず、モジモジしている。丁度横にある姿見鏡は坐った全身を映じているのを見た彼女、又ハツとした思い入れで、はてはジツと横姿を見比べるようにして、

「アナタ、映画を見てもこんな凄い縛り方見たことないワ、ほんとに悪趣味な惨忍性ネ」

「初めて？」

「あたりまえですよ、一寸息はずませている間にこんなにされちゃって、でも蹴飛ばされ

たりするよりはましネ」

「エッ？ 蹴られるの？」

「エ、すぐ足蹴にするのよ」

「アチラサマは足早いヨ、ハハハ」

「マア、場所によってはすごいよ」

「ハハハッ、失礼！」

「ホホホ、」

「ホントニ初めて？」

「エ、こんなの」

と又鏡の方を振向いて、鏡越しにボクを前かゞみしながら見上げる目。そして又自分の姿を見比べる目。好奇心と情熱の圧力の交錯した目、眸、瞳、改めてボクを見上げる顔。下唇はハッキリとボクに行動を求めているのは、こうした生活にある妾根性（メカゲ）にありがちな向うみずな肉慾の処理意識。

立ちほだかって膝で肩から首を挟むようにして、その下唇を親切に吸ってやる。「ムムムウーッ！」とうめき喘えぐ、唇を抜くとボクの手は帯を解き始めている。

「手の色が変わって来てるワ、解いて頂戴、お風呂へなら素直に入りますから」

「ハイハイ、縄目は一寸ゆるすが素直には入れないよ」

「エ、どうせそうでしょうけど、逃げない



縊死を 憧れる男

青葉 槇 一

もの、サ」と縄目を突上げて来る。当然の筋道通り素ッ裸にしたよし子。首縄こそかけないが再び高手小手に縛り上げるが、何の抵抗もない。このおめかけさんノッペリ肌の胴長「サア、水洗い水洗い、イヤ水責めだ、水責めだ」と浴室の戸を開けて引立てる。麻のカスリを尻からげたボクは、水道の蛇口の前に立たす。

「イヤネエ、ホントに水責めヨ、冬なら」
チャブチャブ洗うだけなんだが、彼女既に背中の手の十指を握ったり開いたりして喘えぎつぎける。
「アナタは何するのでも縛ってされるのネ」
「ウン、悪い病氣らしいがネ、娘さん達もなれて来ると却っていゝものらしいよ、奥さんは知らないが……」

「又奥さんって……、手が自由だったら引っぱたいてあげるのにイ！」
「それ、それ、そこがいゝんだよ、被征服慾ってネ」
「又何だかムツカシイ事云ってエ」
膝小僧、脛、足の甲と拭き上げて、元の脱衣室に引戻すと、彼女の方から横坐りに坐り込んでしまふ。
(未完)

縊死に憧れるなどと云ったら、自殺志願者かと早合点されるかも知れません。ではそうでないのかと云うと、ハッキリそうも云いきれないのです。何故ならば、現実には自決の意志がないとしても、やはり自殺を夢想しているのに違いはないからです。

縊死に対する私の異常な興味は、もしかしたら、少年時代に受けたあの強烈な印象が因になっているのではないのでしょうか。

それは私が、小学校の三年生位のときでした。私の住む市では、毎年五月に全市をあげての祭が行われ、夜は各町から思い思いの趣向をこらした屋台が繰出して、数万の見物人が集めく中を、お囃子の響きも華やかに妍を競うのですが、その屋台を普段蔵ってある小

屋の中で、私はいまわしいものを見てしまったのです。

屋台の小屋は、人家を離れた淋しい神社の裏手にありました。生れつき身体が弱く、神経質で陰気な子供だった私は、友達といったものもなく、自然独りで遊ぶことを覚えましたが、その小屋も実は私の秘密の遊場所の一つだったのです。少年雑誌の冒険小説に出て来る、主人公の少年が、悪漢の為に誘拐され様々の苛い目に合わされる場面を、私は秘かに再現して悦んでいたのです。それには屋台の小屋はまことに恰好の場所でした。以前は錠前もついていましたが、今は毀れたのがそのまゝになっていて、自由に出入りが出来ましたし、淋しい処ですから、人に見咎められる心配も有りません。窓がないので中は暗く、自分の背丈の四倍もありそうな屋台が、ものゝけのように覆いかぶさって、ゾクゾクして来るような恐しさ。本当に今にもその辺の物陰から、覆面をした悪漢がとびかゝって来そうです。私は小さい胸をハクハクさせながら、車の下に這い込み、ポケットに忍ばせて来たタオルで自分の口に猿ぐつわをし、縄跳びの縄で足をグルグル巻きに縛ると、両手は縛られた心算に後へ廻してゴロリと転りま

す。それから、（イヤだ。イヤだ。助けて……！）とか、（痛いワ。痛いよウー）。お母アさあん……！）などと心の中で叫びながら身体を藻掻かせます。そうして次第に昂奮して来ると、ズボンとパンツを引きさげて、お尻をまる出しにし、一層激しく暴れ廻って泣き叫ぶのです。

此の遊びが私には一番気に入っていて、殆んど一日おき位には、ソツと小屋へ出掛けて行きました。

そのときも、夏の陽盛りの道を一人で小屋まで行き、戸を開けた途端、私はアツと息の止る程仰天しました。眼の前にブラリと下っている異様なものは、男の首吊りだったので。後になって判ったのですが、その男は同じ町内の建具屋の主人でした。暑い頃になると、逞しい軀に六尺褌をキリ、と締め、上には薄いメリヤスの襦袢を一枚だけ着て、店の板間で仕事をしているのをよく見かけたものです。建具屋はやはりその恰好で小屋に這入り、褌を解いて梁にかけ、首を吊っていたのです。此方を向いているお尻のわれめから真黄色の糞が太股を伝って流れ落ちていきます。勿論私は、長い間縊死体を眺めていたわけではありません。すぐ転るように家へ駆け戻った

のですが、幼い私の眼底には、あの恐ろしい光景がクッキリと焼付いてしまったのです。帰宅した父へ、母は早速昼間の出来事を話して聞かせました。

「へエ、首吊りをねエ——。未だ若かったのに——」

「えゝ、それにあなた、マア模一が見付けたんですよ。一番先に——」

「ホウ——」

「真蒼な顔で帰って来て、首吊りだって云うんでしよう。あたしはもう喫驚してしまっただけに交番へ飛んでいったんですよ」

「併し又何だって、そんなことをしたんだらう？」

「さア、よくは知りませんが、あの人近頃、何だか脳の様子が変だったって云ってましたよ」

母が忙しそうに台所の方へ去ると、父は兵児帯を巻きつけながら、私へ向って、

「模一。恐かったかい——？」

「うん——。ねエお父さん——」

「ム？——何だい？」

「あの、建具屋の小父さんねエ。——ウンコ漏らしてたよ」

私は、誰かに云いたくて、そのくせ何だか



云うのが恥かしいことを、とうとう父に云ったのです。

「あゝ、それは首を吊るとウンコが出るんだよ」

「大人でも？」

「うん。自然に漏らしてしまうんだ」

大人でも大便を漏らす——。それを聞いて

私は股のつけねが固くなるような、妙な快感を受けたのでした。

日が経つにつれて、恐さのほうは段々に薄れていきましたが、そのかわり、首吊りのことを思出すと、何かわけの判らない昂奮を覚え、もう一度見たいと思うようになりました。あの、人間がプランとぶら下った感じや、ぶ

ざまな脱糞の有様が、私の心を頻りに咬めるのです。

あるときです。私が洗濯物を干している女中に、

「ねえや。僕、首を吊ってみようか——？」

と云ったので、彼女はすっかり驚き、

「マア坊っちゃやま。御冗談にもそんなこと仰っしゃるものじゃございせんよ。何処かの子供が首吊りの真似をして、本当に死んでしまった事がございます。坊っちゃやまも決してそんな真似などなさってはいけません。お解りですね」

とクドクドとたしなめました。

半分は冗談ながらも、子供の考えなさで、私は本当に首吊りの真似をする気でいたのです。でも「死ぬ」と脅かされて、それだけは止めたが、縊死への興味は少しも減らず毎晩のように夢にみました。

十五六になると、その夢が夢精をとまなうようになりましたし、昼間でも縊死の幻想だけで、Ekstasieを覚えることが有りました。

○

フランス映画「恐怖の報酬」は、色々の意味で私に強い感銘を与えましたが、中でも、

殆どショックに近い感動を受けたのは、樹の枝からブランと吊下った若者の死体が現れたときでした。

その夜から、私は憑かれたようになって、縊死のことばかり考え続けました。意識の底に沈んでいた縊死願望が、突如として海底火山のように噴上げて来たのです。

そしてとうとう、子供ではない、大人の私が、浅ましくも首吊りの真似をしようと思いたったのです。勿論本当に頸へ縄をかけるわけにはいきません。そこで、縄を使って、身体を垂直に保ちながら、宙吊りになる方法を考え出さなければなりません。あれこれと脳をしばったあげく、落下傘からヒントを得た一方法を実験するために、夜中家人の寝静まるのを待って物置小屋へ這入り込みました。用意した物は、五米程の余り太くないロープと手拭五本。それに蠟燭なのです。

戸を閉め蠟燭を点けると、私は先ず、脚と腕の付根を、左右とも手拭でしっかりと縛りました。次にロープを二重にして、左肩の手拭の後側（背中）へ通し、それを左の股（お尻）から右の股、最後に右肩へ通しました。つまり、肩と股とを繋いでロープを背中に背負った恰好になります。それから空箱にのり

ロープの端を梁へかけて、解けないように確く結びました。終りに、残りの手拭を後のロープから繋いで頸に回し、頭を前へ下げることににより、圧迫感が頸部へ加わるようにしました。

此れで準備は出来たのです。私はドキドキする胸を押え、思いきって空箱の台から足を離しました。グツと股の手拭が食込みますが、さして苦痛ではありません。手足を真直に垂れ、頭を下げると、私は眼をつぶりました。ブランと宙にブラ下った不安定感が、何とも云えません。首吊りの、ぶさまでみじめな実感が、快感と興奮を急速に喚びおこし、殆どエクスタシーを覚える程でした。五分ばかりすると、私は漸く苦痛になり始め、爪先で台を拾うと、ロープを解いて下におりました。

私はでも、それだけで満足したのではありません。次の日。私は計画に従い、時間を計って緩下剤を服み夜の来るのを待ちました。

零時を少し廻った時刻。物置小屋に這入った私は、昨夜と違い、着ているものを全部脱ぎ素裸体になりました。そして激しい便意に急ぎたてられながら、もう気もそぞろに手拭を縛り、ロープを通しました。ブランと下り、手足をタラリと伸すと、途端に泳いでい

た排泄物が、タラタラと股を伝って流れ出しました。

蠟燭の黄色い光に照し出された、誰も知らない深夜の物置小屋の中に、一糸もつけない素裸体で梁からブラ下った私は、心ゆく迄脱糞しながら、恍惚と我を忘れていたのです。

○

これで、浅ましくも恥かしい、首吊り遊戯のお話は終りですが、私は行末死ぬときには必ず縊死を選ぶ心算でいます。縊死は窒息による瞬間死で、苦痛も快感も感ずることは出来ないうえですが、それでもかまいません。首を吊った哀れな私の姿を大勢の好奇の眼に曝すだけで、充分にもう満足なのです。

又もし私にホモの恋人が出来たとしたら、縊死による心中も空想しています。二人の身体をしっかりと括りあわし、一緒にブラリと吊下ったら、あゝ、何んなに素晴らしいでしょう！

私は愚かな、縊死を夢みる男です。

（山口二三夫・画）

「磔」
随 想

十 字 好 介

一
惨酷な江戸時代の死刑の中でも、特に極刑と称せられる磔の刑は、私に執って、垂涎おくあたわざる、恰かも息を詰める程厳しく犇々と身内に感ずるアルファを意識する。人に依っては、或はその酷さに顔をそむけるかも知れぬ。が、然しそれは磔に限らず、全ゆる死に繋る刑に通じる事だ。私にとって斬首、絞首等では曲がなく、唯、死を与えるべき刑

に過ぎない。形式的な様式の美しさという点では、矢張磔刑を以て第一とするのではないかと思う。そしてその壮烈な、人間の全ゆる無防禦を露呈した姿を中天に晒す、その景を想像するさえ妖しい昂奮を覚える。
想像するたびに私が身震いする程、刺戟を受ける磔という情景を充分に堪能する程味わって貰った文献を次に列記して見よう。

二

先ず映画から、

笛吹童子に於る磔のシーンの悲愴な美しさは、同好の士は感嘆した事であろう。白衣の神々しい迄の悲愴美。田代百合子と楠本健二が、白木十文字の柱に縛られ観念の眼を閉じていた。その妖しき美しさよ。然も裏から迄見せて貰えた事を感謝している。

次は文芸大作近松物語である。前者が少年少女向の娯楽篇故、救があったが、此の方は微尽もない、刑後の晒であった。夜間が薄気味悪く啼く夜の刑場に、男女が並んで死後の骸を柱にかけられている慄然たる美しさ。映画の筋そのものから全篇磔の妖しさを犇々と感じるのは、此のシーンを中心においた為だろう。文化的な映画の成功を論じはしない。私は此のシーン故に何れ程、此の映画を楽しく思ったか知れぬ。数分前のシーンでは、此の男女が、裸馬に背中合せに縛られ引廻されるシーンが、此の男女の運命を暗示し、そうして此の柱に張られ、非人の槍に薄命の血を流した。然も生命を賭けた恋の為に道ならぬ道として罰せられたその悲しさ、その悲愴さが夜の刑場の晒に於いて極まっている。
女は十字の柱、男は大の字に張られているのも又何ともいえなかった。続いて此の男女を浅間しいと蔑視したおさん茂兵エが、遂には自らも恋の炎の燃えるに委せて同じ運命を辿る。その緊迫したシーンの連続が、先述の

磔シーンが網膜から消える間もなく、然もそのシーンを想像させながら、京の街を引廻される姿の悲愴さを出していた香川京子の美しさが未だに眼に残る。若し磔シーンを出したら、とさえ欲が出る。少し近松物語に余分の筆が走った事をお詫する。

次は二、三年前の流賊黒馬隊に於いてだ。私は此の映画を廿九年の夏頃再上映で見たから敢て記す。此の方は少し磔シーンに彩があるが、それは省く。西条鮎子と沼田曜一がその主人公。此の方も刑場迄のシーンが印象的であった。

水戸黄門漫遊記難波岬の決闘でのシーンは頂けなかった。服装と、それに老人と子供の故であろう。磔シーンは白衣、そして女である事が私に執っては絶対に必要。従って（此のKKクラブの旧い号で載っていて、ダブるから削除される事を恐れています。為念）怪傑黒頭巾中の処刑の幻影は、前述の近松物語にまで想起させられた。

珍しく洋画で、二年程前、フアビオラで磔が出た事が記憶される。廿九年には遂に期待しながら見られなかったのに、青銅の基督がある。洩れ聞くに香川京子が主演らしくて今から楽しみである。舞台で花柳小菊が磔にされていたそうで見なかった事が悔まれる。

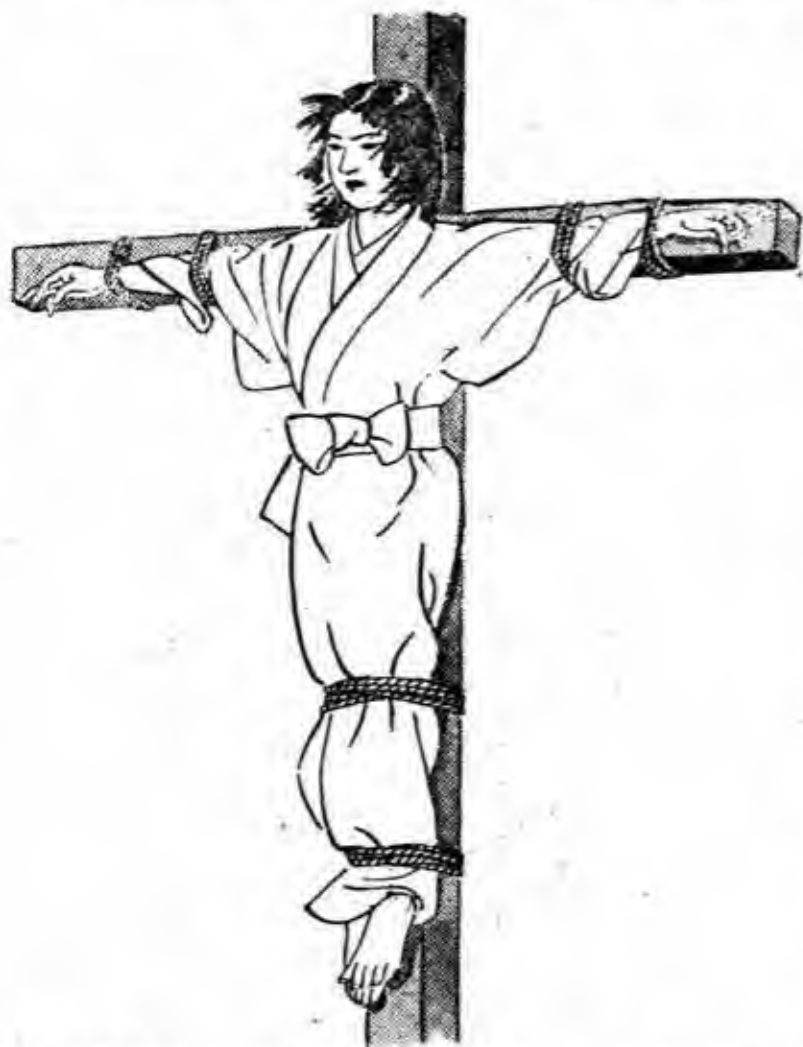
三

映画の他に小説がある。勿論挿画が無いと詰らぬ事は論ずる迄もない。小説倶楽部所載戦国恋慕で木俣清史画伯が麗筆を揮っていた海音寺潮五郎作黒田騒動中、お八重の方の処刑のシーンがある。富田千秋の筆で描かれた図は角度と表情に味があった。

KK誌上にも廿九年十二月号で磔零花で私を満足させて呉れた。文中に現れたる磔は興味の無い方が多いと思ひ省きます。

四

だが、私には残念に思える事が一つある。



それは誰かゝ解いて呉れないかと云う希望を持って、その残念なる疑問を次に記して見た。それは柱の事だが、前述の笛吹童子や流賊黒馬隊の場合、足を置く台のある事だ。あれは艶消だと思ひが如何だろう。

次に、柱に架けられた場合、縄が体にかゝっている近松のシーンが本当だと思ひのだが前記二作では両手首と足だけなのが物足らぬ古い錦絵や、物の本には脇をさいて胸前で結んでいると云うので正式であるかも知れないが、それは一幅の画として見た場合、余り感じが良くないのではないか。

昭和廿九年は誠に良き年であった。写真機があれば、あの良かったシーンを次々と写したかった。果して写るか如何かは別として、私は自分の網膜に映ったそのシーンをなんとかして記録しておきたいものだと思つた。

尚終りに臨み大川由起子氏の数篇の磔礼賛の文をこよなく愛する。此の美しかろう同好のお嬢さんに、此の拙ない筆による一文を是非捧げたい。緊縛サド、マゾには稍々心弱いシーンではあるが一九五三年十二月号の女囚処刑図の絵は私にとっては満足であった。あの文中の意を以て今一度描いて貰えないか、私の意も添え都築峰子氏にお願いするものだ。若し同好の士よ、あの文を参照に一篇の物語、詳しい処刑迄の首尾を明かに記して頂ける方があれば私は如何程感謝する事であろうか。



秘められた日本人虐殺事件

二 木 良 雄

五色の旗の
許に王道楽土
をうたった且
つての満洲国

で起った日本人虐殺事件である。折から太平洋の風雲ようやく急を告げて、日満親善を叫ぶ当局の意向によって当時闇に葬られた。そして今や訪れる邦人となない灰色の大平原をヒョウ／＼と吹き渡るシベリヤ風の中に、恨をのんで眠る清水氏夫妻の慟哭の聞ゆる思いがする。

二木がトラックで本部から二道溝の便事処に帰ったのはその日の夜七時頃だった。中満とはいえ、零下二十度を越して万物白一色に凍ついて、その中を半日もトラックに揺られ

て来るのは肉体的にも精神的にも並大抵のことではない。

「やれ／＼、やっと帰ったぜー」

二木と中村はすっかり草臥れてしまった。

電話連絡で二木達の帰るのを知って飯盒で飯を炊いて待っていた舟木が、「二木さん、今晩は一荒れ来そうだぜ」と、待っていたように云った。「荒れる」という言葉の意味は団員だけが知っている団内語だ。

「又、満警と何かやったのかい？」熱い番茶をグツと飲み干すと、二木は訊いた。

今日では全く変わっていると思うが、その当時、四平市は元奉天省から分離して四平街を四平市と改めて首都として出来た新しい省だった。この四平市昌図県〇〇鎮というのが二

木達××開拓団の入植した処だった。二道溝は京奉線の沿線にあって、昌図城を通過して〇〇鎮に通ずる軍用道路の起点だった。こゝから〇〇鎮までトラックでも半日、馬車ならたっぷり一日かゝるので、新しい入植者や訪問者の物資の集送の便をはかるため、二道溝に予め便事処を置き、二木は舟木と運転手の中村と三人で、電話一本を頼りに本部との連絡をとっているのだった。

二日間便事処を空けていた留守中に何か起ったらしい。二道溝には当時日本人は電気技師をしている山田さん一家と、表具師の清水さん夫婦が居た。その他は若干の行商人が来る。特権意識の強い日本人と現地の満人警察官との間に時々紛争が起って、その度に便事

処は日本人のクラブみたいになっているので二木達はよく引張り出される。その悶着の起る事を「荒れる」というのだ。二木は又それかと思ったのだった。

「いや、今度は違うんだ。蒙古兵だよ。うるさい事にならにや良いがのう」

「へエー、蒙古さんとかい、一体何をやったんだい？」

飯を喰いながら話を聞くとこうだ。今朝表具師の清水さんが日帰りの商用で開源に行くため駅で待合せて居たが、そこへゲデン／＼に酔った一人の蒙古兵がやって来て、待合室のベンチに寝そべって歌ったり、怒鳴ったり石を投げたりするので清水さんが注意したところ、日本人面をして生意気だとも思ったんだらう。小柄な清水さんを小突きはじめてので、清水さんが便事処に訴えに来たのだそう。ところがその時、丁度便事処には同じく汽車を待って時間をつぶしていた四人の日本兵が居合せたからたまらない。「チャンコロのくせに生意気な」ってんで、どや／＼出掛けて行ってくだんの蒙古兵をチャカ、チャカに叩きのめしてしまった。そして後始末もせずに涼しい顔をして汽車に乗ってしまったので、舟木君が斯は気をもむ次第と分った。

「困った事になったなあー」

「全く、相手が悪いよ」

舟木君がしょげる。二道溝を衛星都市として昌図城がある。そこに満洲国軍〇〇部隊が屯営していた。彼等は純粹の蒙古人で編成されていた。蒙古の国技である特種の蒙古相撲で鍛え上げた軀は何れも六尺余の選り抜きの巨人ばかり。おまけに民族優越意識はジンギスカン以来彼等の伝統だ。そこらをチョコチヨコする日本人等は文字通り眼下に見下す気位を持っている。それが小面憎くもあり、又友軍として頼もしくも思われる連中だ。しかもそんなのが四千人もいるのだ。「こんな奴等に暴れられたら手をつけられない。困った事にならねばよいが」二木は思いあぐねて昌図の警察署にいる日本人次席に電話をかけてみた。

「今のところでは、此方ではそんな気配は見られませんかね。多分大丈夫でしょう」

次席は樂觀しているようだ。

「二道溝には日本の兵隊は一人も居ませんし武器といっても私達の三八が三丁しかないんですから、もし奴さん達に来られたら討死するより仕様ありません。大丈夫だらうなんてんじや困ります。何とか具体的にやって見て

下さいよ」

「そうですね、部隊には日本人将校もいる事だし、それに一応報せておきます。警察としてはこれ以上どうしようもないんですよ。第一、満洲に来て現地人と喧嘩するようじや困ります。場合によっちゃあ、その清水とかいう人に退去して貰うようになるかも知れません」

この日本人次席、満洲国官吏のような事を云って、あべこべにおどかして来た。これでは頼りにもならない。そこで二木は舟木と中村に相談した上、とりあえず、今日一晩だけでも清水さん夫婦を便事処に保護しようと決め、三人で迎えに行った。未だ清水さんは開源から帰っていないそうで、奥さんが一人で留守番をしていた。今朝の事を話すと、

「まあ、そうでしたか、それはそれは、主人は気が短い者ですから、いろ／＼とお世話になります」

若い奥さんは鄭重に詫言を云って、

「主人がもう直き帰って来る筈ですから、帰ったらそう申しておきます」

余り重視をしていない風だった。

「清水さんは後で又迎えに来るとして、貴方だけでも」

押し問答したが奥さんは笑っていて応じない。先程の日本人次席といふこの奥さんといふ、満洲に永く住んでいる人はこんな事には馴れっこになって慢性化しているのか、それとも日系満人を除く他の満人を無気力者と見て馬鹿にしているのか、二木等の昨日今日渡満して来た者の神経質さを笑っている風でもある。二木達はしばらく顔を見合せていたがやがてむきになって心配していたのが何か馬鹿らしくなって来て、

「何でもないんだー」

「こんな事はよくあるんだなあ」

「兵隊でも満警でも変らんのらしい」

とうとう帰り道には三人で笑い出してしまった。

「あゝ、つかれた」

「馬鹿々々しい目にあつたぜ」

「舟木さんが余り云うからだ」

三八から弾を抜き取りながら三人はボヤいている。しかし二木は「何か起るぞ——」という予感がしきりに動いていた。そんな事を云えば、こん度は中村と舟木に笑われそうである。

「中村さん、一緒に風呂へ行かんかい」

「ワシや今日はくたびれた。チャンチューを

飲んで先に寝るよ」

無理もない、白昼々とした目も痛む曠野を半日も運転して帰って来て、休む間もなくこんな馬鹿々々しい事で馳けずり廻ったのだから、誰でもくたびれが一度に出るのである。

「じゃあ一人で行って来るかあ——」

二木は吹きながらシューバーを引っかけて防寒帽を頭に直かにのせて便事処を出た。いつも貰い風呂をする電気技師の山田さんの家で、幾日振りかの湯にひたって今日一日の疲労を洗い落し、手足をのびくと延した。

「二木さん、何か面白い話はありませんか」

無聊に悩む山田さんは二木の顔を見ればいつも云う。日本酒を御馳走になりながら蒙古兵の一件を此処でも話してみた。

「どんなものですかねえ、警察の方でも心配は要らんと云うのですが」

「そりや大丈夫ですよ、奴さん達にや日本の憲兵が想像以上に恐ろしいですからねえ、昌図には憲兵分隊がありますしね。それにそんな事は此方では毎度の事です、清水さんの奥さんだって別に驚きはしませんよ」と云った、更に山田さんは語をついで、

「こゝは、独立国といつても態の良い植民地ですからね。関東軍と甘粕さんの協和会が、

がっちり隅々迄押えているんですから、まあそのうちに話だけでなく、実際の事柄が貴君にも追々と分って来るでしょうがね」

酒でテラ／＼光る顔を撫て山田さんは事もなげに笑っている。「やはり取り越し苦労であつたか」と、二木はとにかく安心したような気持になって快く御馳走になった。

いとまを告げて表に出ると星が綺麗だ。

いゝ気持になって鼻歌まじりに便事処の見える満人街まで帰って来た時、二木は見た！

便事処の玄関前に整列した一個小隊程の蒙古部隊を！時、昭和〇〇年二月二十三日午後十一時だった。

「大変な事になった」火の塊が咽喉元へ込み上げて来たような気がして、夢中で駆け出した。玄関に走り込む二木を見て、蒙古兵達は動きかけたが、下士らしい兵隊が鋭い声で何か言つて制した。玄関を入ると取付に電話器がある。見ると二人の蒙古兵が電話の前に立っていた。

「ニイ、チュウバー（去れ）」と二木は叫んだ。無性に腹が立って来た。その時二木は気がついた。蒙古兵達は帯剣をしているだけで銃は持っていない。俺達にや三八があるッ！二木は夢中で事務室の扉を引いた。開かない

内側から鍵をかけているらしい。

「開けてくれッ、俺だッ、二木だ」と叫んだ時、後から蒙古兵の一人が組付いて来た。それを突き飛ばして扉を又引くと、今度は内側から扉が勢いよく開いて、中から二木を突き飛ばすようにして一人の男が飛び出し、

「助けてくれー」と裏口へ脱兎の如く逃げ出した。清水さんだ！ 同時に鳥のような奇声を上げて蒙古兵の一团は玄関からなだれを打って裏口へ殺到して行った。舟木と中村が事務室の真中で真青な顔をして立っていた。

「清水さんは何時来たのだ」

二木はふるえる手でカチカチと三八式歩兵銃に装弾しながら叩きつけるように叫んだ。

「何故出したんだ、駄目じゃないか」

「清水さんはたった今来たんだ、開源から帰って飯を喰っている処を踏み込まれたんだそうさ。血まみれになって逃げて来た。奥さんは殺されたらしい」



舟木が両手をしぼるように揉みながら色を失った唇の端をヒクヒクさせて、途切れ途切れに言った。「大変な事になった！ 大変な事になった！ どうしよう」二木の頭は混乱して同じ事ばかりが堂々めぐりをして、何も考えがまとまらない。

「とにかく行ってみよう、このまゝにしておくと清水さんも殺されるぞ」

「憲兵隊に電話をしてみる」

と云う舟木を残して、中村と一緒に深夜の

町へと飛出した。今この町の何処かで二木達と同じ日本人が、血まみれになって蒙古兵に追い廻されて、その家では奥さんが惨殺されているというのに、この静けさはどうだ！ 鼠一匹走った形跡もない！ 二木と中村はそれらしい方向に走った。満警に出逢ったので銃を突きつけて、

「兵隊が日本人を追っかけたらう、ナーベンチエイバ？（何処へ行ったか？）」

日本語と満語のチャンポンで、怒鳴りつけた。満警隊は日本語の教育を受けているし、この巡査は事件をすでに知っていたらしく、

「リーベンレン、チーベン、チュー（日本人は彼方へ行った）」と指す。又走る。その途中で清水さんの家があったので、二人は駆け込んで見た。

「おゝっ！」

「ひどい事を！」

二人の口から悲痛な声ほとばしる。襖が踏み倒され、茶簞笥が倒れてチャブ台と飯び

回 想

精 二 文並画

ツがひっくり返って、楽しい食事中の惨劇をまさしくと語っている。そして台所と次の間との間に女の死体が——。全身所嫌わず踏みつぶされて、モンペの上下は掻き裂かれて半裸体の手足に針金が痛々しくからんで血を吹き、それに、未だ溶けない雪と泥の塊がこびりついている。むき出しの乳房の上を答の跡が縦横にミミズ腫れを走らせて、その上を又無数の靴の跡が——。そして更に、「畜生、腹の上に小便をしてけっかる」と中村がうなる。引きむしられた頭髮の束が散乱して、その中に仰向きになっている顔の上にも鼻血の色でくっきりと靴の跡が印されていた。たゞ一つ生命を保った電燈のみが白々しくこの地獄絵図をうつし出していた。

思えばあの時、無理にでも連行すれば良かった。幾年か前に雄図を抱いて渡満した時、この人はこのような終焉を予期したであろうか。二十九才の若い命を異郷に散らしたその瞬間の気持を想像して、二木は悲痛さに胸が高鳴る思いさえした。顔の靴跡からその凌辱の様が連想されて激しい怒りを感じた。そして又、この場合死者に対する冒瀆かも知れないが、或る種の感情もかすかに動いてくる。それを打ち消すように激しく首をふって、「清水さんも、もう殺されているかも知れんぞ、早く行こう」

中村をうながして家を出ると、平然と巡回している前のは別の満警に出会う。それを道案内にして蒙古兵の跡を追ひ、二道溝の街

太平洋戦争が終った昭和二十年の夏、私も他の人々と同じように、規律と時間とで縛られた、三年間の海軍生活から開放され、夢にまで見た懐しい我が家に、帰ることが出来ました。

戦時中、二度と踏めるとは、思いも及ばなかった畳——私は、久し振りのその畳の上で手足を思う存分に伸ばして、誰にも干渉されない気安さから、夢の様な日々を幾日か送っ

を出外れた凍ついた軍用道路で、遂に彼等を発見した。黒々とした一団めがけて一発、また一発と二木はぶっぱなした。限りない忿怒と屈辱に「死ねっ、死ねっ」と心中に叫びながら射ちまくる。シベリヤ風の吹きすさぶ果しない平原に、銃声は余韻をものこさず吸い込まれていった。味気なさど心細さに二木はいつの間にか泣いていた。

惨劇の夜は明けて、何事もなかったように朝の息吹の始まる頃、答跡だらけの裸体が血塗られた鉄鎖をまとして、零下二十七度の寒々とした太陽に照らされていた。一枚の襦袢布のように——。それが清水さんだった。

(おわり)

たのです。「自由って、ほんとうに良いものだなあ」と、今更の如く、生きて帰れた身の幸福に浸っていられたのですが、それでも、時たまは、深夜「戦斗ラッパ」で平和な夢を海軍生活の思い出の夢に破られ、頭の中で過去と現実とが交錯して、ハッとして、床の中で眼をさますことも、しばしばありました。そのように急変した生活環境に、あれ程熱中して、今迄セッセと画き続けた責絵にも感

責 絵 の

(第三回)

依 田

興が湧かなくなって、暫くの期間は他の本の蔭にされて、本箱の奥の方に、画帳はしまひ込まれたまゝでした。

一方その頃の東京は、空襲の火の手を免れた薄汚れた街々だけが、悪夢のような曾っての思い出を残し、他は一面の焼跡が、遠い山手線のホームまでも、見通しがきく位、黒々と拡がっていました。

勿論、急造の寄木で点々とバラックが、建ち始めてはいましたが、焼跡の整理等は、誰

も見向きもせず放置されたまゝ、それに加えて防空壕を堀った後の泥の山が、諸々方々の街路上にまではみ出し、この焼跡からは、かつての平和だった東京の片鱗さえも見出すことは出来ませんでした。

人々は、きっと敗戦という大きな衝動に、
 呆然とし、それにも増して大きく転換した社会のうずまきの中で、どうして明日から生きて行ったら良いのかと言う不安に頭をなやまし、何の希望も湧かすことが出来なかったの
 でしょう。

只、その日、その日を生きて行くために、不足勝ちな食糧のことだけを追って、生活しているかのようにでしたが、この様な不安定な

社会状態と生活の中でも、安易な慰安は、求めに応じて次々と生まれました。

それは、今迄押しつけられ、強要された軍国調から、急に開放されたための反動と、与えられた「自由」の謳歌とから、総ゆる面が極端から極端に転換し、中でも興業界が、新宿の〇〇座の「額縁シヨウ」として始めた、ストリップの進出は目覚ましいものがありました。

これが大向うを沸かし、未知のものへの好



挿画(1) 肉体の門より

挿 画 (2) 焚 火



奇心と、外国的な原色がかった色彩とが強い
アウションをもって、人々の間に、割りこん
で来た原因だったのかも知れません。
私はこんな状態の東京に、一年―二年と、
或る会社勤務を続けて、平凡に日を送って
いました。そんな頃の或る日。帰宅してフト
取上げた新聞紙上に「肉体の門」の実演広告
を見出しました。

忘れかけていた責絵の筆を精神的なゆとり
が生じたために、又とり始めた頃だっただけ

に、この広告は私の心を或る種の期待に躍ら
せ眼を見張らせました。

御存じのように「肉体の門」は、田村泰次
郎氏の終戦直後のヒット作で、夜の女達の世
界を描き出したもので、私はその文中で、仲
間の仁義を裏切って、女達から私刑を受ける
責場に快い刺激を感じ、その情景を想像し
て、幾度か画帳にも、筆を走らせて見ただけ
に、その翌日、とるものもとあえず会社の
勤務の終るのを待兼ねて、小一時間も道程の

ある、その劇
場に出かけま
した。

夜の女に身
を落した若い
未亡人町子は
その仲間達の
掟「魂まで売
ってはいけな
い」という一
線を、恋しい
男のために破
ったことが知
れて、今彼女
達のねぐらの

焼ビルの地下室で、仲間の女達に周囲をグル
リと取囲こまれて詰問されています。

「掟を破ったものは、どうされるか知ってい
るんだらう」「やきを入れてやろう」四人の
女達は、自分達より年上のしかも美貌の町子
に淡い嫉妬を感じ、彼女の白い肉体を包んで
いる着物を無理矢理にはいで行った。無言で
女達のなすがまゝに従う哀れな表情に、舞台
に見入る観客は息を呑んで眼を輝かし、又、
フーッと誰かが溜息を洩らしてもいました。

舞台では、更に劇は進行します。帯の端を
強く引かれた町子は、クルクルと体が廻され
ヨロヨロとヨロメキ乍ら、本能的にその両手
は、胸元をしっかりと合わせるように押えら
れていましたが、薄い襦袢姿の描くその肢体
から発散する艶っぽさ―興奮の絶頂とはこん
な状態でしょう。場内はシーンとして咳一つ
起らなかったのです。町子は、けものの様に
なった女達の手によって、今はもう、赤い腰
のもの一枚が、最後に身につけただけにむか
れ、手を後に振じ上げられて、しごきで手首
を固く縛られた上、眩しいような体の上半身
も見ろ見る中に、細紐を幾重にもまわされて
行きます。必死にもがく町子の白いふくよか
な胸の隆起に喰い込む細紐は、その苦痛の度

合を感じさせ、「ハア、ハア」と息をはずませてあえぐ体は、コンクリの柱を背に女達の私刑におびえているかの様でした。

仰向いた顔に現われる苦悶の表情と、ピッタリと肌を緊縛されて、舞台の中央に立たされたその白い肢体、俳優も良かった故か、魅惑的であり又場内の雰囲気はピッタリとしていて、見るものをして無我の境地に陥しれたものでした。

又ボルネオ・マヤへの私刑の場も、前に劣らない位に素晴らしいものでした。

錠を破った事を自ら認めて、女達の前で、すっかり観念しきったマヤは、憎く憎くしようにのゝしるお仙の手で、両手を前にとられて、その手首にギリギリと今まで牛の肢をくっつけてあった麻縄でくくられて行きました。

そして広間の天井の鉄骨へその麻縄がかけられて、女達の手でマヤの体は吊り上げられるのでした。ピンク色のフレイヤーの多いスカート一枚の、半裸体にむかれたマヤは、後向きではありましたが、そのスカートの揺れと種々変わるヒタの線からも、眉をキリキリと上げて、苦悶に耐える状態がよくうかがうことが出来、場内を深い興奮に包んだものでした。

私は其の頃、丁度舞台で見るマヤのような気風の女性が好きでした。昔風の言葉で言う「鉄火肌」とか「小股の切れ上った女」を現代版にしたような女性です。それが今舞台上で私刑を受けているのです。

「エ、イツ、エ、イツ」と女性特有の甲高い気合と共に振り下されるお仙の鞭が、マヤの肉体の上に火花を散らし、その苦痛に今にも崩れそうになる、自分の体の重みを爪先を立てて、必死に支えようと目覚める女体、舞台効果のスポットと音と共に、忘れようとしても忘れ得ぬ一シーンでした。(挿画一)

こんな事があってから、私は責絵の魅力にとりつかれたかの様に、他人の迷惑にもならず、そして自分の憧れを自由に発散の出来る喜びも手伝って、毎夜の如く描き続け出したのです。

この頃の描く画の傾向は、前回の初期(専門学校当時)のもの、それから軍隊当時のもの、即ち単なる「縛り絵」と、「現実的な責を組合した画」とは変り、裸又は、半裸体に近い美女に、サジスチックな夢や、内外国の伝記から知識を得た刑罰とを取り交ぜた種類の絵が多いようでした。

之は、若い頃だっただけに、女体に対して

憧れを感じていたこと、時代の流れに染まって、開放された女性のヌードを材料的に多く集められたからだだったのでしよう。

之は現在描く作品に対し、その殆んどのものに、情景に沿ったアクセサリを加える方が、かえってピッタリくると考えて、実行していることは逆だったようです。

この様な近代的な女性を対象として責絵を描きつづける一方、以前は見向きもしなかった時代物に手をつけ出したのも此の頃でした。それは、知らず知らずに責への興味が湧き出して、それに関した種々の参考本を書店から書店へと漁り歩いては買求め、夢中で読み続けた影響があった様です。

日本のきもの特有の味、そして日本髪、それらは責絵の中に、一種の艶っぽさを増すのに非常に有利であり、又日本人の感情にピッタリと来る何かを持っていたのでした。

女の縛り方から始まって、種々の拷問や責「南蛮いぶし」「海老責め」「抱き石」「箱責め」「吊責め」等、その代表的なものは、多く紹介されて来たようですが、その他いろいろ日本の責や、日本髪姿の娘が捕縄を十字にかけられて責具の前で操り拡げる様々な姿態は、近代的なものと違って責への夢を

充分に満たして呉れたものが、之は又稿を改めて書きたいと思っています。

こゝでは、近代風の責絵だけを、其の当時の作品中よりピックアップして構図をまとめてみました。

焚 火 (挿画二)

これは第一次歐洲大戦のとき〇〇〇軍が敵方の婦女子に行つた残虐行為の一つです。

女は必死にもがいた。兵隊の真黒な手にもかみついた。だが所詮は、かなわない無意味な抵抗だった。前後からはさまれて衣服は次ぎ次ぎに裂かれ、その上女は最後のものまで剥がれて、すっ裸にされると、さすがに羞恥の心から、両腿をキユツと合わせ、上体を前にかぶめる様に身をかがおうと努めた。「おいっあれにくっれ」隊長格の言葉に、兵隊達は女を壊れた砲車の方へ引っばって行った。両手を横に拡げさせられ、ハチ切れそうな股を左右に開かれ、そのまゝの形で、両手首、足首を一つ一つ太い荒縄で砲車へ引き縛られた。



挿画(3) 石責め

動かすことも出来ずに固く縛られた掌の下の窪地に、焚かれた火の熱風を感じた声だった。次第にその勢いを増す火の手は、手の近くの高さにまで上って来る。
「ヒエーッ、アツ、アツ、たすけて、アッ」人の世の苦しみとは思えぬ苦痛の連続に、苦悶の呻きを上げてのた打つ女体は折からの戦場に散る道端の白百合の姿にも似ていた。

石責め (挿画三)

之は昔、わが国でも罪人に自白を強要するために用いられた拷問の一つであつた事は、皆様のよく御存知のことですがこの石は一枚や二枚なら女でも耐えられたそうです。しかし、長時間そのまゝ放置されると、腿又は肢の皮膚や肉が破れて血が滴り、その苦痛は相当なものだったようです。此種のものとは本格的責絵の初歩のものでしょう。私は之を近代的なものに、マッチさせるため角石の代りに手頃な鉄材を用いて見ました。「此方へ来るんだ」男をかくまって逃がして

手足の皮膚に喰い込む縄は、骨まで砕く様な強さで、身動きも出来ない上にがんじがらめに廻されていた。
「ニヤリ」と兵隊達が、残忍そうな眼付きで女の縛りつけられた肉体をなめ廻している。
「畜生！」はげしい憤りを感じてもがいても顔を外向けようにも、どうにも仕様がなかった。
「ヒエーッ」突如、女は精根を振り絞った悲鳴を上げて叫び悶えた。それは丁度、女が

やったばかりに、その男を追って居た暴力団の手で、バー・ミキのマダムは、無理矢理に今暗い地下の一室に連れこまれた。

乱れた髪が二、三本垂れ下った顔を恐怖におののかせながら、ヨロヨロと入って来たマダムの姿―白い薄いシユミーズ一枚にまで、むかれた脂の乗り切った中年増特有の弾力のある裸身を惜し気もなくさらされるように、細引が後手の小手とともに胸高々にまで、上半身を巻き、キツチリと固くくゝられた縄目の姿だった。

「かんにんして……哀願するマダム……」

「えゝい、しゃらくせえ。どこに男を逃したんだ。俺達の顔に泥を塗りやがって……」

マダムは室の中央の柱を背に押しつけられるように其処の床に座らされた。

今度は太いロープが、柱と共に彼女の上半身の自由を奪って行った。のどのところにも青い紐が二巻、喰い込むように結ばれた。

「ごめんなさい……お願いっ助けて」身動きすら出来ない程の痛さに彼女は悶えた。そして薄暗い光の下で、まだ自由になる両腿をわずかにくねらせて、少しでも痛みを柔げようと努めた。

「あんまり世迷いごとをほさくな、まあ、少

し痛い目を見なくちや、男の居所は言えねえらしいな」男は隅から鉄板を一枚かゝえて来て、それをマダムの太腿の上に抱かせた。ヒヤリと冷たい鉄板の感触と重み。

「アレッ、痛い、お願いっ助けて」マダムは必死に呻いた。「うるせいっ、少しはしづかにしろ」ハンカチが丸められてグ、ハッと口に押し込まれて、その上から別の布が押えに固く後で結ばれた。「ウ、ハ、ハ」声にならない呻きがハンカチの下から洩れる。全身に汗がビッシヨリと、水を浴びせられたかのようににじみ出て、肌の上を這って落ちる。

火あぶり (挿画四)

火あぶりの型式には、幾つもの形があります。その事はさておき、こゝでは外国映画によく出て来る私の好んだ形のものを選びました。

天幕を土人達に襲われて捕われた探険隊の一行中の二人の白人の女は、木で造った枷を



挿画(4) 火あぶり

首と一緒に両手にはめられて、それに繋がれた鎖で引っぱられ、土人達の奇妙な喚声と共に、彼等の部落に引き立てられて来た。

もの珍しげに女を囲む土人達の黒い顔、顔。二人はもう生きた心地さえなかった。

人から聞かされていた人喰人種の殺戮のことが、思い出される程恐しかった。果して耳を落され、鼻をそがれ、そして二つの眼をえぐられて惨殺されるのだろうか。二人は別々に離れて行って、首枷をかけられたまゝ先ずシヤツを破かれてはがされ、長靴も脱がされズボンも奪われて、次第に匂うばかりの白い肌を露出されて行く。反抗しても無駄なことは言うまでもない。こうなったら奇蹟か、救援の手を待つ以外に方法はないのだと、すっかりあきらめ切っていた。女はもう一糸もまとわぬ姿で、足枷までも両足にかけられて、土人達の祝いの踊りの太鼓の音を無意識に聞き流していた。

太鼓の音がハタと止んだ。フト体をよじらして振向いた女は、ハッとして息を呑んで眼を見張った。

同僚のロイが、之亦、白い裸身をむき出しにされ、二つの柱にかけられた棒の中央に、両手を高くくくられて、もろに吊り下げられているではないか。地上から離れた足先がスツと形よく真直ぐに伸びている下に、土人達の手で木の枝が見る／＼高く積まれて行く。火がつけられた。パツと上がる炎、そして煙、「キヤーッ」悲痛な叫び声と共に、その

煙の中で女の体が反けぞりもだえるのだった。

動物責め (挿画五)

子供の頃、猫にいたずらしてひっかかれたり、又鶏にわとりのくちばしで指先をつゝかしたりした事を覚えていますが、にわとりのくちばしの場合はまだ猫より後に曳く痛さが薄く、つゝかれる前、こそばゆい様な感じもあって一寸スリル的な気分を味わえたものでした。勿論、柔かい肌をつゝかれる場合は又別です。

「畜生、よくも俺に恥をかゝせて呉れたな」

アパートの一室に、ダンサーのマリを訪れた男は、顔面に憤怒をあらわしてこう言った。

「あら、何のこと……」軽く受け流すマリ。

「バカにするな、ヨージ」男は矢庭にマリに跳びかゝった。せまい部屋の中で、男はマリの両腕をとってグイと後ろに振じ上げると、側の細紐をとって両手首に固く巻いた。



挿画(5) 動物責め

「あら、何すんのヨ、誰か……」叫ぼうとする女の口があっと言う間に塞がれて、ハンカチで猿轡がはめられた。

「うゝゝ」うめきつゝ、男の手から逃げようともがくが、男のポケットから取り出された

挿 画 (6) 食 物 責



細引で、乳房の上から二巻き三巻きと上半身を荷物のようにキリ／＼とまかれ、芋虫のようにながされた。

男は、荷物でも扱うかの様に、マリの体を抱えてベッドの上に投げ出すと、両肢を一杯

縛の苦痛にもたえる処女の眼前に山海の珍味を並べたてる。

「写真的に言っても、女性の満腹感の表情と、何かを欲している空腹感の時の表情とは、後者の方が眼や唇等の輝きで女性の美しさを

に開かした格好で足首を別々にベッドにく／＼りつけた。「俺のうらみがどんなものか、ゆっくり楽しむがいゝぜ」男は冷やかにマリを見下しながら近寄って、スカートを下腹の上までまくり上げると、パンツ迄も安全剃刀の刀で切りとって破いた。「フ、フ、」男の不気味な笑いと共に、用意されて来たらしい包を解くのを見て、マリは猿ぐつわの下で眼をみはった。それは一羽のにわとりだった。そして彼女の自由を奪われた白い肉体の上にパラ／＼と、とりの餌がふりかけられた。

食 物 責 (挿画六)

一層引き立たせると言われていますように——此の種のような静的な責絵(他は眠る時間を欲する様なうつゝ責的なもの等)も好きでした。拘束具には、鎖、手錠、枷と言うようなものを、多く描きましたが、これは金属的な感触——即ち、堅牢、冷たさ、それに美惑——がこの種のものにピッタリ来る様に感じられたからです。

此の当時、都内の新聞紙面に、或る音楽教師がお弟子の令嬢を住込ませ、夜はブレイの相手に、そして昼の自分の留守の時には、女に足枷をはめて、家庭内の用が足せる位の長さの鎖で寝台の足につないで……と言う事が載っていたことがありました。その令嬢も自分から之を拒もうとしなかったと言うことですが、この時のその構想が、私の夢と全く同じでした。

以上、拙文にて三回に分けて、誌上に掲載して戴きました責絵の回想も、丁度、現在篇に入る前で区切り、今度は新しいスタイルのもので投稿させて頂きます。サジスチックな夢を持つ同好者のみなさま、その夢を生活の中に於いて少しでも楽しいものにしようではありませんか。社会や他人の迷惑にならない、自分自身だけの楽しみに……。 (おわり)

懸賞〔告白と手記と体験〕入選

或る少年のモノロオグ

牧

啓

一

或る少年のモノロオグ

僕のような性癖を持った少年が、他にもいるのであろうか？

僕は長い間、こうした自分に激しい厭悪を感じ、どれほど普通の明るい健康な少年でありたいと願ったことだろう。しかし、それは虚しい願いであった。僕は、自分の身内から燃えあがってくる、狂おしい炎に、いつまでも抵抗することはできなかった。所詮、僕は暗い衝動に身悶え、孤独な炎に身を焼かれながら、この道を歩んでいくのであろう。

僕が他の屈託のない健康な少年達とは、異った傾向の性欲を持っていることを、漠然と感じはじめたのは、中学生の頃であった。だ

が何分その頃は、まだ無邪気な子供にすぎなかったし、不安を感じながらも、切実な問題としては迫ってこなかった。

それがはっきりとした形となって、はじめて僕の前に姿を現したのは、高校に入学した年であった。

高校に入学した当初の僕等にとって、最も関心のあることは、校友会の何部に入るかという事だった。中学と違って、高校のクラブ活動は、自主的で盛んだったし、また高校生活のなかで最も愉しい華やかな存在でもあった。新一年生の勧誘に来る各部の上級生の宣伝も、また魅力的なものだった。僕の友人連

中は、いずれの部に入部しようかと騒いでいたが、僕には既に心にきめている部があったので、各部の上級生の宣伝も、それほど関心はなかった。僕の入部したいのは音楽部であった。中学二年の時に、ボーイソプラノからテノールに変声して以来、僕は将来、東京の音楽学校に進んで音楽の勉強をする決心だった。先生方からも、僕の素質は認められていたし、行く末はテナーとしての活躍を夢見ていたのである。

ところが高校に入学して二週間ほどした頃だった。四、五人の仲間と、放課後の運動場を横切って帰りかけていると、プールの横に



あるシャワー室が騒々しい。見ると、練習を終えたラグビー部の生徒が水を浴びているのである。僕の目はそれらの若々しい裸像に釘付になってしまった。ほの暗いコンクリート

のその部屋には、十人あまりの伸びやかな裸体が、さまざまなポーズをして水しぶきを浴び、ひしめきあっていた。裸の少年達は皆一様に、下腹部に白い褌のようなものをしてい

る。薄暗い部屋で、そのものの白さは、少年達の明るい小麦色の裸体と調和して、異様な美しさで僕にせまってきた。僕はそのはじめに見る白い褌のようなものに、すっかり心を奪われてしまった。それは少年達の若々しい肉体の腰部を被っていた。だが褌と違って、彼等のまるいお尻は、いずれも皆まるだしだった。僕は息の弾むのを押えて、仲間聞くように云った。

「あれ、何を締めてるんだろう、褌かな」
するとスポーツ好きの一人が答えた。

「バカ、知らんのか。サポオターさ」

「サポオター……何のためにするんだい」
僕はこの新しく自分の心をひきつけたものについてもっとくわしく知りたかった。

「ブラキンにならんようにだよ」

友人はいとも簡単に、しかも単的な少年らしい表現で、ずばりと云ってのけた。

しかし、このブラキンにならんようにという言葉は深く僕の心に沈潜していった。僕にとってこの言葉は、異常な感動をあたえるものだったのだ。

スポーツ通の友人は、更にくわしく説明した。

「あれ、ゴム製なんだ。だからピッタリ締

るんだよ。走ったり、跳んだりしても邪魔にならんのださ」

そして最後に、少し淫らな少年らしい笑いを浮かべながら附け加えた。

「だからね、あれしてたらストリップ見ても大丈夫なんだ。ゴム製だろう、ピッタリ締めつけてるから、いくら元気な奴でもさ」

僕は興奮している自分を、相手にわからないうようにするの骨を折った。あの裸体の逞しい少年達の、サポオターに被われている部分を秘かに想像したのである。

その夜、僕は胸がときめいて眠れなかった。このような想いは、今までにないことだった。僕の頭の中では、白いサポオター一つの少年裸像が、狂おしい乱舞を続けていた。少年達の腰間を締めつけているサポオターが何時までも頭の中で白く冴えていた。

それともうひとつ、秘やかに胸を燃えさせるものがあつた。それはあの少年達の裸像のなかで、一際目立って体格のよい少年の映像が、僕の心に喰い込んでいたのである。その少年は若鹿のようであつた。すらりと高い背丈。明るく陽に焼けた肌の色。誇らかに張った胸の初々しさ。そして、ちらりと僕の視線とぶつかった瞳の、キラキラと光った熱っぽ

い眼差。髪を短く刈った顔は、精悍で生氣にあふれていた。僕は生れてはじめての恋をしたのである。

翌日、僕は当然定めていたことのように、さっさとラグビー部に入部してしまった。このことは友人達を呆然とさせた。彼等は僕が当然音楽部に入ることと思っていたし、まかりまちがっても運動部など、ましてラグビー部などへ入部するとは考えてみることもさえないことだったのだ。彼等は、弱々しい感じがするほど華奢な僕に、ラグビーなど出来るはずがないと云った。

「音楽家転じてラグーとなる、か」

「牧、タックルされたら、お前の軀なんか折れちやうぞ」

「大丈夫さ、牧はしなやかに出来てるから、柳みたいにしなうだけだよ」

皆からさんざんからかわれても、僕の決心は変らなかつた。

僕はあの少年達と同じように、サポオターをして、組んずほぐれつ、ラグビーの球を追う生活がしたかったのである。否、その奥に秘んだ本当の気持は、あの体格のよい少年達の裸群に、そしてそのなかでも一際美しい軀の持主である僕の恋人への、接近したい気持ち

があつたのである。

ラグビー部の部室は、天井の低い細長い狭い部屋であつた。汗と花の腐ったような匂いが、その部屋にはただよっていた。高校では禁じられているタバコの臭いもした。それは僕の心ときめかすものだった。三年生の部長は、ぶっきらぼうに紹介した。

「これ、牧。今日からラグビー部員として、皆と一緒にやることになった。一年生だからよく指導してやれ」

ラグーたちの目が一斉に僕に注がれた。僕はそのなかに、あのひとの目もあることを意識して顔が火照った。

「いやに細いなア」

「大丈夫かい、こいつ」

荒っぽい言葉に、僕は、狼のなかに迷い込んだ小羊のような自分を感じて、恥かしかつた。僕の恋人は、二年生で、藤尾健一という名だった。

授業が終ると、三三五五この荒っぽいラグーボーイたちは部屋に集ってくる。するとそこには、不思議に魅力的な雰囲気が生れるのだった。狭い部室は、充実した若々しい肉体で充滿する。紫色のタバコの煙が流れる。大人でもない、また子供でもない少年達の、満

たされない、それだけに生気のある空気が重苦しく支配するのだった。

彼等の話題は、自然の欲求のように、まだ知らぬ世界のことに移っていく。女のこと、セックスのこと、そして哄笑のうちに語られる罪のない猥談。彼等のあけすけな表現と、自分のセックスのことを話す直截簡明な態度に、僕は顔を赤らめ狼狽しなければならなかった。それは、今まで属していた僕のグループにはない、全然異質のものであった。

そんな話題のなかで、僕は小さくなっていくのである。話の中心になるのは決して、藤尾健一だった。彼はまだ二年生だったが、部内の勢力を握っているらしかった。彼の体格と、ラグビー部でも特別優秀なチャンピオンであることから、三年生も藤尾には一目置いているようだった。

藤尾健一の話は、一層欲情的だった。その体格からしても、それは頷けることだった。全く、彼の肉体は、遠く見たよりも充実している、到底十六、七の少年とは思われなかった。しかし、大人の軀とも云えず、やはり少年の未完成な優美さを示していて、青年のゴツゴツとしたいかつさはなかった。特に横顔の精悍さと、首から胸にかけての線の美しさ

は、僕をしてしばしば彼の姿に注目させた。時折そのような僕の視線と、彼の瞳がぱつとぶつかり、僕の動悸は早鐘をつくようになるのだった。

ひとしきり、そうした話がはずむと、部長が結末をつけるように「さあ、練習だ、練習だ」と怒鳴る。少年達は、いっせいに服をかなぐり捨て汗と泥に汚れたユニフォームに着かえはじめた。部屋には再び花の腐ったような匂いが、たちこめる。少年達は、荒っぽく制服や下着を脱ぎ捨てると、全裸になってサポオターを着ける。僕はそのすこしも恥かしがらず、あけっぱなしにセックスを晒す少年達の態度にとまどってしまった。彼等はお互いに自分のものの自慢などしあっては、サポオターを着けていた。そのなかで次の言葉は僕に鋭く響いてきた。

「なんていっても、そりやあ、藤尾のが一番立派さ」

しかし、僕は自分の願いにもかかわらず、健一の裸体に目を注ぐことは出来なかった。唯、わずかに、彼の幅広い胸から腹にかけてちらりと見ただけであつた。

僕がそうしてとまどっていると、部長が、「あ、牧はユニフォームがなかったな。誰か

二着持っている奴は、牧に譲ってやれよ」と云った。すると思いがけなく、着がえをすませてボールを投げていた藤尾健一が、「じゃあ、俺のをやるよ。俺、もう一着持っているから……」

と云うと、無造作に着ていたシャツを脱いで、僕の方へ放った。僕はぞくぞくするほど嬉しさが、胸内からあふれ昇ってくるのを覚えた。満足に礼も云えない位だった。裸の上に着るシャツは、彼の体温ではの温かった。それはもとは臍脂色であつたらしいが、今は色も褪めて汗の臭いがしみこんでいた。僕は彼の着ていたシャツだと思つて、身が震えてきそうだった。粗い毛糸のシャツの感触が、彼の力強い線で縁取られた胸のように思えてくるのだった。僕は恥かしさに身を縮めるようにして、ズボンを脱ぐと、買ってきたばかりの白いサポオターを着けた。腰と股がピツタリと締めつけられて、軀が軽くなったように心地よかった。背後に藤尾健一の気配を感じて、急いで新しいパンツを穿こうとすると「おい、そんなんじやいっぺんに汚れて破れてしまふぜ。これ、穿けよ」

健一は親しみをこめた笑顔で、にっと白い歯を見せて笑うと、泥で剛々したパンツを差

出した。僕はドギマギしながらも、云われるとおり、そのパンツを穿いた。厚い布地のパンツは、お尻に赤や黒の糸で縫が重ねてあった。

「それ、俺が試合の時穿くやつだから縁起がいいんだぜ、しっかりやれよ」

すっかりラグビーの仕度をした僕の肩をたたいて健一はもう一度にっと笑いかけた。僕は改めて健一に、ぐんぐんひかれていくのを感じた。

練習は予想していた通り、激しいものだった。強健な体格のラグーボーイたちでさえ練習が終ると、ぐったりと芝生の上に軀を投げ出すのである。まして、華奢な僕にとっては、死ぬような思いであった。勿論、選手などにはなれなかった。補欠にもなれず、部の足手まといであった。しかし僕はやめなかった。やめるにはあまりにも健一にひかれていた。健一

がボールを抱えて走り出すと、僕は夢中で彼

練習が終ると僕の軀は擦傷だらけだった。



の後を追った。どうして自分にそんな走力があるのか、不思議なほどの速力だった。唯彼の軀めがけて、ぱっと軀を投げかけるのである。それはほとんど壮烈にすら見えた。僕のタックルは有名になった僕は勇気のある人間と思われた。しかしこのタックルは、相手が健一の時にのみ發揮されることを、皆は知らなかったのだ。だがこの僕の悲壮なタックルも、成功することは少なかった。

藤尾健一は、僕の身を打ちつけるようなタックルにもかかわらず、僕を引摺ったまま走り続けるのである。僕は彼の腰に、あのサポオターを締めてるあたりに、しっかりと両腕をまわしたまま引摺られていくのだった。引摺れながら僕は幸福だった。陶醉感すら味っていたのである。

僕の軀の擦傷は治る時がなかった。一度、例のタツクルの後、太股にひどい擦傷をこしらえた。部屋に引きあげて、さすがに痛くて横になって休んでいると、健一が入って来た。彼はすこし照れたような笑いを浮かべながら、荒っぽい手つきで赤チンを塗ってくれた。傷に泌みて痛かったが、不思議な悩ましさに僕は息を殺していた。健一は片方の手で、僕の太股の傷を撫ぜながら

「痛むか？……すべすべした足だなア」

と、独り言のようにつぶやくと、ふっと暗い目附きになった。僕は何かを期待して、軀を固くしていたが、何事もなく過ぎてしまった。

その事があってからだだった。健一の僕に対する態度が少しづつ変りはじめたのは――。

僕がタツクルをしても、彼はもはや僕を引摺って走ることは、少なくなってきた。時には、あまりにも、わざとらしいと思われるほど、彼はあっけなく、僕と共にグラウンドの芝生に倒れてしまうのである。激しい息遣いに喘いで、しっかり抱きあったような格好のまま、互いの動悸に耳を澄すように転った数秒を過すのである。そのような時、私の顔近く彼の瞳がキラキラと光っていると、僕は彼の

波打っている胸に顔を押しつけたくなるのだった。

時たま、僕がラグビーの球を抱えて走ることがある。僕は走りながら、健一がタツクルに走ってくることを願っている。健一のタツクルは凄まじかった。激しい勢で走ってきたかと思うと、投げ倒されているのである。彼の腕が、しっかりと僕の腰を捕えているのを僕はどれほどの喜びで確めたか知れない。

このような彼と僕の親密さは、僕を彼に一层近づけていった。練習後の彼の汗ばんだ背中を、タオルでふいてやったり、着がえする彼の裸体を盗み見ることに、わずかに僕の欲情を慰めていた。しかし、練習後の汗ばんだ彼の裸体から発散する甘酸っぱい体臭は、僕をかぎりなく悩ませた。僕は遂に、彼のサポオターを秘かに持ち帰ったのである。健一の充実した、張切った軀を支えているサポオターはすいぶん痛んで古くなっていた。ゴムがゆるんでいて、僕がしてみてもグブグブだった。薄く汚れたサポオターには、何かのしみが意味深くついていて、僕はたまらなくなつて、その上に顔を伏せた。強烈な臭いがした。僕は少年達の会話から教えられた行為を行ったのである。勿論、頭には、健一の

裸体を想い浮べて――。

僕には一つの疑問があった。それは、時々示す健一の動作から、彼が僕に関心を持っている事はわかったが、彼も僕のような性向の持主なのだろうかということだった。しかし僕はあまり期待していなかった。僕のように女の子に全然興味を持たず、軀のいい少年に性欲を感じる者など、僕以外にはあり得ようがないと思っていたし、健一が盛んに女の子とを話すので、やはり女を求めているのだとあきらめていた。が、僕のラグビー部の少年たちに一樣に感じていた関心は、ずいぶん変わってしまった。今では健一以外の少年の裸体には、ほとんど欲情を感じなくなっていた。

僕は、細っそりした軀つきや、いくら陽に焼いても、白い肌のせい、ラグビー部の少年たちに倒錯めいた気持を起させることがあつた。

或日、練習後部屋で服を着かえていると、三年のNが突然背後から僕を抱きしめた。ふざけた調子だったが、僕は厭悪を感じた。それは健一が見ていたもので、一層ひどかった。と、健一が怒ったような調子で

「やめろよ」

と短く云うと、Nを荒々しく突き放した。

このことは、僕の感情を健一の上にしっかりと固定させたのだった。

やがて、夏休みになると、ラグビー部の少年達は、毎年の例によって合宿練習にはいった。学校に泊って練習するのである。うれしいけれどつらい毎日だった。真夏の太陽に照されての練習は文字通りくたくたにしたし、泊るといっても、教室の板の間に毛布にくるまって眠るのだから、はじめての僕には眠れなかった。眠れない理由がもう一つあった。それは故意か偶然にか、僕の隣に健一が寝ているのである。皆、昼間の激しい運動に疲れているので、すぐ肝をかきはじめののだが、僕は、裸の軀に毛布を申わけ程度に巻きつけて眠っている健一に、注意がいて、眠れぬのだった。

そんな幾晩かを過した或夜だった

疲れてウトウトと浅い眠りに陥っている

と、ふと異様な気配に目覚めた。僕の顔のすぐ近く健一の顔がある。熱っぽい目がキラキラと光って口を半ばあけ荒い息が僕の顔にかかっていた。僕は待っていたものが近づいた

【読者通信】

四月号本日購入しました。本月は特に写真が充実しております。一番素晴らしいのは杉原虹児画のマゾヒスティンの夢です。何と実感のこもった絵でしょう。それからフォトアルバム写真もよいし、ポーズも各種各階層(サドマゾ)の夢を満

足させるに充分です。萩千恵子嬢の階段での写真は今迄にないアイディアでした。これからもこの様な特殊なものを載せて下さい。最近の映画でファン必見の「逆襲大蛇丸」この映画はいろいろの緊縛場面が数多く、又一風変わった取扱いをしてるので従来の緊縛とは少し違うので是非見る価値があります。新倉美子が口に布をかまされての猿轡で手足を前で縛られてもがく処、二カット、次に利根はる恵と瑤峨三智子、これが今迄の映画と変っている。捕われる

迄の映画と変っている。捕われるにゆきます。これについて先生の処は丁度ターザン映画で動物ワナにかけられる様な場面を思わせる。船の荷揚げに使うアミの様なもの山道にかくされてる。そこへ二人がワナにかゝり外から更に太いロープで括られる。それから塩蔵へ宙吊りにされる。サーカスの空中飛行の時の様な細木に背中合せにつかまり、手は片方ずつ二人の手が紐にくゝられ、地上三尺も浮いていた。更にクロースアップで二人の表情等、可成り長いシーンであった。更に大谷友右門がはりつけにされ、火あぶりにされる。この映画はその意味に於ても必見すべきである。文章と絵が拙くうまく書けません。読者の中でこの映画の事を書いた人があったら是非載せて下さい。伊藤藤雨先生が指導された「めくら狼」が一日より新潟市で上映されるので早速見

四月特大号の素晴らしい「アブ川柳」にはじまり「襦袢への幻想」「女性の下着写真マニエ」「耽美の果て」そして「大和撫子」その他の記事のブロー・マニエ、おしめマニエである私にとって、どんなに感激的な喜びであつたか。たゞ編集者に対して厚く御礼申し上げます。殊に「大和撫子」の中のお若い女性が無理やりゴム布のおしめカバーを穿かされるシーン、四馬氏をはじめ挿画の方々が全く私の好みにあつたブルマ型ブロー・マニエを描いて下さったこともこの上ない喜びでした。

(I・Y)

ような期待と不安で息がつまりそうだった。

しかし、僕は知ったのだ。結局彼が求めたのは、女である僕であつたことを。僕はつらかった。愛する彼に満足させたかった。僕は恥かしい事もあえて行った。彼の満足のため

に――。だが、彼は僕のもとから立去るであ

ろうことを、僕は哀しく承知していた。

結局、僕も彼も、異った道を歩んでいる二人だったのである。僕を望む人でなかっただけのことだった……。(おわり)

岩瀬祥一のお灸院

絵と文 岩瀬祥一

あんまり女の人の滑らかな背中や、豊満なお尻に、灸が据えたくって、据えたくって私はとうとうお灸院を開業してしまいました。その名の通り女の人ならどんな階級層の女性でも大歓迎してお据えする、女性に限る岩瀬祥一のお灸院であります。

婦人病はおろか、女の肩凝り、女のこしけ、冷え性、安産、等を治療し、さては女性のマゾヒズムの性的興奮まで満喫させると云う訳で、開業早々よりお灸を据えに来る婦人は多く、緊縛モデル嬢まで来て下すって、金くのところ、灸師になった私は大満足です。

勿論、男の人は据えに来てもお断りで、灸院内の入室は絶体お断りと云う訳であります。

婦人達の滑らかな背中や、ふくよかに盛り上ったお尻から、薄紫色の煙りが立ち上り、じりじりと

背肌や尻肉が火傷されてゆく、その様に、私は無上の愉悦と興奮を持って見つめ、熱さを我慢するために辛抱枕に必死としてみついで、

「熱っ、熱っ、熱っ」と悲鳴を上げながら熱さを耐える女達の、妖しいまでの魅力を発散させる様に、私をして、すっかり

たんのうさせてくれるのです。でも、そんなにまでして物凄い熱さを我慢する女達は、それだけの価値があるから据えるのでしょ

う、据え終った時の女達は、口を揃えて言うのです。「それは熱うございますわ、やっぱりお灸も一種の火傷でございま



すからね、据えられている間は、悲鳴を上げる程、それはそれは熱いものですわ、でも私達女には、

にあって全くお灸というものはよく効くものですわ」

被虐快感と辛抱強さがありますしそれに何んと云っても女の体質はお灸の効目はてきめんで、据えたその日からもう痛みが薄らぎ、身体中がほかほかして、それは何とも云えないよい気持なのです。女

どの女達も「熱い、熱い」と悲鳴を上げながら、辛抱して据えた甲斐があって、気分がすっかり快くなり、今更のようにお灸の効を讃え、云いようのない嬉しさに胸を膨らませて帰って行くのです。

私刑奇話

『呪い塚』縁起

畔野当魔

三条春彦・画

『呪い塚』縁起

徳川時代行われた刑罰の中でも、公刑に関する記録は多く残されており、よく知られているが、諸藩で独自に行われた処刑の方法に關しては、記録も少いせいか余りよく知られてない様だが、これら私刑の中には、公刑と異って自由で奇抜な、またそれだけに苛酷な処刑が多い。その内の一つとして、私はとくに刑罰史研究家にも殆ど紹介されていないもので、金沢藩下で行われた奇抜な死刑を紹介してみよう。

これは、私が偶々^{ふたまたま}神田の古本屋で求めた同藩下の古い郷土誌にみられたもので、処刑をなすに当って一応公の手続は経ているのだが、村奉行の取扱ったものだけに、殆ど私刑に近く、その奇抜さや残酷さは他の公刑に見られないところのものがある。

この刑は、主人の家の乳のみ児虐殺を疑われた子守娘に対するもので、昔から主殺しに対する刑罰は鋸びき等に見られる様に、苛酷を極めた最高刑を課したものだ、いたけない乳児を殺したとのこととて想像以上に残酷な方法で処刑したらしい。

漢文体のこの本の内容は物語風に書かれており、地方の奇話や特異な記録が集められている中の一挿話である。

この本の内容を現代文に直して述べると、次の様である。
今を去る寛文三年、加賀国射水郡大白石村の豪農、七右衛門の家に玉の様な男子が生れた。

七右衛門は妻よね女との間に何一つ不自由ない暮らしをしていたが結婚後十余年を経た四十の年になっても、子宝に恵まれず、唯一つ

の不運をかこっていただけに夫婦の喜びもひとかたではなく、早速子守を雇って育てることにした。

やがて、子守娘には七右衛門の小作人の与兵衛から、不払いの小作代のかわりに娘のおちかを出して貰う事にした。

おちかは、この時十八になったばかりだが水呑百姓の娘には珍らしく、切れ長の瞳に男好きのする顔立をしていたので村の青年の多くは、彼女のあとを追い廻していたが、中でも同じ村の善吉という青年とは恋仲らしく、仲が特に睦まじかった。

それだけに、ちかは地主の子守に出るのを嫌がったが、さもないと小作料の不払で父親が下手すると入牢しなくてはならないので、仕方なく、しぶしぶ出ることにした。

七右衛門夫妻は、赤児を可愛がるのあまり、おちかに対する扱い方も手厳しく、少しでも怠けると、ことごとくに口やかましく文句を云った。その腹いせに、ちかは背中では泣き騒ぐ赤児を叩いてしまふ事が多くなり、日に日に赤児に対する憎悪は激しくなっていた。偶々或る日、おちかが野良に出て子守をしている時、通りがりの善吉を見つけ、二人はその晩同家の納屋で密会する事を約した。やがて夜になり、夫婦が寝室に入った後、ちかは赤児を隣室に寝かしつけるや、すぐさま胸をときめかせながら、人目をしのんで納屋へと急いだ。

運悪く其の時、寝ていた赤児がオシメが濡れ気持悪がって泣き立てた。隣室に寝ていた女房のよねは泣声を聞き立てて赤児につきそって寝ている筈のおちかを呼んでみたが、見当らないので探し廻った所、呼び声を聞いてあわてて納屋から飛び出てきたちかが、庭先にぼうぜんとして立っているのを見付けた。

よねは、乱れる髪をかきたてるちかを引き立てて部屋に入れ、赤児のオシメを替えさせると、ちかに何故納屋から出てきたかを、七右衛門とともにしつこく問い訊した。ちかは仲々口を割らなかつたので、業をにやした七右衛門は、嫌がるちかの寝巻をはぎとり腰巻一つにさせ、腰紐で後手に縛り上げ、傍らの濡れたオシメを、ちかの口の中につこんで、猿轡をかました。

女房のよねはやおらかたわらの物差しを手に取り、ちかの素裸の背中を打ち初めた。ビシリビシリと打ち下す度に、ちかは丸くもち上ったしりをくねらせたが、七右衛門に押さえつけられているので致仕方なく、オシメの猿轡をはめられた口中で呻いていた。それでも仲々首を縦にふらないので、全身とくろ嫌わず打たれがそれでも白状せず。白い背肌を赤くはらし、みずばれに成った所からは血がにじみ出ていた。

夫婦はちかを、そのまゝ引きずって納屋に転がしておいた。

翌日、ちかは許されていつもの通り子守をさせられていたが、野良に赤児を背負って出かける内に、昨夜の責めの疲れと背中からの痛みから、赤児を草叢に降ろすと、自分は近くの林に入ってこっそり居眠りした。何しろ昨夜は殆ど一睡もしてないので、すぐぐっすりと眠ってしまった。やがて眼がさめて気がついた時には、もはや暮近く、ちかはあわてて赤児をおいていた場所へ駆けつけた。だがちかは、はっとその場に立ちつくしてしまった。赤児がいないのだ。着替えのオシメだけが、そばに残されているだけだった。

ちかは顔色を変えて暮色迫るあたりをさがし廻ったが見当らないので、早速主家へ知らせた。七右衛門一家は血相を変え総出で夕暮の田圃一帯を探し廻ったが、やがてその中の一人が、ちかが赤児を

置いていた草叢の近くの肥溜の中に、何か白い物が浮いてるので引き上げた所、それはすでに糞にまみれて醜い姿で死んでいる赤児の屍体であった。女房のよねは、その場に泣き崩れてしまった。

赤児の死体を運んで夜道を一同は引き返したが、おちかは其の場で荒縄で縛り上げられ引ッ立てられていった。昨夜の仕返しに、ちかが赤児を肥溜の中に、故意にほうりこんだと思つた夫婦は、直ちに奉行所にちかを主殺しとして訴えたので、逮捕に來た役人は必死に無実を泣き叫ぶちかを、肌衣一枚の裸足姿で無理矢理押し立てていった。

奉行所では調べは明日に廻し、ちかを早速牢屋に入れたが、ちかは主殺しの重罪人故縄をかけられたまゝ、さらに木製の足枷をつけられ薄暗く冷い牢屋の荒籠に投げ出された。

翌朝、起されたちかは腰巻一つと一枚の囚衣に着換えさせられたが、その時隣室から身重の若い女が、泣きながら非人に引き立てられてゆく姿をみて、我知れず恐ろしさにふるえ上った。

やがて代官の出仕とともに、ちかは本縄をかけられ白洲に引き出された。

七 右衛門と仲の良い代官は、最初からちかの事を有罪と決めつけていたので、直ちに処刑しようか考えていたが、一応調べなくてはならないので、引き出され、白洲の砂利の上に縄尻をとられて坐っているちかに、自白するように促したが、ちかは根も葉もない事とて、強くこれを否定した。

やがて証人として、日頃ちかの父親と仲の悪い隣家の儀助が、あの日野良を通りかゝった際、確かにちかが、赤児の鼻

や口をオシメで押さえつけていたと証言した。白洲で聞いていたちは、思わず立上り、後手に縛られた体を震わせて無実を叫んだ。代官は儀助の証言にもとずいて、ちかは赤児をオシメで窒息死さ



た。ま

せた上、肥溜の中に投げこみ、素知らぬふりして赤兎が一人で居なくなったが如く騒いだのであり、これは前夜主人に自分の不始末を叱責された腹いせにやった事であろうときめつけ、ちかに白状する様促がしたが、ちかは非人にいくら棒でこづかれても全然首を縦にふらなかった。

そこで代官は、ちかに神妙に白状しないと拷問にかけろぞと脅かしたが、ちかは拷問にかゝっても、知らない事は知らないから白状できぬと強く云い張ったので、ちかは、非人に縄尻をとられて、拷問蔵に引ッ立てられていった。

代官は、ちかが非常に強情な娘で、ありきたりの責め方では白状しないことを、七右衛門から知らされていたので、拷問係りの役人を呼びつけて、ちかを殺さぬ程度なら、いかなる方法を用いてもよいから白状させる様命じた。

拷問蔵に入れられたちかは、まず腰巻一つにされ、二つの乳房が飛び出してしまふ程、強く縄で締め上げられた。拷問役人は、非人に命じて石抱き責の台を運ばせ、真青になって震え上るちかを算盤板の上に坐らせて腰巻をめくり、ちかの小肥りの白い股を、付根までむき出しにさせ、縛っている縄を台の後の柱にくくりつけた。

目を異様に光らせた拷問役人は、傍に立てかけてある三角状の木棒を三本取り出して、ちかの足と股の間に鋭い方を上にして差しこんだ。それだけでもちかは痛さに堪えられなかったが、やがて拷問役人は非人に命じて重さ十二貫もある面の凸凹に荒れている伊豆石を、ちかのむき出しにされた股の上にのせた。

一瞬「うーん」と、ちかは呻ったが、眼を引つらせ、口元を噛みしめて苦痛にこらえたので更にもう一枚のせた所、ちかの太った股



は半分も圧し縮められた様になり、算盤木の鋭い目は膝に強くめりこんで膝全体がやゝ凸凹になり、おしりと膝の間に入れた三角木のため、しりに強く喰い込んで腰巻が破けて白い肌を覗かせ、めり込んだ箇所が傷になって血をにじませていた。

顔を苦痛でゆがめながらも、ちかはなかなか白状しないので、役人は拷問石の上に腰掛け自分の重みを加え、ちかの体に寄りかゝって責め立てたが、依然として白状しないのもう一枚のせた所、ちかは「ぎゃあ」という悲鳴と共に気絶してしまった。

仕方なく非人が責め石を取り除いた所、ちかの太股の表面は、荒れた石で押しつぶされたため、石の凸部が喰いこみ無惨にも血がに

じんでいた。後の柱に縛っている縄を解いて、ちかを拷問台から引き離れた所、ちかの膝には算盤板の跡が判っきりとつき、膝と股の間に入れた棒のため、もらした小水で汚れた腰巻の後部が切れて、白い肌を覗かせ、役人達の淫らな眼を誘っていた。

直ちにちかは板の間に寝かしつけられ、医者によって手当を受け、やっと息を吹き返したが、体の衰弱が甚だしいので、次の拷問を明日にのぼし牢に帰される事になったが、なにしろ足をいためていて歩く事ができないので、土を運ぶ時に使う荒縄で組んだ畚の中もように押しこみ、非人の手で引きずられる様にして牢に戻された。

拷問役人の報告を聞いた代官は、ちかの強情さに驚き、明日行う拷問はもっと苛酷なものにする様に命じた。

牢に入れられたちかは、腰巻一つのまま後手に手錠をかけられ、大きな足枷をされ、さらに円型の直径三尺もある首枷をつけられているので、疲れた体を横にするにも、首枷の為に首がつかえて横にもなれず、また足枷の鎖が天井から吊り下っている縄に結ばれて、足が引き上げられているので、坐ったまゝでいたが、その内疲れのためぐったりとぶらさがる様に横になってしまった。

少しして、痛みで忘れていた小用が、土牢の冷えのため急にしたくなったので、牢番に声をかけて縄を解いて呉れる様頼んだ。やがて中に入ってきた牢番は足の鎖を外して足枷だけはとったが、手錠はとってくれずに、俺がやらす事になっていると云いながら、無理矢理ちかを便器用の桶のそばに連れてゆき、腰巻の前をめくった。

ちかは、拷問される事よりこの様な恥しめが、拷問される間続くのなら死んでしまった方が良く考えたが、やがて来る死への恐怖におののいて思わずしのび泣いた。命が無性に惜しいのだ。何も悪



い事もせずに死ななくてはならないのかと思うと身を切られる様に口惜しかったが、今さらどう仕様もなかった。

翌朝ちかは、非人の手でこれからはまた下をよごすといけなからとて、オシメ様の褌をされ、その上に腰巻をつけ、すぐさま拷問蔵に引き出された。

前日からの責めと恥しめのためにげっそりと頬のこけたちかは、首をうなだれて砂利の上に坐った。拷問を行う前に役人から白状す

るか否かを問われたが、「私がしたことではない故、どんなに拷問しても無駄です」と答えた。

それに昨日拷問されていた際、責められれば責められる程、何かしらちかは体の内に異様な快感が湧き起り、気絶する直前の恍惚感を今一度味わってみたいという気持が拷問そのものを、さして恐れさせなかった。

やがてちかは、非人の手で腰巻を外され、褌一つの全裸に近い姿で冷い砂利の上にうつぶせに寝かされ、頭の前方と、足の後方に立っている杭に両手足を縛りつけられた。拷問役人の命に応じて非人の一人が、お灸の艾を盆に山の様にのせてきた。二人の非人がちかの腰を両側から押えると、役人はその艾をちかの背中とおしりの上にのせ、やがて一つ一つに火をつけていった。

白状するなら取除いてやるからなと役人はちかに言ったものの、ちかはうん／＼うなりながら、白状すると死ななくてはならないからなんとか頑張らなくてはと、不自由な体を力ませ、白状しなかったが、役人は、ちかの肉づきのよいおしりが熱さでビクビク盛り上るのをみて、

面白半分にその上に艾を山の様においた。艾が燃え切ったあとには醜い焼けたしみがついていた。役人は艾をのせつづけてちかを責め立てたが、白状しなかったので、次の拷問に移す事にした。非人がちかの手足の縄をとぎ、今度は左右の足に縄を別々につけ、高い天井から一問程の間をおいて垂れている二本の鉄環に足を縛った二本の縄をそれぞれ通した。

やがて四人の役人が、各二本の縄を引き下げたので、ちかの体は



逆のまま足の方から上に吊り下げられていった。

足は左右別々に一問程の間をおいて吊り上げられているため、次第に非人が引くにつれ股間がひろがり、遂には左右に裂けそうになって、ちかは盛んにひいひい悲鳴をあげた。役人が縄尻を左右の取手に結んだので、ちかは両股を殆んど一直線に開いたまゝ吊下げられた。次に、役人は沢庵石を縄でくくり、ちかの後手に吊り下げたので、ちかの体はその重みでつつ張り両手が引き抜けそうになった

が、ちかは唸り声を出しながらこらえていた。

やがて役人は左右より、ちかの体を鞭と竹棒で打ち初めた。ちかは打たれる度に悲鳴を上げていたが、それは上ずった叫び声であった。容易に白状しないちかに業を煮した役人は、大きな桶に水を入れて、ちかの顔を水の中に漬けた。ちかは暫らくは我慢してたが苦しくなると、首を上にもたげ息をしようとしたが、その度に役人がちかの頭を、桶につっこむので遂に気を失ってしまった。

ちかはそのまま牢へ戻されたが、仲々正気を取戻さなかった。一方ちかが一筋縄ではゆかぬ事を知った代官は、なにしろ白状させ、本人の拇印を調書におして、それを城元に送り、許しをえなければ処刑ができないので、余分な費用を投じてでも、ちかを特殊な方法で責めることにした。

翌日拷問蔵に引き出されたちかは、異様な器具を見た。四方が一間大の鉄板が、三尺位の高さの石の台に、四つ隅を支えられてのせてあるのだ。

役人達はちかを素裸にするや、両膝を束にして縛り、首を前に強引に押し曲げて、両膝を縛った縄の残りで縛り合せたので、ちかの体は海老の様な形になってしまった。

役人達は塩を鉄板上に撒いたが、顔を膝にくくりつけられているちかには役人達がなにしているか皆目判らなかった。

やがて役人達は丸くなって横にされているちかの体を鉄板の上のせた。つぎに蔵の入口から、非人が真赤におこっている炭の山を、大きな水桶に入れ運んできたが、それを鉄板の下にしき撒き、その上に火のまだおきてない黒炭をのせた。初めは熱くなかったのに鉄板上のちかはなんら苦痛を感じなかったが、火が起きてきて鉄

板が熱くなると共に、ちかはもがき初めて、あついあついと叫びながら体を三転させて苦しみ、遂には鉄板上から転げ落ちてしまった。しかし、直ちに役人の手で体中にしみわたる様に塩水をかけられ、再び鉄板上にのせられた。その内ちかの体は真赤にはてり、真白だったおしりを真赤にして泣き叫ぶ姿はむしろ滑稽に見えた。鉄板の上から落ちるたびに、役人は自白を問い訊したが、ちかは仲々白状しなかった。しかしやがて、その苦痛の度合が以前の責め方より強烈なためたえられなくなり遂に十回目転げ落ちた時に、無実の罪を自白して調書に拇印を押してしまった。

拷問のすんだちかは、奉行から処刑の用意ができるまで、牢で待つ様に云われ窓もない、暗く冷えびえとした牢で、直径が三尺もある首枷をもてあましながら、近づく死の運命に脅びえていた。

一方代官は、七右衛門の申入れをいれて、ちかに主殺しの刑罰として最も惨酷な刑を処す事に決め、処刑の方法について種々協議したが、ちかが、赤兎をオシメでしめ殺し、肥溜に投げこんだ、その犯行の酬いとして彼女にオシメをさせたまゝ引廻し、村外れで一日その姿のまゝさらし、翌日大きな樽にちかを入れ、中の杭に縛りつけ、その中に糞尿をいれて、首だけ出させて晒し、更に糞尿の量を多くして、処刑を行い殺すことに決めた。

仕度が簡単なので、ちかの処刑は二、三日後に行われる事になり、村や郡の辻々に、告示の立札が立てられた。

一方ちかの父母や姉妹は、主殺しの家族として縁坐させられ、奉行所の牢に、入っていたが、一家全部斬首と聞いて、肩を抱き合って悲しんだ。

やがて処刑の第一日である、ちかの引廻しの日がやってきた。隣村

はもとより、ちかの処刑の方法の奇抜さや、ちかが若くて、しかも美女であることが人気を呼び、村はまるで祭の時の様な人出で埋められた。

早朝引き出しにきた牢役人に起されたちかは、あまりにも処刑の



答え

日が早かったので驚きかつ悲しんで、牢から出ることを泣き叫びながら拒んだが、無理矢理牢役人に引き出された。

牢役人の前に坐ったちかは、お仕置の時ぐらいはよい着物を着させて下さいと頼んだが、役人は「馬鹿をいうな素っ裸で仕置されるんだ」と素気なく答えたので、

ちかは必死になって腰巻だけはまとわせて下さいと頼んだ所役人は笑いながら「腰巻に替るものがちゃんとあるから安心しろ」と云った。

ちかを非人達は一応素裸にして後手に縛り上げ、土間に寝かせつけた。何をするのかと、ちかがいぶかっている内に、一人の役人がにやにや笑いながら、白地に紺で縞や花模様がある、ちかにも見覚えのある死んだ赤児のオシメを五六枚持ってきた。ちかは駄々をこねる子供の様に、オシメをあてられることを嫌がったが、牢役人は「それなら、お前の恥しい所を見せ廻るか」と云われ、いやいやながらも役人のなすがままにさせた。役人は赤児にオシメをさせる

時のように、寝かしつけているちかの両足を上げさせ、オシメを束に重ね、こんもりとしたおしりに当てがった。更に落ちない様荒縄でオシメを腹の下で締めた。足鎖をかけて立たせると、次に「死んだ赤児だと思って背負え」と、大きな沢庵石を乳かけ縄で強く縛って、背負わせたので、ちかの豊満な両乳房は、縄目からはみ出しそうに見えた。

全裸に、縞模様のオシメをさせられて、背中に沢庵石を負ふり、乞食に縄尻をとられたちかの奇妙な引き廻し姿が奉行所の門を出ると、門前に黒山の様に埋っていた群衆は、ちかの姿を見て、思わず声を立てて笑いこけた。

ちかは、この惨めな恥しい自分の姿を、黒山の様な群衆に見せるのは辛かったが、とりわけ村でつき合っていた若者たちに、こんな姿を晒す事は身を切られる様で、早く引き廻しをすませたかった。

ましてや、恋仲の善吉に見られたらと思ったが、彼のためにこんな惨めな姿で、無実のまま殺されてゆくのかと考えると、かえって善吉が憎らしく思われ、善吉にこの姿を見せつけてやりたかった。やがて引廻しが初まったが、ちかが、オシメを荒縄からずり落さない様に、両股を少し開き目にゆっくり歩く度に、後についている非人は手にした鞭でちかのしりを打った。子供たちに、「わあっ、オシメをさせられていらあ」と云われる度に、ちかは恥しさの余り頭を下げ目を閉じて歩かねばならなかった。

何しろ村といっても広いので、背中に石を負ったちかにとって、この引廻しは辛かった。ちかの足が少しでも遅れると、後の非人がおしりを容赦なく打つので、次第にちかのしているオシメがずり落ちてきた。非人はこれを面白がって、さらに打ったので、遂に

おしりの方に当てていたオシメが、はさんでいる縄からずり落ちてしまったので、ちかはオシメを前に垂らしたまま歩き続けていた。やがて風が吹く度にオシメが風になびき、ちかはその度にしゃがみこんで役人にオシメをちゃんと直すよう哀願したが、役人は無慈悲にちかのおしりを打って歩かせた。その内遂にちかが一歩も歩かなくなつたので、役人は仕方なく外れているオシメを後の荒縄の中に挿し入れたが、何しろ赤児のオシメ故、あまり強く引っばって入れたため、前の方の縄にはさんでいるオシメが抜けてしまった。

「わあっ」と起る見物人の笑声に、役人はあわててこれを直したが、ちかは恥しさのあまり声を立てて泣き出した。そのはじらいがかえって見物人達の興味をそそり、ちかの引き廻しのあとには野次馬が多くあとをつけた。

村を半日ばかりで一巡し、やがて晒し場である村外れの橋のたもとにつくや、非人は早速晒札を建て、ちかを晒しにかかった。

晒し場には、一枚の荒簀が敷いてあり、その後に杭が一本立ててあり、更に簀の前の左右に三尺ほど間をおいて、二本の棒杭が立ててあった。

ちかは荒簀に坐らせられると、後手を杭に縛りつけられ、つぎに前に投げ出している両足の先を、各々左右一本ずつ、簀の前の二本の杭に縛りつけられ、一本の青竹を両膝頭の下を通して、足を青竹に縛りつけたので、ちかは無惨にもあてられているオシメを見せつけたままの哀れな姿で晒された。

その内、頭をうなだれていた彼女は、見物人が立札を見て「ああ可哀相にこやしに漬けられて死ぬんだとさ」と語り合っているのを聞いて愕然とした。

罪もない私を、そんな惨酷な刑で殺すなんてと、大声で叫びたかったが、騒いでもどう仕様もないので、黙ってうなだれていたがこやしで殺すとは、どういう風にして殺されるのだろうか、と思うと、死ぬことそのものより死ぬまでの苦しみが思われて、縛り晒らされて自由のきかぬ体をふるわせて、しのび泣いた。

四月とはいえ、裏日本の加賀国は、日本海より吹き寄せる冷たい風のため、夜になると寒く、篝火をたいて番をする非人が、淫らな行為に出るため眠れずに起きた彼女は、冷えのため小用がしたくなかったが、縄からはなされる事は許されないので、我慢し切れず、オシメの中に用をたしてしまったが、むしろさっぱりとしたよい感じがした。しかし冷えこんでくるにつれて、濡れたオシメが気持ち悪く、身動き出来ぬ彼女は我が身の不運をあきらめ切れなかった。

夜明け頃、多勢の人夫達がやってきて、穴を掘り初めたが、やがて中に棒杭が一本立っている大きな桶を運んできて、掘り下げた穴に埋めていった。

日が上るとともに村人達がやってきて、ちかの汚れたオシメを見て冷やかしたりしていたが、その内、村奉行の連中がやってきた。村人達は、これから初まる処刑を見んものと黒山を作って集っていたが、ちかは晒し棒から解かれると桶の中に入れられ、棒杭に縛りつけられた。

やがて、到着して、座にすわった、検死の役人が居並ぶ中に、七右衛門の満足気な顔を見た彼女は、憎悪に燃えた瞳で見返えしたが、今更どうにもならなかった。

検死の役人の一人が立上って、これから処刑を行うむね、書状を読み上げた。

宣告が終るや否や、非人達が、錠がかまっていた大八車に駆けつけ錠を解除した。

錠の下から現われたのは、八つ程の肥桶であったが、非人達はこれをかついでちかの傍におくと、やおら桶の蓋をとり、黄色い糞尿の雨を情容赦もなく、目と口を閉じ顔中に不快の表情をみなぎらせているちかの頭の上から浴びせた。

やがて桶が次々に空けられ、糞尿はちかの胸のあたりにまで達したが、その不快さに、ちかは気が狂った様に喚き立てた。このぞつとする様な、こやしの中で殺されねばならないのかと思うと、いても立ってもいられなかったが、やがて首まですっぽりつかった時には、ちかは全く半狂乱の態であった。

代官は、糞尿がちかの口もとまで達したのを、鼻をつまみながら見届けると、こやしを入れることを中止させ、縄張りを解いて見物の人々に処刑の有様を見せた。

村人達は、どろどろした糞尿の間から無念相に首だけを出して苦しんでいるちかの姿を見て、鼻をつまみながら笑いこけた。ちかは頭の先から流れ落ちる糞尿が、口の中に入らぬ様に、堅く口を閉じていた。見物人の中には桶の中に石を投げ入れて、飛沫がちかの顔にかゝり、ちかが顔を苦し気にしかめるのを見て楽しむ者もいた。

検死の役人は、一旦立去っていったが、その間ちかは人々に惨めな姿で、こやしの中に漬かったまま晒されていたのだが、責めを伴った晒しだけに、非常に苦しかった。

やがて役人達が、周りに集っている見物人を追い払うと、検死の役人を先にして、裸馬に二人ずつちかの家族が、後手に縛られたま

まやってきた。先頭の馬に乗って来た父母に続いて、次の馬に乗せられてきた姉のきよや、姉のおみねは悲しさのあまり、裸馬にまたがったまま泣き続けていたが、刑場に近づくにつれてその泣声は一層高まり、ちかちかがって人々の涙を誘ったが、折から吹き起った無慈悲な強風が、姉妹の裾をひるがえし白い太股を覗かせた。馬上から降された四人は、代官より主殺し犯人の肉親として、縁坐処刑する旨言い渡されたが、砂利の上に坐ってただ泣き続けるばかりだった。

非人に縄をとられ、まず最初に、きよとおみねの姉妹が引き出された。非人達は死にたくない泣きわめいて拒む姉妹を、無理矢理おちかが糞漬けになっている桶のそばに引き据えた。

糞漬になって、桶の中から汚れた首だけ出して苦しんでいるちかの姿を見て、姉妹は「おちかちゃん」と泣き叫けんだが、驚いて見上げたちかも、思わず声を立てて桶の中で、糞尿が口の中に入るのも忘れ泣きわめいた。



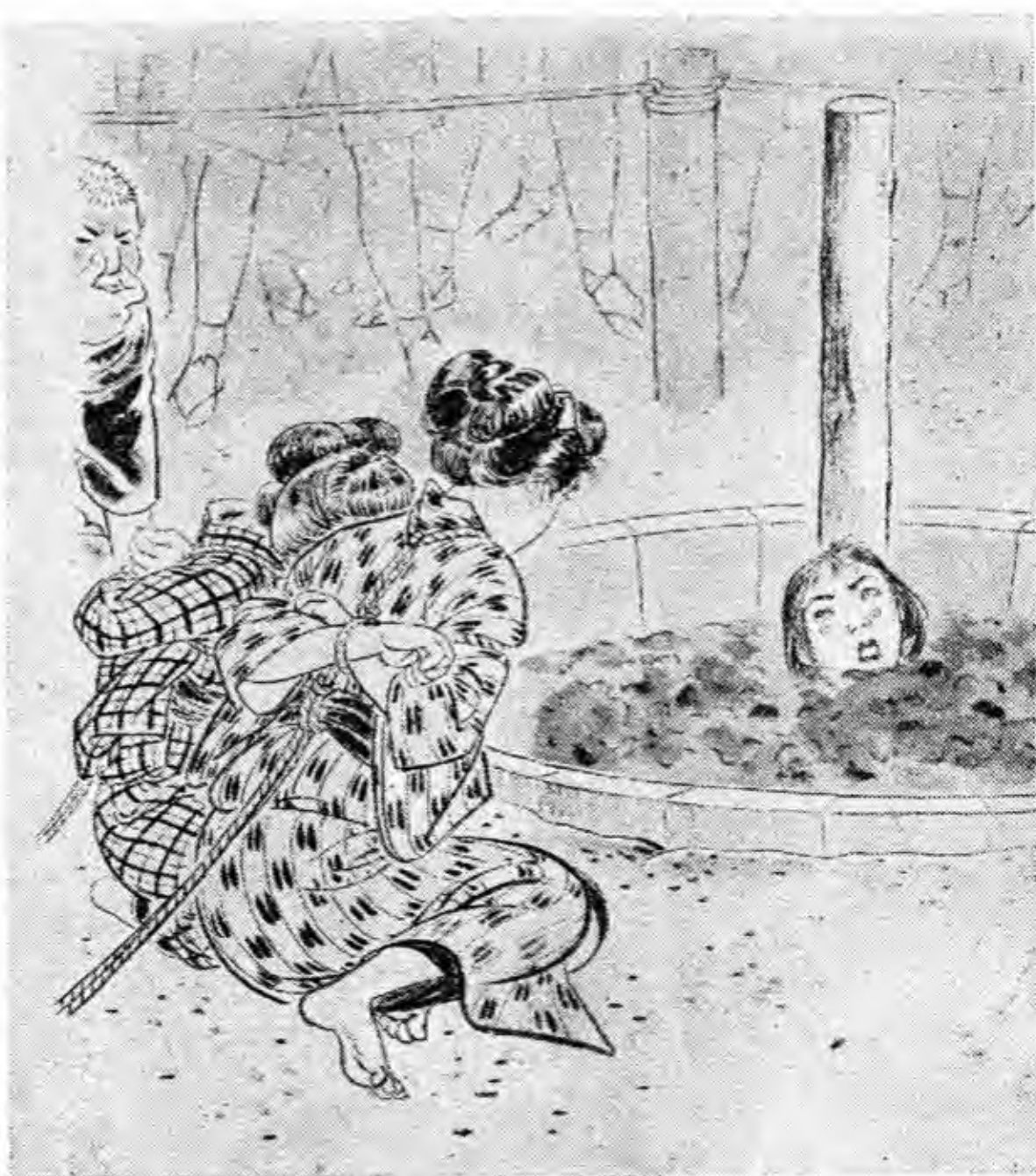
この有様を見かねた代官は、処刑を早くすませる様命ずると、二人の首斬り役人は泣いて嫌がる姉妹を、非人に押さえつけさせて、首を打ち落した。

おきよの首だけは、「ぼちゃん」という音を立てて桶の中に落ちたが、おみねは、あまり暴れたので、首切り役人の切っ先を誤まらせ、肩先を割られて肌を血に染め、悲鳴を上げ苦しみがいていたが、次の二の太刀も上手く切れなかったので、非人達がかけより断末魔の悲鳴をあげて苦しむおきよの首を、無理にねじり切って桶の中に落した。

桶の中のちかは、肉親の首を見るにたえかねて眼を閉じていたが、その内に首の重みで糞尿が口先から鼻の先へと上ってくると、息ができず苦しくなり、我慢し切れず、しばらくあっぶあっぶ、糞尿の中で、顔を出したり沈めたり縄で自由のきかぬ体をくねらせもがいていたが、遂には苦しさの余り、多量の糞尿をのみこんでしまった。

やがて口を糞尿の表面からかすかに出して息をしていたが、次に引き出された父母の姿を見ると苦しい息の下から、二人の名を叫び「おらが殺したんじゃないよ、これだけは信じてくれや」と泣いて叫んだ。首の座についた父母が、何か彼女に云いかけようとした時、首切り役人は、二人の首を切り落してしまった。

二人の首の重さで、糞尿がちかの鼻もとから額の下まで達するや、ちかはあぶくを立てて、糞尿をのみこみながら息をしようと、縛っている縄も切れん許りに伸び上って苦しんでいたが、遂に二、三分すると糞尿の中に頭をがっく



りさせたまま窒息してしまった。

ちかの死を確かめた検死の役人は、非人に命じて、糞尿を胸の辺りまで汲み取らした。

やがてこやしの中から現われたちかの顔は、苦し気に目をひんむき、唇をかみしめ、ゆがんだ口元からは、糞の塊を吐きたらしていた。

思わず眼をそむけた検死の役人は、すぐ捨札を立ててさっさと立去っていった。

近寄った見物人は、無惨な死に様をしているちかの姿に顔をそむけると同時に、前とはちがって、こんなにひどい刑罰を加わえなくてもよいものにと、口々に奉行所の遺方や、七右衛門の態度を非難した。

ちか達の死体はそのまま、三日二晩晒されていたが、村人たちの中には花を手向ける人はあっても興味本意で見物するような人はいなかった。三日二晩晒された後、こやしを汲み取り桶の中に土を入れ、塚を作って埋めた。

だが、其の後数年間、ちか一家が埋められている塚の前を、夜中に通る村人で、ちか達の亡霊に出会い、あわてて逃げ帰ったが、二、三日奇妙に体中が臭くて仕様がなかったという目にあった人が絶えなかった。

そこで村全体で、この不幸なちか一家を盛大に供養してやったため、亡霊は出なくなったが、其の後、村の人々はこの塚を「呪い塚」といって非常に恐れた。

以上が、郷土誌に見られた奇話の内容だが、勿論、内容や表現の仕方が相当誇張されて伝えられているのはいぬめない。しかし地方で行われた、奇抜な私刑の一つとして興味ある話である。

(以上)

あるマゾヒストの手帖から

沼 正 三

第九十 「丹夫人の化粧台」

探偵作家横溝正史は、戦後は本格物ばかり書いているが、戦前は猟奇趣味の作家で、手帖に取り上げたい作品をいくつか残した。その初期の短篇に「丹夫人の化粧台」というのがある。円本時代の現代大衆文学全集（統第十八巻）に既に収録されているから、古いものだが、速報欄で書いたように、最近号の雑誌に再録されているので、ここで取上げることにした。

栄養学の泰斗丹博士には若い美しい夫人がいる。博士が三十八の時、まだ女学校の生徒だった十八の彼女を見そめて、とうとう嫁に貰ったという。博士が研究にいそがしくて、あまり家庭に構わないからか、彼女は若い男達に取り巻かれて、派手に暮している。然し十二年間浮いた噂もなく、貞淑な婦人として聞えていた。ところが或る日、夫人の不在中に、博士は夫人の化粧室の内で自殺していた。美しい未亡人を争うサロンの若者達の中で、最後に二人残ったが、その一人もまた、自殺してしまう。彼を自殺に決意させた原因

は丹夫人の化粧台にあるらしい。最後に残った一人高見子爵は、一夜、化粧台の内から猫の鳴くのを聞き、隠された合鍵を見出して、壁の中に作りつけになった大きな化粧台の下部の鍵穴に差し込んだ……と、戸が開いて、中から奇妙な怪物がとび出した。真白な皮膚、長く垂らした髪、美しい容貌、せむしのように曲った背中、その少年は「犬のように舌を吐きながら、眼をいからせて」高見の首を絞めつけた。夫人は「譲二！」と叱りつけたが、もう遅かった。破局が訪れた。——この少年は夫人の隠れた愛人だったのだ。それを知ったことが先に二人の男の死を招いたのであった。少年は夫人が実実にいた時の愛人で、夫人の結婚当時十七才。夫人は、丁度実家で飼っていた猫や小鳥を婚家に連れてゆくのに同じように、高価な諸々の嫁入道具の数の中に、この美貌の少年を加えておいたのだ。そしてこの生きた調度は、十二年間に互り、人知れず夫人を慰め続けたのであった。

以上があらすじである。一読何となくマゾヒスティックな感じがある。何故だろうか？



老教授と若い妖婦という組合せは、この作者には、常套の手法であるのみならず、そのこと自体では、別段、マゾヒズムと関係はない。

男を箱に入れて女の所に運ぶというテーマは、マゾヒズムと無関係とはいえぬが、「絵島生島」を持ち出すまでもなく、東西の文学に例が多すぎて、それだけでは、何の刺激もあたえない位平凡になっている。

愛人を箱の中に入れて隠しておく、というテーマも珍らしくない。古典的な例を一つあげると、スタンダールの「恋愛論」第五十三章にあるアラビアの話。美女ボオネンは愛人ウエダを「自分の部屋に導き入れ、一つの箱の中に隠した。そして大丈夫だと思ふ時には、彼を箱から出して一緒に話し合い、誰かに見つかりそうになると、急いで又箱の中へ入れるのだった。」この引用文は、そのまゝ丹夫人と譲二少年にもあてはまる。然し、丹夫人の場合に感じるマゾヒスチックな昂奮を、このボオネンの話からは感じないのは、何故だろう。——一言でいえば、男の苦勞が足りないのである。箱の中に潜んだウエダは、実際は譲二少年同様辛かったのである。ところが、ここでは、それは現わされていない。物足りないのはそのためだ。女の享樂が男の苦痛の上に成立っていてこそ、マゾヒズムの文字といえるのだ。

聊齋志異中に「天宮」（柴田天馬訳本巻十）という千一夜物語風的一篇がある。郭という美青年が一夜酔って眠り、覚めると、墓穴のような石の小部屋で、若い女と枕を並べていた。女は、自分は仙女で、こゝはその洞府だという。女が出ていくと、食事が来たが、真暗で燈をくれないので、手さぐりで食べねばならぬ。この中に起

居し女の相手を勤める日が続く。郭にとっては、この暗黒は「異常な幽鬱と苦悶」であった。……仙女というのは、実は宰相の若夫人であり、墓穴と思ったのは、彼女の後房内の一室だった。彼女は男に顔を見られなくなかったので、男に燈火を許さなかったのだ。

この話は、大分マゾヒズムの味が濃くなっている。自分は金殿玉楼に安逸な生活をしながら、夜分自分に奉仕する男を、ただ顔を見られたくないというだけの理由で、終日暗処に閉じ込めておく、というやり方は、丁度、昔スキチアの女達が、奴隷や捕虜を、より内密に、より自由に、玩弄するために、まずその目玉をくり抜かせた（ヘロドトスの所伝は、このとおりではないが、モンテーニはそう解している。随想録第三巻第五章を見よ。）というのにも似た、男の人格を無視し、単に自分の性欲満足的手段としてのみ見る態度から出るもので、こういう女性をマゾヒストは渴仰する。然し丹夫人が該二少年を暗処に入れたのは、彼の目を恐れたのではなく、他の人の目を恐れたからである。宰相夫人の郭青年におけるとは、動機が異なる。

この点で、更に示唆的な例をあげよう。本誌昨年七月号の「残虐な女性」に紹介された、ある露西亞貴婦人とその髪師の話である。コルヴィンの「鞭撻者」にもこの話は出ており、データが多少異なるが、両者とりまぜて、私流に表現し直すと――

侯爵夫人は大きな化粧セットを持っていた。大きな箱に鏡台や櫛や美容薬を附属させ、それを寝台の枕許から離れたことがなく、旅行先にも携えて行った。美しい彼女の化粧好みを知るほどの人は、彼女の寝室に、その箱を見ても何の疑念も抱かなかった。家の召使と彼女の夫の外は誰も真相を知らなかった。――その中には、一人



の若者が入っていた。毎朝化粧の度に彼は引出されて彼女の頭の手入れをし、終ると又箱の中に蔵われたのだった。化粧台と見えたのは、実は彼のための檻であって、彼はその中に入れられて、生きた化粧道具として、主人に奉仕する運命にあったのだ。十八の年から十年間（コルヴィンの記述に従う。）日の目も見ぬ、不自然な生活は彼を青白く、老人のように背中曲った縮った身体にしてしまった。……一体何のために、彼はこの檻に入れられたのか。何のために魔人にならねばならなかったのか。——侯爵夫人には禿があった。彼女は髪を使っていた。この男は彼女の農奴で髪師の技術を身につけた者、その髪故に彼女は一日も彼を手許から離すことができなかったのだ。しかも、彼女の禿は、絶対に世間に知られてはならなかったのだ。彼女が髪師を使っていること自体秘密にされねばならなかった。常に身近に置いて、しかも人に知られぬためには彼を家具の中に隠してしまわねばならぬ。こうしてこの髪師の存在は抹殺され、檻の中で人知れず飼われる生きた道具にされてしまったのだ。

これは小説ではない、実話である。エカテリナ二世時代に本当にあったことで、コルヴィンは、この女性の他の逸話も伝えている位だ。こういう女性が実際に生きていたことを知ると、丹夫人の化粧台という空想の産物も、実際に起り得たであろうとの可能性を与えられて、生き生きとした興奮を呼び起す。というのは、次項で書くように、丹夫人の化粧台の物理的施設については、私達は充分現実性のある想像を補充することができるのだが、それを支える丹夫人の悪魔的な人格——十二年間も男を箱の中で飼って平然としている神経——だけが、どうも非現実的な空想でしか存在し得ないものによ

うな気がする。それが侯爵夫人の髪師のことを知ると、女はこゝまで悪魔的になれるのだ、という実証を与えられて、心強くなるのである。

勿論、両者は正確に同じではない。侯爵夫人には初めから農奴を自由に扱った権力があつた。男は始めから彼女に奉仕するものとして檻に入れられた。利用と奉仕の関係は純粹に一方的で、侯爵夫人としては、飼犬を犬小屋に入れるのと少しも違わぬ気持ちで、事を運んだに違いない。それは人間対畜生の関係であつた。これに反して、丹夫人と讓二少年は愛人として対等の関係にあつた。二人は愛欲によって結ばれていたのだから、利用と奉仕は相互的だった筈だ……だが、それに止まるなら、この小説は、マゾヒストを喜ばせはしない。

十二年という歳月が決定的だったのだ。まだ未成熟な十七の年から、世間と隔離されて、暗処に幽閉された少年が、精神的に退化するのは当然である。人間らしい精神活動は一切不要になり、唯性的欲望とその充足のための技巧の知識だけが頭を占領するだろう。肉体的には、夫人に毎夜使用される部分が発達するだけで、他は、狭い暗い場所に不自然な姿勢を長く続けるために、次第に畸形化して来るだろう。破局の来た時二十九才になった讓二を、原作者は「少年」と表現している。彼は十七才以後順調に成長していかないのだ。女性の性欲にのみ奉仕するような一種の畸形的發育が精神的肉体的に、この少年を襲っただろう。——一方、丹夫人は、二十才、二十五才と順調に成育し、肉体的に完成して行き、精神的にも、家庭婦人、社交夫人としての成長を続けてゆく。十二年は長い。その間に両者の懸隔は次第に大きくなる。妻であり、サロンの女王である夫

人にとっては讓二は唯一の男性ではなく、彼との交渉は生活の一部に過ぎないのに反し、讓二にとっては夫人との交渉が生活の総てであり、彼女は彼の生存の唯一の目的となる。対等の関係は従属関係に変化して行く。讓二は夫人が人に隠して持つ性的玩具に過ぎなくなる。こうなればもうあの髪師と同じことだ、唯彼が侯爵夫人のオシャレ心を満足させる道具であつたのに、此の丹夫人の性慾を満足させる道具である点が違ひに過ぎない。そして少年の肉体に畸形化が進行する。「犬のように舌を吐く」せむしに、夫人は果して昔の愛人讓二に感じたのと同じ敬愛を感じたろうか？ 原作者は、夫人に「讓二！」と犬を叱るようなことばで呼びかけさせている。そして云う「夫人にとっては、（彼を相手にすることは）、珍らしい小鳥を可愛がるほどのな、気軽な遊戯だったかも知れない。」と。讓二は愛人ではなく、愛玩動物だったのだ。少くとも何年か経つ間にその変化が起つた。侯爵夫人の場合と同じように、人間対畜生という、一方的な利用と奉仕の関係が成立した。それ以後においては、夫人にとっては、讓二少年は狎（よ）ころ——屢々貴婦人の閨房の備品である——に過ぎなかった。夫人は、自分は快適な生活を享受しながら、傍ら不倫の愛慾をも満さんがために、愛人を畜生の境涯に追落とし、十七才の少年の一生を破滅させてしまったのだ。愛人の愛玩動物化、これこそ、この作品が私達マゾヒストを喜ばせる理由なのである。

余談になるが、侯爵夫人の髪師の話は、実際に、この小説の成立に影響したのかも知れない。初期の横溝正史は、例えばその「カリオストロ夫人」が、H・G・ウェルズの「エルヴィシヤム氏の話」の剽窃的翻案であるのを見ても分るように、他の想を借

りることにあまり潔癖でないから。——少くとも、この作品に空想のみを感じた人は、髪師が十八才から十年間この檻の中で暮したことを知れば、「事實は小説よりも奇なり」との感をいだかぬわけに行かないであろう。

第八十五項補遺 出典について

三月号手帖第八十五項で、「若いマゾヒストの告白」という一文を紹介し、戦前の雑誌に載つたものではないかとの疑いを記しておいたところ、一六〇三番氏及び東京I・K氏から、早速教示があつて、出典を知るを得たので、大方読者諸君に、報告しておきたい。性学の大家として大正昭和の交にかけて著名だった沢田順次郎の主宰していた雑誌「性」の第三巻第四号（大正十年四月号）に掲載された、主幹たる沢田氏の「性的狂崇及び食尿症を兼ねたるマゾヒスム患者に於ける研究報告」（上）の中、第三「患者の告白」として、五通の書簡が紹介されている。患者の誌上名は石本正三という。

一信 沢田主幹様。私は本年二十四才の男子ですが、少年の頃より、異常なるマゾヒスムにて、年若き美婦人の為に、惨酷なる戮り殺しにせられることを希望して居ります。又美婦人の身に附いて居る庶物を崇拜し、痰や鼻汁位は微々たるもの、尿水を飲み、糞便を喫べて見度いと日夜希ふて居ります。身分高く、年若き美婦人の奴隷となり、其の御方の糞尿を常食とし、酷使せられ、又玩弄物となつて、恥辱を与へて貰ひ、又出来得る限り、惨酷なる戮り殺しにせられた上、肉を料理されて喰べて貰ひ度きことを、今でも希望して止みません。或る時は、年若き女医方の為に生きながら解剖せら

れんことを希ひ、或る時は、女学校の便所にモグリ込みて、姫君達の尿を飲まむことを希ひ、或る時は、美しき白人婦人を見て、其の御方の為に自分の肉を料理して、喰べて貰ひ度くなつたこと等、一々数へ切れませぬ。……………

以上冗長を厭わず原文のまゝ冒頭の部分を引いた。本誌二十七年七月号を所持の方は、一三八頁「色情倒錯者の手紙」の冒頭と比較されたい、殆んど全く同一の文章であることが分らう。このあと女優の家に厠から忍び込み、いじめられること。

二信 女車掌三人に責められ、顔に尿水をかけられること。看護婦会の共同下僕として、玩弄物になり、黷られたり、尿を飲まされたりする快味が忘れられぬこと。

三信 看護婦会の会主は三十五六才のハイカラな美婦人で、その方の用便のお供をすること。門下生も十八九歳から二十一二歳位の美人揃い、彼女等が縫合の実習をする実験台にされること。

四信 四谷の某所で、前の三人の女車掌から、二回目の責めを受けること。万年筆で刺青されること。口を開かせられ、手漬、青痰を吐き込まれ、更に面上に放尿されて口中に入ること。

五信 若き美婦人の痰唾鼻液糞尿等を崇拜し、常食としたい等の箇条所。高橋お伝かバルチザンの女参謀ニーナの如き、美しき毒婦に命を捧げたいこと。

以上五通である。教示を賜つた両氏の御好意に謝意を表する。

速 報 欄

三八 江戸川乱歩「踊る一寸法師」(探偵実話増刊)これは有名な

ものだから、手帖に扱うのを遠慮して来たのだが、雑誌の最新号に再録されたのを機会に、この欄で簡単に取上げておく。「虐待された侏儒の復讐」というテーマで、明らかにボーの「跳び蛙」から奪胎した作品。曲馬団の一寸法師が団員の玩具にされる。肉襦袢のお花が皆の前で彼の顔に跨り尻を下す。「酔っぱらったお花は、祿さんの顔の上で馬乗りの真似をした。三味線の調子に合わせて『ハイ、ハイ』とかけ声をしながら、平手でビシャ／＼と祿さんの頬を叩いた。……」といった場面。大正十四年の作だから、肉襦袢をつけているが、戦後の私達は、お花の肉体と祿さんの顔の間に隔ての布はなかったものとして読んで差支ないだろう。尚、映画化される方の「一寸法師」はマゾヒストには用がない作品である。

三九 横溝正史「丹夫人の化粧台」(同誌)これも古い作品の再録物。手帖本文で扱うことにした。

四〇 木々高太郎「少女の臂に礼する男」(同誌)これも再録物。私自身は大して買わぬが、本誌昨年十二月号で春木俊野氏が、題名を逸しつゝ言及された(一〇九頁上段)作品だし、忠実な挿絵もあるので、挙げておく。同誌には、以上三作品の外、渡辺啓助「浴場殺人事件」では女を縛った挿絵あり、又村上信彦「テート・ベージュ」は白人に妻を奪われた夫の心理を扱い、清新な作。

四一 佐藤春夫「晶子曼陀羅」これは読売新聞に連載されたもの。すべての点で夫を凌いだ妻を描いた作品としても興味があるが、特に、劣等感に囚えられた鉄幹が明治三十八年八月の「明星」に発表したローマ字の長詩「Guitara」を紹介して点戴ける。田舎廻りの女剣舞の座頭がアル中の夫を「ぐうたら」、「ぐうたら」と呼んでこき使う。彼女が立膝で食事しつゝ、夫に団扇で煽がせる所

をうたった最後の聯をかな交り文に直すと――

ぐうたら、ぐうたら

ぐうたら男後方より

団扇使えば物見高!

粗木の小屋の節穴は皆

目となり嬉々と密語いた

彼奴嬢アを煽いでる!

四二 宮本幹也『銀座令嬢』

女だてらに空手の達人というやぐさの親分の跡取娘が出てくる。映画化されたから、読んで見たが、つまらぬ。マゾ的刺戟は、まだしも映画の方があつた。

四三 シャーロット・ジェイ作恩地訳『死の月』

(ハヤカワ・ポケット・ミステリ) ニューギニアを舞台とする探偵小説。マゾ物ではないが、劣等土人と白人との關係にマゾ的興味を感じ得たから、挙げておく。「原始狩猟族の段階にある土人達は自らも野獣として狩られることを否み得ない筈だ」などという考え方の人も出てくる。

四四 「ある靴フェチシスト」(風俗科学三

月号) 靴フェチシストが同時に足フェチシストということはない、その逆もない。まして異性の中でも同性のでも、などということはない。マゾヒズム現象の一たる下等願望の変形としては



文芸春秋漫画読本、第二集、
一六二頁「つゝしむべきものは巻」の4
(雑巾がけ)の一コマ。(秋好馨画)

格別だが、節片愛好^{フェチシズム}としては、そんなことは起り得ない。標題の作品は、だから、もっともらしい作り話の例として、挙げておく。この雑誌はこんな記事が多い。例えば、本号の「惨虐の極致」は、浜尾四郎「島原絵巻」の剽窃である。「女の小便と雲道の研究」に、積雪上に女が放尿して黄色になった雪を味う話があるが、これも何かで読んだ記憶がある。

四五 「浴室と化粧室」(建築写真文庫十二)

著名な別荘やホテルの清潔美麗な便所の写真がある。大便器の写真を見つめながら、そこに麗人達の蹲んだ有様を附加して空想できる人には、楽しいものだ。

それから、婦人用洗濯器^{ビデ}(bidet)の写真もある。「ビデになりたや、ホテルのビデに……」というが、ビデがどんなものか知らぬのでは、話にならぬ。ビデについては、まだ手帖で取上げる機会を得ぬが、ここで一言いうと、「人間ビデ」の主題、就中、女主人が他の男との抱擁を解いて後、彼女に「人間ビデ」として奉仕するという主題は、マゾヒストにとっては、こよなく楽しいものである。余談だが、本誌三月号真砂氏「ヴィナスの重石」の終末場面を読んだ読者は、マゾヒストらしいマゾヒストであつたなら、必ず、そのあとに続く場面を空想せずにいなかっただろう。人間犬になって郁子と健ちゃん痴戯



文芸春秋漫画読本 第二集

二四頁の上の絵、子供の引く水まき車を先生が鞭で追う図。(ロナルド・シール「ちんぴら女学生行状記」)

に侍らされた山口が、もう一度仰向けにされてヴィナスの重石を加えられた上、彼女に今度は口を開いて人間ビデとして奉仕するよう強制される……そんな場面を。前作「二百字讃歌」では、濡れた桜紙を捨てる屑籠の代りに、主人公の口を使用させた真砂氏のことだ。公刊の制約がなければ、当然その場面迄書きたい所だったろうから、そこを空想で補うのが読者の義務であらう。

四六 ウキッテルス著柴田訳『性と女』 女のナルシズムや不感

症を説明した部分に、男に対してサディスティックになる女のことを扱ったところがあるので、さしてマゾ的でないが、紹介しておく。

訳文は良くない。

四七 アリストパネス作村川堅太郎訳『女の議会』(岩波文庫)

要書房版が文庫入りした。同じく文庫にある高津春繁訳『女の平和』と並んで、マゾヒズム学校高等科の必修書目の一。アテナイの婦人達が女傑の指導下に、男装して民会を乗取り、政權を男性から女性に譲ることを議決し、女將軍、女總統による女性政治の下で、財産を共有とし、男性共を女性全部の共有物にするといった破天荒の革命を実現する……

四八 秋好馨「ますらお派出夫会」(文芸春秋漫画読本第二集)

これは手帖第四項(本誌一昨年六月号)で既に言及したもの。単行本にもなった。幾篇がある中から二篇文再録している。一齣だけ示す。

四九 ロナルド・シール「ちんぴら女学生行状記

「聖三角女学院の鐘——」(同誌)これは凄い漫画だ。デフォルメが過ぎてグロでさえある。内容はサディスト向だが、女性のサディズムという点からは、この欄でも充分扱える。女教師の鞭という喜ばしい風俗のない日本では、夢想もできぬ作品である。

五〇 ブースビー作『白妖姫』(探偵倶楽部三月号)

これは以前牧逸馬が訳出して世界大衆文学全集に載せたものだが、マゾ向きの場面を省略して再録しているのは良心的でない。裏切者に残酷な笞刑を施す美貌妙齡の女海賊。貴婦人であり、根拠地の島では専制君主。部下の荒くれ男達を、盲目的服従状態にまで訓練している。彼女の私室の内に入ると、猛犬

の牙で殺される。それが分っていても、部下は、彼女が命令すれば平然と室内に歩み入る。彼女の命なら、死を見ること帰する如し。マゾッホの現代ものに似た女性崇拜小説。この再録では、原作の俤がない。

五一 山村正夫「虫めずる姫」(同誌) アポロンと譚名される

女蕩しの美青年が、彼の容貌に驚かぬ幻の美女に逢って、遂に敗北する。「奴隷になります」と愛の告白をする男に向って、彼女は宣告する「虫になりなさい。醜い汚い虫になりなさい。」男は自ら硫酸で顔を灼いて醜くなる。だがまだ彼女は許さない。彼がほんとに虫になるまで……

五二 ヒルシュフェルト編高山洋吉訳「戦争と性」第四巻 有名

な「世界大戦の風俗史」の訳で、挿絵が原著に比しずっと少ないが、訳文は忠実な完訳で、先ずAクラスのでき栄え。邦訳四分冊の最終巻だ。(尤も「戦後の風俗史」という原著が、これに続くものとして編纂されているが。)この四冊は本誌読者たるほどの人は是非備えられるが良い。第四巻には「世界大戦における惨忍性とサディズム」の章があり、サドの作品を読むような流血の暴行、強姦や性器切断や文字通りの鬭り殺し等の記事に満ち充ちた数十頁がある。アルメニア人百二十万人の虐殺とか人間の手の皮を剥いて作った手袋とか……

然しマゾ向きの頁もある。火を点けたタバコを押しつけて捕虜の目玉を焼き潰すのを楽しんだオルガという女の話は、例の「残酷な女性」から引用されているから、森本氏の訳筆が及ぶのを本誌上待つことにして、こゝでは、クラスノフの「露皇帝の驚から赤旗へ」から引用されたチエツコの女性ドーラのことを引いておく。彼女は

秘密警察に属し、死刑と決った男の処刑を、全部一人で引受けていた。そのやり方は「自分は脚を開いて椅子に掛け、背後に素裸の捕虜を立たせ、次いでその男に椅子の下、彼女の両脚の間に這い込ませる。捕虜の頭が見えろとすぐ、彼女はその男のこめかみを射つ」のであった。……フィクションでなく実録だから驚く。彼女は勿論男装だろう。軍服かも知れない。椅子に掛けてタバコをふかしている。裸になって這った男は犬である。何も知らず、いわれたとおりに、椅子の下に這い込む。前方には拍車の光る彼女の長靴が開いて並んでいる。「あの間を這い出れば良いのだ。犬のように靴を舐めれば許してくれるだろう。」そう思って這い進む。上では、ドーラがタバコをくわえたまゝ、空いた右手をつとポケットに入れ、コルトを取り出して、靴の間から男の頭が出るのを待っている……只の一発。男は、凡そ考えられる最も屈辱象徴的な姿勢で殺されてしまう。

従前の三冊も、それぞれに面白い。第二巻には、独乙将校達の集會で、全部が人間馬になって、背中に一人一人女騎手を乗せて、音楽に合わせて這い廻った話があり、第三巻には、男に飢えた貴婦人達が、秘密結社を作って、自分達の意のままに変態的サービスをするような男達を組織的に入手し、馴らしつけた話がある。これらは一例に過ぎない。繰返して言うが、この四冊は是非求め給え。

五三 山田風太郎「畸形国」(小説の泉春の増刊「大衆小説」)

これは私には今月の収穫であった。華族出のスター宝珠富貴子が、せむしの億万長者と結婚する。夫はもとより完全な奴隷であるが、そればかりでなく、一家の多数の使用人が悉く片輪者だ。畸形の群に君臨する完璧の美女。彼女の驕慢は通常の人間達に囲まれる時に

幾層倍することができる。精神的サディズムの陶醉。夫が鼻缺けの女中と話すのを彼女は飼犬が飼猫にふざけている位にしか思わない。「精神の上で、彼女は夫を飼っていた。召使達はもとより獸類以下であった。」……幻想の畸形国の王座と女王座。側に燈明を持して侍立するのは、身体の両側からじかに両手首、両足首を生した海豹体の美少年。遠く紅白の綱で車を曳く二本足で立った巨大な犬と見たのは、^{フンテメンシユ}犬人として、全身毛むくじやりに長毛の密生した人間。……不具者ばかりの王国だが、乱歩の「孤島の鬼」などと全く異なる扱い方である。面白かった。畸形の主題は、手帖でもいづれ取上げるつもりである。

五四 香山滋「染血の十字架」(同誌) 逞ましい男を誘拐して来て海底の宝を拾う重労働に従事させ、搾取する美貌の女海賊が登場する。ズボンを通きピストルを握り、奴隷達の生命を消費することを何とも思っていない。作業の後で気に入りの奴隷にだけは、セロフアンの砂糖包みを犬にやるように投げてやるが……

五五 西川満「女怪西遊記」(同誌) 台湾時代に比べてこの人の筆は荒れた。然し戦後書いた通俗ものでは、時々サチスチンを扱っていたようだ。この作品は、西遊記から取ったもの。原典に忠実でもなく、趣も劣っているが、一応女上位的場面がある作として、挙げておく。

五六 Guillaume Apollinaire, *The Debauched Hospodar*. (啓明社版) 前号でサドの作品の英訳を紹介したが、同じ本屋から、他にも艶笑文学書の英訳本が翻刻されているので、英語の読める人のため紹介しておく。洋書を扱う店なら、どこでも入手できるし、英文も平易である。

このアポリネールの「放蕩殿様」という作品は、特にマゾヒストの為に書かれたものではないが、「二十日物語」や「ファニー・ヒル」などと同じく、各種の倒錯を意識的に万遍なく扱って、どの方面の読者をも喜ばそうという、典型的な行き方をしている。第八章でマゾヒズムが主題となる。旅順開城直後の赤十字天幕内で、マゾヒストのカタシユ大尉は、彼の妻が皮革商と不義をしているという通知を得て、心から悩みつゝも一方、それにマゾ的幸福を感じると告白し、妻との性生活の思い出話をする。初夜以来、妻は彼に身体を許さず、彼の目の前で他の男を抱き、或いは女中と戯れ、又グレートデン犬が彼女の要求に応じようとするのを彼に命じて犬を手伝わせる。遂には彼女の足下に身を投げて哀願する彼をば情人に鞭たせ、自分も髪留針を彼の身体にブツブツと突刺して喜び、更に情人との情交の後で、二人で自由を失った彼の身体の上で踊って踏みこむ。……要するに彼は妻にとっては、犬同然、或いはそれ以下の存在で、彼女は彼を自分のサディズムを満足させるための玩具にしてるわけなのだが、彼自身も、立派な一物の所有者であり、ノーマルな性交欲ある人でありながら、この妻の虐待を喜ぶように訓練されてしまったのである。……

右の点を離れても、日本軍人の出てくる西洋艶笑本としても珍らしい。旅順籠城軍側から見た日本軍を描いている。日本兵は良い猥褻画を浮世絵で持っているから、軍中に婦人が必要としない、などといっている。

五七 *ibid.*, *Amorous Exploits of a young Rakehell*. (同社版) 同じ作者の『早熟少年愛欲修行』の英訳。一千部限りといっているが、いわゆる限定版ものと異なり、入手は困難でない。この作品

も内容はマゾ的ではない。マゾヒズム関係の記事としては第八章のマダム・ミユラーの話だけである。彼女の夫はマゾヒストで、常に彼女に血の出るまで鞭たれてからでないと男性能力がなく、しかも更に彼女の趾の間を砥めたりせねば続けられないのである。マゾ記事は少いが、アポリネールはサドに傾倒していた丈あって、排泄物趣味があり、その方の記事が仲々面白い。第三章では、女の放尿も男のように空中に半円弧線を描き得ることを窃視中発見して吃驚した位の初心な少年が、第九章では、便所に覗き穴を作って、終日、城館の全女性の「放尿脱糞」を研究するようになり、第十章では女を狩小屋に連れ込んで排泄行為させ、終ると紙をもって近づくと、といった位に成長する………。艶笑文学の常として、アニリングス、クニリングスの情景は何度もあること勿論である。

五八 『江戸川乱歩全集第一巻』既に四巻、二巻もでている。第一巻では有名な「パノラマ島奇談」が入っている。しかし、こゝでわざわざ紹介するにも及ばぬであろう。

号外 女のはな息(朝日新聞一月中連載記事)東京デパート労組の女執行委員長、女書記長達に男性従業員がリードされている話とか、才色兼備の女性弁護士沢井光子嬢の気焰とか、印象に残る二三があったので、挙げておく。

号外 投げ銭に群がる学童ら(朝日新聞二月一日付記事)英国親光船が清水港に寄港した時、棧橋の子供達に英人船客が十円貨を投げたところ、争って拾うので、面白がって皆が次々に投げ与え、子供達に拾い廻らせて打興じたという。大きな反響のあった記事だ。日本人を乞食扱いするとはけしからんという意見もあった。が、これはどんなものか。こちらが拾わなければ、続いて投げはすまい。

すっかり拾われた以上、投げた英人船客達を非難はできない。南洋やアフリカの港では、船客の投げた銭を海底に潜って拾う土人がいるそうで、この英人達の眼には日本人もそういう芸をする土人の一種に写ったかも知れない。銭拾いをやった以上、それも仕方があるまい。向うさんのことはさておいて、人々に一番残念がられたのは子供達に少しも自尊心がないということだった。殆んど国辱を感じた向きもあったようだ。然しこれも子供達にすれば無理もなかったろう。終戦後の飢餓と卑屈の時代にジープから撒かれたチョコやボンボンを拾い廻らぬ丈の見識を大人が教えただろうか。今の子供達は、被征服者として、征服者たる白人を見ることに馴れて育って来た。その子供達にとって、豪華な観光船の船客は、周囲の大人達とは違っていた。優越者の種族たる白人であった。彼等の投げた十円貨の前に敢て四つ這になり、上なる彼等の視線の的になって、彼等を楽しませ、優越感を満足させることに少しも自尊心を傷けられると感じなかったこの子供達も、もし周囲の大人が十円貨を投げ与えたら、憤然拒否したに相違ない。同じ日本人の前に這うことは自尊心を傷けるからだ。子供達に自尊心がないという非難は、だから、当たっていない。自尊心の問題ではない。皮膚の色で人間の価値を上下に分つ人間観の問題なのだ。「白人はえらい。」だからその前に平気で這えたのだ。戦前の教育を受けた者が愛国心教育の復活のなれどと考えている中に、子供達は何時かそういう人間観白人観を身につけて育っていたということなのだ。戦後の混血児の就学も、黒人との混血児はひがんでいるが、白人とのそれは、むしろクラスをリードしてるのも多いという。白人の智能の優秀もあるが、それ以上に、混血児としての劣等感がない——むしろ、ちやほやされる位だ

ということが原因である。正しく植民地的白人観だ。手帖第二十六項（一昨年八月号）で書いたように、今の子供達がそういう白人観

や、植民地人根性を持っていることを喜ぶ私には、清水港で起ったこの「植民地的風景」の報道も嬉しいものであった。

第一章 種類について

六尺禪、越中禪、水泳禪、もっと禪等だ
が何んと云っても六尺禪が第一です。六尺
禪と聞いただけで心が躍ります。

股間に喰い込んだ禪の最大の魅力もここに
あります。禪を絶対にやめられぬ原因の一
つです。

第二章 生地と色

生地は何んと云って
も晒木綿に限ります。

肌ざわりの良さは格別
です。さらっとして肌
に触れたときの気持の
良いことでも。色は白
が一番好きです。新鮮
清潔の感じと共に、色
彩美も万点です。汚れ
を知れぬ純白の美しさ
赤は性的魅力を感じま
すが、あまり好みません。

第三章 緊縛感について

これは禪マニアにとって美的観点と共に
重要な条件の一つです。締める喜び、締め
られる喜びと共にきりりと締めつけられた
快感は、愛用者のみが知る夢の世界です。



感 私 美 禪

山本加津男

第四章 ソドミアと禪について

一月号で山口氏の述べられた如く、禪美

着を感じ、禪美への執着を覚えるのです。
ソドミアとして逞ましい彼氏を想像して自
己満足を得るのです。でも一人では淋しい
友を得ることが出来たら、その欲は倍加
するでしょう。

第五章 禪美の憧憬

僕が禪美にあこがれを持ったのは学生時
代でした。いや、もっと以前に禪姿の美し
さを知ってはいましたが、現在程ではあり
ません。今では一日たりと禪なしで
は過ごせません。学校で水泳練習の折、逞
ましい身体をした友人が締めている六尺禪
に思わずみとれ、早速、締め方を知らぬ僕
は頼んでこっそりと締めてもらった時の喜
びは、今持って忘れることが出来ません。
きりりと締った禪美の素晴らしさにすべてを
忘れ、一人欲びに浸ったものです。でも、
最近では禪の緊縛感と共に禪姿で縛ったり、
縛られたりしたいとも思います。或る夜等
禪一本で床に入り、自縛して一夜を過した
こともあります。とにかく禪美への夢は果
しなく、日夜を楽しく過ごしております。

愛好者にはソドミーの傾向の人が多いの
は事実ですが、私感を述べさせて戴きますと
禪を締めることにより何か自分に欠けた男
らしさというものが蘇った様な感じがする
のです。逞ましい男性、偉大なる力を与え
られた満足を得るのです。又少年期への愛

「B氏は何処に」

あるマゾヒストの公開状



坂田 信治

異様な興味を抱き、この年令となつて女色には全く関心がない。そして又幼時に灼き付けられた動物虐使(男性の馬に対するもの)の印象が、マゾヒズムと結びいて、空想的マゾヒストであると同時に、その馬の支配者が、革の長靴を穿き、革鞭を使用して居た為、長靴、革鞭崇拜狂となり、両者を身に付けた男の家畜、或は奴隷となつて、激しい折檻を受け度いと願望する念に苦しめられ、日常の生活でその何れかを、見聞するとき甚だしい反応を示す。やゝ長じて、年長の男性に犯され男色に就ても多大な関心を有する。勿論独身であり、空想のみでは最早我慢出来ず、彼の支配者を求めるべく、奇譚クラブ誌上に、公開状を発表する。

(B氏)

生年月日 明治四十一年×月×日(満四六才)

職業 牧場主

体格 身長 五尺二寸弱、体重 十七

貫強、肩巾広く、胴長で肉付は極めて良いが脂肪太りではない。色は浅黒く、体毛濃く、太い頸と節くれ立った大きい指を有する。威風堂々として、筋骨逞しく強靱な肉体の持主である。長年の乗馬で著しいがに股である。

容貌 色は浅黒く、所謂男性ホルモンの過剰で、赤味を帯びた艶を有する。額は広く両びんへ禿げ上つて後頭部は極めて髪が薄い。

世の中には変つた人間が居るものです。茲に登場するAという男(実は筆者)も、その一人と云つても良いかも知れませんが、全く相識らないB氏(実は筆者が心の底より探し求めている理想の男性、未だ現実には相識しない。)と廻り合つて、交した手紙を示して見ましよう。先ず登場人物を出来るだけ詳しく紹介した後、手紙は公開しましょう。

(A氏)

生年月日 昭和五年×月×日(満二四才)

職業 会社員

体格 身長 五尺五寸強 体重 十二貫五百匁、身長割には瘦せて居て、筋骨薄

弱であるが、病身ではない。色は白く、体毛は薄い。細い指は優しく、極めて女性的である。概括すれば、貧弱な肉体で頼りない感じを与えるが、不具な点は全くない。

容貌 色白く、頭髪は多く漆黒であるが、眉毛が極めて薄い。眼は一重瞼であるが、美しい眼光を有する。無髭に近く、滑かな皮膚である。特に唇が美しい。家柄は良く、その伝統とも云える一種の気品が在る。さっぱりとした清純な風貌と云える。然し乍ら瘦せている点が、弱々しい感じを人に与える。

性格 内気で無口であるが、女性的言動は全く伴わない。父親を早く失つた為、男性に

太い眉と、大きい柔和な然し忽ち峻厳な表情となる二重瞼の眼を有する。髭は鼻の下、顎からもみ上にかけて連り、粗く太い。支配者として完璧な風貌で、威怖の感を人に与える。

性格 精力絶倫で、極めて男性的である。

幼時より逆境に堪え、苦勞を重ねて今の産を成した為、利己的であり、又支配者たらんとする念強く、サディスティックな性向を有する。特に長年馬と共に過し、戦時中は輻重兵として、馬を役使した為、馬に関しては暴君的扱いを行う。それは彼の支配下に極めて荒い馬があつて、その服従に激しい鞭と、強烈な拍車の責めを要した為である。それは一つの潜在意識となつて、馬に限らず動物を、革鞭で激しく責めることに、異様な興味を抱いている。現在牧場主として、馬に対する加虐には事欠かないが、それも稍飽きて、人間を馬として支配し度い願望を有している。その対象は戦場で通じた、若い学徒兵を想像している。最近妻を失い、二人の子供と共に、暮している。

(B氏からAへ)

奇譚クラブで、きさまのものを見た。おれはきさまに合つてみたい。ともかく手紙をよこせ。

(AからB氏へ)

拝啓 此度は不思議な御縁で、貴方様にこ

のようなお手紙を差上げることになりました。小生にとって之に勝る喜びは御座居ません。この半生に於ける最大の望みが今や果されるということとは、何と素晴らしいことで御座居ましょう。然し乍ら簡単な貴方様の文面では、何一つとしての手懸りもなく、小生の想像に依つてのみそれを補う他はありませんが、小生は貴方様にどれだけ気に入って頂けるかが非常に心配です。小生の履歴或は性格其の他は奇譚クラブ誌上に掲載されましたAに相違ありませんが、もっとよく知って頂く意味で小生の写真を同封して置きましたので、御推察下さい。何はともあれ小生の総てを、貴方様に捧げ度いという決意には、変わりありません。もう何も管々しく申し上げません。お会い下さる日をお知らせ下されば、何をさておいても赴く所存で御座居ます。その日の一日も早からんことを念じて居ります。

敬具

(B氏からAへ)

きさまの手紙はよんだ。おれはきさまのよな男をさがしていたんだ。きさまのそのいかにもきどったたいどを、ほねぬきするほどたたきのめしてやるぞ。おれは無学だから、きさまのような男をみると、むなくそが悪くなるんだ。きさまのしやしんを見たが、そのようすじやおれの一けきでは、一ぺんにぶつとばされるぞ、いいか、きさまにはそれだけ

のかくごがあるか。おれの馬のしこみ方はなにかまでも有名なもんだ。拍車とムチでどんな馬でもぶっ倒れるまで、いためつけるが、きさまはそんな目にあうのが、恐しくないか、半殺しの目にあうかくごがあるなら、やって来い。×月×日××駅×時×分着の汽車できさまの来るのを待つ。おれの顔をきさまは知らねえだろうが、カーキ色の乗馬ズボンに黒いかわの長ぐつをはいた男がおれだ。他にもそんな奴がいるかもしれねえが、拍車をつけているのは、おれだけだ。ここにきさまのいりような金××円を入れておく。

このようにしてAは、B氏に合うべく出発しました。彼の心の中には、溢れるような歓喜の期待がありました。そしてAの最後の輝しい青春が始まるのです。

あゝ、これが現実に実現したら、この雑誌を読まれる人々の中に、どうしてB氏が存在しないと云えましょう。私はB氏が私を奴隷として、否もっと卑しい家畜として、私を呼び寄せ、支配し征服する日を信じて居ります。B氏は何処に、私の未だ知らない御主人は何処に居られるのです。どうか私を支配して下さい。待つて居ります。

B氏は何処に、B氏は何処に居られるのですか。

(おわり)

倒錯の英雄、織田信長を完膚なきまでに揶揄した新研究

倒錯の英雄、織田信長

笠 置 俊 郎・作

第五章

文豪と信長の倒錯比較論

天才と云われる人の現実生活を窺ってみると、常人と異った倒錯性に富んでいることを発見するのだが、信長も例外に洩れず、その日常生活の実相は、徹底した傍若無人さと、我儘と癡癡、そして折檻と成敗を無上の愉しさとして、実に多くの家臣、召使を苦しめたのである。

信長の人物としての偉大さは、むろん云うまでもない。彼ほど政治と軍事に亘っての、天才的力量を兼ね備えた指導者は、古今に稀であるが、光秀に対するような、極めて意地悪い、執念深い、恰

度、悪女のヒステリー発作でもみるような、日常のやり口を眺めると、安国寺の恵瓊ではないが

「高ころびに、あおのけに、ころばれ候すると見え申候」という危気が感じられるし、寛政の三博士の一人、尾藤二洲のように

「信玄謙信二公、知_レ兵克_レ敵、而不_レ知_レ智_レ服人、織田羽柴二公、知_レ智服_レ人、而不_レ知_レ德服_レ人」

と徳性の欠除を指摘したくなるのだが、常識的に「完全な」と云うことは、極く「平凡な」人間で、偉力を発揮することなどは思ひも及ばないことである。

その思想が、偉大なほど、現実生活が、まるで謎のように、倒錯的に歪んでいるのは、天才児の避け難い人間像とも云えよう。

その意味で、文豪と信長の比較論を試みるのも――比較解剖学的な

収穫はあるだろうと思う。

世界的文豪も数多いが、私はモーパッサンを挙げたい。

モーパッサンは、性来、厭世憎人的な気質をもっていたが、その最後は、惨ましくも脳バイ毒で発狂してしまった。

しかし、彼が、たとえバイ毒患者でなかったとしても、十分に、発狂する素質はあったよ。だし、そう云った変質は、彼の文学の主体をすら成している。

モーパッサンは、幼少時から偏執で、サディズムに惹かれたらしい。その著「猫について」は、読者もすでに御存知だろう。

モーパッサンが、幼い頃に、庭園で畏にかかって苦しみ悶える哀れな猫の様子に、惹けるような興味を寄せて、飽かず眺めたこと云うことが告白されている。

また——彼がアフリカを旅行した時のことだ。ある日、天幕の中で寝ていると、頬つべたの上に、ひやりと冷いものが落ちてきた。

愕いてよくみると、それは一匹のいとも奇妙な面構えをしたヒキ蛙であった。そこでモーパッサンは、この不届な無礼者にいかに復讐するかを考えた。彼は、忽ち一計を思いついて、ヒキ蛙の口に煙草を押し込んで、それに火を点けたのである。

ヒキ蛙は強烈なニコチンにむせんで、のたうち廻って苦しみ、はては、白い腹を風船の如く膨らませて死ん



でしまった。

このモーパッサンの、小さき者への虐殺は——彼らしいサディズムの表現であるとも云えよう。

まことに、モーパッサンは芸術を愛する文人であり、信長は乱世に戈をとる武将であるから、自ら、生活の色合に相違はあるが、被虐体が、猫か蛙か——それが、人間と云っても封建的主従関係の下にある家臣か、占領地の被征服者かの区別があるだけで、共通して、その虐待の方法が、意地悪い、ヒステリー性を匂わせているのは面白いことである。

モーパッサンは、ペンの人であるから、彼のサディズムも、悪戯程度の行為に留ったが、十分な昇華をみせずに、良心のうちに抑鬱したことであろうし、沈積したことだろう。それが、バイ毒の脳中枢破カイの病毒作用と重複して、遂に発狂したのではないかと思われる。

その点では、絶対権力をもった……と云うよりは、自らの力で取得した信長は、世に毒血の驕慢児よ、と恐れられながら、家臣を成敗し、占領地の降将を虐殺することによって、サディズムの心理的昇華をはかったから……モーパッサンのように、発狂せずにすんだのであろう。

恐らく、信長にも、モーパッサンと同血の、発狂的気質のあったことは、彼の数々の、横暴と、嗜虐的殺戮の例にみて、そう信ぜざるを得ない。

今一つは、天才には、同性愛の耽美主義者が多いということである。その例に、大トルストイのことが偲ばれる。

トルストイの晩年、奥さんの嫉妬に悩んで家出したことは有名だ

が、その果に絶世の文豪も淋しく田舎町の駅で病死した。この天才の現実生活は、その高邁な宗教的文芸思想との距離に深い謎があるようだ。

トルストイの奥さんは、トルストイと、その親友チュルトコフの間を疑っていたと云われている。当時、トルストイは八十の老翁であり、チュルトコフは、これまた妻子ある立派な紳士、どうして、この二人の間に同性愛が存在し得たのだろうか。

だが良人を知る者は妻に如かず、と云うなら、トルストイの秘密は、案外、奥さんがいぢばんよく知っていたのではなからうか。

或は若い頃からのトルストイの生活に、同性愛的傾向があったことだろうと想像もされるのである。そして、奥さんは、そのことを身近に知っていたのであろう。

それも、単なる肉体の関係に留まるのなら、奥さんの嫉妬も、ある限界でおさまったかも知れないが、トルストイが、一切の原稿の処分や、著作権抛棄のことまで、チュルトコフに委任したとなると……そこに浮ぶ同性愛の緊密さは、耽美的と云うよりは、うずくような魂の歎びと、慰めに彩られ、愛と信頼の極致を描いているように見えるのである。

奥さんの必死の嫉妬ぶりは、こうしたトルストイとチュルトコフの交りに向って、益々熾烈さを加えたのであろう。そのことは、信長にあっては蘭丸との同性愛にみられるのだ。

蘭丸は決して単なる、当時の風習の、男色愛好の娼童ではなかった。信長は、むしろ蘭丸との同性愛に耽美し溺れてもいた。蘭丸とて信長を無二の愛人として慕っていた……が、彼らは感情以上に魂まで溶け合っていたのである。

攻城野戦の獣の如き咆哮、屍山血河の惨劇、骨肉相食み、同族相殺く、戦国の習いの中で、変転極りなき世の争乱を眺め、その中に身をおいて……一世の英才を以て立つ信長の胸奥の琴線に触れるものは、よし彼が絶世のサディストであろうとも、潜然として、人生の空しさを痛歎する、何ものかが揺曳したに違いない。

この信長の幽鬱沈痛を救うものが、蘭丸との同性愛であった。ただろ——同性愛とは、かほど強烈、芳醇に匂う人生の耽美なのである。この信長の心情は、三島文学調の人生観が、アブレ的な近代的情感でなく、すでに、戦国時代の天才児の心の中に燃えていたことを証するではあるまいか。

新春の新聞に、中村錦之助が「蘭丸のような個性のある役がやりたい」と述べていたが、それは、観賞的な「女形俳優」に満足し切れない錦之助の心のうずきであり、信長、蘭丸の同性愛の高さに憧れはじめたに外ならないと思われる。

歴史的な年代の距りは、よし浪路遙かであっても、蘭丸の心を捉えた錦之助の言葉に、私は、「追だね」と、幾度も独りで頷いた。話が脇道に外れたが、トルストイの場合も、また、信長の場合も、彼らにとって、チュルトコフや蘭丸が、己が糟糠の妻よりも、大切な愛情の対象であったと云えるのだ。

信長と共に本能寺に、兵火の中に殉死した蘭丸の末路と、後事をチュルトコフに話して、旅に死んだトルストイ。その倒錯感情の果の詩的な凄壮美に、私はもろくも心を搏れるのだ。

ここに天才とサディズムの繋りをみ、天才と同性愛を想いみるときに、純化された耽美の世界と……愚劣醜怪な、悪戯的変態性慾との、懸け離れた違いを、はっきり意識しながら、天才たちのよう

に、めざましい倒錯的な生き方を憧憬せずにはおれない。

信長の謀略的性格について

どんなに科学戦が発達したとしても、戦争に謀略はつきものである。殊に、戦国時代にあつては、謀略が大半の勝敗を決したことであらう。

ところが、謀略——つまり特別機密の随密的作戦は、これをやりこなせる特異の性格がないと成功は難しいもので、それは、やはり一種の倒錯的性格だと云える。

民衆を煽動して革命を企てる赤色分子には、確に、常人と異った倒錯性があるもので、やはり謀略家と通じるものがあるようだ。

信長は、名将たるの器でありながら、謀略家の性格をもっていたが、その謀略ぶりも、極めて悪く徹底したものであった。

例えば、野史に載っている、美濃の斎藤との間における謀略戦などは、けだし秀逸である。

斎藤道三のことは前章で書いたが、道三には義龍、孫九郎、玄蕃という三人の子があり、道三は義龍を白眼視し、義龍も父に反噬して、互いに父子相争っていたが、永祿二年四月に道三は、義龍の急襲を受けて殺され、弟の孫九郎、玄蕃も義龍のために斬首された。かくて義龍は美濃一国の実権を握ったが、信長は、いつの日か、美濃を侵略する計画であつて、この斎藤の紛争には、およそ、信長一流の謀略があつたものと思われる。

と云うのは、野史に従えば、信長は、妻の濃姫（道三の女）を許して、斎藤氏の家老三人が、信長に加担して、道三に謀反を企てていると洩したので、驚いた濃姫が密かにこのことを父道三に知らせ

てやった。

道三ほどの人物も、我が娘の情報と云うので迂濶にも信じたのであろう。三人の家老を叛逆者として、斬罪に処した。

実は、その三人の家老は、道三にとっては身辺を護ってくれる無二の忠臣であつたと云うから、そのため、道三の不慮の死が早められたことは疑いない。

この話の真偽には、若干の疑問もあるが、信長らしいやり方だし、恐らく類似した謀略がめぐらされたのであろう。

その証拠に、信長は、逸早く、舅殿の仇討だという名分で、自ら軽兵を率いて義龍に戦を挑み、内紛に乗じて美濃に突入したが、義龍は父道三に似て戦い巧者で、丹野原に伏兵して、信長の猪突を待ち、不意に迎撃したので、信長も泡を喰い、この時ばかりは、敗退を余儀なくされた。

史実によると、信長の八十余騎を、義龍の兵三千で包囲したとあるが、その重囲を突破した信長は退却も名人であつたらしい。

それにしても、罪もない忠臣を殺させる——という謀略の凄味は、いかにも信長らしく、道三ほどの梟雄も一杯食った



わけである。

信長にすれば、民にかかる人間のあさましさは憫笑の種であり、まんまと意中に陥ちた時の快味をむさぼったことであらう。利を以て誘えば、難なく民にかかる人間の本質的な弱点を見抜い

ていた信長は、人間性悪説の倫理感をもっていたと思う。

後に信長は、義龍の家老達と内通して、義龍に反旗を翻えさす密約をとり交し、寝返りの家老達から人質をとった。

こうしておいて——その家老達が、やっと密かに稲葉城に帰った頃には、早や信長は、稲葉城に殺到していて、忽ち、城の囲りの町家を焼き払って包囲してしまった。

あまりの神出ぶりに、稲葉城にあった寝返りの家老達も呆れ驚いたが、直ちに城を包囲する織田軍に呼応したから、義龍は遂に降った。

この美濃攻めも、徹頭徹尾、謀略一本で、殆んど兵を損ぜずに目的を達しているのだ。たいていの者なら、斎藤方に反乱が起きてから兵を進めるだろうが、この辺りが、信長の天才戦術家としての面目の存するところだろう。

今川義元を、田楽狭間に撃ちとり、美濃の斎藤義龍を降して、信長の声望、漸く四辺を圧したが、その間、信長は、永祿四年に八十人の家臣を連れて、ひそかに京に上って、室町の裏辻に宿をとって將軍義輝に会っている。

この信長の微行を追うた斎藤方の刺客を、京の町で一喝して退けた話もあるが、信長の志はすでに中央にあり、天下布武の理想と構想は成っていたのである。

その後、將軍義輝は永祿八年、権臣松永久秀、三好一族のために、包囲急襲されて自刃した。

將軍義輝の二弟のうち周高は殺され、覺慶は幽せられたが、覺慶は逃れて近江に走り、また追われて、越前に逃げ、転々とした末に、信長に緋ったのである。これが、十五代將軍足利義昭である。

信長は、かくて破竹の進軍をして京に入り、義昭を將軍に推戴し、自らは、無位無冠に甘んじ、よく京畿を平定したのである。

とは云え、その後の信長にとっての勁敵は、武田信玄、上杉謙信、中国の毛利、それに本願寺と、まだまだ豪族が反信長の勢威を張っていた。

幸運なことに、天正元年四月、三方原戦役以来、信長とは交戦状態にあった武田信玄は俄に逝去してしまった。それに、北国の飛將軍上杉謙信も天正六年三月、京に上らんとして卒中で歿した。

天正十年、信長は徳川家康と共に、武田勝頼を攻めて、之を滅したが、この折の、信長の謀略がまた惨酷であった。

かつての帝大史料編纂官花見朔巳氏の記述によると、残忍なる信長のだまし討ちは万人に悪感を抱かせるといい、その例に、稲葉一鉄を信長が殺そうとした話や、それに似た話として、越前勝山の小笠原家譜にある記事を紹介されているが、それによると、信濃伊奈郡松尾の館主小笠原信嶺は、武田の属将であったが、織田に寝返り、その室女を人質に信長に差出し、信長軍の嚮導を勤めて忠節を励んだ。信長はこれを悦び本領松尾城安堵を約した。しかるに、その後、信長から伊奈地方を賜った毛利河内守秀頼と森庄蔵が、信長の密命を承け、突如として松尾城を襲ったので、信嶺は纔に身を以て木曾に遁走した。これはまったく武士にあるまじき、だまし討だと言っている。

いやそればかりでない、甲信に侵入した信長は、占領地の不穏を察して、当国の群士に告げて

「我が旗下に降る者は、本領安堵たるべし」と布告した。

本領安堵と言う甘言に釣られた武田の諸将が、続々と降を請うて

来ると、信長は、平然と、片ッ端からその首を刎ねてしまった。

まったくインチキであり、だまし討も、こう公然とやられると、批評の言葉もないくらいだ。

卑劣と言え、そうかも知れない。だが信長の思慮はまた別にあった。だいたい、主家の滅亡をよそに、譜代の家臣が、自己保身に汲々として、臣節を忘れて敵將の軍門に降るといふことは、信長の最も憎んだところである。

逆に、飽くまで主家と運命を共にして戦って、不幸、虜となった將兵に、手厚い待遇を与えた信長は、封建的新秩序の精神的支柱は、臣節の尊さを以て本分とする新武士道にあるとの思想を抱いていたのである。

その意味で、信長は、甘言に釣られて、のこのこと恥知らずに投降する武田家臣の、厚顔と愚昧に憤り、片ッ端から殺戮したのだが、なお、それにしても、公示を詐って釣り出したところに批判の余地はある。

これは、信長流のサディズムの然らしめるところで、民にかかった狡猾な狐を殺す、あの不義なる智慧の実を食った人間の、悪を愉しむ心の現れであろう。

僧侶を憎んだ信長

信長ほど、沢山の坊主を殺した大將は史上に類がない、坊主と信長は、不倶戴天の仇敵であったと云ってよい。

當時は、仏法僧を敬う思想が生きていて朝に僧の行くに会えば、その日は仏恩があつて幸せがあるといい、僧侶に袈裟を布地すれば三代が仏恩を蒙ることができるといい、もしも、坊主を殺せば七代

に祟るものとされた。

遠くは、平清盛も南都を焼いた仏罰で、身は業病に苦しんで仆れた。また、遂に平家西海に滅ぶに至った……と、それは、あたかも真理なる如く思われていた。

信長は、これらの仏教絶対思想の世相の中で、まったく外道の如く、坊主共を焼き殺したのである。

なぜ、信長がこうまでも坊主を憎んで殺戮したのか——それは単に信長は坊主が憎かったのだという感情だけの問題では、むしろない。

そこには、當時の武門と寺門の抗争という特殊な社会事情を解明せずしては、信長の憎悪の実体に触れることはできない。

この時代にあつては、仏教は——貴族仏教から庶民仏教への移行期であつたと共に、国家によって保護された仏教が乱世のとぼちちりを受けて、保護に頼ることができず、自力を以て寺領を確保し、法城を護らねばならなかった。

かくて神聖なるべき法城には、兵甲を帯びた僧形の兵が満ち、法鼓は久しく絶えて軍鼓と変り、五濁惡世に袈裟は俗塵に塗れ、仏日ために暗く法燈は消え、破戒無慙の飲血の惡僧横行し、寺門自ら迷執の闇に流転する有様とはなつた。

精神界には墮落した仏門ながら、その寺領の武力的拡張と自衛はすさまじく、勃興する武士階級の勢力に拮抗して、寸尺の地も譲らなかつた。

こうして変態的な寺門の領主化は、当然、武士の許すところではなく、殊に、澎湃として、封建統一政權機運が盛り上るに従つて、武士と僧侶の衝突は避け難い宿命であつた。

信長が屈起したのは、これ歴史の必然性であり、天下布武は、統一政権への旗印であって、それは全国和平統一のスローガンに外ならず、当然、変態的寺門の領主化は解体さるべきであり、僧侶から武力を剝奪すべきであった。

武力をもち、僧兵化した坊主共は、一匹たりとも生かさぬ……という牢固たる決心は、信長のサディズムと結びついたのである。

なお、今少し、当時の宗教界を瞥見する必要がある。それは——貴族仏教であった天台（叡山）と真言（高野山）の、聖道門派の墮落と、その非民衆性に反撥した浄土真宗の抬頭のことである。

聖道門は、肉食妻帯を禁じ、専ら苦業的禁慾生活を行って精進一途、修業三昧に生きて自らのうちに仏光をみ、自らを仏にまで高める修業をした。そのために、却って、その非人間的な苦業に敗け、身を持ち崩し、反動的に破戒に陥る者が多かった。そして——遂には、不自然な禁慾が、兇惡なサディズムを生み、仏法の清浄を冒瀆したのは許せない惡徳であった。

これに較べて——易行門と言われる浄土真宗は、もとより法然の弟子親鸞によって開かれ、肉食妻帯を許し、僧侶の生活も俗人と変らず、ただ一向に念仏して救いありと言う庶民的仏教であった。

そも、人間生活は諸惡煩惱に満ちて、地獄一定に外ならない、一心に念仏する外に、救われる道はない、と言う革命的教説は、忽ち一世を帰依せしめるばかりに流布した。

当然、この新興仏教を既成の天台、真言の勢力が圧迫したので、当時蓮如上人は、越前の吉崎にあって教勢の拡張に奔走した。こうして一向坊主は諸国に流れて、教化地域を拡げたので、いつしか民衆は、一向坊主を中心に、宗教的な平和な村落を作ろうとした。

ここにも、武士領主との抗争が起り、それが一向一揆となって、明らかに武家領主に対する農民の反抗という形をとった。

当時、農民は『武家を地頭として手強き仕置に遇わんよりは、一向坊主を領主として我儘を言ひしらはん』

と言いつつ武門と戦った。ここにある手強き仕置とは何か、それは戦国時代特有の、殺伐なる農民圧迫である。

法制史から言っても、磔、逆磔、串刺、鋸引、牛裂、火焙、釜煎、焼松灸、耳鼻削など、無残な極刑は、この時代に多く行われ、練兵、演習の際に、農家をわざわざ焼き払って武を示した乱暴な領主もあった。

領主地頭は、暴力を以て、農民の婦女を犯し、財を掠め、従わなければ、刑罰を加えて農民を奴隸とした。

こうした圧迫下で、農民達は一向坊主を領主として、我儘（自由）を願望したのは、切なるものがあつたと思われる。

このような状態で、中央に進出した信長も、武家統一政権の一大障碍として、平安朝以来、帝室叡岳を夢想する北嶺山徒の兇惡なる僧兵の集団と、反信長勢力の諸大名と結托する各地の寺門、それに厄介な一向一揆、などの仏門の輩を掃討せねばならなかった。

信長の坊主を憎む情が、けだし強烈であつたのは己むを得ないことであり、況んや、俗家の後家や婦女子に好色の魔手を伸し、惡どく俗化墮落した坊主に、いささかの尊敬も払わなかつた信長である。

当代記に、相国寺の兌長老の寂した時、「惣別僧形無形儀にして成人の息有なんと於京中嘲弄す、金銀蓄多し云々」

とあるように、坊主は一般に破戒無慙であつたから、信長の眼には、ただ一個の無頼と何の撰ぶところもなかつた。

信長が武田を滅した時——惠林寺の快川和尚が、信長の敵、近江の佐々木承禎、若狭の武田五郎などを穩匿したというので、問罪の軍を以て惠林寺を包圍した。

惠林寺は甲斐の名高い伽藍であり、快川和尚は聞え高い名僧であったので、これを破滅させるに忍びずとして、信長に助命と歎願した者もあったが、信長は頑として承知せず、光秀の如きも、「却って天下は、評して信長を不仁の君と言うでしよう」と諫めたが、信長は、生意気を云うなど光秀の頭を打ったとも言われている。もとより光秀に本気で怒ったのではない。

時は天正十年四月三日、攻め手は織田九郎次郎、長谷川与次郎ら、信長自らも下知した。その時の惨鼻を極めた攻撃ぶりを信長記に見ると。



寺中にあった老若は、一人残らず山門へ呼上げ、とあるから、軍兵が槍を擬し、刀を突きつけて山門に集めたのであろう。そうしておいて廊門から山門へ籠草を山と積み、信長の命令一下、これに火を放ったのである。

むろん、その山門には、快川和尚や、中村長禪寺の高山和尚、などの長老をはじめ、百五十名の寺の老若がいたのだ。

さては、焚殺するのかと、立ち上る黒煙に、寺を囲んだ軍兵達が、あまりのことにハツとなった時……その軍兵の中から、すすり泣きの声が洩れ、思わず、その場にうつ伏して、

「生仏さまを焼殺すなどとは、ああ勿体いなや、これで仏罰が当らずにおこうか……」

と、槍を投げ出し、白刃を抛り投げ、身をもだえて、山門の方に合掌して泣いた。これは当時の惠林寺焼亡図に遺っている話で、織田の軍兵にも一向宗の信者があったのだ。

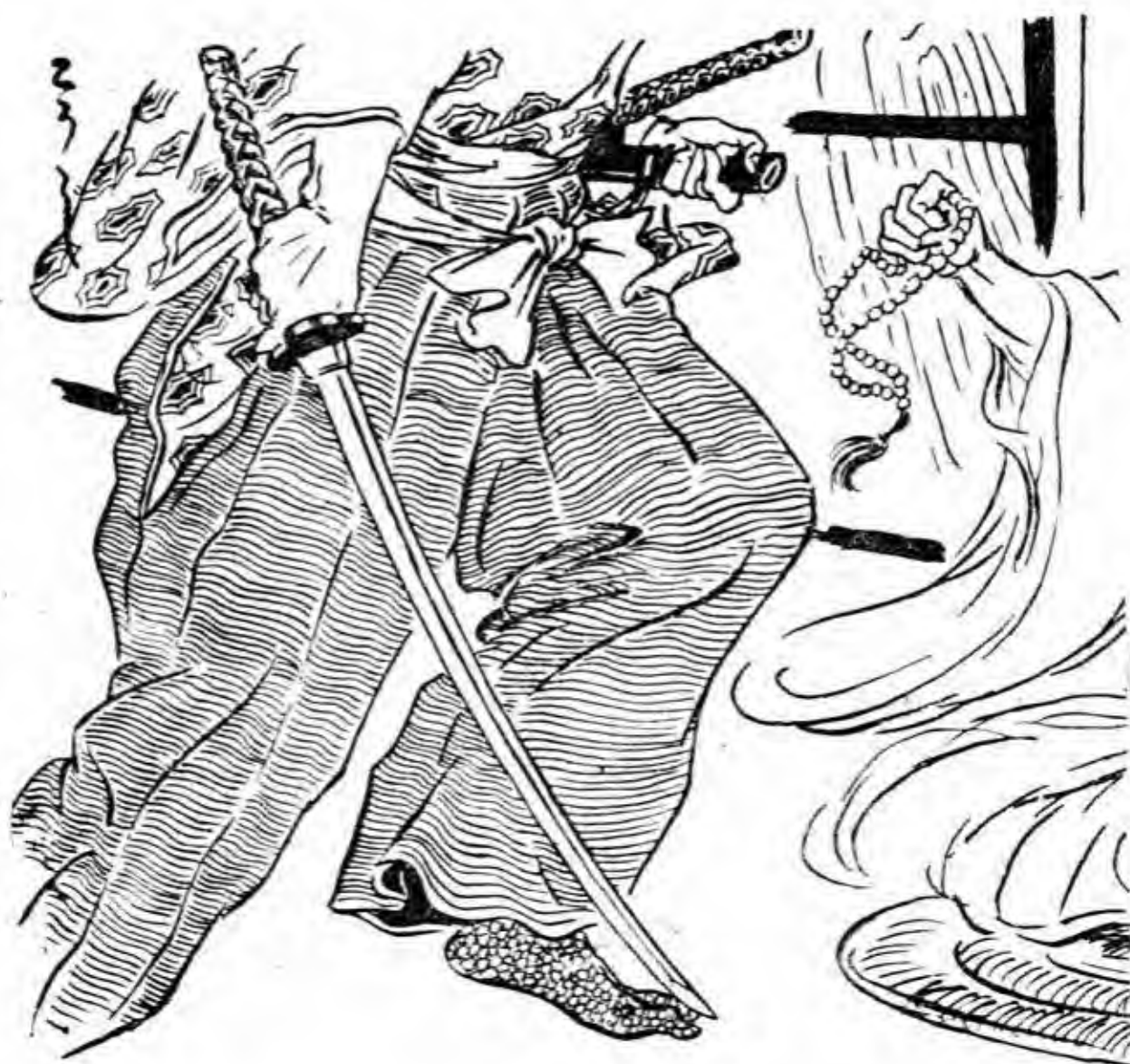
この有様をみて信長は、愚昧な部下を憎んで、

「容赦なく、不屈な軍兵を斬れ」

と厳命して、即座に処断したと言われている。

やがで濛々たる煙が一团の焰々たる火となるや、焦熱地獄の紅蓮の中に、長老快川和尚は合掌したままの生不動の姿をみせ、老若児衆は、踊上飛上とあるから、阿鼻叫喚して狂乱したのであろう、ついには、互に抱付き、相擁して、もたえこがれ、咽火血刀のその苦しみは眼もあてられず、相果てた……と記され、その惨劇を叙している。

信長は、この生地獄の凄惨目を掩う現場を、冷然と眺め、わずかに憫笑を浮べて、いささかの動揺も見られなかった。



いかにも百五十余名の生命を一炬に葬った信長のサディズムは、残虐であり残忍であり、天人の許さざるところとも思えよう。

だが——信長は、無為に暴を用いたことはないのだ。むしろ、彼はよく政治に心を用い、社会正義を尊重し、民衆の苦を救った、そ

の点、名君でもあったのだ。

信長には、天下を救わねばならぬ、天下布武の大事業があったのだ。歴史的必然性を以て迫る全国の和平統一の英雄的大業があった。

ならばこそ、この大理想を、小賢しくも、衆生済度の身にある坊主共が、反信長陣営の大名に荷担して陰謀を以て攪乱を計るなどは、もとより断じて許し難いところであった。

天下のために、信長は敢て、この暴挙に出たのだが、それだけに、信長は公然と、そのサディズムを愉んだのである。

その時、火中にあった快川和尚に、高山和尚が「三界安きことなし、何処に向ってか回避せん」と問うと、「顛面露堂々」と快川和尚は答え、さらに高山和尚が、「作麼生か^{そもん}是堂々底」と問うのに「心頭滅却すれば火もまた涼し」と答えたと伝っている。これは快川和尚が、唐の杜荀鶴の句を誦したのである。

また——信長の、長島の一向一揆の平定の如きも、空前の大量殺戮で、これまた、史上稀な大虐殺史である。

長島は木曾川の河口にある大デルタ上にあつて、難攻の地理的要害であつたから、信長もその平定に悩み、数度の出陣で二人の弟まで戦死させている。

先に述べたように、一向一揆は、単なる烏合の農民軍ではなく、宗教的に結束した強固な民兵で、その総司令部は、石山本願寺（大阪）でここからすべての作戦指導が行われていた。

当時の農民の中には、戦争に経験のある武士生活を営む半農半士の者もあつて、闘志において戦略において侮り難いものがあつた。さすが、謀略のうまい信長も、相手が宗教で固った民兵だけに、

内部攪乱は全然利かず、正面から武力で鎮圧する外に手段がなかった。犠牲が大きく、それに、昔も今も、民兵はゲリラ戦が上手で、加うるに人海作戦とくるから、朝鮮半島に上った米軍のように、苦戦の連続で、信長とて逆に追われて、這々の態で危急を通れたことも一度や二度でなかった。

これは信長だけでなく、一向一揆には、家康も手を焼いたし、上杉謙信も身動きできぬほど脅されたのである。

それらの諸将は、大いに閉口はしたが、一向一揆を絶滅できるなどとは思及ばぬことであつた。しかし、信長は——不可能を可能にする確心に燃え、必ず絶滅してみせると深く決心していた。そしてまた、信長は後に、殆んど一向一揆を終息させたのだから、矢張り、何と言つても偉大だと思ふ。

とまれ、長島の宗徒と石山本願寺の連絡を完全に断ち切って、大軍をもって、袋の鼠とし、猛攻に次ぐ猛攻を加え、令を下して長島に在る人間は、老幼男女を問わず、見つけ次第に射殺し、斬殺せよと命じた。

これでは、ゲリラ戦も刃が立たない、信長は督戦また督戦、だんだん包囲の鉄環を縮めて、遂に一揆はもとより住人のすべてを、おう殺し尽したのである。

為にデルタ上は満目荒寥、惨として人影を絶ち、長島は無人の地と化し、一揆の徒党は巨大なる恨みを遺してここに全滅したのである。その時織田軍によって掃討された農民の数は実に二万に上った。悲風は愁々として、痛恨は永えに消えやらぬが、ここでも信長は、ただ、徹底掃討の悲願に立って、一歩もたじろがず、暴虐の鬼となつていたのである。天正二年のことであつた。

この年、信長は一向一揆の本拠である、大阪本願寺を攻めて多大の戦果を収めたが、本願寺は仲々陥落しそうになかった。

信長が本願寺を倒さんとして、いかに長期の作戦を用いたかは、次の年表で知ってもらいたい。

○天正二年四月大阪本願寺を攻める。

○天正三年、本願寺の与党三好笑岩を河内に攻めて之を降す。

○天正四年四月、大阪本願寺を攻め、本願寺重囲に陥り糧食すでに竭きんとするとき、毛利輝元、紀州雑賀の鈴木孫市らと戦艦を以て大阪本願寺救援に來りて信長の水軍と木津口に戦い信長軍敗退して大阪東本願寺に糧食搬入して本願寺陥ちず。

○天正五年二月、信長は紀州雑賀の鈴木孫市を討つて本願寺を孤立させた。

○天正八年、信長本願寺と和し、遂に光佐（顕如上人）は大阪開城して信長遂に之を屈服した。

この長年に互る抗争譜をみれば、信長にとって、本願寺は、そして本願寺にとって信長は多年の怨敵と言うの外はない。

信長が、坊主を憎んで虐殺したのは、決して一時の、彼の癡癡からではなかつたのである。二万余の老若男女を、その手で虐殺して憚からぬ信長の、サディズムの豪氣と果敢、果して何人誰が彼の心情に近づくを得るだらう。

坊主の横暴と政權慾を信長が木ッ端微塵に破砕したればこそ、やがて徳川の天下泰平の御代が訪れて、万民鼓腹撃壤の和平が開かれたという厳たる歴史上の事実に想到して、改めて、信長のサディズムを偉大なりと讃嘆するばかりである。

（以下次号）

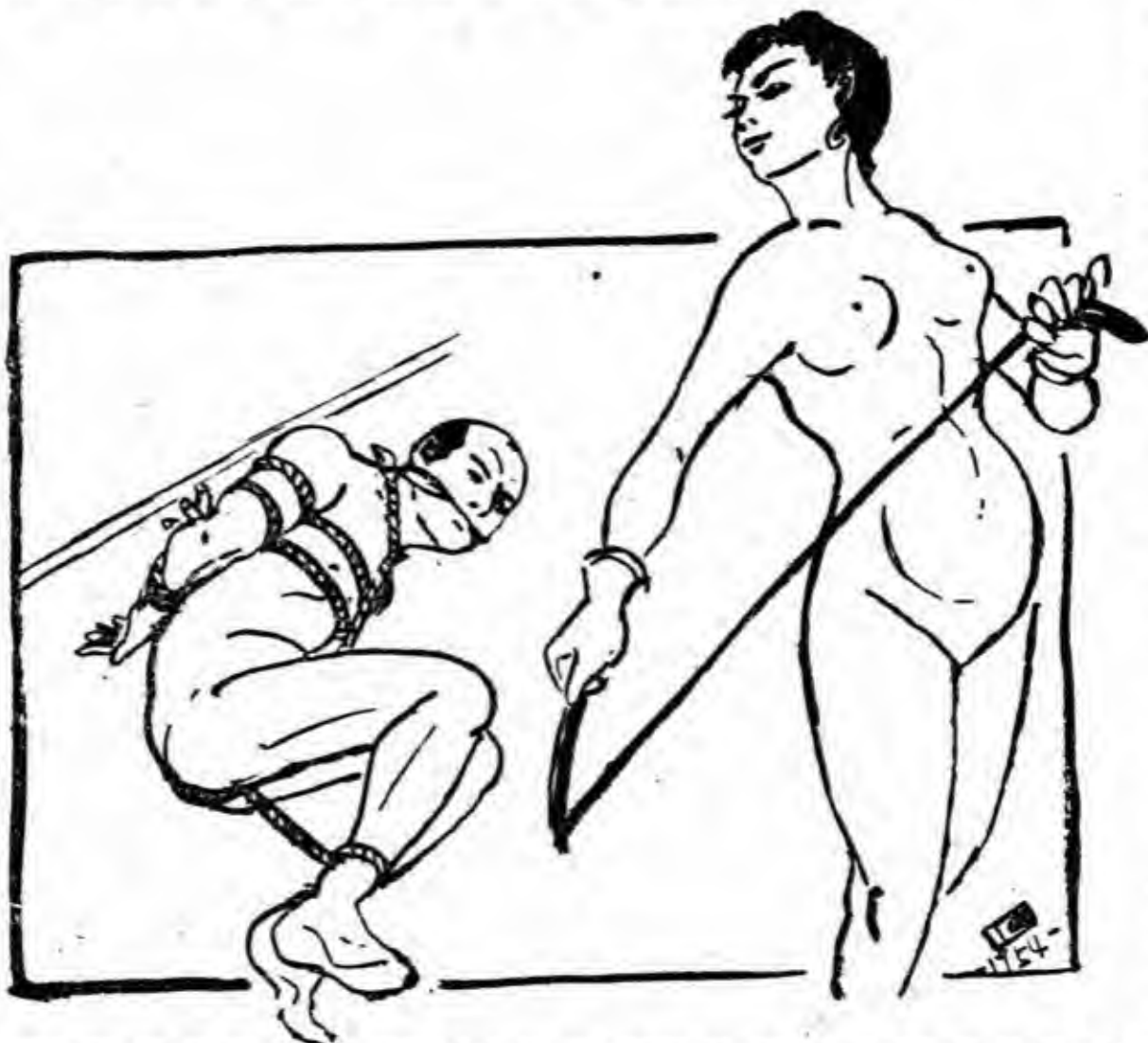


マゾヒストの絵 (投稿)
『牛乳風呂の饗宴』(四月号)より

大阪

K 生

私は貴誌を一年四月号より愛読しているマゾヒストの一人です。先日、四月号を買い、馬族保氏の「牛乳風呂の饗宴」を面白く読ませて頂きました。殊に円城寺一等兵とのエピソードに感激し私が円城寺一等兵の様なシチュエーションにおかれたらと唯空想するのみで、その空想の慰めとして書いたのが、同封致しました絵でございます。下手な絵ですが恥を忍んで送る



次第です。若し貴誌に載せて頂ければ光栄と思います。その際題名が必要でしたら適当におつけ下さって結構です。一昨年、

アリスの人生学校が増刊として出版されましたが、出来れば、マゾヒスト版も出版してほしいと思います。

敬具

現代マゾヒズム芸術時評

—映画演劇に於けるマゾヒズム—

原 忠 正

(一) 米映画「慾望の谷」 The violent
men and their women.

(シネマ・スコープ)

主演 Oバーバラ・スタンウィック

グレン・フォード

エドワード・G・ロビンソン

Oダイアナ・フォスター

メイ・ウイン

此の映画は、決して傑作とは云えない。

冗慢な構成と、印象づける事の少いマツクス・シュタイナアの音楽、チグハグな人物の取り扱い等は、一九五三年から一年以上に涉って米國コリアーズ誌に連載されたこの原作の魅力を半ば以上失ってしまう結果となっている。強いて云うならばロビンソンとスタンウィックという二人の演技力に

只々頼ってしまった様な作品といえる。野口久光辺りの批評は、シネマ・スコープが漸く芸術性を持つに至ったエポック・メイキングな作であるかに云って居るが、これは映画としては、ローズ・マリイや百万長者と結婚する方法に劣るとも決して勝る事のない代物である。むしろ、帰らざる河の方が、シネマ・スコープの技術的な特長を充分に使って、モンロオの一種独特の頹廢的な空気を弥漫させていた事だけでも優位に立つと思われる。

併し、私が、こゝにこの余り映画としての出来栄えのよくない作品を持ち出したのは、勿論、別の観点からなのである。私はかつて、偽れる花園というベティ・デイヴィスの作を取り上げた事がある。その中で私は、「病人」を見殺しにするという様な点

で、精神的なサディズムは横溢しているがこうした状態は決して、性愛的な感情に適切でないという事を書いた筈であるが、この映画の一部には、逆に最も理想的な状況配置が見出される。

簡単に梗概を示すと、今は大牧場主となつた開拓者のロビンソン——彼は或る争いの時に怪我して、隻脚である。——と其の良人に既に愛想をつかして、良人の弟と通じている妻スタンウィック、其の娘のフォスターこれら牧場側に対して、小牧場主でロビンソンの横暴な併合政策に反抗する軍人上りのグレンフォード、とその許婚メイ・ウインといった人物が、始め、大牧場派と小牧場派で争いを始める。併し、一寸した時間的なズレから、双方焼打ちとなり、お互いに家を焼き払われる。大牧場が焼かれた時、スタンウィックはロビンソンを火中に見捨て、單身難を逃れて、良人は死んだと思ひ、シエリフをそのかして、グレンフォード一派を始め、大牧場拡張の妨害をしている農夫達に暴虐な弾圧をする。そして、弟と二人で牧物の再建をして自ら牧場主に収まろうとするが、豈計らんやロビ



ンソンは、半死半生の処を娘フォスターに看病されて、フォード側につき、遂に弟はフォードに、スタンウィックは、弟の恋人に殺されて、フォスターとフォードが結ばれる（許婚は前半で、フォードが東部へ行く）と云わないので怒って去っている）

この様に、——実際に当れば、これ以上

に——不必要な人物やエピソードが多すぎて、凡そ興味を減するが、大体の筋は、こんなものである。注意すべき処は、牧場の火事に際しての、スタンウィックが、不具の良人を火中に残して逃げる部分の凄まじい迫真力である。前述、「偽れる花園」の場合が、内科的な病気であるに反して、こ

場合は外科的な不具であること。危険が、前者は発作という本人にしか感じない状態で平静な中に起きるに反して、後者は、火事という一般的な災難の中に起こり、その火事は又、夫婦の独占欲からの反動として起ったものであること。妻が奪うものが、前者は当然薬品であり、それを取りに行つてやらないという平静な消極的な行為であるに反して、後者は、松葉杖を故意に火中に投ずるといふ、昂奮した積極的な行為であるという点等で、両者は根本的に相反している。沼正三氏が、かつて「キエフ太公妃」の話で云われた様に、犬の様に、人間よりも一段劣った地位での対立への欲望は一般的なマゾヒストの希望と考えられる。其の一つの典型的な——併し実現困難な——例を私はこゝに見出すのである。

それともう一つ、大牧場に屈して、安い値段で、自分の牧場を売りに来たフォードに傲慢な態度で、嘲笑的に対する娘フォールスターの部分、——前半——も見様によつては充分にマゾヒスト好みである。序で乍らもう一つ、これはマゾ好みではないかも知れないが、スタンウィックの指図もある

という点から云えば大牧場側の子分共が、農夫を虐める部分が中頃にある。文章で書いても余り感じが出ないので、詳説しないが同性マゾの人々には充分に昂奮を感じさせよう。

最後に、スタンウィックという女優について一言すれば、彼女は本年四十七才、R・ティラーの妻としてかつて「牧童と貴婦人」にも出ていたと思うが、私好みに乗馬好きで、其の上この頃は悪女、奸女ばかりやっている。中でも、「吹き荒ぶ風」で的一部分は、たしか前に紹介したと思うが、この人程、貴族的な冷たさを以って、弱者に対する人を私は知らない。かのエドヴィ・ジュ・フイエールですら、これ程の傲慢さを持ってはいない。旧作の内でも、私達の見たい作品の多い人である。

猶、云い添えておくが、画面は余り明瞭でないし、テクニカラーも余りほめた色ではない。都内在住の方にはすでに有楽座でのロード・ショウは終わっていると思うが、こうしたシネマ・スコープの二番館は、新宿劇場、上野宝塚、本所映画、及日活系洋画館であるから、以後シネマ・スコープにつ

いて見られる時は何卒参考にして頂きたいと思う。

◇シュニッツレル作「牧笛」

—Die Hirtenflöte—1911

天文学者エラスムスが妻を「勝手気儘に何をやってもよい旅」に出す。妻は、牧童叛乱者、伯爵、侯爵、と遍歴の後に良人エラスムスの許へ戻って来るが、こゝも亦安住するに足らず、独り、暗い荒野の彼方へ姿を消す。エラスムスは後を追うが、遂に見出す事は出来なかった。彼は、其の後、発見した星に妻の名ディオニシアと名付けるが、後世其の星は二度と発見されない。妻ディオニシアと同じく、永遠に暗黒の虚空に其の美しい姿を秘めてしまったのである。ろうかという、ヴィリエ・ド・リールアダン風の幻想的な物語りである。

云うまでもなくシュニッツレル(Arthur Schnitzler. 1862-1931)はグキーン派を形成する頽唐派の劇作、小説家、其の代表作「輪舞」——Rondo——は先般映画化されて私達の印象にも生々しい。

この小品も亦、「輪舞」と同じく、一人

の女が中心となって遍歴する——輪舞のは男女・女男と廻るのだがこの作品では、女が次々と廻ってゆき、元へ戻ってくる訳である。——訳なのであるが、従順な、併し心の中には好奇心と、淫蕩を持つ若いディオニシアが、如何に環境に従順に変化するかを描きつくしている。特にマゾヒスト好みの部分は、伯爵と共に隣国との戦いに騎士として従軍するくだりである。彼女は傷つくが、伯爵は奇襲に命を落す。ディオニシアは死体を乗馬に縛りつけて、凱旋の隊列の側を駆け抜けて、伯爵の棲居へ戻る。幻想的なシュニッツレルの文章は、簡単な叙述の中に、雄々しく、ジャンヌ・ダルクにも似た、女性の姿をうつし出す。この部分について、侯爵の妾となったディオニシアは本妻を追って、妻の座につき、権勢並びなきに至り、多くの反対者を投獄し、断罪するのであるが、反感を持つ男を、馬上から鞭打つ場面もある。シュニッツレルは短篇を書かせては、当代随一と称された人である。その靈筆とも云わべき筆致はこのディオニシアを宛ら生けるが如くに想わせる。この女性は崇高、全能である。そ

して遂に、人の知る能わざる彼方へと消えてゆく。緩徐調に始まり、レントよりも遅く、終るこの小品は、詩的なマゾヒスト向きの傑作と云うべきであらう。

(一) 英国映画「彩られし幻想」

ロンドン・フィルム

—The Man Who Loved Red Hair—

色彩映画テクニカラア方式

主演 モイラ・シアラア

原題を見てすぐ判る様に、邦訳題名は些か見当外れである。そうして、既成の觀念から云うと、この映画は沢山見当外れな点を持ってゐるに思ふ。モイラ・シアラアは勿論、「赤い靴」や「ホフマン物語」の名バレエ・ダンサーである。それが、何と一人で四役をやつて、バレエは僅かに五分足らず、其の上ディキシー・スタイルのジャズでチャールストンを踊るのであるから大体の見当はつくと思ふ。こんな風に、映画作法上からは普通であるが売り込んだスタアのネームヴァリアウの特殊性をひっくり返している点からも、何か普通でないものを、私は予感的に感じて居た。私はむしろ場面的なFOX・HUNTを期待して居たのだが、之は見事に裏切られた。というのは、この映画が、余りにもはっきりとした髪フェティシズムを具現して居たからである。毛髪が、マゾヒズムと共にサディズムとも多くの關係を持つて居る事は周知の通りであるが、(例えば、伊藤晴雨老の面に現れるあの画面を掩いつくして居る毛髪のパラードを考へて頂きたい。あれは正しく、毛髪フェティツシユと東洋的サディズムの混合した形である。)私は、後述する様に、マゾヒズムと多くの關連を、サディズムとのそれよりも感じてゐる。この事は、理論の飛躍を伴うかも知れないが、マゾヒズムの古典、ザッハール・マゾッホ教授の併有した毛皮(特に氏は毛の長いテンを愛用してゐる。)フェティツシユと同一の系列に属するものと考えらる。

この映画は、「赤い髪」のデエマによる四つの変奏曲と、短かくセンチメンタルなエピローグ」という風に考へてもよいものである。主人公は、有爵の地位を以つて、只管に赤い髪をした少年時代の恋人「シルヴィア」を思ひつゞける。妻カロライ

ンは、其れを知つて居乍らも、自分が、「赤い髪」を持つてゐない(台詞では「My Face」というが、これは髪を中心としての経過から考へて「My Hair」の意と解してよいと思ふ)為に知らぬ振をし乍ら老年に至つて、打明けるのであるが、このエピローグはむしろ蛇足であつて、英国映画の氣位の高さと、控え目さを示す以外の何物でもない。私達が、併有するフェティツシユの故に、街頭や、劇場や、又郊外で、不意の庶無を娛しむ様に、主人公は、赤い髪に憑かれる。フェティツシユに加えて、英國女性の、傲慢なまでのノーブルさは、マゾヒズムに偏向を有つ人々に、昂奮を与へるであらう。猶、映画としては、B級の下の出来である。

(二) 楽劇ペレアスとメリザンド

—Pelléas et Mélisande.—C. Debussy.

作詞 マーテルランク

作曲 クロオド・ドビュフィ

「音楽は、漸くワグナーの王国から独立した」これは、著名な評論家、カルヴォコレシが、この楽劇に与えた讃辭である。金管樂

器の物凄い叫喚と、寺教的な感興を以って迫る悠然としたリズム、拡大され尽したかと思われるオーケストラ、といったワグネルリズムは、女性的な香りを伴ったドビュッシーに一步を譲ったのである。殊にこの作品が、小規模なオーケストラの控え目な表現と、一切のクライマックスを取り去った伴奏の書き方によって、特長づけられている事は、香りに重大な意味がある。この香りは、閨房の香りである。

ドビュッシーに於て、昼の明るさは、すべて桃色の倦怠の中に閉じこめられてしまふ。そうして、眠たげな音楽は、私達をして速かに、夢幻の世界に誘い込ませてしまふ。そこに語られる物語は、古典的な異様物語りである。彼の代表作といわれる、小管絃楽の為の音楽「牧神の午後への前奏曲」

——Prelude d'après Midi du Faun——

は半牛神と女性との交接を語っているのであるし、「このペレアとメリザンド」はメリザンドを巡っての兄弟の争い、というよりは、姦淫である。兄の妻としての尊敬を感じつゝ、女性としての愛情をも感じ、遂に兄ゴロオの為に殺されるペレアの愛情の表

現は、有名な「髪の場合」に於て、最高の頂点に達する。古城の塔の上から髪を梳く、メリザンドは、長い／＼髪を下へたらず。地上のペレアはその髪を讀えつゝ長い二重唱の後に髪に接吻する。奇クによく出る言葉「女王」は私が嫌いな言葉の一つであるが多く安価に用いられ、言葉の持つニュアンスと実体のニュアンスが余りに違ふ為にある。

この言葉の持つ、崇教の念を籠めたひびきは、こゝに実現している。この場面は現在幾種類もの全曲LPレコードによって聞く事が出来るが、特に、フェティシズムの情緒溢れた逸品が、昭和五年録音の古いものであるが、この場面だけ、「髪の場合」としてフランス・ポリドールの吹込で、日本ポリドール会社から昭和五年以来販売されている。

(三) 米シネマ・スコープ「私は二人の夫を持っている」

主演 ベティ・グレイブル

漸く大年増の色気を漂わし始めたグレイブルの近作である。音楽物としては、ずい分

に野心的な意図を示しているが、出来は良くない。アメリカ物の独特の嫌味が全篇を貫いているのであるが、その性急な特性と奇抜な着想が、この欄に取上げるべき一部分を提供して呉れている。前半たしか三巻目位から相当長い時間のモダンバレエの部分であるが、妙ないきさつから、二人の夫を持つ事になったグレイブルが「男はいつもいゝ思いをしているのだから、私はこういゝいゝチャンスに思う存分二人の男を悩ましてやろう」と考えて女天下の夢に眼る場面である。彼女は多数の男達（土人の扮装で半裸）を七つの檻にギッシリとつめ込む、美しい檻の中で男達はひしめき合うのだが檻には一つずつ月曜から日曜までの曜日と特長（例えば、馴れ難いとか、大喰いとかいった）を書いた札がかけられている。彼女は其の檻の前を誇らしげに歩くのである。突飛ではあるが、大願望、奴隷願望の人々の血を凍らすに足る場面である。この場面の為に二百円の入場料を払っても左程に損した気分はしないと思う。「欲望の谷」と共に充分に娯めると思うので御紹介しておく。

懸賞入選作品

佳作第二席

あわれ誠一郎

日文卅古六

林 茂子・画

(一)

式場から自動車^{くるま}で新婚旅行に出発するーと
いった、妙子と誠一郎の結婚はそんなものでは
なかった。

母親がなくて男親に育てられた妙子と、父
親がなくて母子暮しだった誠一郎との結婚は
妙子のその父と、誠一郎の母と、長屋の世話
やき小母^{おは}さん夫婦と、このおばさん夫婦が仲
人として、妙子の兄たち四人も丹波の山奥か
らは一人も出て来ず、誠一郎の方にも親戚代
表などはなく、それで、新夫新婦と仲人夫婦に
新夫の母と新婦の父と、たった六人が膳に坐

って、誠一郎^{おやこ}母子の家、階下二間二階二間の
八軒長屋のその二階で式の真似事をしてすま
せた。勿論新婚旅行など考えても居ず落着い
たら二人で大阪へ映画でも見に行こう位で野
合に近い同衾をその二階でしたのであった。

小男の誠一郎は、蚤^{みようこ}の夫婦はいやだという
条件を仲人のおばさんに申出ていたので、新
婦妙子と門口に並んで隣の息子のカメラで撮
ってもらう時、似合いの夫婦でしょうがとお
ばさんが誠一郎の母に囁やいたのであった。

電車の中などで見る若い女たちが皆、小男
で非力の誠一郎の眼には、背丈も自分より高
く腕も太くたくましく見えるのであった。そ

れで誠一郎はそんな女たちの誰彼に、何んだ
女のくせにと、自分の及ばぬことを思わずに
反感を持つのであった。

自分の妻として一生一しよに暮してゆく女
性は、その女性の夫である自分の自由になる
様な人でなければいやだ。自分は子供ではな
い、これでも一人前の男だから女の一人位は
自由にしたい。こうした意識の強い誠一郎。

その誠一郎が結婚前に描いていた夢は、自
分の妹の様な女を妻にして、色々教えてもや
り、夫婦だけの遊戯の場合も、いじめたりせ
ずに負けてもやっていると、その時、その場面を
思い浮べては楽しんでいたのであった。

「妙子を一つたのみますぞな。可愛がってや
って下さいよ。」と式の夜、酒になった時、
盃をくれ乍ら妙子の父が誠一郎に親としての
心配を見せてたのんだ。その言葉が誠一郎の
心に残った。

妙子も床入りをして枕を並べた時、
「あたし、こゝにこんな悲があるの、ゆるし
てね。」と、二の腕の黒い痣を誠一郎に見
せて詫びた程、こんな身体をあなたにあげて
すみませんという位、純真なウブな娘であっ
た。

それがどうだ。此頃の二人の夫婦生活は。
長い間寡婦暮らしを続けて来た誠一郎の母に
新夫婦としての甘いところを見せつけてはな
らぬ。世間の嫁姑の仲の様でなく、お母アさ
んお母アさんと母とは特別に仲よくせねばな
らぬ。――

これが新婦妙子の心構えだったので、新夫
誠一郎は母と妙子と自分と三人の生活に於て
妙子は母の嫁に来たのかとひがむ位にほっと
かれることが多かった。それで、持って行き
どころのない淋しさから誠一郎は外で飲んで
帰ってくるが多くなった。

「また飲んで帰って……。」と妙子はいやな
顔をするが多かった。

「家へ帰ってもおもしろくないからだ。明日
は店が休みだから映画にでも行こうと云って
もお前は、出られないと云う。何んだ。お母
アさん、お母アさんがって、僕は、どうしてく
れるんだ。」

「でも、明日はお母アさんが、障子を張替え
るんだといって障子紙を買って来られている
んですもの。お母アさんに一人で障子を洗わ
せておいて、私たちが二人で遊
びになんか行けないでしょう。」

「ふん、そうか。前の休みに
はお母アさんが急ぐ仕立物をた
のまれたとかでお手伝いだと云
って一日母と差向いで針仕事。

その前の休みには、田舎からお
前の父が神戸へ出て来たからと
お前の様子を見に来たので一日
出られなかったし、僕の休日は
会社員の様に毎週一回あるのと
違って一日十五日と月に二回よ
りないのじゃないか。お前が来
てから二人が一しよに出たこと
が何回ある？」

「でも、それは仕方がないわ。
お母アさんにしてみれば、今日

迄、お父うさんが無くてあなた一人を相手に
暮して来られたのを、あなたを私にとられて
お淋しいのです。私のことをよい嫁が授かっ
て、娘が一人出来たようなものですとおっし
やっているわ。二人してお母アさんを淋しが
らせずに孝行してあげましょうよ。」

「孝行もいゝが、限度があるよ。うちはちっ
とも世間の若夫婦の様でないではないか……



「おい、酒を買って来てくれ。酒が足らぬ。」
 「そんなに酔っていて、もう、およしなさいな。ちやんとお膳がこしらえてあるんですから御飯にしましょう。」

「買って来いと云ったら買って来い。」

「でも……お膳が……。」

「僕は、飲むと云い出したら絶対に飲む。お膳、お膳って、こんな膳が何んだ。」

誠一郎は足を上げて、白いふきんのかゝっている食膳を蹴った。ガラガラガラと茶碗が崩れ醤油瓶がひっくり返った。

それは新婚一年目の秋の初めであった。

妙子は泣いた。その夜二人は床をのべてから、無理に買わせたその三合を飲んで、すでに定量を過ぎた誠一郎は益々狂暴になった。

うつ伏して泣く妙子を蹴って猛った誠一郎は顔を上げた妙子の頬を三つ四つも殴った。

俺は今無茶をやっているなと思いつゝも酒の力は恐ろしい。あたまで火焔が渦巻いていて誠一郎はもう自分で自分を制御出来なくなっていた。

なおも続けて殴りかゝった誠一郎に、キツと妙子は身構えた。その時はもう妙子の顔に涙はなかった。

殴りかゝって来る誠一郎の腕をぐっと押え

た妙子の力は強かった。

妙子は五人兄妹の末っ子であり、上四人が皆男の子だったので、その兄たちの腕白時代に兄たちにいじめられて男の子の様な女の子に育ち、娘になってからも柴刈りや田車の後押などさせられて、都会育ちの青白い青年の上、小男で非力な誠一郎などよりもずっと力は強い。

いくら力は強くても女であり妻である以上、その夫にいくら叩かれても極力防ぐばかりで手向いはしなかったのだが、今夜はあんまりである。

妙子の押えた腕を振りもぎって

「何んだ。女のくせに。かゝってくるのか。」

と酒の勢いで、なおも猛然と突っかゝってくる誠一郎の胸を、妙子は、

「乱暴はおよしなさい。」と

どんと突き返すと、誠一郎はやっぱ酔っている。仰向けにひっくり返った。

「何っ、こいつ。」と起き上ろうとするのへ、



「乱暴はやめてっ。」と妙子は身体ごとのしかゝって押えつけた。

刎ね返えそうとする誠一郎、静めようとする妙子。上と下とで一寸争ったが、馬乗になっちゃった妙子は、もがく誠一郎の両手首をぎゅっと布団の上へ押えつけてしまつて、誠一郎がいくら足をびんびん空を蹴ってもがいても、妙子はどっしりと跨ったまゝで、び

くともせぬ。

「ね。あなた。もうかんにんして。わたしが悪かったから。ね。ね。あばれないで。」

組敷いた妙子の方が組敷かれた誠一郎に抱きつく様にして詫びるのだった。

この騒ぎを階下の誠一郎の母は隣へおしゃべりに行って全く知らぬ。

そんな事があってから、妹の様な妻をいちめたりせずに負けてやったりしてと、考えていた誠一郎の夢は全く破れてしまった。

二人の夫婦生活は、誠一郎の方からいくら求めても、男性の本能がどんなものかを知らず、従ってそんなことはたゞいやらしいこととして理解も何もない妙子がいやがれば、誠一郎は自分の妻を如何とも出来ず、それを不満に彼が暴れたりすると、結局は妙子に押えつけられてしまうのであった。

(二)

港に荷がはいる。仲仕がそれを荷揚げするその海岸の倉庫(上屋)に事務所のある運送店に木村誠一郎はつとめていて、その上屋の事務所で揚荷積荷の重量計立会をしたり、店の人夫の労賃計算をしたりするのが仕事なのである。

その店の人夫の中には、上屋の清掃を受持っている女清掃婦が五、六人いて、揚荷袋の綻びを縫い合せてメリケン粉や豆の荷が綻びから洩れ出るのを防いだりもしていた。その女たちのその日その日の仕事を終えて帰る時に渡す日当計算も誠一郎がしてやっているのであった。

日照り続けて忙しかった日の太陽が港の青山に沈み、沖からひたひたと波止場に寄せる浪面が暮色になって来ている時刻になるとその女たちが誠一郎のいる事務所の窓口へその日の日当を受取にくる。

今日も女たちに日当を渡してやって、もう自分も事務所を片づけて帰ろうと誠一郎が一歩くしていると

「やア、まだ居たね。丁度い。木村さん。今日はちよつとあんたに話があるんだ。」

とほん今、日当を渡してやった女清掃夫の中の一若いお志津と呼ばれているのがはいて来た。

「あゝ、お志津さんかい。もう帰ろうと思っ

ているんだ。何か用でもあるんかい。」

「あんたに一寸聞きたいことがあるんだ。」

「何んだい。誰も来やしないよ。こゝでいいじゃないか。」

「いや、ちよつとでよいから、私について来て。」

「困るなア。あゝ、お志津さん、あんた飲んでるね。」

「うん一寸一ぱいやって来た。ぐずぐず云わんで一寸出ておいで、そんなに時間はとらせないから。」

「しようがないなア。酔っぱらって。」と

誠一郎はしぶしぶ椅子から立上る。

「よし、来てくれるね。ついておいでよ。」

とお志津は先に立つ。

もう全く夕闇が港から這上って、棟を並べた上屋と上屋の間は薄暗い。

お志津は誠一郎をその三番上屋と四番上屋との間の仲仕たちが寄って一と休みする休み場へ連れ出して行った。そこにはいつも仲仕たちが片づけて帰る腰掛用の渡し板がまだ渡したまゝになっていた。

「まアこゝへ一寸掛けな。」とお志津は四五人は掛けられるその渡し板に腰掛けて酒臭い息を吐く。

「何んだい?。こんなところへ引ッ張り出

して。用というのは。早く云っておくれよ。」

「木村さんよ。お前、このお志津さんを舐めてるんじゃないかね。このお志津さんはこれでもこの港町では啖呵のお志津ってちっとはうるさい姐さんなんだよ。」

「お志津さん、そりや何んと云うことだい。」

お前は僕に何か怒っているね。」

「そうよ。お志津さんはお前のやり方がちよいとおもしろくないんだ。お兼にしるお咲にしるお才にしる、皆あんな婆アさん等にこの偽き盛りのお志津さんより何故あんなに多くの日当を払ってやっているんだ。その人の日当というものはその人の偽き振りによって払ってやるのが本当じゃないのか。」

「何んだお志津さん、そんなことか。それなら先月も君に云った様に、成程君は若くってよくやっけてはくれるが、こゝへ来てからまだ日が浅い。新しくあとから来た者に古くからやっていくれる人たちより多くの金を渡すことは出来ないじゃないか。そんなことをすれば古くからやっている人たちが承知をしないよ。」

「だから辛抱をしろしろといつもお前は云うが、何時迄辛抱したらいいんだ。こちらから云った時だけいつもそんなことばかり云って

その場逃ればかりしていいいで、さア、今日は何時になったらどうしてくれるとはっきり聞こうじゃないか。」

「僕も僕のお金を君たちに払っているんじゃないやなくて、主人の命令に従っているんだからそんなに僕の勝手には出来ないじゃないか。」

「じゃ、私に店へ行けと云うんだね。ではお前はでくの棒か。たかゞ女人夫一人の日当位が計らわれない様な代理ならやめてしまえ」「そんな無理を、まアまア君は今日は酔ってるから、明日にでも飲んでない時によく話をしようよ。僕もよく考えておくから。」

「こいつ、又、逃げようとするのか。このお志津さんはそろそろ何度かぬらりくらりと口先であしらわれはせんぞ。こいつ、さア、何とかはつきりしたことを云え。」

矢庭にお志津は誠一郎のネクタイを掴んだ「オイ、乱暴はよしてくれ。考えておくと云ってるじゃないか。」

こんな所で偽っている女は力が強い。

「何っ、逃がすものか。今日は。」と

お志津は誠一郎の胸倉を取ってぐいぐいと倉庫の壁際へ押して行った。

「よせよよせよ。」と誠一郎は振切って逃げようとする。ひよろひよろ青年など何んとも

思っていないお志津は

「わたしの云うことを聞かぬのか。」と

誠一郎を押つけて締め上げようとする。

「よせたら、女のくせに。」と 誠一郎の振払った手がぱしっとお志津の顔を打った。

と、お志津は、

「こいつ。青二才。殴ったな。」と 猛然と誠一郎に掴みかかった。

組打ちになると誠一郎は一と溜りもなかった。あたまを掴みに行った手首も捕えられ、押つぶされる様に其場へ仰向けに倒されてしまってお志津に馬乗りになられてしまった。

馬跨りに誠一郎を組敷いたお志津は刎ね返えそうともがく男の太股を押さえつけると、ヘンな気になった。それはそうだろう。荒偽きはしていてもお志津もまだ三十前の若さのある女なのだったし、それにお志津は先刻からの揉み合いで全く酔いが廻っていたから。必死に抵抗したが及ばず、誠一郎はこゝで女豹と化したお志津に遂に男として恥しいことをされてしまった。

「木村さんよ。男として女のわたしにこんなことをされたとは誰にも云えはしまいが、もしもしゃべったことが私の耳にはいったら、今度こそは締め殺してしまおうよ。いゝかい。」

それから、もうこうなつた上からは、これからは何んでも私の云うことにそむいたりしたらきかないよ。」とお志津はもうぐったりとのびてしまっている誠一郎の身体の上からのくと誠一郎を見下し乍らこう云つてはだかつた前を直すのであつた。

(三)

勿論、そんな勤務先での出来事の屈辱は誠一郎は妙子にひたかくしにしてはいたが。

さて、また妙子、誠一郎の夫婦生活は。結婚後もう五年も経つと、新妻だった恥しさももうなくなつてしまつてゐる妙子は、今では全く誠一郎を征服してしまつて、その呼掛けにしても、二人っきりになると、「あなた」といつていたのが、「お前」と呼ぶ様に変つてしまひ、誠一郎の方は、妙子を「お前」などとは何かに圧せられて云えなくなつて、お妙ちゃん／＼と従う様になつていた。



妙子の機嫌のよい時など、妙子の方から誠一郎の首へ手を廻したりして、誠一郎を抱き締めたりしてふざけ掛けて、

「お前はもう私のものよ。何んでもハイハイと聞かなければひどい目に会わされるということとはもうよくわかつてゐるでしょう。」

等と笑うのであつた。

夜は、布団の三分の二までを占領して大字に肝をかい寝る妙子の肥った偉大な五体に誠一郎は松の木に止った蟬の様にすがりついて眠るのである。

そうして誠一郎は時々自分の裸体をつくづく見眠つてゐる妙子の半裸を眺めては、男と女の身体の違いを造物主のいたずらかと不思議に思い、妙子という女の女体、これが自分に授かつた不思議なもののかと見詰めた。りすることもあつたのであつた。

「ね、お前、男のくせに女のわたしに、こんなにされても口惜しくないのなさけない男ね。一ぺん誰かにお前がわたしにこんななされてゐるところを見せてやりた様な気にもなるわ。」と妙子は相敷いた誠一郎の身体にどっしりと大きなそのお尻で跨つて、慇懃を乞う様な誠一郎の顔を見下し乍らその優越観を見せることもある。

「又お前、飲んで来たんだね。少し手綱をゆるめると直ぐに増長するんだね。よし、今夜はカチ／＼山の狸にしてやるから。」と

それは、或る土曜日の夜、飲んで帰つた誠一郎を妙子が締め上げた言葉なのであつた。

カチ／＼山の狸というのは、よく子供の絵本などに捕えられた狸が爺いさんを欺して縄を解いてもらう迄に四つ足を縛られて吊されているのがあったその様に、両手両足を一しよに縛り上げて転がすことであり、そんなこと位、妙子は誠一郎がいくらもがいて手足をばたつかせてあばれても苦もなくやってのけるのであった。

「カチ／＼山の狸はこの上まだ吊し上げるんだが、可哀想だから吊し上げだけはかんにんしといてやる。」と四つ足縛りに縛って誠一郎を布団の外へ転がしておいて、妙子はぐう／＼と寝てしまう。朝になってもほどこいてくれずに、妙子は起きると着替え乍ら、「どうだ。口惜しいか。」と転がされてもうぐったりしている誠一郎の顔を片足でぎゅっと踏みつけたまゝ見下し、暫くそうして踏みつけていてから、トン／＼と階下へ下りてゆくのである。

誠一郎は何とかして束縛からのがれようとして、妙子の腰紐で縛られているその紐へ歯を持って行こうとするのだがとゞかぬ。これまでは二、三回、その結び目に歯がとゞいて、噛んで結び目をゆるめ、縛られている手足をもがいて縛しめを解いたこともあったが

今日はそれが出来ない。

階下では、

「お母アさん、これも一しよに洗ったときますの。」と妙子の女の^{おんな}声がして洗濯の水音がしている。

昼前になって、段梯子を上ってくる足音がして、妙子が二階に姿を見せると、まだ朝のまゝに転がっている誠一郎のあわれな姿の頭の方へ来て、立って見下し乍ら、

「どう。こたえた？、全く降参した？」と笑う。

「もうこらえてくれよ。」と誠一郎は哀願する。

「いゝえ、まだ／＼、しかし、手足だけは自由にしてやろうかな。」と縛しめを解いてはくれるのだが、

「あッ、そう／＼、わたしにこんなものを読ませようとして。」と机の足元に投げたあつる本と雑誌を拾い取るとパラパラと片膝立ての坐り姿で妙子は頁を繰ってみる。

誠一郎はやっと手足が自由になって、それでも暫くはぐったりとしていたが、妙子が自分をすてゝおいて本や雑誌に見入っているの、で、そろ／＼と身体を起しかけると、

「おや、お前、わたしにお詫びもせず逃げ出す気かい。そうはさせないよ。」と、見て居たものを投げ出すと立って来て誠一郎の手首と首筋を掴むと猫の子を引づる様に机のところへずる／＼と引づって行って直ぐに又組敷いて馬乗りになると、投げ出した雑誌を再び拾い取って跨がったまゝに読みはじめる。

この本や雑誌は、誠一郎が妙子に寝物語りに、こんなことの書いてある本もあるんだぜと話して、女にやられるのは僕だけではないのだぜと聞かせると、いつも妙子が、

「フン、自分に都合のよい勝手な作り話ばかりして。」と信じないので、そんならこれを見てみると見せたのだが、

「フン、そんなもの見たくないッ。」と、その時は投げつけてそのまゝ二日程、机の足元に投げられたまゝになっていたものなのであった。

「どう、情けない？ では、私の前に両手をついて頭を畳にすりつけて詫びる？ 大分いためたから詫びるなら今日は許してあげろ。」とそれは存分に誠一郎をおもちゃにしてからの妙子の許し言葉なのである。

「どう、あやまる？」

「うん、もうかんにんして、あやまる、あやまるウ。」



「よし。」

誠一郎は妙子とそういったマゾ的な遊戯をして遊ぶ時、妙子に、

「一ペン位負けておくれよ、たのむから。」

と云うのであるが妙子は笑って、

「男のくせに、なさけないことを云いなさんな。負けてもらって勝って、何がおもしろいの。それよりも私に実力で勝てる様になりなさい。」と云ってどうしても負けてはくれな

かった。

あゝ、一ペンでも女の子に勝って自由にしてみたい。いっそ、十二三の子供を相手にしてみようか、いや、やっぱり一人前の強い女に勝ってみたい。

これが誠一郎の念願なのではあるが。

(四)

以下の二つ三つはその誠一郎のコレクションの一部である。

そんな姿が好ましいというよりも、こんな自分と同じ様な男たちもこれこの通りにあるんだぞ、という自慰の方がこのコレクションをはじめた誠一郎の動機なのではある。

新聞の切り抜き(A)

出刃包丁を奪つて

あべこべに夫を斬殺す

斬りつけられた女房

十五日午前十一時頃福岡県嘉穂郡幸袋町汐頭炭坑夫中島勇一(三十四)は内縁の妻三輪かま(三十四)と痴話喧嘩の末出刃包丁でかまに斬りつけたが返つてかまに刃物を奪はれ勇一は頸動脈を切断され其場に即死した、かまは兇行の後夫勇一が何者かに殺されたと訴へ出て其場で逮捕さる(福岡新聞)

新聞の切り抜き(B)

暴行に及んで

女に絞殺さる

元氣な女自首

廿八日午後十時ごろ新潟県刈羽郡鶴川村島崎きよし(三八)方へ同郡石黒村牛馬商矢川政次郎(四二)が忍び入り暴行を加へようとしたので、きよしは細紐で政次郎を絞殺し直に官原駐在所に自首して出た、尚同家は村一番の資産家である(長岡電話)

(雑誌の切り抜き)

小田原の亭主殺し

大地震のあった四時間程前、国府津に大火

があった。留吉は主人の井上からの迎ひで、主家の得意先に火事見舞に行ってくれるやう云ひ付かった。しかし折角主家に代って、留吉が、わざわざ国府津まで火事見舞に出掛けたのに、主人の方からは、国府津までの往復のバス代さへ呉れなかった。

「この寒いのに、人を使ひ立てやがって、馬鹿にしていやがら、ほんとうに……」

一寸した、つまらぬ事が職人肌の留吉の氣に触った。川口のおでんやで、一杯ひっかけたむしゃくしゃ腹で家へ戻って来た留吉であった。戻って見れば、女房のキウも寢床に這入ったまゝ起きようとしたかった。

——この阿魔もが……

「やい、起きろイ！」

「ウム」

いゝ氣持で生返事のまゝ、キウはくるりと寝返りを打った。留吉のむかっ腹は尚煽られた。

「寒い処を駈ずり廻って来たんだ……エヘ、起きて御苦労様の一と言くれえ吐かしたらどうだッ！」

「……」

「起きろッてうに起きねえのか！」

「うるさいねえ、ほんとうに！」

「何にを！」

大人しい男だったが、酒の勢ひが手伝ったか、足を上げて、キウの枕を蹴った。余りの見暮に、ビックリ愕いて起き上る女の横ッ面を続け様に、二ツ三ツ殴り付けた。根が勝気なキウは黙っていなかった。

「何をするのさ、……乱暴な。」

いきなり男の胸もとへ、武者振り付いた。

キウは五尺二寸、十八貫余もある大女だった。どっちかと言へば、小男の留吉などよりも余程も力が強かった。それに酔ってはいるし、一寸揉み合ったが、他愛もなく、留吉は布団の上に押し伏せられて仕舞った。

「何にを！ この阿魔奴！」

捻じ伏せられた留吉は、キウの髪の毛を掴んで、弾ね返さうとしたが、のしかゝるやうに抑付けていたキウは、却って、馬乗りとなつた。ぐいと余計に、押し付けて、逆に留吉の腕を放り解かうとした。が、留吉もいつかな放さない。あべこべに、片手の拳で突き上げた。

「痛い！ 畜生。」

怒りにまかせたキウは、どうした機みか留吉の頸に手を掛けた。苦しまぎれに、手足をばた／＼振廻して暴れる留吉に、思はず全身

の重みをこめて抑付けた。

キウはもう、はね返されないやう抑へ付ける外、何が何んだか判らなかつた。

と、急にものがくのがやんで、がっくり力なくなつた留吉だった。

「おやッ！」

うつろな眼が留吉の頸と自分の手を見くらべた。

「あッ！ た、大変な……」

荒い吐息が、はだけた胸を波立せた。

「どうしよう、……？ ？」

キウは、たゞ戦くばかりであつた。

【註】 以上、新聞と雑誌の切り抜き引用は、仮名遣い其の他原文のまゝ

【告知板】 三月七日付のお手紙を下さつた

山村由美子様、御申越の件承知しました。場所には南海本線浜寺駅出札口とさめます。日時目印等お知らせ下さい。○名古屋の舞踊師渡辺由子さん、誌面がなかったので本月号に載せられませんでした。来月号に載るだろうと思います。○モデル嬢着用品の下着類は目下全然手持がありませんので、何れ入手出来るまで御照会はお待ち下さい。その時は誌上にその旨告知します。既に御照会下さつた方には、後刻お返事します。

緊縛モデルの素顔

(その三)

辻

村

隆

—村田那美子—

川端さんのマンネリズムがようやく鼻につきたした頃、本誌上のモデル募集に応じてきた五人の女性のうち、自称松竹の女優と称する毛色の変ったのが外ならぬ彼女であった。

余り喋べらないのだが、喋べり出したら案外よく喋べる。元女優と云うから、どんな役で出演したのだと聞くと、スタンド・インで一度出たきりだと云う話。

松竹の中篇時代物で、男優W（彼女は名前を告げなかったが、察するところ、若杉英二

あたりか？）と一緒に、股旅物で街道を歩いて行く後姿を撮ったのがあるきりで——。

恐らくはその時、主演女優T・F嬢事故の為、エキストラ中の、一寸背格好の似た彼女を、スタンド・インに引張り出したものらしい。時間にして僅か三十秒足らずのスクリーンの彼女も、これで結構半日はかかったと云うのだから、いかさま元女優には違いない。

緊縛写真でも御存知の通り、髪は断髪——と云っても、あの頃は未だ「ローマの休日」が上映されていなかったから、ベップバイン以前であるが、その断髪たるや、ザン剪りの

さんばら髪と申した方がふさわしい。謂わば「七人の侍」に於ける津島恵子の頭とでも云ったところか——。

——大スターだって殆んど縛られるだろ。例えば、君の好きな嵯峨美智子にしろ、月丘夢路にせよ、高千穂ひずるにしろ、映画に縛る場面はつきものなんだ。だから我々のこの緊縛写真も謂うなれば芸術の為だ。君の縛られたポーズが、いつかスターとなった時、きっと役立つと思うよ。——

第一回は単なるヌード程度で見送って、第二回目の時、こんな曲学振りを發揮して説く



後手に縛られて正面に坐らせられた村田那美子嬢

と、易々として承諾した。

川端さんで相当強度の縛りを敢行した直後だっただけに、デリケートな神経の麻痺しつつあった私は、早速それではと最初から中等科程度の緊縛の構成にとりかゝった。彼女一向に拒む事なく、私達の思いが儘になってく

れる。こりや掘出しものだ。多少動作は緩慢、鈍重で、頭の仿らきもそれに正比例してはいが、可成りポリウムもあり、殊に、その処女の初々しさは、好感の持てるモデルだった。体に比していささか顔の大きいのが難と云えば難とでも云えようか――。

かくしてこのニユーフェイスを、編集長は平凡な名の村田那美子と命名して、昭和二十八年七月号の口絵に「緊縛女体の一表情」として初掲載、昭和二十八年八月号には「被縛女体の研究」と題して、四頁の口絵全部を使って、豊かな緊縛ヌード五態にて始めてデビューさせた。

引続いて、同年十月号の口絵では「野外の責場撮影」

にて活躍、同年十一月号では、巻頭、天然色刷口絵の緊縛ヌード、並に「溪流に縛られて」で、その可憐な姿態を現わして好評だった。杉さん、坂口さんとの三人連縛。これについては杉美美さんで触れたので重複する様だから省略しよう。(昭和二十八年十二月号「三人の女の縛られしヨ」参照)彼女は一番無難に、終始黙々として従順に動いてくれた。特に、昭和二十八年十二月号の口絵、最後の頁の「全裸で藪の中へ仰向けに縛られたポーズ」撮影の時は、汗まみれの全身が砂だらけになるのも構わず、あゝでもないこうでもない、と、直射日光に曝されながら、ポーズをとってくれたのは、後手に縛られたまゝであっただけに、その協力ぶりには感謝した。

時間のルーズなのが、彼女の玉に瑕で、約束した時間に來た験しがない。そんな事から前記の連縛の時も、三人で撮るつもりじゃなかったが、万一をおもんばかって、来なくては困ると云う処から、ついあちこちへ連絡したのが、全部揃ってあんな結果になったのだ。

彼女はどちらかといえば、太い神経の持主のようだが、強いて取り上げれば、多少はマゾヒスチックな傾向もあるのだろうか――。

縛って相当手ひどくしても（磔け、吊り等）一向に拒むというようなことがないと云っても之は、川端さんのような縛りそのものに強い憧れを持つマゾ的なものではなく、彼女が夢見る将来の大女優の緊縛シーンを思い浮べての陶酔振りと言った方がよいだろう。

昭和廿八年五月中旬頃だった。

野外ヌードを思い立って箕田編集長と一行四人、遙々関西線で笠置まで行き、そこからバスで尚半里程奥の有市と云う部落辺りまで人外境を求めて廻のぼった事があった。

木津川の流れをとり入れて、溪谷の裸女と云った、彼女の廿八年十一月号の「溪流に縛られて」の数枚はこの時のものだ。

此処で私は、終生忘れる事の出来ない十年も寿命の縮った、恐ろしい想い出を持っていく。幸い休日を選けたので人影も殆んどなく

←溪流の上に腰を下した村田那美子嬢の緊縛ポーズ



溪谷では、私達は安心してカメラを駆使したが、笠置山をバックにした有市の部落の外れに、無人の水車小屋のあるのがフット目にとまったものだ。

ゴトン／＼と水車は飛沫をあげて、鈍く笠置山から流れ落ちる溪流の流れに任せて廻っている。私の脳裡にその時浮んだのは、嘗っ

て責絵に見た、水車に磔に縛られた美女が、廻転につれてくる／＼と、黒髪をのたうたせて逆転に苦悶するシーンであった。

こいつはいける——。と私は早速、箕田氏に耳打ちした。「よからう」と、一も二もなく私の提案に賛成してくれた。

審かる彼女に、裸体の上からガウンを着せた儘、大奇岩の割目を縫って、やっそこへ辿りついた。小屋の中を覗くとてっきり誰もいない。占めた——。水車を使った後で、この小屋中の責めをやろうと胸算用しつつ、素早くあたりを見廻す。昼下りの午後二時頃、附近はシーンとして人の気配もない。茂みの木立ちがうまくカバーして対岸からも、関西線の線路側からも先ず／＼見られる心配はなさそうだ。

——こりや凄じき芸術だ。映画人が見たらきつと驚嘆する程のものが出来上るよ。水車に縛られた裸女なんて、凡そロマンチックじやな



笠置の山中で裸身を晒した村田那美子嬢

いか。ねえ村田さん……。――

と例によって煽り立てると、

――だって、縛られた儘ぐるぐると逆さにな
ったりして体が廻るんでしょ。それじゃ目が
舞ってしまふわよ――

――ダイジョウビ。ちやんとこうしてせきを
止めると、流れが水車を除けて、横の溝に流
れ込む様になっている。じゃあ止めておくか

らね――。

どうやら納得させて、私はジャブとズ
ボンを捲くり上げた姿で溝につかると、せき
をぐっと引いて流れを溝に外し、彼女をせか
した。

水車の車輪は鉄製であったが、水掻きと、
車軸からかけわたした鉄止めの後光は木製で
出来ていた。水苔でぬるめくのものにもお構いな

く、私は逸り立つ心を押えて、彼女を車軸に
押し上げて立たせると、両手を上げさせて水
かきに手をあてがわせ、礫の様に別々の後光
の木枠に、水かきの間げきに縄を廻して、鼻
と縛りつけた。この際バタフライは反って目
障りなので素早くこれも外し、その際彼女の
両足がツルリと車軸から滑って、体の重みが
両手にかゝり、だらりと伸びて痛そうにした
のを、少しの辛抱と、その儘両脚を片側づつ
後光に足をかけさせる様にして、おもむろに
足首に縄をかけようとした時だった。

「おい、下から人が来るぞ、どうやら、この
上はお籠り場らしい。白い着物を着ている」
他によい撮影場所をと探しに行っていた塚
本君が他人事のように、のんきな調子で注進
に及んだ。

正しく我々にとっては晴天のヘキレキ。突
如現われた妨害者に、あわてふためいて、村
田嬢の縄を解くと、ガウンを着せかけた。

一足違いに四、五人の中年の男女が私達の
傍を通り過ぎてゆく。残念ながら水車責めは
中止しなければならなかったが、箕田氏が更
に上流へ行こうというので、身仕度を整えた
一行は彼等の後を追った。雑木の茂った急坂
を五丁ばかり登ると、三丈ばかりの滝がごう

／＼と音を立て、その下には白衣の女が滝に打たれてお祈りをしている。

私達は灌木につかまりながら、滝の上へ出てみた。一米幅位の川が岩の間から激しい勢で流れている。こゝなれば絶対に人が来るようなことも万々あるまい。

対岸の岩の上にカメラが据えられた。滝の落口に縛られた裸女を配しようという私のアイデアを実行にうつすため、モデル嬢を綿ロープで後手にがっちり縛った。「この辺でどうだろう？」という塚本君の言葉に、私は彼女を岩の上に立たしたまゝカメラの位置に戻った。箕田氏は暗部をカヴァーするために露出計を片手に、しきりにレフを装作していた。「もう少し左へ寄ってごらん」私がそう要求したときだった。岩の水苔に足を滑らしたモデル嬢が、アッ、という間に川の中へ一本棒のようになってはまり込んでしまった。何しろ後手に縛られているので調子のとりようもなく、お臀の肉が岩にぶち当たるにぶい音が、ずしんと腹にしみるようだった。

一旦、川の中へ全身を没した村田嬢は、川の流れに押されて横向きに浮かび上りながら滝の落口に縛られた上半身を現したではないか、その時の私の驚き、顔が蒼白となり、鼓

動が早鐘のように打ったのを今でも、その時のように感じる事が出来る。が、次の刹那私はカメラを左へ押しつけるなり、滑り込みの姿勢で川の中へ飛び込んでいた。半分落ちかゝったモデル嬢の足を掴んだ私は驚きのため暫くは起き上れなかった位だ。

縛られた裸女が滝と一緒に落ちていったら先ず／＼命はないだろう。恰好の新聞種になるのは確かだが、想像するだけでも寿命の縮まる一瞬だった。箕田氏も塚本君も、私と前後して傍に駆け寄ってきた。三人でのぞいた目のくらむような遙か下に音を立てる滝壺、村田嬢を抱き上げ、ジャックナイフで縄を切って岸へ上げる。

「あゝ、よかった」と胸を撫で下して、村田嬢に怪我はなかったかと尋ねたが、お尻を打って痛かっただけで異常はない由に、一同、やれ／＼。然し、これ以上継続の意欲は湧いて来ない。第一、私は全身濡れ鼠だし、三脚についたまゝ倒れたカメラのピントグラスはこなごなに割れてしまつて用をなさない。編集長のスベヤーとして持参したライカがあるにはあるが、とてもこれ以上ポーズをつける元気もない。

濡れた髪をタオルで拭いた村田嬢が、案外

平気な顔で、かえって私達を慰め顔でさっきのポーズをしてくれたが、まだ胸の鼓動のおさまらなかつた私達は、服を乾してはう／＼の体で引き揚げた。どうやら、三人揃つて滝の上で小便をした罰が当たつたらしかった。

―坂口 利子―

坂口さんと始めて逢つた日には可笑しい想い出がある。

編集長から例の如く電話連絡があつて、私はその日（昭和廿八年の五月頃だったか生憎と朝から小雨の降つていたのを覚えてゐる）約束場所の南海線ナンバの改札口で待った。午前十時と云う約束であつたが、改札に着いたのは九時半前だった。

例によつてこゝは待合せが多い。所在なく私は辺りを見廻して、待人の女性の品定めや彼女の対象を考えたりしていたが、私の傍らで、これも先刻から人待顔の、イラ／＼した様子で待ちあぐねているらしい真赤なセーラーの女性が、時々フト私と顔が合つては、気味／＼とツイト視線をそらせて、構内の大時計と、自分の南京虫とも見較べたりしていた。同じ場所で知らぬ者同志、やがて現われる相手を待つのは誠に照れ臭いもので、待時

間が長ければ長い程、奇妙に待つ身同志の劣等感と屈辱感を覚えてくるものだ。

私はさりげなく彼女を傍らから観察していた。その気配に気付いたのか、顔を上げた彼女は、又しても私とパツタリ顔が合うと、露骨に視線をそらせて、思い切った様子でスタ／＼と構内を出て行きかけた。途中でヒョイと振り向いたが、私が凝って見つめているのを知ると、更に脚を早めて立去って行った。

約束時間キツチリ、箕田氏が塚本君を連れて現われた。

「おや、未だ彼女来ていませんねえ、どうしたんだろう……。一度そこいらを探してくるからね、此処で動かず待って、下さいよ——」

あたふた構内を見廻し乍ら、彼は雑踏に消えた。

五分——十分——

後手高手小手腰縄猿ぐつわといった本格的縛り（坂口利子嬢）



多少の不安と焦燥と、期待と裸図に心を躍らせている私。

「やあ、お待遠さま。紹介するよ、こちらが坂口さん——」

後ろから声をかけられ、ひよいと振り返ると箕田氏の蔭に隠れる様にして佇んでいたの

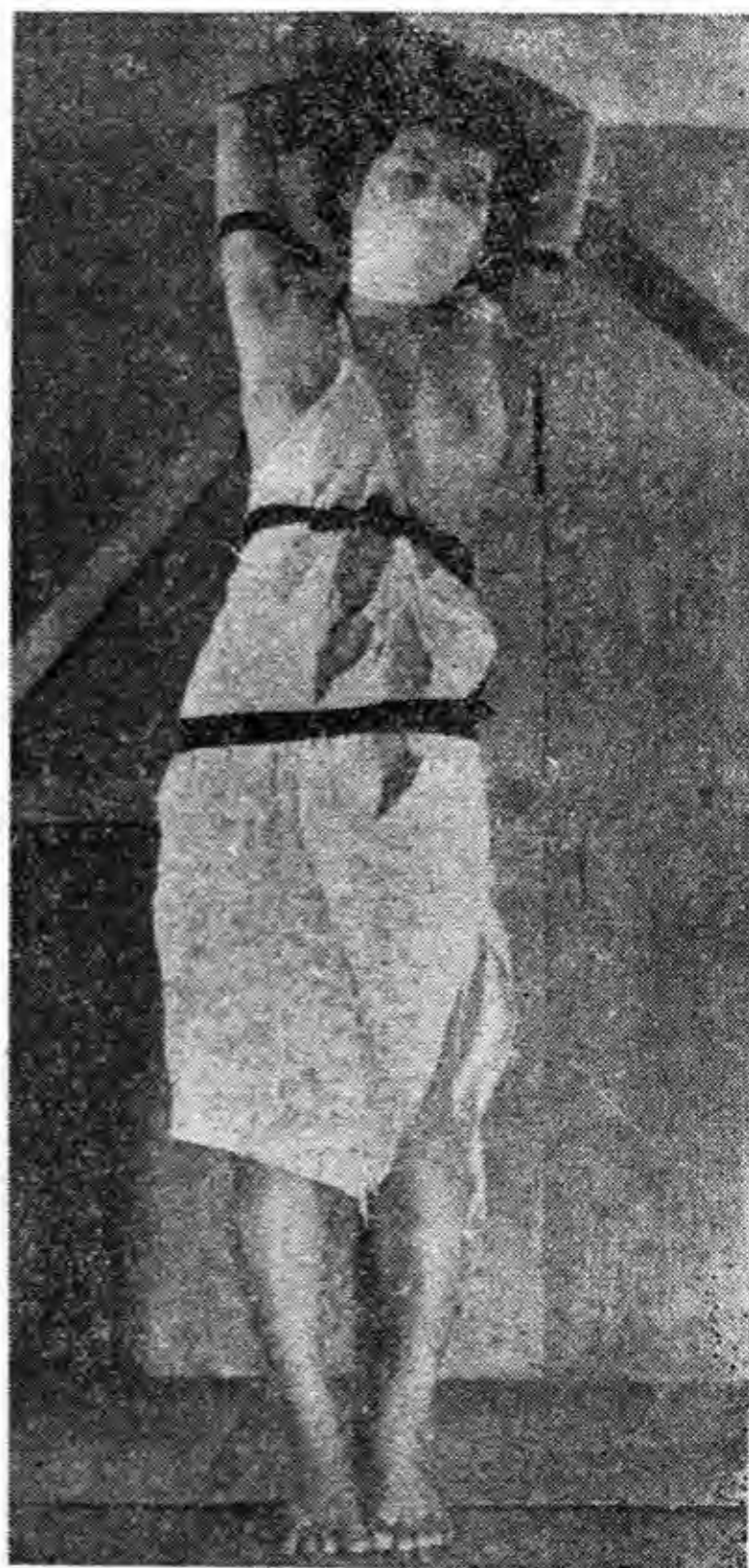
が、先刻御承知の真紅のセーターの彼女、即ち外ならぬ坂口利子さんだったのである。「やあ——」

お互に奇妙に照れた複雑な笑みを交して挨拶したが何か奇遇にも思えた。併し考えて見れば別段不思議でも何でもない。箕田氏が同時に私達二人に、同一の待場所と指定したに過ぎぬのだから、出逢うのが当然なのだろう。顔を見知らぬ事というものは、隣り同志で待ち乍ら、或いはどちらも多少はそうじやないかと考えつゝも、ヌードモデルと緊縛者と云う異常の出合いだけに迂かつに声もかけられなかったわけだ。

第一印象から私は妙に気圧された感じだった。そのせいか目的地の羽衣荘に向う途中も変に話が弾まず、チグハグな感情をもて余していた。

箕田氏の度々の懇請に応じて、衝立の蔭で

両手を挙げて縛り上げられても尚豊満さを失わぬ乳房の持主、坂口利子嬢



がある。坂口さんも或いは、こうしたモデルと云う職を離れて、ブライベイトに交際して見たら、思いもかけぬ激しい情熱を燃やす人かも知れない。それにあのブリ／＼した白い肌、盛り上った乳房、締った腰、その裸体図は凡そ肉感的で、肉体派の美人としては満点に違いない。

この彼女を始めて羽衣荘で緊縛した時、私は妖しい迄に種々の構図を幻想した。にもかゝらず、私の予想とは凡そ喰い違って彼女はこうしたものに対する感情は、無に等しかった。

最初からの約束で、いきなり緊縛過程へと導入した私に、成程、彼女は成すが儘に縛られ、動いてくれるが、

——一体何が面白くてこんな事をして、縛ったり転がしたりするのだろうか——

と云った風な無感情に多少嘲侮をこめた表情がカメラアイに写って来た。

それに羞恥にも強く、早く解放されたげに度々時間をきき、フィルム巻替毎にわざと大仰に疲れた様子を見せて、促がすと淡々承知する有様だった。

「彼女、余り大した事もなかったね。いゝ体なのに惜しいもんだ——」

だ。それにもう一つ、毛深い事。

いつの頃からか、私達は彼女を猿轡美人と云う呼名を奉って呼ぶ様になっていた。猿轡を嵌めた時、彼女は俄然精彩を放って、別人の如く冴えて美しく変貌したからである。

その後度々と撮る様になってからも、つとめて素顔の場合は真横から撮らぬ様にした。

(唇がとがって見えるからだ——)

毛深い女程情熱的であると云うし、私も亦過去の経験から、その一事には思い当ること

やっと裸形になった彼女が、おず／＼現われた時、私は事実彼女の均整のとれた肢態に暫し見惚れていた。豊満な乳房の盛り上り、くびれたウエスト、腰から臀部へかけてのなだらかなふくらみ、しまり具合、そして固肥とりのコリ／＼した肉体の感覚。全体的にはモデル中NO1であらう。にもかゝらず反面彼女の欠点も亦極端だった。

唇許の悪さ——。何と云っても之は致命的である。反歯の為、唇が心持ち尖っているの

別れた後、箕田氏は稍々落胆の気色でつぶやいた。通り一べんのモデルにない、何か新しいものを掴もうとする私達にとって、坂口さんの恬淡、不遜の態度は、喰い足りなく物足らなかつたのである。

その数日後、案外の達筆で、箕田氏宛に来た彼女の手紙を見せられた時、私は思わず眼を疑がわずにはおられなかつた。

あの無表情と無関心の彼女が、あの日の緊縛に著しく感激し、激しい喜悦を覚えたとうののだ。是非又お願いしたいと繰返し、女には珍らしく大胆な表現で書かれてあつたからである。

私達は改めて彼女を見直し、活路を見出した様な思いで、直ちに折返して連絡した。

二度目は折悪しく、例の杉、村田による三人の連縛となつて、彼女の感情の奈辺にあるかを確信し難かつたが――。

サド対マゾの二人のものを撮つた時、村田さんや杉さんは、サド役がいかにもきごちなく、そこに手加減とやり難さをはっきりと現わしていたが、彼女は例の無表情の大胆さで私の云うが儘に、村田さんを、又杉さんを容赦なく虐め足蹴にした。

ひよっとしたら、これはサドの役に向くか

も知れない――。未だ春日ルミ嬢の出現以前で、しきりにサド役の女性を物色していた折であつたから、箕田氏が東京から天泥盛英氏が大阪へ来られた機会に彼女にマゾの男性湖田平雄を配して、幾枚かの作品を得たことを聞いた。(昭和二十九年、五月号、六月号、八月号の口絵にある)彼女は乗馬靴に鞭をふる、次々と男性を虐め、「足砥め」「人間馬」「腎打ち」等で、颯爽としたサドぶりをさえ示しているようだった。

そうした連縛や、異性を対象にした時も、二三日後になると、きまつた様に綿々たる便りを寄越し、今度こそ是非一人きりで撮ってもらいたい事や、貴方達が心行く迄好きな様になさつても、それは反つて私の歡びを増すだけでしよう。と、書かれてあつたのは愈々以て、一体彼女が何を希んでいるのか判断がつかなくなつてくるのである。

末期の川端さん以外、モデルから此種の便りのあつた事は未だ嘗つてなかつた。

「彼女が得心の上なら、ひとつウンと責めて見ようじゃないか。僕はてっきりサジストだと許り思つていたんだが……。」

箕田氏は何とも納得の行かぬ顔で、それでも彼女の訪ねてくると云う日、縄もいつもよ

り多いめに揃え、丸太棒、梯子、角材等も準備した。

撮影は始まつた。私は今日こそはと意気込んで、彼女にあれこれと緊縛ポーズをつけたが、案に相違して、矢張り彼女は事々に洩るのである。羞恥心も相変らず強い。縛つた後の腕をさも痛そうにさする。

私は厭になつてしまった。縛られるのを好まぬ処を見ると、矢張り箕田氏の考えた通りサジストなのだろうか――。それにしてもあの手紙は……。

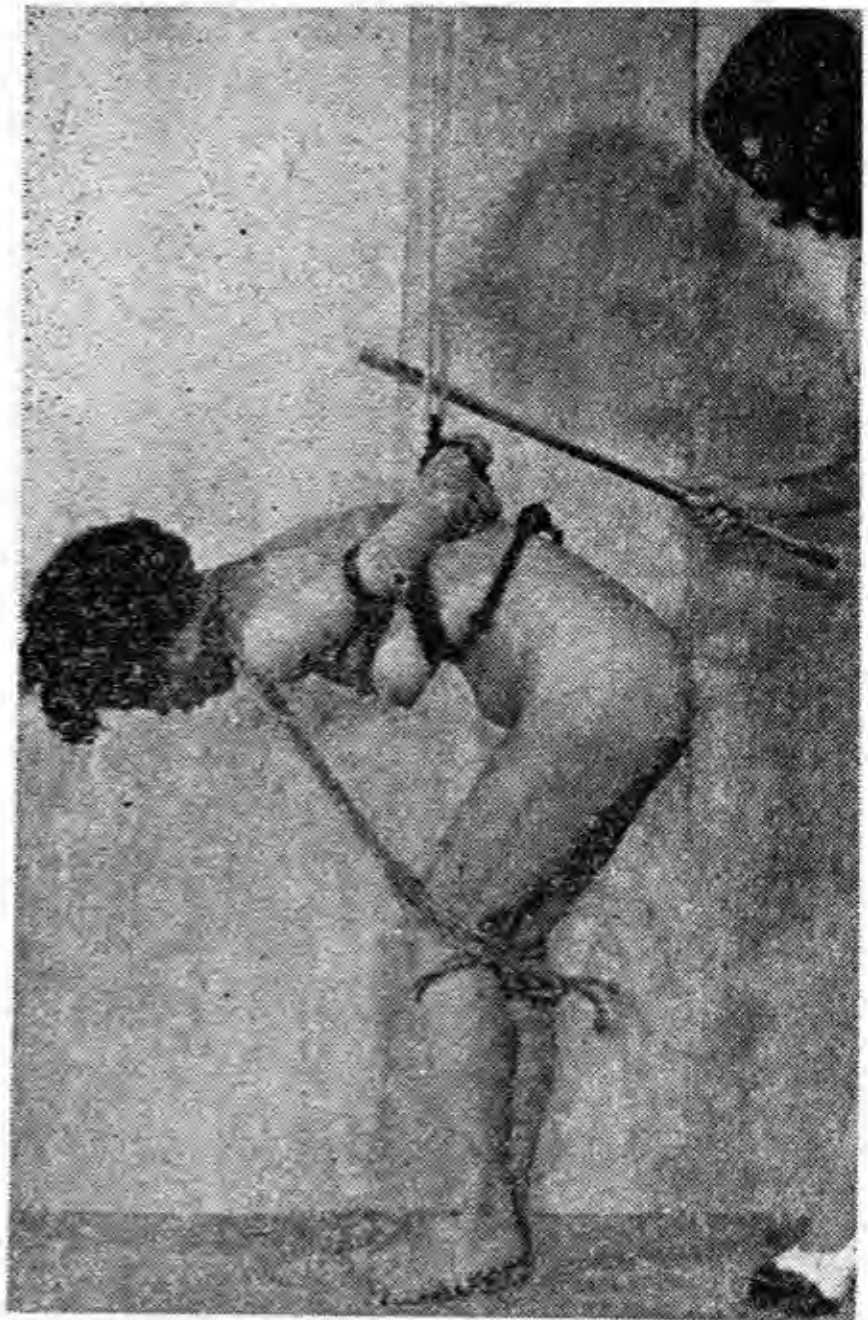
何だか莫迦にされてる様で、思いは同じか流石に強引な頑張りを見せる箕田氏も白けた顔付で匆々に切り上げた。

これを最後に彼女からは暫く遠のいた感じだった、にもかゝらずその後の頻々と彼女の手紙を寄こして来た、どれもこれもマゾの願望の露骨な、恐らくは川端さん以上の書き振りで、サタンの囁きに似た毒々しさを紙面一杯にもつた手紙が多かつた。例えば、

「……ひとりじつとあの時の事を考えていると、耐らなくなつてくるのです。思いきりギユウと縛られて、U子(註、彼女の本名)息も出来なくなる程強く猿轡をはめられて、吊り下げらたて、箕田様と辻村様に替り番こ

に鞭で叩いて戴けたら、きつとすうっとするんでしように……。私は莫迦な女です。今度こそ〜と思い乍ら、いつもその時になると別のもの一つの心が尻込みしてしまつて、いつも怒らせてばかりいて……。でもこの次こそ、きつといふ子になって、いつか仰有られた様に、ローソク責めや浣腸もおとなしくされるが儘になりますわ。

それからこれは私のお願い……。一度でいいから私の髪の毛だけを縛って、天井から吊り下げて欲しいの。U子はそんな時の自分の姿をいつも夢に見るのですあゝ、こんなことを書いておきますと、又私のどこかが疼いてきます。早くお目にかゝれる日を愉しみに、U子は今夜もこの二階で唯一人、自分の手で猿轡をはめて、ひし〜と両手足を縛った儘、朝まで眠りますわ……。と、ざっとまあこんな調子で、もつと〜こゝに書くのを憚る様なことを、一週間か半月おき位に、長々と書いてよこしてくるので



首と膝頭とを縛ってヨチ〜歩きさせられる坂口利子嬢（右端は杉嬢）

ある。手紙にはどれ一つとしてサドの願望はない。とすれば、平然と男を鞭打ち、乗馬靴を男の頭にのせたあの時のごうまんな姿は、一体何と考えればよいのであろう。

併も、これ程希み乍ら、撮影では前述の通りあの始末である。どこまで本心かわからない。彼女の正体はどちらなのだー。

一層のこと、思いきり皮剥いでやりたい様な衝動を、モデルに感じたのは恐らく彼女

だけである。

その癖、あのポリユームのある肉体と内潜した激情の果を考へる時、むげに捨て切れぬ未練心が沸々と湧いてくるのであった。

彼女が赤裸々に、一切の羞恥のヴェールを擲って、ぶつかってくる時はいつの日だろうか。（この項終り）

【追記】 辻村君から「緊縛モデルの素顔」を書くという相談を受けたとき「余り本当のことばかり書くなよ、モデル嬢に噛みつかれるぞ」と注意しておいた。事実、原稿になってからも事々にうるさい位セーブしてきた。だから若し、この一文に生ぬるいところがあるとしたら、それは辻村君のせいではなく、編集者の責任であると知って貰いたい。先日川端多奈子嬢から突然電話があつて、数時間快談することが出来た。彼女からは長らく便りはなかったが、書店で奇クは毎月見ていたらしい。とにかく、ファンの方に彼女の健在を御知らせしておく。（編集子）



孤独の広場

——古川裕子さんへ——

吾妻

新

古川さん

いま四月号を落手し、あなたの「孤独」をよんで、すぐペンをとる。編集部には申し訳ないけれども、ルビ活字でもいいから誌面の片隅にのせて頂きたい。それほど僕は感じたことを語り、あなたにも読者にも了解または批判を受けねばならないと思っている。

実をいうと、「孤独」は「囚衣」以後ももっとも僕を感動させた。灼けつくような誠実さがそこにある。いや、誠実さしかないのだ。僕はなにひとつ反対できない。「異常性欲者は永遠に孤独なもの」という言葉にも、いささかの誇張も感じられない。またどんなに入念

に反証をあげて弁護しようと、現実社会に生きていくわれわれが苦しむということも、まちがいに事実にある。

あなたはそれを、熱をこめて強調した。正しいから強調したのだ。それは僕に、なにか不気味な印象をあたえた、もっと言うなら、浅薄な楽観論のそらそらしさにグサリと刃を立てられた気がした。そしてその対象のすくなくとも一人は吾妻新であるように感じた。真実を言わなければならぬ。それにはまず、「夜光島」の問題に触れなければならぬ。

さきごろある雑誌の小説で、幹事長にから

むモデル問題が起り、その作者と、僕の将棋の好敵手である編集長とが起訴された。そのとき感じたのは、あなたのことだった。もしも事の軽重を問うならば、その幹事長の数十倍の権利をもって僕を起訴されてもしかたのないような気がした。なぜなら、僕はあなたをモデルにしたから、唐沢登枝は、たしかにあなたをイメージにしていたのである。

その理由をたずねられると、僕は両手をついてお詫びしなければならぬ。理窟はどうにでもつけられる。しかし、それは衝動だった。僕はほんとうにあなたを書きたかったのだ。前からそう思っていた。サディストとマ

ゾヒストは多くべつべつに描かれている。もしくは一方的に重点をおいて描かれている。それを一つの場所におき、同等の立場で、一応外界との接触を切り離れた状態で、どのように進展するかを想像してみたかった。フィクションならモデルはいらない筈だ。だが僕には現実から全く遊離したものをかけない性質がある。いちばん手近の僕の妻はあまりに具体的にかいてしまったし、「教育」の限界が邪魔をしてこんどの「小説」のイメージにはならない。また実物を知りすぎているために空想のなかで冒険させることができない。古川さん、

僕はあなたを知らない。ただ誌面を通してのみ知っている。その告白から真の人間像を逆算できるなどとは思ってもよらないことだ。だからこそ、空想の典型としてすばらしかった。これは作家の真実です。モデルは「附いて離れる」ことを要します。僕がマゾヒストの心理をもっと深く教えられたのは、あなたからだ。とすれば、たとえあなたを意識しなくとも、書くモデルはあなたらしく（現実とは別として）なったにそういない。

もちろんそれはあなたの亡霊であり、本もののあなたは途まどいする、というよりも、

侮辱をかんじ、腹を立てるかもしれないと思った。しかし僕は眼をつむった。済まないと思いつながら頬かむりした。マゾヒストを描くのにあなたを思い浮べないわけにいかないしどうしても僕は書きたかったからだ。これ以上説明できない。ただ、あなたから少しでも抗議が出たら即座に中止することを箕田氏に約束しておいたけれども。

こうして僕は、ともかく書きはじめた。だが、告白する。あの小説は失敗した。かくにしたがって、僕は唐沢登枝を愛しはじめたからだ。モデルの口実は返り刃となって僕を刺した。空想だ、創造だとじぶん言い聞かせながら、奇妙な羞恥に苦しみはじめた。僕はあなたがいかに憤り、それにもましてキザに感ずるだろうかを恐れた。いや、いまでも恐れている。僕はあなたに直接手紙で求愛したすべての人間よりも卑怯のような気がする。それこそ、僕にとって最も耐えがたいことなのだ。だから筆は渋り、思いきったことがかけなくなった。こうなればもうおしまいだ。僕はあるだけ主人公を冷酷に扱い、フィクションらしくみせかけようと決心した。それで男を殺し、女を凌辱に棄て去った。お詫びします。ただこれだけは信じてほし

い。もしも実際のあなたを知っていたら、僕は伝記を書く。小説は書かない。

だから、「私のかく『告白文』から読みとれる人間像は、他人の眼を通すところな風になっってしまうのか、という、至って見当ちがいな嘆き」を感じて、そこから「異常性慾者とは何と孤独な寂しいものなのだろう」と結論することだけは撤回して下さい。

古川さん、

問題の中心点に入ろう。

僕らの孤独は二種類ある。一つは対社会、一つは個人。前者についてはまったくあなたの言うとおりの。今まで書いたものを見て頂ければわかるように、この点については僕はすこしも甘い考えをもっていない。この世界では数少ない当事者よりも理解者はまだ少ない。しかも、いわゆる理解者を僕はほとんど信用しない。ただ、そのために不当に傷けられたばあいに、僕は斗うほかないと思っただけだ。あなたと僕のちがいは、じぶんの性癖を罪惡視して社会に屈するか、しないかだけである。

後者については、人それぞれではなからうか、好ましい対象を全然持たぬ人もあり、持った人もあり、いま持っているものもある。

最近号ヨリ 二大連載予告!

吾妻 新・訳

題 未 定 (ジユスチヌ)

「クリスチヌの受難」にて定評のある吾妻新氏の麗筆は、こゝに再び皆さまを快い桃源境に誘い込まずにはおかないことでしょう。

松井頼子・作

仮題 「赤い花は泣いている」

「縛られることが好きだ」と自ら喝破していられる松井頼子さんが、久方ぶりに想を新にした快心作を提げて皆さまの信を問うと意気込んでおられます。

あなたにはすばらしい対象との生活があった「囚衣」のあなたは孤独ではなかった。それをいま回想して甘美な幻想だと思ふのはゼイタクだ。もしそこまで思いつめるなら、ノーマルな結婚生活でも孤独でないものはないかもしれない。

「夫の死がもし、あんなに早くおこらなかつたならば、私と夫との感覚のちがいが、もっとも」と目について、今の私の考える程、調和したものにはならなかったのではないか——僕はそう思わない。真実の声だろうが、僕はそう思わない。

なぜなら、アブノーマルな人間の趣味は千差万別で、その細かな相違が固定観念となつて強化されるのが特徴だけれども、それはリ

ビドが自己の内部に閉じこめられている状態である。あなたと亡夫との愛情関係では、いちばん根本的な欲望を充足させるために、そしてそれが得がたい貴重なものであるために、こまかい相違はたやすく溶けあつたにそういない。それが相違として、いま感ぜられるとしたら、それは孤独になつたからだ。

たとえば障碍競技——これは非常な傑作だけれども——のルールを変えて、ウラインを吞ますのと反対にその場で関係を結んだとしても、あなたの感覚はそのようなものとしてその競技を受けとり、満足できたと思うし、亡夫の趣味がちがっていたとしても、やはり今日おなじような感想をあなたに抱かせたかもしれない。

僕はじぶんの体験からそう信ずるのだが、どうだろうか。またフイクションに戻るが、もし夜光島の生活が永くつづくとしたら、健次郎はゴム引レインコートに、登枝は汚れたズボンに「感ずる」ようにならないだろうか、

そこで、こんなお願いが許してもらえとすれば、僕はあなたがあのモデルと実際のあなたとの間にみとめるズレや誤りを、あの小説に即して、遠慮なく徹底的に説明してほしいのだ。あなたの具体的意見を、僕は切実にききたい。

愛は理解だけでは成立しないから、将来どんなに社会が進歩して正しい意味の理解者がふえても、その意味で異常性慾者は孤独であるといえよう。グループ対社会とみれば、われわれは氷にとりまかれています。だがエスキモー人の生活のように、外気が冷たいときは氷の家は暖いのである。

個人生活となれば話はべつだ。羽村京子さんにしても沼正三氏にしても、けっこう幸福そうではないか。配偶者に人を得れば孤独ではない証拠だ——たとえ稀な幸福だとしてもあなただってそうだった。してみれば、「異常性慾者は永遠に孤独」というのは社会的の意味であって、あなた個人に課せられた絶対の運命だということではできない。

古川さん、元気を出しなさい。僕らには、眼にみえない孤独の広場がある。

(終)

継子いじめ

大村光子

「さぼろうとするなんて、フテくしいったらありやしない」

「ほんとだよ、あれだけこらしめても未だきかないんなら、今日という今日は徹底的に痛い目をみせてやらねば」

私は余りにも朝から体がだるいので起き上れなかったのを、どう弁解してもきゝ入れようとはしない二人だった。私は腰巻一枚の裸体を後手に縛られて、自分の部屋である納屋からくらの中に引き立てられる時も、眩暈を覚える程ふら／＼していました。そんな私を無理やりに太い梁に吊るし上げると、二人は手に手に青竹を握って私を挟んで右と左に立

ちました。

「そら、いくよ」

ビシッという音と共に腰のあたりにひどい痛みを感じました。

「そら」と今度は反対の方から、そして「そら」「そら」と二人は息をもつかせず打ちまくりました。

「一寸待って」

「何さ、もう可哀想になったのかえ」

「誰が可哀想になんて思うもんかね、それよりお腰をとってしまわない、その方がうんときくと思うんだけど」

「それもそうね」



継母の手がのびると、赤い布がふわりと床に落ちた。それから二人は目茶苦茶に打ちまくった。ビシリ、ビシリと青竹が鳴るたびに、赤くなり、はれ上り、そこからは血さえにじみ出た。私はもう何をされているのか分

らなくなり、あたりが真暗になると気を失っていった。

それからどの位経ってからだろうか、私はふと目をさました。

「気がついたようだね」

「もう心配はありません、それでも二、三日はこのまゝ安静にしてやっておかねばいけませんよ」

と云う小声がはっきり聞かれるようになり私は何時の間にか煎餅布団に寝かされているのに気がついた。あたりを見廻すと、継母とその妹がじっと、いさゝか心配そうな顔つきでこちらを見ている。

「注射をしておきましたから、そのうちに熱も下るでしょう。なあに一寸した風邪ですよそれにしても、一寸ひどい折檻をされるようですね」

と、医者らしい男は二人の顔を見てにやっと笑った。「それについて一寸」と継母は医者等を次の間に連れて行って、何かとそく話しかけていたが、医者は相当つかまされたらしく、「ではお大事に」と云って帰ってしまいました。

私は腰のあたりがやけるように痛んで、寝返りさえ自由には出来ません。それから疲れが一度に出たのか、腰の痛みは治ってもふらふらして歩けないので下の仕末は継母かその妹の手を借りなければなりませんでした。

しかし、いくら要求しても二人は仲々応じてくれません。仕方なしに床を這い出し、いくらも行かないうちに洩らすのがたび／＼でした。その度に私はそのお仕置をさせられるのです。それも打ったり叩いたりではなく、「そんなにお便所に行きたいのはお腹が冷えるからよ、あたゝめてやりましょうよ」

「そうね、じゃあ私一寸買ってくる」

と云って外に飛び出して行ったようでしたが、やがて私の寝ている所へ入って来た妹の手には、何やら紙袋のようなものと、せんこの束をにぎっていました。私は布団をめくられ、寝巻の紐を解かれ、腰巻さえ押し拡げられてしまいました。

「もう少し大きいのがいいわよ」

「これくらいかね」

「もう一寸」

「いゝわ、それくらい大きくすれば」

私は胸に腰しかけられた継母の重みで声もあげ得ぬ位苦しく、身動きも出さずじっとしてしまいました。やがて下腹に耐えられぬ程の熱さを感じる様になりました。妹の買ってきた紙袋は艾だったのです。もがこうとすれど自由にならず、「あゝゝ、あつ！、あゝ」とうめき声を立てるばかりでした。

それから毎日は五つか六つは至る処に据えられるようになったのです。しかしそゝうは一向に止みませんでした。何しろ立てなかつたのですからね。その為、私の床の横に便器がおかれました。その場迄はどうやら這ってでも行けるからでした。それも小便だけはどうやら出来ますが、大便は矢張り誰かに支えてもらわねばなりません。その場合は哀願に哀願を重ね、やっと願をかなえてもらうのですが、

「くさいおつき合いは二分だけよ」と意地悪く云いますので、用を短時間に終えねばなりません。その為用を達す前には浣腸を強制されました。床の上に引き起こされた私は寝巻も腰巻も臍の上まで捲り上げられ、便器の横迄引き出されて、そこでぐったりしている私を四つ這いになるようにさせるのです。

しかし手足に力の入らない私にそんな恰好は出来ません。胸が床についてべた／＼とした私をどうにかこうにかお尻だけを高くするような恰好にして注入するのです。注入が終っても仲々排便させず、私の苦しむのを見て喜んでいのです。

こんな苦しみを味あわされながらも、病の方は次第に良くなり、やがて歩ける様になりました。しかし、そんな事に興味を持つようになつた二人は、自由に私が便所に行くことさえ禁じてしまったのです。

これ以上申し上げれば、読者の中には「なあんだ。興味本位のつくりごと」と思われる方も居られることゝ思いますので、この辺で止めて置きますから、後は想像におまかせすることに致しましょう。



編集者への公開状

狩井麗作

毎号奇ク誌上に発表される読者投稿は実に真摯なものばかりで、私達愛読者には心強い限りです。中でも編集者への公開状は、特に読者と奇クとの今後の連携に有益なものと思われまます。ただ、残念なことは、多くは読者の注文と云う形で出て来ているのですが、今一步踏み込んで、誌の発展についての基本的テーマに突込んだものが少いと云う事です。私としましては充分研究をしている訳ではありませんが、一言考えている事を述べてみたいと思います。奇クが、今後どうなるか？この問題は、読者にとっても、編集者にとっても重大な課題ですし、片時も忘れてはなら

ない問題でしよう。では、その答えは何か。多分こうなるだろう、との推測や、なり行き任せは危険です。勿論編集部では、その点十分討議され、常に考慮されて行っていると思います。ただ私が心配するのは、編集会議を如何に度々開いたにしても、その議題の展開には常に冷静な科学的資料を基本としていなければならぬだろうと思うことです。次に私なりの科学的資料について述べて見ましよう。アブ誌の盛衰は読者が決定する事は、他の雑誌と同じですが、アブ誌の場合、特に強いと思います。奇クが軌道に乗り出して二年半、その間に奇クの性格もずい分変りました。読

者も次第に増加して行ったと思います。一度読者になれば、その人達は固定します。しかし奇クが発展する為には、より広範囲の読者が出来る事は絶対必要です。（勿論、狭い読者のままでいい。より深く貴重な雑誌にして行った方がいいと考える読者も多いでしょうが、この是非は又別稿にゆずります）この新しい読者をどう獲得するか、と云う問題と、新読者と旧読者との関連をどうして行くかと云う二点が、今後の重大問題だと言えましよう。これを解決して行く為には、既成読者の性別、年令別、職業（教養）別の層を、分析し研究しなくてはならないと思います。各層の人々が奇クに何を望んでいるか、又、奇クを常識的社会生活と、どのように融合調和させているか。それらの読者によって、奇クは他人に、或いは他の階層に、どのように伝播されたか、又は孤立化させたか、等の問題があります。新しい読者層に対する分析は、尚一層重大です。どのような人々が読者になつて行くか、最初奇クをどう見たか、年令による受入れ方の相違を研究する事により、今後奇クが、社会の中の普通誌となる踏台を、つかむ事が出来ましよう。昨年、私はF市に於いて奇クが書店から、どのように買われて行ったかを調べて見た事があります。市内の二つの書店に親しい店員が一人ずつ居ましたので、奇クの購買について、統計を取ったもの

です。次に結果をあげてみましょう。A・B店合せて奇クの売れた数(二十八年八月の一ヶ月間)二十一冊。男十七冊、女四冊。年令別では、男三〇才以上六人、三十才以下十七、八才迄十一人。女は三十才以上三人、三十才以下一人。となっています。勿論相手にたしかめたのでなく店員の観察による推量です。尚、女の人で店に並べてあるのを立ち読みする人が、若い人に割に多かった由です。これらの結果は、ごく一部で、短期間なので、これだけの数字から、何かを引き出すのは危険だと思います。しかし、このような周倒な研究をなす事は、奇ク程の特異な雑誌としては是非必要ではないでしょうか。広告業にもP・L問題と云うのがありますが、奇クにも、社会心理学の背景を追究して行く事は是非必要だと思います。編集部に於いても、二十八年と二十九年迄KK通信の特別会員として、読者の履歴調査をされて居ります。それらについての社会心理学的分類、考察をなされた事と思いますが、支障ない限り発表をして頂く事も、読者及び研究者にとって有益と考えます。読者層の分析は、案としては良くても、実行に困難な事は、私自身職場で知りすぎる程知って居ります。しかしごくわずかでも、手をつける事の出来る面があると思いますし、それらを常に考える事が必要です。雑誌も三年位経過すると、どうしても、マンネリ

ズムに陥ります。ともすれば、婦人雑誌のように、表紙を取りかえれば何月号にでも通用するような、変りばえしない内容が、毎号つづく事になります。新旧読者を同時に満足させる事のむつかしさから、いくつかのサブ雑誌が、つぶれて行った筈です。この危険が、奇クにも、来ないとは言えません。読者に対する慎重な認識こそ、編集部最大の仕事だと思います。この資料を基礎にして、次には、誌をどのように、大衆の中に拡大して行くかの方針、或いは、どのように持続させるか、等が考えられると思うのです。私の聞いた範囲では、奇クの内容に於いて、サチ、マゾ、浣腸、切腹と分離が強くなり、マゾの人、浣腸の人、第一部のサブニストは、奇クを買っても、自分の属する誌面のみしか読まず、他は全然目を通さない人もあるとの事。これらの問題も、読者と編集部とで共に考えて行かねばならぬと思います。以上、私が常々抱いて居りました奇クと云うサブ誌経営についての疑問や、感想を述べてみました。勿論、私の調査にしても、ただ思いつきでし、私の云う読者層による雑誌経営等の問題は、本格的にやって居りませんし、口はばった事は云えないのです。ただ、このような問題に興味を抱いている読者がいると云う事を知って戴くだけでもいいと思ったのです。最近、課題原稿の中に、編集部への公開状を出して

直接話合ったり、又、四月号では、座談会の企画もありますが、編集者の意欲が感じられ頼もしく思っています。最後に、私の企画を一つ述べて見ます。それは、奇クグラビヤ写真の撮影を、読者の特定の人にやって貰うと云う事です。例えば、サディスティクなフ・オートを吾妻新氏に、マゾを沼氏、切腹を川合氏、浣腸を花村氏等に分担させ、モデルを編集者立合いの下で、自分の構想により、写真に撮させるのです。それを、グラビヤに掲載して行くのです。そうすれば個性豊かなサブニストによる写真が出来、新しい感覚や、ニュアンスが出て来るのではないのでしょうか。勿論、地域的に無理があると思いますが、時期を見る事により可能となります。何故私がこのように読者によるサブ写真の依託撮影をお願いするかと云えば、奇ク編集者の撮影では、今のように分裂して来た、サブの各傾向の写真を同一人が作ることに、どうしても無理が出て来るからです。又編集部は、健全なノーマルな性癖の人で構成されていると思えますし(之は当然、そうあるべきだと確信しています)カメラの辻村氏にしても、あれもこれもでは、やはり、マンネリズムになると思うのです。それ故、出来れば、読者の中で一応、ベテランであり、真面目な活躍をされている執筆者に、依頼して撮影をさせるのです。そうしていけば、グラビヤに変化も出来

又、真にアブ誌としての文献性も大きくなつて来ると考えるからです。この点についての編集部の御配慮を頂ければ幸いです。但し、私の言う読者が、カメラを使用されない場合は演出や、実際のポーズ等を、やって貰えばいい

いと思います。私のような、カメラマニヤは常に、新しい写真を考えては、ドン欲な妄想をしている次第です。

以上、編集部の大胆な御好意に甘えて、一文を草しました。生意気な点がありましたら

何卒お許し下さいますようお願い致します。尚、読者欄、その他にも希望がありますが、他日にゆずりたいと思います。

二月二十二日

箕田京二様

異端文学へ

淡 美 一 郎

一編集者と読者への公開状一



「奇譚クラブ」が、真摯な風俗研究誌であることは、その生命の長

(一)

きを見ても容易に頷かれよう。だが、生命の長さは、全国に跨った同好者の趣味的なつながりが強力であるせいも多分にある。広く誌

面を読者に解放し色々な告白物を載せたのが成功の原因であった。人間誰しも、猟奇異端を好むものであるから、日常の生活で、しばしば自分達の経験する心の妖しい働きが、誰にでもある衝動であったと知った時は、ホッとした安堵にも似た気持ちになってくるだろう。そして自分も一つアブノーマルな告白を書いて見ようと云う気になる。さて、それが採用になるか否かは別として、とにかく、そんな親しみ易い感情を誰にでも与えた処に「奇譚クラブ」の勝利があった。

それで編集者としても、より一層、読者との結びつきを緊密にする為、多くの投稿者に満足を与える様、あらゆる努力をすることに。本誌の読者通信、読者欄の他誌に較べて量の豊富な事、正に驚くばかりである。こうして、サディズム、マゾヒズム等々、世に謂う変態性慾の悪

の華が誌面に咲き狂うのである。切腹、浣腸が本誌独特の売物となっている他、多くの変態告白物もあるが、特に前者は、余りにも単刀直入な描写で、ある種の危惧を抱かしめないでもない。興味本位での追従者を生みはしないかとの心配なのである。

だが私は、そこ迄、道徳的にする必要はないのだ。こゝで言い度いのは、そう言った告白物の生々しい感じだけで奇ク全体を覆いたくはないと言う事である。

告白物、体験記は、そのまゝで良いだろう。更には、現在連載中の、稀有な文献に類似したレポートも、もう少し量を多くすれば、これについても取上げて言う事もない。

問題は、本誌の創作欄の充実なのである。多くの寄稿者が執筆するに際しての、一つの共通な方向を定めようと言うのである。創作欄の高い芸術的な雰囲気

赤裸々などぎつい体験記と、生硬になりがちな文献資料的な読物と巧くカヴァー出来ないものかと思う。と言って誤解されても困るが芸術的に云々とは、決して高く止って意味の分らぬ、所謂純文学に類した小説を意味するものではない。

勿論、本誌の小説では純文学に匹敵するものが現われれば、元より結構だが、その出発点に於いて純文学や大衆文学とは違った特異な基盤に立っての主義主張をモチーフにしたいのである。

(二)

仮にそうしたものを異端文学と呼ぶとすれば、それを志す者にとって参考になるのは一昔前の探偵小説がある。

江戸川乱歩の創作探偵小説が現われる迄は、探偵小説と云えばその殆んどが外国文学であつた。日本に於けるそれらしいものは子供だましに等しい犯罪実話だけだつた。

もっとも純文学の方では一連の谷崎潤一郎のものの如き、探偵小説的色彩の濃いアブノーマルな小説だったが、謎とトリックを生命とする探偵小説ではあり得なかつた。

た。

当然、一般読者に於いても極く限られた者達だけが探偵小説を認めていただけだったから乱歩を始め探偵小説のバイオニア達の苦心は並大抵の物ではなかつた。

機会あるごとに探偵小説の特異性を強調し、その内にあって探偵小説は文学であるか否かで内争もあつたが、ともかくも、現在では大衆雑誌界の一方の雄としての探偵小説を樹立してしまつた。

我が愛する「奇譚クラブ」の創作が、異端文学（文学であるかどうか論議もされるだろうから一応異端小説とでもしておこう）樹立の為の捨石であつてほしい。

冷静に考えて見る時、現在の風俗雑誌に掲載されるアブ小説は、いずれもあぶな絵的な中途半端な艶笑ものか、サド・マゾの刺戟的なシーンをのみモンタージュした場当りのなものばかりで、真摯な創作意欲など全然うかがわれない。

では一体どんなものを此処で異端小説、乃至は文学と言うか説明しよう。

先ず、その創作態度としては、一般文学を志すものと全然同じである。生ぬるい桃色の思考を排除しよう。変態性慾に基いた、ざり

ざりの、やむにやまれぬ意欲をぶちまけよう。

表現方法としては、異端文学をより適格に訴える為、感覚的な方法を最大限に駆使する事である。人間の心の奥底にひそむ、変態な忌わしい性癖を赤日の下に晒らしそれをそのままにせず、人間心理の相剋の形で表現する。

これを、もっと具体的に言えば今迄のアブ小説に心理的な描写を加わえ、一流の心理派探偵小説からトリックを抜いた新しいジャンルと言う事になる。

この異端小説を、やがては、一趣味雑誌だけの同人的なものから広く一般文学へ進出させ様と言うのである。

行詰つたと言われる探偵小説にとつて代るべき読物こそ、外ならぬ、我等の異端小説だろうと信ずる。

探偵小説の先駆者達が捧げた情熱を、我々は、異端小説に向けよう。

当時の「新青年」と丁度同じ立場にある「奇譚クラブ」が新らしい時代の小説である異端文学の卵を、よくめんどろを見てやってほしいと思う。

(三)

こんな意味で「奇譚クラブ」が先日募集した懸賞作品の意義は大きい。

拝見した処、入選作は創作が多い様だが、そんな中から、野心的な明日の文学が生まれる様、念願する。

恥しいながら現在の段階では出版界で我々が主張する強烈な新文学を受け入れられる状態はない。僅かに「奇譚クラブ」に、その萌生えに適した土壌を見るだけである。

寄稿者の諸君が、以上説いた様なひたむきな熱情を以って異端小説に取組まれるは勿論、編集者に於いては、一つの新しい文学運動として、協力される様お願いする。

「奇譚クラブ」の創作欄が、他の告白物や、資料的読物に比べていちじるしく不振なのをうれい、敢えて此の一文を呈する。

本誌の特色ある小説陣が、全く新らしい文学として新鮮な魅力を一一般人に与える様、お互に励み度いと思う。

縛り絵について

— 滝麗子様へ —



鳴海文雄

滝麗子様、いつも嬉しい口絵を描いて戴いて本当に感謝しております。旧号をめぐってみますと、目次裏に、口絵頁に非常にすばらしい絵が載っています。本誌の一愛読者としていろいろ貴女の絵の批評やら希望やらを遠慮なく申し上げます。どうかお

許して下さい。

滝さんの絵は洗練されたスマートさというものがありません。どちらかと云うと素人くさい絵です。ところが却ってこの素人臭い点が絵にサディスティックな雰囲気を与えています。例えば、「地下密室の怪」や

「松葉責め」は悦虐の表情を捉えた佳作でした。滝さんの絵は何よりもこうした妖しい雰囲気を描くところに一つの特徴がある訳です。

昨亭先生の近代的な明るさ（それは明るすぎる位です）。四馬先生の西部劇風のリアリティよりも、僕には貴女の画風がびったりします。考えてみますと貴女の絵には血を流すような惨虐さがありません。幻想的な、しかも惨虐さのない縛り絵は僕の傾向と一致しているのかもしれませんが。

一方「新妻もの」の一連の作品では、こういう濃艶さと違ったあたゝかい雰囲気を出されたのには感心しました。蚊帳を吊りに来た妻をしごきで縛るとか、掃除姿のまゝ縛るとかいう日常的な題材は大変なごやかなものでした。四馬先生の冒険小説的なリアリティに対し、貴女は庶民的なリアリティを持っていたといえるでしょう。これらはサディズムという惨虐の匂いする言葉を柔らげ、親しみ易いものにした意義ある労作だったと思っています。レインコートを着せた絵など、ほのぼのとした愉しさと爽やかさゝえ感ずるのです。

滝さんの絵を見て感心するもう一つの事はアイデアが実に豊富なことです。小道具コスチュームの使い方は、畔亭先生を以て第一としますが、ヴァライテイに富んだ縄のかけ方は何んといっても滝さんです。目次裏に一連の続きものとして載った「縛り方教室」。即ち「股間縛りの縄のかけ方」「ゴム紐利用の縛り方」「変形海老責め五態」「サーカス責め」「棒ぐいを用いた縛り」「椅子を用いた縛り方」(もともと後二つは見ていません)は見ていて飽きることを知らない作品です。

「ハムア」と思わず感心すると共に、どうしてこんなアイデアを思いつかれたのかと不思議に思う程です。秀抜なアイデア、しかも縄をハッキリと示すため前面と背面から描いて分り易いようにしてあります。

殊にすぐれているのは「ゴム紐利用の縛り方」でしょう。伸縮性のある太いゴム紐を股間縛りに利用した、それらを見ると多くの口絵中、僕はもっともサデイスチックな気持になります。女性のもっとも恥しい部分にゴム紐がしっかり喰い込んでいるということ想像すると堪らなくなります。

このゴム紐の効果は非常に複雑ですね。縛りの効果はいう迄ありません。股間のゴム紐は、V感覚もA感覚も刺戟するでしょう。更にこんな姿勢での晒しは、どんな羞恥を与えることでしょう。更にこれにくすぐり責めを併用したら、効果が重々とも強い悦虐感を起こさせるに違いありません。いや／＼これは失礼しました。僕の云ったことはあの絵の中にすっかり描いてありましたね。

さて、滝さんは此頃、川柳ものに手を出していますね。川柳ばりの、くずした線で風俗描写をやっていますが、僕は余り感心しません。口絵もサーカスとか奴隷売りとか、断片的なものしか描いていませんが、あの豊富なアイデアはどうしたと云いたいのです。僕はあの色々な縄のかけ方を目次裏に発表して戴きたいのです。高手小手、海老しぼり、逆海老、柱しぼり、足吊り、逆吊り、股間しぼり、前手しぼり、足かせ、柱抱き、と責めにはいろいろの方法があり更に縄の量や縛るものゝ種類、小道具、衣裳を考慮に入れると、縛りの方法は恐らく無限といってよいでしょう。これを逐次発

表していただきたいのです。

実は僕はこの外にもっと大きなお願いがあるのです。と云うのは、多くの縛りの集大成なる絵巻を完成していただきたいのです。責めにおける縄のかけ方はコイトスにおけるラーゲ或はそれ以上のものですが、これは残念なことに全然体系化されておられません。だから乱雑になっている縛りを完全に体系づけて分類し新しいアイデアを含めた絵巻をつくっていただきたいのです。

先ず、コイトスの正常位とも云うべき後手首縄から始めて、その変形などを絵に描いて説明をつけるのです。基本的なものから次第にいろ／＼な工夫をこらした縛りへと移ってゆくのです。勿論、縛られるのが人妻、女学生、オフィス・ガール等いろいろ変えていけば一層面白くなります。これが実行され、刊行されたら皆争ってそれを求め、S・Mの一大バイブルとなることは疑う余地もありません。

いや。これは箕田編集長へ提案すべきことですね。どうでしょう滝さん。大仕事をやっていただけませんでしょうか。いろ／＼勝手なことを書きました。今後とも益々活躍されんことを祈ります。



最近に於ける奇クの充実ぶりを驚異の眼をもって見守っているのです。四月号では、篠原咲恵さんの「大和撫子」みずしま・まもる氏の「責め衣」殊に興味深く読ませていただきました。篠原さんの「半公刑」は今後もぜひ出来るかぎり続けていただきたいと思ひます。巻頭の写真も、毎号すばらしいものばかりですが、時には趣向を変えて、金属もしくは板製の足枷、手枷等を用いた責めアルバムをのせていただけでいいでしょうか。モデル嬢に首輪をはめ、手と足に鎖のついた手枷、足枷をつけ、その上に、口には金属性の嵌口具をはめられた写真、またはパンチイ一つのモデル嬢が、両足を開かされて、板製の足枷をはめられてゐる写真など、のせていただけたらどんなにすばらしいだろうと思ひ

ます。それから、三月号に滝麗子先生の筆で奴隷のセリ売りの絵がのせられていましたが、できればあれを物語り風に、「百合子の冒険」のような連続絵物語にしたいだけではないでしょうか。いかもこの欄にどなたかが云っておられました。若い女性が奴隷商人につかまり、手足に鎖をつけられ、セリ売り台にのせられ、更に売られてゆく過程を、絵と文章両方で書いていただきたいのです。最後に、もう一つお願いがあるのですが、マゾヒストの頁として、女性の下着（ブローズ、ブラジャー、およびストッキング等）をつけさせられ、縛り上げられた男の写真をかかげていただけないでしょうか。以上が、奇クに対する私のお願ひです。御発展を心から祈って筆をおきます。

(東京 本山生)

白石稔さんの緊縛映画予告篇は私たちファンにとって本当に嬉しい記事です。どうか今後も続けて載せて下さるようお願いいたします。奇クの記事の中から感じられるに映画の緊縛場面と相当の同好者が居られる様に思ひます。出来れば女優緊縛場面のスチール集などで

奇ク誌上を飾っては戴けないでしょうか。私の経験では富士のSSか桜のUSを使用してF3・5に開放すれば、客席から殆どないし、秒で余り動いていない場面は撮影出来る様に思ひます。こんな事を素人の私が申し上げるのは潜越でありますが、映画通信と一緒にその場面が見られたら、どんなに素晴らしいことだろうと思ひます。前にも書きましたように、私の好みは和髪でありますが、この頃の奇クに和髪の写真が載ったのは去年の七月号の「乱れ髪」一つぶし島田」だけだったと思ひます。この写真はモデルも美しく、こういう写真がまだあれば晴雨先生にお願いしてもっともっと発表して戴きたいと思ひます。一月号の八六頁「畔亭雑記」のカットが素晴らしいと思ひます。畔亭先生にも是非あつた面をもっと描いて貰って下さい。「きものシリーズ」も私にとっていつも期待しているものの第一です。白金さん、挿画の滝さんに今後の御奮闘を御願ひ致します。分譲写真のうちに和髪時代劇色のないのが淋しいと思ひます。しかし、某誌のものの様に髪がはっきり分るようなのは全くいけません。「忘年会奇談」の滝

先生の絵や、「ボクの責め方」の四馬先生の絵のようなのなら、もっと美しいモデルが得られると思ひます。映画の緊縛場面を好む人の多いのも、彼女らが現在の第一級の美人であるという事に依るのも忘れる事が出来ない事実だと思ひます。美人という言葉を使いましたが、これは現在のモデル諸嬢に対して甚だ失礼な言葉になりましたが、私の云うのは裸体に必ずしも拘わらず、きものに少し膝がのぞいたと云ったものに、反って魅力があるのではないかという意味にとつて戴きたいと思ひます。編集の方々に、私個人の好みばかりを望むのは余り勝手な希望ですが、分譲写真のうちに是非一種類だけでもいゝから、時代色のものを作つて下さい、御願ひ致します。

(長野 T・T生)

貴誌益々御発展の御事心より御喜び申し上げます。私も一年半位前から奇クの愛読者となりました。女性で御座います。今迄にも何度かお便りを書きまして読者欄の偶にでもと思ひ立ちましたが、何となく気がおくれが致しまして、書いては破るという事を繰り返して参りました。それでも此処数ヶ月

前より女性の下着を集めて、或はそれを我が肌で愛撫される男性のある事を知り、以前より私の腰のものが数度失くなった事など思い合わせて、何か知らたままにない気持ちに馳られて思い切った恥しさを返り見ず差出す次第で御座います私の此の気持は何と申したらよろしいのでしうか、異性をこがれる事は私、勿論未亡人として人知れず夜毎肌を……居りますがそれだけでなしに誰でも宜敷いのです、此の私を思い切り強くいじめ抜いてくれる人があったら、そしてどんなに恥しい事を要求され様とじっと忍んでその人の云われるまゝになつて見度いと思ふことが、私をたまらなく昂奮させるのです。特に私の使い古した肌着でよかったです、どんな事をされてもかまいませんから思い切つてよこして戴ける方に御譲り致し度いと存じます。私の体臭をぐっと包み込んで御望みの方へ御送り申上ますわ……、私の肌を包んだ此のお腰が何処かの異性の方に思い切り抱きしめられたら……考えるだけで体中がぶる／＼ふるえて参ります。こんなお恥しい便りは読んで戴けるか知ら……編集部の皆様、私の切なる願いをどうか誌上に発

表願つて、一人でも多くの男性の方に私の肌のお送り出来ませう様御取計下さいませ。でも直接お尋ねになることは絶対におことわりよ、編集部を通じてお便り戴けましたら、私どんな遠方の人にも必ず御送り申上ますから……私数年前に良人を失ひましてから現在或る会社で勤めて居りますが若い頃からの下着は全部残してありますの、御申込み下さればきつと／＼私の体臭をうんと包んで御手許まで御送り致し度いと思ひます。こんな事を書いて一人一人に昂奮してしまつて……お恥しいお便りで御免なさいネ。益々奇クが御発展になります様、そして毎月毎月が楽しくあります様にお祈りして。
(編集部より) 編集部に対する御依頼の旨、諒承致しました。編集部宛一括してお送り下されば、御希望のように取計らひませう。

○ 愛読者の会を作りましょう。本誌三月号で菅原春夫氏が云われたように、愛読者相互間に於て親睦を計る為、愛読者の会を作り度いと思ひます。我々の奇譚クラブを大きく盛り上げる為、会員の相互連絡親睦のためアブノーマルな人達の悩みをなくする為、明るい健全な会をお互の力で作り度いと思ひます。そうして大いにKK誌を応援し、明るく大きく育て、行こうでけありませんか。(加藤要)

○ 最近の御誌の記事についての感想を申し上げますと、昨年の十二月号の古川さんの「愛恋の日に」が一番印象に残りました。いや、印象に残る等という生易しいものでなく、読み返す度にどうにもならない胸の痛むのを覚えてました記事としては他の告白や創作に比較するには余りにも厳しい人の世の現実に戦慄をさえ覚えまして。——中略——味方のない人間が人間の憎悪に如何に立向えるものか、所謂アブノーマルと云われる人々が人間の憎悪を最も怖れる存在であると思推するが故に。吾妻氏の「夜光鳥完結篇」が心待ちにされるのです。登枝という無上の味方を持ち、しかも自由な小説を借りた吾妻氏が、章三郎にどのような対策を与えて下さるか期待しています。特大号が続いて記事に

○読者通信をお寄せ下さい

読者通信欄は孤独に悩む方々のこよなき慰めの場として、広く同好の士のため誌面を開放しております。本名其の他の秘密は固く守りますから、御安心の上、御遠慮なく、ドシ／＼とお寄せ下さい。

男性マゾ、切腹、浣腸や単なる露出(例えば柴崎さんのように)等には余り強い興味を持てないので一度読了し

も力が籠ったものが小生の嗜好とは別に数多く登場したのは大きな歓迎だと思います。新年号の「眼帯マニアの妻の手記」(菅野房江さん)「緊縛に関する十二章」(辻村隆氏)二月号の「鼻責めについての実験」(古田吉郎氏)「自分で自分を後手に縛る方法」(伏屋春江さん)三月号の「汗について」(みずしま・まもる氏)「緊縛モデルの素顔」(辻村氏)は忘れ難い好記録であると思ひました。小生はソドミー、

てしまふと、むしろ読者通信などを読返しているのですが、花村さん、角さんの記録は繰返し読みました。三月号には片矢氏(陰の花)竹谷氏(手術室)緑氏(天狗鼻由来記)と久々の懐しい顔触れが揃いましたね。三月号の宝塚二三夫氏は二月号以上に面白く、以前KK通信で黒井氏が賞讃されたのも尤もと思ひました、被虐少年期(三根氏)きものシリーズ(白金氏)

A 感覚(羽村さん)のシリーズは違った年令、異った性向を明るく読ませて下さるのも感謝しています。二月号の二本氏の作品はほぼのと似た微笑を禁じ得ない作品で、三根氏のものに較べずとも余りにノーマルなものと云えるでしょう。三月号の長瀬さんも深刻ぶる程アブノーマルだとは思えませんが。たとえマゾヒストであっても初めは誰しも嫌悪や羞恥を見せるものですから、女性のプロレスもある今日、対象を得るのは容易と思えます。最後に編集氏に対して勝手なお願いを三つ致します。第一は川端多奈子さんの近況を調査発表して戴きたいことです。勿論個人の生活に干渉は出来ませんが強度のマゾモデルであった川端さんが、奇巧の縁結びで新しい生活にはいられたものであれば、夫君の鞭を用いても現況を発表されるべきである。フアンの一人として考えています。第二は最も敬愛する投稿者古川裕子さんの近況をやはり隔月位は必ず載せさせるべく図って戴きたいのです。第三は「Mへの手紙」の中に触れている二俣志津子さんの被縛フォトを實現して載せたいのです。二俣さんの一連の作品と「Mへの手紙」か

らマゾヒスティックな性向も感得されるのですが、サド的アブノーストとして胸を張る二俣さんをM氏の手腕で、どうか思うさま縛り上げて下さい。以上三つをお願いはいずれも編集部諸氏の御都合を顧みない勝手なものです。考えよるによつては容易に実現し得るものと思えます。類似誌総退場の今日、本邦唯一と思われるユニークな存在は、それだけに一ヶ月が待ち遠しく思われます。男性マゾも切腹も浣腸も結構ですから、女性悦虐も益々力を入れて下さる様お願い致します。数多い読者の各種各様の要求に応じて行くのは大変なことと存じますが、最大多数の現実の幸福の基となるために御健闘御願ひ致します。(近藤一)

○ 前略拙著「汗について」の入選については誠に意外の感あり、瓢箪から駒とは正にこの様なことと存ぜられます。早速三月号に一部を活字にさせていただきましたことは感謝に耐えません。挿絵も小生の意図する処を簡潔に表現されて見事だと思いました。出来ますなれば此の挿絵をかゝれた人のお名前を御教示下されれば幸いに存じます。大体ビニール、ゴム引布に限

らず、一般に防水布というものはおしめカバーを除いては外からの水分に対して身体を保護する為のものが多く様に思われます。小生はその逆の場合を想定して、人体の発散遺漏する諸々の水分を外部に放棄し得ない状態を考えて見たのです。数年間実際にやってみて——尤もこれは余りはっきりした意識はなかったようですが——こゝに一種の倒錯の快美が確立するように考えられました。貴誌の取上げておられる、切腹とか浣腸とかの様に。あるいはそれ以上に。特別におしめカバーについては、誰しも遠い郷愁があるのではないでしようか。従つて母の乳房を恋うるような気持がおしめカバーに対してあったとしても、それほどおかしい事とは思われなかつた考えます。只それが完全な成人の肉体と一緒に考へる所に倒錯と滑稽があるわけでありませう。

(東京 みずしま・まもる)

○ 僕は昨年の一月号から毎月KKを購読しています。KKが高尙な風俗雑誌として益々発展してゆくことを念願しております。今後共編集部各位の御尽力によつて貴重な文献誌とし、又新しい芸術の開

拓誌として永く僕達の手に月々確実にお届け下さい。さてKKの編集についてのお願ひを少し述べさせていただきます。何月号でしたか女が女を責める場合、責め手はもう少し年配の人の方が面白味がある。と批評しておられました。僕は年配の婦人が若い青年を責める場面を取り扱って頂きたいのです。少女を責める場合は、まだそのひよわな美しい肉体への苦痛と鞭跡などを与え、またその平凡な自尊心への凌辱を加えて、苦しみ悶えるのをみるのでしようが、この様な場合はすこし変ったニュアンスが含まれて来る余地があります。即ち、四十才前後の背丈も十分に有る婦人で、目鼻立ちが整っているが、精力的、我執的なあくどさが感じられる婦人が、眉目秀麗、品性高潔な何か天上の美しさを感ぜさせるような清らかな感じのする二十二、三才の青年を責めるような場合、勿論、縄による肉体的拘束と虐待凌辱(もっとも陰惨さや殺風景な不潔などの非芸術的要素は避けて、縄も柔らかな絹紐がよいと思います)を取去ることは出来ませんが、それは単に肉体的苦痛や平凡な凌辱を与えるばかりではなく、巧みに青年の体に、そ

れらに對する慾求に目覺めさせ、燃えたくせすることによって、その青年の世間一般には見られぬ真実と清浄に限りなくあこがれる潔癖な理想主義的精神に對して、心理的な苛責をつけ加えることになるのです。それはある小数の思索的禁慾的な青年にとつては、激しい肉体的虐待以上に苦しい苛責であつて、青年の心にはその鋭い良心の苛責が狂い、その肉体にはあたかも体刑のごとく、女のほしいまゝな酔いしいれた責めが加えらるゝのです。女に誘惑されるまゝに着ているものを脱がされ、紺紐で後手にしばられ、仰向に投げ出されて、齒をかみしめて自責の念に苦悶する若い人の痛ましくも清らかな激しい表情を、そして鞭をそばにおき、煙草でもふかしてその精神的苦悶を喜びながら、これから加えようとしてゐる責めと凌辱に血を沸かせてゐる中年の女のあゝといふ心をとろかすような、いき／＼した表情を想像してみて下さい。どちらも美しいではありませんせんか。その清らかな青年にも苛責する女を求めるだけの慾望がありそのあゝといふ婦人にもいけにえとなる青年をいたわるだけの優しさがあつて、それによつて結び合さ

れ、青年の自己の醜さに対する激しい自責に生の満足感を覚え、婦人は青年の責めさいなむ行為のなかに生の満足感にひたつていくのです。美しいとはいき／＼した生の発現に對する形容詞であつて、道学先生の善惡の規準を超えたものだと思はれます。乱筆で文脈もと／＼のわず甚だ失礼なお便りになりましたが御容赦下さい。いろいろ／＼まだ書きたいことがあるのですが、この辺で失礼致します。

(大阪、山崎生)

炎マニヤにとつて苳という言葉をきいただけで楽しくなります。誠に女性の人が「何々のお灸をすえて来ましたわ」と話してゐることを聞くと、その婦人の熱がる姿を想像して興奮をおぼえます。これは炎マニヤにならなければ判らないと思ひます。又、すえられる時もボカボカと熱くなつたと思う瞬間にジリジリと音を立てながら皮膚が焼ける時の熱い苦しみ、小生も色々と自分で浣陽やバンドで鞭打ちなど行いますが、やはり灸が一番手頃でよいです。それはお灸ですと不意に人に見られても変態とは他人には判らないからです。それにお灸責めの相手はすぐ見つ

かりますので、始めは病氣の様にして知人の女性にすえて貰ひ、自分だけ灸責めにあつてゐる気分です。苦しんでいけばよいのですし、それに灸をすえてくれる女性には若干なりともサド的な傾向がありまゝです。それで親しくなつたら自分の性質をそれとなく話すと、「では縛つてあげるわ」と承知してくれまゝです。又、反對に「私も身体が思いからすえてくれない」と云つてくれれば望むところで、逐次縛り迄発展させて行きます。たしかに女性にはマゾ的ですからと云う女性が多いです。灸をすえに行つても女性の人が仲々多いです。灸の跡をいやがる婦人に対しては、小生は味噌灸をすえてやつて居ります。苳が大きくてすむし、大して熱くなくボカボカとしてよい気分です。ブレーには相手に熱つそうに「あつムムム、かんにんして下さい」と云つて身をくねらすなど、ゼエスチャイをつかつてもらふと、本当に気分が出ます。愛読者の女性の方ですて見たい、又はすえられて見たい方がありまゝたら連絡下さい。最後に貴社の御発展を祈つて居ります。

(保田 徹)

【サディズム通信】

四月号は、訪阪の記念に心齋橋で求めました。開頁一番目次裏の川柳を楽しみました。縛りの句も中々味があり、結構です。奇文芸欄を新設して、川柳、狂歌はもとより俳句、短歌(勿論アブものに限る)等々を発表されたら、一そう楽しいではないでしょうか。口絵ではいつも乍ら、四馬孝画伯の作に快哉を叫びます。殊に「複雑な表情」における、彼女のサルグツワの中から、何かを私に話かけてゐる事をハツキリとくみとる事が出来ます。絵物語も毎回感激して拝見してゐます。同画伯のサルグツワのはめ方が、私の好みにピッタリしてゐるのも画伯を好きにした大きな、原因かも知れませう。パツと眼に飛び込んで来た今月号の写真版の素晴らしさ(マチガイじゃないのかい)と善意の悪口も、出ようという所です。モデル諸嬢の美しい持味もこゝにイカンなく発表されるといふものです。トップのポリュームの大きさに威圧されてしまいました。「縄と女体の幻想」では第三の萩嬢の高手小手における「諦」の悲しい眼がこれまでにモデル諸嬢に欠けていた

俳優的な顔の表情がとても真に迫って活々としていて、嬉しい事でした。続いて、「春日、伊吹のコンビ」これも奇クの名物にしたもので、メカクシのない伊吹嬢の顔が、とてもあわれでよきものでした。「公園」の萩嬢はやはり、最後の場が、真に迫ってよい表情でした。「早く解いてー」といった合意的な甘いものではなく、これからどんなことをされるか、といったそのおそろしさと、迫ってくる敵をケンセイする強い意志が表われていました。表題の付方でこの絵だけが大きく生きるように思いました。相変らず同性の「シバラレタ」態を見ると、バカに見えてお気のどくです。四月号口絵中、もっとも内容的に「深み」を感じたのは、杉原虹児画伯の「マゾヒスティンの夢」でした。女性の（かなしさ）と（よろこび）がこの一葉の絵でイカンなく表わされておき、マゾヒストの人の知れない（たのしさ）に酔うことの出来る幸福を、うらやましく思いました。複雑な女性心理を説明する名作として、敬意を表する次第です。古川柳のギ作しはられてよくぞ女に生れける。と云いたくなる所です。「ブラックチャンパー」もので四

馬先生に、作っていただきたいストリープがあります。婦女誘拐団の内容を、つきとめるため女探偵が、家出娘になって故意に彼等にとらわれ、その実情を見聞する（こゝが絵になる）最後は勿論、目的を果してハッピーエンドです。この女性スパイは、新聞記者でもよし、平凡な筋ですが、絵物語ともなれば別な味も出ると思います。が、いかがでしょうか。

（東京、小原）

○小生、奇ク丸一ヶ年愛読する炎マニアの一人です。東京の「岩瀬祥一氏」の女性専門のお灸室に深く同感し、美しい女性の白い背肌の灸痕にも喜悅す。美しい顔を熱さにゆがめ乍らたえる女の姿は、実に筆には書けぬ悦楽だ。旧号の「南川さんの灸をすえられる女」杉美美子さんの写真、灸責三態は実に有難く時々、書籍から出して見るのも慰安の一つ。尙、伊藤晴雨先生の絵と性液、血染の毛綱も良い。右の外、灸責に感謝する。編集部の皆様に尙も灸責を多く奇クにとり入れて、くださる事を願います。又もう一つ奇クに時代物を多くとり入れて下さい。芸者女郎の私刑も重ねて要望します。

（静岡 鈴木丑太郎）

○前略「売られゆく女奴隷たち」は本当に楽しく拝見いたします。次号には、もっと／＼激しいせり売人の権力の、あるところを見せたい。完全に人間から家畜になり下った奴隷、そして其の売買は、馬市同様或はそれ以下でけこうです。私は乳房や腰のものを取られて、かい主に冷淡に一個の物品として取り扱われてみたいのです。竹竿の様なものに一列にたながれた下等の奴隷や、美術展覧会の様な各種の台の上に、あらゆる姿態でつながれた女奴隷。それにもっとも貴重がられた白人奴隷の別室に於ける、せり売する衣類を外した下検分。或は又、脱走しようとして、つかまった女奴隷達のおしおき、私達女性には口にこそ出さなくても、殆んど総ての人がこの奴隷売買、この世で一番あわれな宿命を反面、もっとも強く期待致しています。動く物品、物いう家畜の取引の姿を、史実と空想とを取りまぜて勇敢に、美しくしかも残虐に必ず載せて下さい。

（香川 鈴木愛子）

○僕は昨年四月号より貴誌を愛読

致して居る者ですが、特にアクロバットの演技及び写真を見たり、又アクロバットの練習を友達二人で練習し合って互にムチでなぐりあう、サド、マゾ、両傾向の青年です。僕がアクロバットにあこがれる様になったのは、小学校五、六年の頃、よく町角に十二、三才位と十五、六才位の支那服を着た少年が二人来て、支那手品を見せて後で着ていた服を脱ぎ、二人共薄い肉色のタイツと股の付け根迄切れ上った黒の海水パンツだけの姿で両脚を真横に開いて地面にベタツと着たり、両脚を開き体をグツと後にそらし手を地面につけて頭を股の中に入れ、足の前に置いた茶碗を口にくわえて起き上がる曲芸をしたり、又十五、六才の少年が体をそらし手を地面につけソリ橋をした腹の上へ十二、三才の少年が両手をついて逆立ちして足のひざを曲げて下へ垂らし、顔の両側へ足首を当てるの等を見てからです。又、その海水パンツやタイツ姿にも魅力を感じました。それを見てから友達と海水パンツ一枚になって御互に体を曲げて手を下につける練習をしました。が、なか／＼体が曲らず、友達が酔を飲むと体が軟らかくなると云うの

で酔を飲み飲み練習しますと、次第に体が軟く曲る様になりました。それから実話小説(サーカスの記事の出ている小説)や映画(特に角兵衛獅子の出で来る映画)を読んだり見たりしていると、貧乏な子供達が小さい時に曲馬団に売り飛ばされて、親方からムチでたゝかれながら飯もろくに与えられず危険な曲芸を仕込まれていて少年達に振替えて曲馬団生活をしていて自分に想いを走らせ興奮しているのに気が付きます。僕は「奇ク」三月号のマゾ通信に出て居た神奈川K・M君と全く同感です。最後に貴誌の御繁栄御発展を御祈り致します。(香川 T・K生)

○ 毎号の配本が待ち遠しくてなりません。小生次の様な事を希望します。それは女奴隷ものを載せて頂く事です。それも鞭で打たれたりする直接残酷なものでなく、いや／＼服従を強制される様な美しいものが良い。美しい女性が奴隷に落され、手、足、首に鉄環をはめられ、革衣を着せられて働かされる所。連鎖をかけられて競売される奴隷。反抗した罰にクツワをはめられ馬具をつけて働かされ、馬舎につながれる画や記事。

絵はなるべく写実的なものがよい。二、三月号の四馬孝氏の様なものをお願い致します。四馬氏の画集を臨時に発刊して下さいれば好評だと思います。概して縄紐を使うよりも、鉄環、皮、ゴムの様なものの方が魅力的ではないでしょうか。皮製の囚衣や猿ぐつわを沢山描いて下さい。外国物の魅力もそこにあると思います。(熊木美男)

○ 四馬孝氏は新しい責め絵画家として最も優れた方だと存じます。殊に二月号「悦虐の部屋二態」は傑作だと思います。決して外国画家のものに負けません。四馬氏に注文があるのですが、何とか連絡の方法はないものでしょうか。次に編集部私の希望を申し述べます(1)、縛り縄が色つきの紐の様なものが多く使っておりますが「萩千恵子」「中富綾子」両女史のものゝ如き、矢張り普通の縄を使って欲しいと存じます。(2)、緊縛の箇所が上半身に片寄り過ぎて居りませんか、両手から胸の辺を縛るのは良いですが、その他の部分が何となくもの足りない様です。一番物足りないのは胴中の縛りが不足して居ることです。萩千恵子緊縛

表情集の如きは最もそういう感じがします。縛りとしては女体の荷造りの方を買います。女体の荷造りを素肌でやって下さいませんかでしょうか。(3)、外国文献にならってコルセット姿等如何ですか貴誌のモデル中で一番腰の細いモデル嬢にでもボーズさせて、近頃流行のウエストニッパのSSというサイズものを着けさせて見ては如何ですか、ウエストニッパには「L」「M」「S」とあり、Sより更に小さい「SS」と云うのがありますから、これで引きしめれば二十時以下に細くなります。吾妻新氏の作品中にあったようなものが出来ると存じます。(4)、アクロバット応用の縛りも良いですが、アクロそのものゝ写真を出して下さい。ストリートと云って両足を一直線にするボーズがありますが、普通は身体を左右によじって足を前後に拡げている様です。之も本当に真横に足を拡げたボーズのものが最も上手な芸であり良いものなので、そこから、そうしたのも出していただき度く存じます。アクロの踊子をモデルとして本当の縛りをお願い致します。例えば逆折りの姿勢で(頭とお尻を密着するボーズ)両足首、両手足を一

緒に縛るとか、そういうボーズで胴中を縛って吊すようにする。或は平凡なボーズですが板の上に乘せて両手足、両足首を縛るとか、金輪をかけて括り板に緊いではうのです。これなら踊子は苦しくはないし、見た目には何となく普通のまゝのものすらも、サディスティックではないでしょうか。(東京 T・N生)

【マゾヒズム通信】

別府の荒井貞子様、はるばる東京から九州の「熊ん蜂」女王様に「ふしん」でお便り差し上げます。私は長い間、すばらしい女王様の出現するのを心待ちに待って居りました。はからずも四月号の読者通信欄にて「熊ん蜂」女王様のお便りを見て、私の長い間の願望を果して下さるのは貴女様よりほかにないことを知りました。私は一月にやと二十八才になったばかりの体重十八貫の健康な体の男獣です。(私がどうして貴女様のような高貴なサド女王様の前におこがましくも人間としての資格をもつことが出来ましようか)貴女様の年令といい、体格といいすばらしい理想的な女王様ですね。貴女様は「熊ん蜂」と仇名をいただく

程のすばらしいお尻をお持ちにな
っていらっしやるさうですね。私
はそのお尻に顔を押しつぶされた
らどんなにか幸福でしょう。こう
思っただけでも恍惚として来ます
どうかこの哀れなドレイに貴女様
のお恵みを垂れ給えませ。貴女様
のお許しさえ下されば、私は喜ん
で東京から貴女様のすばらしいお
尻の下敷きになりにとんで参りま
す。

「熊ん蜂」女王様

(東京・米山志朗)

何となくやるせないので奇譚ク
ラブを購入し読まして頂きました
四月号で僕の気持を充分楽まして
くれたのは「牛乳風呂の饗宴」で
した。風呂場の場面はたまらな
かった。美しい女の足の甲をなめ、
かつ足指ではなをつまみあげられ
た描写等、僕はもし、その当事者
になっていたらと深く考えてみま
した。風呂場の饗宴は私にはあり
ませんが、これに近い事は一週間
に一度未亡人にして貰っています
この二つの円柱をぐっと抱きしめ
又円柱ではさまれる時、限りなく
興奮いたします。しかしその未亡
人は美人ではありません。このこ
ろの願望は三十才から二十三才位

の美しい方にその様にされたい気
持です。人間というのは不思議な
もので女のごときは馬鹿にしてい
たのですが、恐ろしく女にいいめ
られたくなり始め、もし奇譚クラ
ブがなければ狂人になっていくか
もしれません。受験勉強とアブノ
ーマルな行為は両立しない様でし
たが、つかれた時この書物は僕を
救ってくれます。春日さんのボー
ズははがゆい感じがします。もう
少しお尻をあらわにして男性の顔
を押えてやって下さい。

(千葉 K・H 生)

荒井貞子様、四月号の私宛の通
信はなんと素朴、貴女は私の理想
にぴったりあてはまる素晴らしい女
性です。貴女の奴隷にしていた
ければ、一生鞭打たれる奴隷とし
て奉仕致します。貴女の大きなお
尻で顔を押しつぶされたら、息が
出来ない程苦しい事でしょう。ズ
ロースを口に押し込まれても、大
き過ぎて、半分位しか入らんと思
います。忠実な奴隷たる私は、女
王様の命令にはどんな事でも絶対
服従いたします。ビシ／＼鞭でひ
っぱたかれて、ひい／＼もだえ苦
しみながら思いのまゝに、もて遊
ばれたらと願っています。私は現

在失業中で毎日、家でぶら／＼し
ています。きつと貴女は私を呼び
つけてくれるでしょう。その日を
楽しくお待ち致して居ります。で
は又お便り下さいね。荒井貞子様
さようなら。(神戸 石本完治)

○ 蠱には森山美歌様、最近では春
日ルミ様等サジの女王様が出現さ
れて、我々マゾ男性は非常に喜ん
で居りますが、一般的に見てマゾ
男性に比しサジ女性の方が少くて
物足りなく思っています。実際
にはサジ女性の方はもっとおられ
るのでしようが、女性特有の謙讓
の美德で、強いて抑制されて居ら
れるのであろうと思います。然し
女性解放の今の時代に、そんな御
遠慮は無用だと思いますので、そ
うお方はドシ／＼名乗り出て頂
く方が御本人様もよろしいでし
ょうし、我々マゾ男性も随喜の涙を
流して喜ぶことですし、人助けに
なると思います。白木近子様、長
瀬昭子様、山田百合枝様等、御自分
より弱い者や目下の女性にサジの
対象を求めて居られますが、御自
分より体力の弱い、或は社会的に
地位のある男を奴隷として虫けら
のように思う存分征服し支配する
ことは、変なコムプレックスを感

ぜられるよりも、絶対の優越感を
もたれてキツト楽しいものに感ぜ
られることゝ存じます。マゾ男性
は決して自分の女主人様に対して
反抗したり、失礼なことをして女
王様の尊厳を冒瀆するようなこと
は絶対にありません。若し御不安
であれば予めその男の手足を縛っ
て自由を奪っておかれ、芋虫
同様に御自分の思うがままに何の
御懸念もありません。どうか御心
配なくドシ／＼男奴隷を使ってや
って下さるよう、広くサジ女性一
般のお方をお願い致します。その
意味では三月号で富山の戸破貞子
様のお便りを拝見して非常に心強
くうれしく存じます。私など若し
お許し頂けるならば、喜んで奉仕
させて頂き度く存じます。私は五
十才近くですが、それだけに社会
的地位も出来、経済的にも余裕が
出来て居りますので、御相手とし
ては御安心がいかれる長所もあり
ましょう。一面、私と致しまして
も名誉の為秘密を守って頂ける清
潔なお方を希望致します。身長は
五尺五寸五分、体重十八貫で健康
です。戸破貞子様その他どなたで
も結構でございます。東京から遠
いお方でしたら、旅費、宿泊費、
お小遣い、その他一切決して御心

配はおかけ致しませんから、是非御奉仕させて下さい。

(東京 敬愛生)

三月号の長瀬昭子さんの「私の体験記」中、最後の責めの状況は微に渉り細に入る表現で、それに加えて挿絵の素晴らしさ、唯被虐者が女であることが不満でなりませんが、私は自分をこの被虐者におきかえ、眼も鼻も口もびったり股で塞がれ(絹のパンティ着用)いくら突きのけてもこの責めを繰り返され、遂には断末魔のうめき声をもらし乍ら伸びてしまふ自分を想像するのであります。どうかこの様な責めを実際に与えて下さる様な女性の方は居りませんか、私は喜んで参上致します。

(Mの青年より)

戸破貞子様。貴女は何と素晴らしい方なのでしょう。「奇ク」三月号に貴女が長瀬様に呼びかけられた御意見を讀んで、非常に頼もしく思いました。貴女は人を組み敷くことが好きですって？ 然も一度男性になさって見たいとか：。貴女の御心配は御無用です。世の中には貴女の望まれる様な男性も案外に多いものです。正直の

ところ私もその一人なのです。私は貴女より少し年下の二十才になったばかりの一寸した二枚目(?)なのです。現在、経済的事情により某私立大学の通信教育を受けている学生服の愛好者ですが、最近になって私は世の御婦人方のために激しく責められんことを強く望む心が芽生え始めたのです。と云うのは、昨年の九月のこと私は地下鉄車内で中年の婦人から、いきなり変な誘を受けました。下腹を

されるならば、私は貴女の尻下に組み敷かれることを甘んじてお受け致します。又、たとえ文通なりとも許されるならば大変幸福に存じます。

(大阪・中野順)

はう手の感触、初めての経験に私は自分をどうすることも出来ず、誘われるまゝにふらふらとその方の後に従い、何処をどう歩いていったか全く夢中で、再び理性を取り戻した時は完全に自由を束縛された私自身を知ったのです。生れて以来、此の時程恥しめられた事はありませんでした。恐怖と恥辱、更に口惜しさのため年甲斐もなく涙を流しました。まかぬ種は生えぬ」と云いますが、僅かその一晚の出来事が何時の間にか私の躰をむしり込んでいたのです。私が自分の心に今迄気付かなかった異常な気持を発見したのは、そんなことがあった時から暫く経った日のことでした。今ではその気持は益々つのる一方です。若し貴女が許

○

僕は昨日始めて御誌を讀みまして、三月号マゾヒズム通信の神奈川K・M生氏と同じ意見なので吃驚致しました。僕も四・五年前から若い男の人(二十三才から三十才)の海水パンツ、キヤルマタ姿にあらがれています。股の付根まで切れ上ったピッタリしたキヤルマタ姿の、臀部と前のふくらみが何んとも云えません。とても快感を覚えます。アメリカ映画(サーカス映画)等は何度も見ます。日本のサーカスの男の人達はキヤルマタを余り穿かないので、アメリカ映画で楽しんでおられます。生れて始めてこういう雑誌を見て、こんな面白いものとは知りませんでした。どうぞこれから御誌にキヤルマタを穿いた二十七才位の男性がムチでなぐっているところなど画又は写真で載せていただけないでしょうか？ 僕のこの願をきいて下さい。今迄とっていた洋画雑誌、洋服の本等減して御誌をとろうと思っております。僕の趣味はスタイル画を

描くことと読書、音楽(クラシック・ジャズ)、映画です。将来はデザイナーになるつもりです。

(東京 A・B・C)

○

私は長い間男性の縛られた写真を見るのが出来たら、どんなに幸福だろうと念願していました。女性の被縛写真は会社へ友人が持ってくる講談雑誌のグラビヤや、大衆雑誌によく見られるので別に関心はありませんでした。が、男性の被縛は皆目なく、私は国家の法律で掲載禁止になっていくかも知れないと悲観してしまいました。それが「奇ク」を知るに及んで一朝にして私の希望が達せられた次第です。此の嬉しさは筆舌につくえません。又、一つは今迄男性でありながら、男性を裸にして厳重に縛り上げたいと秘かに思っていました。広い此の世の中に、此の様な変な趣味を持つものは自分一人の様な気がして、悶々とした日を送っていた次第ですが、「奇ク」を知り又その上被縛写真を見てからは、私と同じ性向の人達が多く存在している事が証明づけられ、今迄の社会観、人生観が一変し、何だか自信に満ちたとても云うか、心の安定感を得た様で、日常生活

が今迄にない明るく希望に充ちて生活出来る様になりました。御送付下さいました写真の中「男性マゾ番外」は私の性向に一〇〇%適合し、全裸のまま後手に縛られ男性に虐げられる姿は、私の最も希望するものであります。私もあの様に縛られ、責められて見たいものだと思ひます。私の最後の希望としましては、縛られた男性が全裸のむき出しの姿で屈辱の姿を是非とも見たい、「お前は法律を知らないのか、馬鹿者奴」と一喝されましようが、何か特別にその様な写真を御分譲下さるという訳には行かないものでしょうか。小生は何時も、世界を動し、人間社会に君臨する男性が、一筋の縄により全く自由を奪われ、無抵抗の姿で屈辱の縄目を受ける姿を見る度に、かくも偉大なる力を發揮する縄目！縄！蛇の様に動きひしひし喰込む縄が、何だか畏怖され圧倒され、神秘なもののように感ぜられます。『緊縛』『男性緊縛』こそは私達被虐者の永遠の憧憬です。きんぱくと口にするだけで小生の魂は激情に燃え立ちます。これからも男性緊縛の写真をどしどし発表して下さい。逞ましい全裸を後手に縛り上げ鞭打って下さい

(志摩生)

戸破貞子様、本誌三月号にて貴女様が長瀬昭子さんに宛てた読者通信を読み、如何にしても御呼びかけしないでは居られなかったものですから、失礼も省みず御手紙致しました。小生、少年の頃より異性に馬乗りに跨られる事に何とも云えない魅惑をもちましたが、生来の消極さと内気な性格が空想のみに満たされぬ満足求めて参りました。おてんばな従妹をわざと怒らせて馬乗りに跨らせてみたりした事はありませんが、お互いに合意の上でそういう事は未だ行つた事がありませぬ。合意の上で出来て、然も遊戯的にそれが自由に出来たらと何時も考えています。つきあう異性は多くてもこれが性に云えないもので、永久に空想のみで不可能の事かと思つています。然し、もしも貴女様を恋人にもつ事が出来たら、如何に有意義的な楽しい人生を送る事が出来るだろうと本当にお目にかかりたいと痛切に感じています。何とかして東京にお出でになりますか、小生は本年二十九才(数え年)の独身或る会社の経理事務を担当してい

てアパートで独り暮しています。本当の東京ツ子ではないのですが東京が一番好きで永久に東京で暮すつもりで居ります。映画、演劇等で喜劇を見て笑い、悲劇を見て泣き、音楽を聞いて楽しく踊って人間性に立脚した真の恋人、或は夫婦同志がお互いの性癖を知りあって永久に楽しい二人だけの秘密を欲し合つて行けたら本当にどんなにいい事かと思ひます。仰向けに転がされた小生の胸の上に貴女様が馬乗りに跨り、両腿の間に小生の顔をピッタリと挟んで、もがく度に小生の顔の上に貴女様のお尻がすえられてしまふ。そして奴隷の誓いとして接吻させられる遊戯等を空想してペンをおかして戴きます。(春木生)

フエチ通信

萩千恵子様。初めてお便り致します。毎号貴女様のお写真を拝し一人で底知れぬうれしさを感じて居ります。私はフエチシストの性分が多分にあります。それで写真を見る度に貴女様の着衣(主にパステイとブラジャー)が変つて居るのが気にかかります。私も女装したいと思つて居りますので、古くなつたものでも譲って下さった

らと思つてゐる矢先、着用品の下着分譲の告知が出て居りましたので貴女様に直接お願いするわけで、希望者も多い事でしようが、是非共特別にお取り計ひ下さい。モデルの写真と同じ品物でしたら私が着用して貴女様と同じ様なポーズで写真を撮つてお送り致します。尚、ふだん着て居られる品物でも結構です。パステイ、ズロー、ス、ブラジャー、シユミーズ、ストッキング等、何んでも宜しいです。それから一点でも二点でもお願い致します。和服用のものでも、又夏、冬、何んでもよろしいです。是非共、いや絶対にお願ひします。そうしたら、私はこの世に生れたしあわせをつくゝ感じる事でしよう。どうぞこの氣持を察して下さい。返信用切手を同封しておきましたから可能品をお知らせ下さい。首を長くして待つて居ります。すぐ品物を送つて下さつても結構です。では何分宜しく。

(下着愛好者)

小生当年二十五才の青年ですがストッキング、パンティの猛烈な愛好者です。特にストッキングについては、皆様の想像以上に愛ちやくを持っています、街を歩いて

いても、ストッキングを穿いた女性が多いので、いつもその足下ばかり見て歩いていきます。電車の中で私の前にそういう女性が立った場合、いつも私は切符をわざと女性の足下に落とし、少しでもストッキングに近づいて、かすかな香りでも楽しもうとするのです。パチンコ屋でも必ず女性の隣に位置を占め、玉をわざと落して足下にひれ伏すのです。或るビルディングの中の共同便所は私の絶好の休憩所です。その扉は下に隙間があるので化粧しに来る女性達の足だけが見えるのです。私は中で寝込んでゆっくり楽しみます。時々私の入っている扉の前で順番を待つ時があります。その時こそ私の天国です。ストッキングに包まれた足が鼻のすぐ前にあるのです。私はただ女性の足下にひれ伏すことが唯一の望みなのです。そしてストッキングに包まれた足を顔の上にのせて貰いたいと思います。又、戸破貞子様や其の他の方々が若し私の顔を太ももで挟んで下さったり、パンティのまゝで私の顔をお尻に敷いて下さったらどんなに嬉しいか、今では寝ても覚めても毎日それが現実に出来る事ばかりを望んでいます。

(名古屋 K・K生)

【ソドミア通信】

初めてお便り致します。昨年五月、巡回雑誌より廻されて来た「奇譚クラブ」という本を何気なくパラ／＼と目を通して行った時の小生の驚きを御想像下さい。勿論それ以来新刊はもとより、機会のある毎に古本屋の店頭を覗き歩いて、昨年六月号より二十八年度分は殆ど集めました。大体小生は今迄新刊の雑誌など、ついぞ買った事がなかったのです。金を出して買う価値を認めず、時にデパートで立読みする程度で充分だったのです。ところが「奇ク」が小生の生活に侵入するや此の信条も破れた。本に今迄になく御誌の発売が待たれてならぬようになったのです。何故もっと早く御誌の存在に気付かなかったかと残念でなりません。扱、小生は満二十七才の青年ですが、女性には全然興味が持てぬ性格なのです。当然その反面として若いむっちりとした美青年に異常な迄に魅せられるのです。従ってシユミーズ、腰巻、ブローズ、処女と云った言葉には全く無関心ですが、褌、パンツ、童貞となると、文字で見ただけで小生自身童

貞の故でしようか、体中が痺れる様な感激に包まれるのです。クラシック・バレエの男性踊り、手の躍動する腹から尻、太股に流れる筋肉の起伏に恍惚となり、世界美術全集の数ある絵画、彫刻の写真の中より、珠玉の如き男性裸像を見出しては深い溜息をついている小生なのです。願わくば貴誌に於て男性ヌードの決定版とも云うべき掲載され、我等ソドミストをして快哉を叫ばしめ給わん事を――。容貌、肉体共に至上のシャルマンは真新しい六尺褌をきりりと締めて、極めて自然な、そして芸術味を失わぬポーズで、然も光線には繊細の注意を払ってパチリと――、あゝ、思っただけでも胸が高鳴ります。モデルについては三月号の京都H・N、六尺褌愛用者の両氏は湖田氏を褒めて居られますが、小生は少々不満です。勿論、私も二月、三月号の同氏の褌姿には思わずギクツとしましたが失礼ながらどうも最負目に見ても美男子とは云えぬし、それに少し御年配と云った感じで今一つ物足らぬ事でした。同じく「寒夜の庭の擒」も不満です。ピンボケがひどく、モデルが弱々しそうでどうも迫力がありません。かえって三一

二頁の小じんまりした二葉の写真に魅力を感じました。柏山氏も云って居られる如く、若人の裸体程美しいものはあるとは思えないのです。二月号のソドミア通信の青葉氏は「全裸」を希望して居られますが、小生とて心からの願いは所謂「一条纏わぬ」にあるのは勿論ですが、それは同氏も云って居られる夢の又夢と諦めて居ります貴重なグラビア頁に詰らぬ外国女のレスリングなど一寸遠慮して戴いて、次号には何卒失望させて下さらぬ様お願い致します。三月号では「マゾへの胎動」「天狗鼻由来記」「巨根崇拜」等を一気に読んでしまいました。「天狗鼻由来記」は三条氏の弾力ある挿絵と相まって実に面白く、殊に一四二頁の絵には何時迄も見飽きぬ程感動しました。(京都 O・T生)

○ 初めておたより致します。私も毎号貴誌を愛読している一人です。私はソドミアでもなんでもありません。広い範囲から云えば或はソドミアかも知れません。実は私は貴誌二月号の読者通信欄に出ております、六尺ふんどし愛用者氏のように熱烈なる六尺褌愛用者です。六尺褌着用に関する写真はもとよ

り、遅ましい男の六尺禪姿を見る
とたまりません。たゞし労働者、
職人、漁師等の六尺禪姿は余り好
みません。インテリーの遅ましい
男の六尺禪姿にあこがれていま
然し、現在このような階級人は、
六尺禪は労働者か職人等の締める
もので、我々が用いるものではな
い様に思われている様で非常に残
念でたまりません。どうかこの様
な階級の人々も大いに六尺禪を愛
用していただきたいと思ひます。
又、貴誌にもその様な人々の六尺
禪姿のモード写真を大いに掲載し
てほしいと思ひます。

(東京 山路越雄)

○ 二月号の読者通信を拝見し、何
とお詫びしようとも取返えしのつ
かぬ不仕末を、異例とも云うべき
御寛大な処置をもってお救し下さ
いました事を知り、感涙を禁じ得
ませんでした。文才もないくせに
書くことが好きで、以前はあちら
こちらへ投稿していたこともあり
ましたが、最近では「奇ク」以外
へは絶対に投稿しない事を心に誓
い、それを確く守っております。
と申しますのも、アブノーマルな
私を本当に理解して戴けるのは「
奇ク」を措て他にはないことがハ

ッキリ解ったからです。もし不幸
にして「奇ク」を失ったとしたら
私は全く生甲斐のない灰色の人生
を送らねばなりません。誌上へ発
表させて戴きました数々の体験告
白も、その時の事実を只思い出と
なつて残っているだけ——又、現
在の経験も、明日になれば記憶の
中へ入ってしまう——そのキレギ
レのアブニストの人生をしっかりと
と緊ぎ止め、私共の生きる基盤と
なつてくれるのが「奇ク」なので
す。自分の告白を他の人に読んで
貰い他の人の告白を読ませて貰う
そのことが、何んなに大きな慰め
であるか知れません。アブニスト
のオアシス、云い古された言葉で
すが、それこそ「奇ク」なのです
二月号の私の「ソドミア通信」を
読んで下さった方々からのお手紙
の転送、真に有難うございました
それによつて私と同じ裸体愛好趣
味を持つ方のある事を知り、嬉し
く思うと共に心強くなりました。
二月号の通信を書いた後で、偶然
新東宝映画「日本の虎」を観まし
たが、その中に全く予期しなかつ
た「男の入浴シーン」があり、そ
れが又、かつての劇映画には一度
もなかった（私の観た範囲では）
克明でリアルな描写にすっかり魅

了させられてしまいました。カツ
ト数の少い割に時間は長く、二本
柳寛と中山昭二、その他二名の男
の全裸体が写されました。中山は
ずつと横向きで胡坐をかけたまま
でしたが、二本柳は浴槽を出ると
き後向きで臀部が完全に現れ、彼
の遅しい裸身がザブツと湯をきッ
て立ち上った時には、思わずドキ
リとしました。後の二人の中、一
人は後向きで胡坐をかいているだ
けですが、もう一人は脱衣してい
るところで、先ずシャツを脱ぎ、
次いで猿股の紐を解き、ゆっくり
と脱いで全裸になります。そして
浴槽の方へスタ／＼と歩いていく
のですが、後向きながら猿股を脱
いで真ッ裸になつた瞬間、私の昂
奮はその頂点に達しました。観終
つても暫くの間、私は夢に夢見る
気持でした。全く私が監督であつ
たとして夢想していたまゝを、内
川清一郎監督は鮮かに実現して見
せてくれたのですから、裸体に趣
味を持つ方には見逃せない映画で
しょう。只、残念なのは古い作品
なので（私が観たのは二番館なの
です）余程小さな町でもないと
もう上映の機会がないのではない
かと思われることです。

(静岡 青葉楓一)

○ 私は本年二十三才の男、極く最
近奇クを一読するや、忽ち大ファ
ンになつてしまいました。全く我
々の好みを巧みに取入れた独特の
内容にすっかり魅せられてしま
いました。殊に一般読者からの赤裸
々な告白文を初め、多彩なグラビ
ア写真など、好みは別として、素
晴しいものばかりだと思ひます。
そして世間に自分と同じ様な性向
の持主が意外に多くいる事を知ッ
て心強く思うと同時に、心の軽く
なるのを覚えしました。しかし、他
にも多くの人が云つて居られます
様に、私共にとつては、男子の写
真が各号にいろいろのポーズで載
せられる事が最も望ましい事なの
です。その点で一月、二月各号の男
性マゾの踏みつけられる場面、殊
に強く縛られたポーズ等は、或意
味で大いに私の氣に入るものの一
つでした。多くの同好者の好み、
願いを容れて、今後は男性同志の
責め場や、遅しき男性の禪姿など
どしどし載せて頂けます様お願い
申し上げます。小生は、先ず十七、
八才の少年や、又二十代から三十
代の青年の裸体姿及び禪姿などに
強く心を引かれます。そして少年
の裸体を求める気持の一方で更に

強く、遅しき浅黒い肌の男性的青年にたまらない魅力を覚え、そんな人の体中を愛撫し、心からのサービスをして又、彼からも愛されたらどんなに嬉しいだろうかと思ひ続けて居ります。一月号でしかの、あの告白文の「集まる人々」に於ける映画館内での男の前にしやがむ男として、自分もサービスをしたと強く思います。外にも一つ、私は、同性の裸体を縛ったり転がしたりして責めつけて思う存分楽しんできたという願ひをいつも持っています。要するに私には、遅ましき男性を思い切り愛しサービスしたいと思う願ひと若い男を愛し愛され、而も同性を責め度い等というアクティヴとパッシヴの両性が混然としていて自分では簡単に割切れない性向の持主なのです。

(名古屋 Y・H生)

【流腸通信】

毎号、流腸の記事にとびついて夢中になっている流腸マニアです。花村恵美子さん、羽村京子さん方先輩ヴェテランの記事に大いに啓発され感謝しています。僕の流腸に対するしびれる様な悦びと、憧憬は丁度この四月号二〇〇頁記載

の花村さんの「流腸に関するお便り」中の、N氏とそっくり同じです。美しい婦人が、羞恥にわななき乍ら、あわれな姿で流腸されている、その施術者になりたいと思ひ、又被施術者は女性に限り、男性は嫌である事なども全くN氏と同じです。だが同時に僕は美しい年上の女性からも、自分が流腸されたいえられない切なさを感じたいと強烈に願っています。昨年、病をえて入院した時、同室だったS夫人という三十少し過ぎた奥さんが、或る日「今日はいよいよ私、手術よ」と云っている処へ看護婦が二人でイルリガートルを重そうに持って入って来ました。僕は一瞬はっとしました。「Sさん流腸しておきましよう、手術ですからね。」他にも同室の人はいました。が、やはり、このS夫人が今、こゝで流腸されるのだと思うと、僕は思わずふるえました。看護婦がふとんの下半身をまくり、左下に横むきにして、着物をまくり上げた様です。僕は仰向いてジッと息を殺していました。「脚をおまげになつて、そうそうそのまゝで口をあけて力を入れないで下さい、すぐですから」S夫人のかすかな吐息が、きこえた様に思います。

沈黙が続きました。たゞS夫人のせつなげな息使いがきこえるだけです。「まだですの」「もう半分位ですよ」「ね、やめて我慢できないの」ふるえる声でした。この事があったから僕は流腸の事ばかり考え、何んとか自分もやってみてみたい(僕の病気は軽い肋膜炎だから)という願望が抑えられず、とうとう或る日、看護婦をつかまえて、三四日お通じがなくて腹がはって気分が悪いのだと、それについて「では流腸してあげましょう」と、いわせてしまったのです。そのくせ「流腸するの?」嫌だな、Sさん、ねえ流腸って気持ち悪いんでしよう」S夫人は、だまってジッと僕の目をみつめ、僕のかくされた願望を見やぶった様でした。それから半年以上、ついぞ僕は女性に流腸された事も、又、自分で女性に流腸した事もないままに、独りであれこれとやっています。どなたか同好の女性で流腸の悦びを共にする人は、いないのでしょうか。お互いにある流腸のわななき悦びを分かちあえたら、どんなにか素晴らしいでしょう。

(東京 田中)

初めてお便り差上ります。実は最

近御誌を初めて手にし、我々の求める処にピッタリと来る内容に一驚を喫した処です。私は御誌の持つ使命について若干私の立場から発表させて戴き度いと思ひて筆を執りました。世上往々にして此の種文獻は邪道視せられ、不徳義呼りされますが、私は其の様な見方が誤りだと思ひます。世の中には其れこそ救い難い本質的なアブの人もあるでしょうが、大多数の所謂アブは精神的にも極めてノーマルで只、感覚がアブと云われる方面に迄伸びている人々、即ち言葉を換えて云えば、精神的肉体的感覚の領域の広い人のことではないでしようか。私自身、男性として極めて健全な特に精神的領域を持っています。総ての生活はノーマルに持つことが出来ますし、又現在ノーマルに持っています。然し他の所謂ノーマルな人に比べて夫等が若干サド的であったり、又フェチ的であったりする人があると同様に、自己を診断して見ると傾向として多分にマゾ的である事を自覚します。骨に滲みる様な冬の寒さに堪えたり、傘も差せない様な暴風雨の中を歩いたりするのは苦痛であつて当然なのです。私に取っては快感なの

です。之は矢張り其の様な感覚の発達というより、発見という事が前提になると思われます。私が御誌に接してつくづく分析して見ると、私が幼時からエネマやアヌに興味と快感を持っていた事や、青春期に新しい汗の香気について極めて自然な好感を持っていた事について、又若干倒錯的な傾向からメンスバンドを使用して見た経験等、自然な精神的発育過程として首肯出来ます。勿論、経験した感覚は精神的発育に伴って他の感覚の発達により其の比重を失いはしますが、大きさを交えるものではない様で依然残って居ます。現在でもシリンジ、イルリガートルバンド、アヌス等に対する精神的な感覚は鋭敏に保たれています。但し、私の生長した環境のせいから我慢する条件を自分で作る程度に止まり、例えばどんな人にも之を暴露する事は理性が許しません。此の点羽村京子さんや花村恵美子さんが精神的マゾと云われる境地について同感です。御誌も広範囲な読者層を持って居られる関係で所謂、A感覚を純粹に追及する面丈に止まれないとは存じますが、存外多いかも知れないA感覚愛好者の為に写真、告白、読物共充実

をお願いします。二月号予告にて羽村さんのA感覚の秘密完結篇を期待して居りましたが、三月号にてお目に掛れなくて残念です。花村さんの手記では前にあった様なジリジリする様な感覚を告白されたものを望みます。只の刺激と期待だけでは読み返したいという感激を覚えません。写真では三月号の伊吹さんの浣腸シーンは成功だったと思います。ズロースの配置着衣のズレ具合、フオーム等構成としては申分ないと思います。

(東京 木村涼一)

【切腹通信】

○
原虹児氏の女腹切面をみた時、思わず、この叫ばずにはいられませんでした。これだけの女腹切面を口絵に組んで下さった編集部には拍手を惜しみません。何という素晴らしい！ 昨年八月号に法谷四郎氏の「切腹曼陀羅図絵」と云う一文がのっていましたが、あそこからヒントを得られたのでしょうか。そうだとすると此の絵の中

げなく、あらわにして腹切場の白布の上に座し、愛人である小姓に、自分の下腹を、降りつもる雪よりも更に柔かく清いむっちりした下腹を、かき切らせています。迫り来る激痛をこらえるためか、姫は左手に豊かに盛り上った乳房を血のにじむほどにギュッとにぎりしめ、右手には、己が黒髪をまきつけ、美しい顔に汗さえうかべて、白いうなじをうしろにのけぞらせ、かすかに開いた花のくちびるからは、固く喰いしばった真珠の様な歯さえかすかにのぞいていて、はありませんか。小姓はどうでしょう、小姓は姫の背後に廻って左手をのばして、しっかりと彼女の脇腹をかゝえ、右手に固くにぎりしめた腹切刀で、愛する姫のふくよかな下腹をギリギリと右へ右へ、力をこめて、かき切ってゆくのです。全く素晴らしい切腹面ですね。この絵を見てみると、サラサラとした衣ずれの音や愛する小姓の手によって自分の下腹をかき切られてゆく姫君の、深い法悦と激痛との入りまじった、絶え入る様な呻き声が聞えて来るような気がしますね。姫君はやがて、この叫びますよ。きつと「あゝ、私はもうだめ、苦しい、もう苦しいの、

早く、早くこのおちちを、お乳をえぐって。」その頃には姫君のまろやかな下腹は、朱の糸を引いた様に真一文字にきりさかれて鮮血がふき出して、白衣を真紅にいろどっているでしょう。小姓は愛する人の腹を断ち切ることの悲痛な幸福感に、眼がくらむばかりになりながらも、必死に意志をふりしぼって、苦痛にもだえて、つきたち、汗にぬれ、うちふるえている姫君の豊かに盛り上った乳房に、思いきり深く刀をグサツとつきたてるのです。あゝ！ この絵は全く素晴らしい。この絵を眺めていると、こんな空想があとからあとからまるで煙の様に湧きあがって来るでしょう。どうです？ 女性切腹マニアの諸兄弟、こんな絵が口絵に毎号一枚必ず欲しいと思いませんか。

(津島比呂史)

○
奇々四月号を拝見した。まず一番に目を通す口絵、杉原虹児画伯の「切腹曼陀羅図絵」の凄烈さに魅了されてしまった。ただ惜しむらくは左足の位置が不明確で(婦人の)何だか長すぎる様な妙な感じを受ける。右足指の股の開いたところ、このこまかい描写は左足の不備を補って余りあると云えるが

映画通信

緊縛映画予告篇

白石 稔

——何よりも緊迫感を与えるのは左手の位置だ。押し潰ささんばかりに握りしめた豊満な乳房、スバラシイの一語に尽きる。後方の人々が左手で被切腹者の左下腹をかえこんでいるのも実感がこもって

いる。しかしこのまゝの姿勢では上体が前へ倒れはすまいか——と心配になる。右手が己れの黒髪を固く握りしめているが、あの腕がお小姓(?)の首にかゝっていた方が、安定感がある様な気がする

のだけれど。随分文句を並べた様だけれど、今迄もう十冊以上奇クを讀み乍ら今回初めて投書したという事は杉原画伯のこの面に深い感銘を受けた故である事を告白します。本文では「アブホート一年生」

宇治みさ子(千原しのぶ)を救うため、單身忍び込んだ姫(千原しのぶ)も同様の運命に陥る。
○花ざかり男一代(大映)

○めくら狼(新東宝) R・テムブル

この映画については、本誌告知板にも掲載されていたがいよいよ封切されることとなった。謎の連続殺人事件をめぐる、人形佐七の捕物が展開される。この中で石黒達也扮するアブ画家は、芸人を種々荒縄で縛り上げては写生するスチールによると、柱縛り棒縛り等があるが、果して映画ではどの様に画かれているだろうか。

○秋葉の火祭(日活)

黒駒の勝蔵(三島雅夫)のために連れ去られ、賭博の景品にされようとする。

○やくざ若衆(東映)

(千原しのぶ、高千穂ひづる) 貧しい娘(千原しのぶ)は、父親と旅をするうち、峠道で父親を殺され連れ去られる。

○緑はるかに(日活)

(藤代鮎子、浅丘ルリ子)

日活初の色彩映画、高田稔扮する科学者の研究秘密を狙う悪漢団のため、その妻(藤代鮎子)と娘(浅丘ルリ子)は、拷問にかけられる。

○酔いどれ囃子(松竹)

(雪代敬子) 悪者にさらわれ、拷問される。

○爆笑青春列車(新東宝)

(筑紫あけみ) 悪者達の密談を盗み聞いている所を、発見されて監禁される。

○月笛日笛(東映)

(宇治みさ子、千原しのぶ) 馬術に敗れた恨みにもえる悪者のため、牢に閉じ込められた娘(

横恋慕する顔役(羅門光三郎)のため、再度にわたり誘拐される

○女性の敵(仏)

(M・メルカディエ) 売笑婦たちの元締の所から逃れようとして発見され、折檻される

○ヴェラ・フルス(米)

(D・ダーヒル) 馬車の中に隠された黄金を狙う悪者のため、同乗していた伯爵令嬢(D・ダーセル)は要塞へ連れ去られる。

○快傑紅はこべ(英)

(M・レイトン) フランスの貴族迫害時代、貴族夫人(M・レイトン)は検察官のため捕えられ、夫(紅はこべ)に救われる。

○野性の男(ブラジル)

(M・ブラード) 山賊のため町から誘拐される。他にも女達が連れ去られ次々と凌辱される。

を小生も最近カメラいじりを初めたので興味深く拝読した。最後に切腹マニア諸氏諸嬢の御健在をお祈りすると共に四月号の杉原画伯の如き迫真力ある口絵を今後も引き続き御掲載下さる様編集部の方にお願い致します。追伸、栃木の原月田鶴子さんの御投書も興味深く拝読しました。実感がこもっています。それにつけても原桐咲代さん一度フオートを奇ク上で拝見しましたが、その後拝見しません一度沈黙を破って戴きたいものです。又名古屋の縦井さんはパンティ姿がいいと云われますが、私はやはり和服というより女性独特の美しい曲線を示す乳房と下腹部太ももこうした点が見える方が好ましく感ぜられるのです。以上少々愚見を述べました。

(香川 西山一郎)

○不破和子さま、あなたは随分思いきったことをなさるのねえ、妾はせいぜい、みずばれをこしらえて切ながっているの、臆病でしよう?お逢いしてしみじみお話ししたいわ、でも駄目ね、せめて誌上ででもお手紙下さいな、きつとよ原月田鶴子さま、せつなくて泣いてしまいました、ご立派ですわ。

皆さま方、お腹を召される前後の言動やあなたのお気持ちなど、もっと詳しく載せて下さいませんか？
尊いお姿を口絵にもしてほしいんですもの、もう十年も経っているんですもの、お姉さま方のお名前も場所も許されると思いますわ、せめてお齡とご命日だけでも……だってお志は日本女性として妾たちの忘れてはならないことなんですわ。
(京都市 木村悦子)

○ 編集部の皆様にはお元気で御活躍の事とお喜び申し上げます。私は切腹マニアですが御誌「奇ク」は私に秘かなる喜びを与えてくれる唯一のものなのです。二年程前から毎号欠かさず愛読致して居ります。美しい処女の真白い腹部を真赤な鮮血がいろどって行くのを夢にでも見たりして一人空想していましたが、全国には私と同様のマニアが数多く居られるのを心強く思っています。奇クを知るまでは、私はこの変態を淋しく思いますが、私にはこの変態から離れる事が出来ず、自分の腹を切ったりして一人楽しんでいました。奇クを知ったことは私の大きな喜びです。今後共どし／＼女腹切の小説や絵、写真等を載せて下さい。それ

れから極彩色の腹切の絵もお願ひします。私には切腹の他にもう一つの変態的な好みがあるので。それは女性の脚に堪らない魅力を感じる事です。素足でなく白足袋をはいた女の足です。汚れない真白な白足袋、真赤な長襦袢に白足袋姿の若い女の姿態。この幻想は次第に強くなり普通の白足袋では既に満足出来ず、五枚コハゼや白絹足袋、白羽二重足袋等の高級な足袋に魅力を感じます。特に鮮血にまみれた白足袋は堪りません。私のこの思いを編集部の皆様満足させて下さいませんか、全国にはこの私の様なマニアも居られるかも知れませんし、奇クの新分野として取り上げては戴けませんか。白装束に五枚コハゼの白足袋をはいた若い女性の切腹姿、これこそ私の理想です。血にまみれた腸や着物、そして白足袋、全く堪らない興奮を感じます。白足袋を見せるために切腹する女性は男の様にあぐらをかいていなければなりません。高島田の腰元が以上の姿態で腹一文字にかき切り、鮮血にまみれている色つきの口絵を是非一度だけで結構ですからお願い致します。
(舞鶴 桜恵之介)

代理部月報

(大好評目下分譲中)

○萩千恵子嬢悦虐集○

手札型 五枚一組 三百円

○浣腸シリーズ五態○

キヤビネ版五枚一組 五百円

○連続縛り「強盗」○

キヤビネ版五枚一組 五百円

○メンスバンド着用○

フオート〔萩千恵子嬢〕

(手札型五枚一組三百円)

○禪美と緊縛○

手札型 四枚一組 三百円

禪立姿正面二枚、禪中腰一枚、禪緊縛一枚(モデル湖田平雄)

○マゾ・フオート○

「尻の下に敷く」

キヤビネ版 三枚一組 三百円

ルミ嬢の豊臀に押しひしがれてうごめくマゾ・ボーイ、咽喉首を太股で締められる、頭をお尻で押しつぶされる、片手をねじ上げられて、どっかとお尻が背中の中にのしかかってくる。何れもマゾヒストの決定版。

○アクロバット五態○

手札型 五枚一組 三百円

○浴室での浣腸五態○

手札型 五枚一組 三百円

○浅野末乃嬢悦虐集○

手札型 五枚一組 三百円

○バンド着用の縛り○

手札型 五枚一組 三百円

○裸女緊縛フオート○

二女連縛晒責

キヤビネ版 二枚一組 三百円
二人の美少女を柱に正面のまゝ縛りつけて晒ものにする。(モデル中富綾子嬢外一名)

○浣腸フオート○

漏斗による浣腸

キヤビネ版 三枚一組 三百円

施術者、春日嬢。被術者、伊吹嬢のコンビによる全く素晴らしい異色ある浣腸フオート、十数態の中から特に秀抜なものを選んで提供。

○萩嬢ストリップ縛り○

キヤビネ版 三枚一組 三百円

均整のとれた優美な姿態が生々しい緊迫力をもってその美しさを皆様へ訴える緊縛フオート。

二月号の切腹通信で女腹切の情景を描いた投稿がありました、あのような空想や幻想的なものも結構ですが、小生の最も好むところでは史実に基いたものより取材したもの、島山勇子、溝口与之、吉村れつ等の切腹に着想を加えたものが実感があって大変好ましく思われます。小生の最も好む吉村れつの例をとって記して見たいと思います。奸悪人宮部父子を仆したのであるから、当然理はれつ女にあつても、掟の前には死罪は免れず、縛首なるところを奥方の願により、特に士分格をもって切腹仰せつけられたのであるから、当時女としては得難い晴の死であります。彼女は喜んで死に赴いたと想像されるのであります。身分ある武士の最期と変らない取扱いを受けたことも事実でしょう。当日刑場とされた切腹場の情景はもとより検視役人、介錯人の風俗には充分着想を加え、れつ女の死装束は白無垢とし、髪はおすべらかしの下髪とした方が最もふさわしく死の座は畳二枚程度とし白布を敷き白木の三宝に九寸五分の短刀側面に検視役人、れつ女に対して正面に畏る勝之助を配し、周囲の情景は刑場らしい形をとること。

切腹の際のれつ女の構図は半裸になることは避けて、下肢はもとより上肢をあらわさず、懷を寛げて乳部と下腹部は充分露わにして、右手を右脇に当て九寸五分を左下腹部に突き刺した瞬間を画き、髪は乱れと共に苦悶の表情よろしく血潮は僅かに膝に流出した程とし介錯人は除ろに太刀を上段に構えたところ——。以上の様な構図が小生の日頃描く女腹切の最も好むところでした。こうして、史実より取材したものこそ実感があって大変好ましく思われます。女腹切には白無垢着用は欠くべからざる条件であることを附記しておきます。どうか向後、女腹切の画帳を出版される際はこうした構図も是非お願い致したいのです。大変長々と書き連ねましたが、どうかこれが些かなりとも参考となりますれば一切腹マニアの喜びとするところで、編集部の皆様の今後の御健闘を祈って止みません。

【読者通信】追補

(豊岡市 M・M生)

四月号の四馬孝「白い奴隷」の絵と文は大変よかったです。以前の「体操倉庫」滝麗子画も素晴しかったです。三月号の滝さんの「売られゆく女奴隷」の絵も好きな

もの一つです。今後とも女奴隷ものをシリーズ式の絵や写真では非お願いしたい。二月号の「姑娘来了」もあんな作り話としてではなく、ほんもの話として絵と共にのせてほしいと思います。四月号の四馬孝「白い奴隷」出来れば女体の競売されるところの絵がほしかったです。古今東西を網羅した女奴隷の売買ものを今後に期待します。

(名古屋 港生)

荒井貞子様、御通信うれしく拝見いたしました。慈悲深い女御主人様、恭順な奴隷たる私は御主人様の仰せには絶対服従致すことを約束申し上げます。慈悲深い御主人様、貴女の空想的な思いつきを奴隷の身に試られ、貴女様の気儘な欲望の満足に役立つよう御仕込み下さいませ、恐れおののき乍らも楽しい期待に満ちて奴隷の肉体をば、どうぞと貴女様の気まぐれのまゝになさって下さいと、厳しい御主人様の前に差し出すのです。慈悲深い御主人様、お目にかゝりとうござります。そして、貴女様のお言葉を聞きたいと存じます。私の願いを聞いていただけるとしようか。(神戸 石本完治)

○

私は数年来乗馬に熱中している二十九才の女性です。乗杉さんと沼さんの女性の乗馬についての御誌の記事は乗馬女性の間で評判になっていきます。其の後乗杉さんの続稿一向に出ませんので早く拝見したいものだと思っています。お友達の話を総合致しますと乗馬愛好の女性には乗馬服と特に長靴に対する強い愛着、鞭と拍車の使用による優越感と支配感に満足を感じます。それから長靴をはいて逞しい馬に跨って男性を見下して激しく鞍で圧迫摩擦される気分はとていゝものです。でもこの快感は人により又馬の反撞の強弱によってかなり違う様です。読者の中には乗馬女性も居られると存じますので色々御意見お聞かせ下さい。

(大阪 Y・S子)

しばらく御無沙汰いたしておりました。「奇々」が毎号「切腹物」を取扱いつつ、躍進しておられる御様子を、心から嬉しく存じております。兵頭様、田谷様、須藤様、児島様、井上様、大島様、法谷様等の男性側からのいろいろな角度からの御発表は、実感とその裏付けとしての考察を伴って、考えさせられる点が多うございます。

次号(六月号)も特大号です (定価百四十円)

異色雑誌の王座としての貴族を示した本誌は、更に新人作家、女流画家、並に新しいモデル陣の全面的な応援を得て、こゝに斬新な口絵、本文を躍動させ、マニア垂涎の超弩級号を御覧にされる筈です。何卒刮目して御期待下さい。

それに、女性側を代表する川合伊都子様の御精進ぶりは敬服のほかございせん。「草双紙に見る女腹切」の連載は、上記の男性側の方々のお筆の跡とともに、切腹資料として残るものでございましょう。その伊都子様より、いつぞやこの「通信」で、私との切腹情景を幻想してお呼びかけいただきましたこと、嬉しく嬉しく存じます三月号にお書きあそばした「S A

◎懸賞入選作品について

都合により、入選作品を左記の通り訂正いたします。

燭火(中川房夫)入選取消し、そのかわり野戦営倉―第一部、孤独の青春、第二部、真空地帯の女―(勝浦美佐緒)を第三席入選に追加、破戒の楽しみ(妻木進)の入選取消し、そのかわり恵まれた幸福(鈴木小五郎)を第四席入選に追加いたします

(編集部)

PPHO日本版」の心躍るような構想と描写は、貴女様のこれまでの作品の中でも、出色の物だと存じます。四月号の口絵、杉原虹児様の「切腹曼陀羅図絵」―ハツと思わず、息を呑むような見事な御作。この一幅の絵から、いろいろな幻想を引き出すたのしさがござい

ます。「切腹通信」で初めて御名を知りました原月田鶴子様―切腹の御体験を、なにとぞ詳しく一編の作品におまとめ下さいませんでしうか。貴重な御体験を、資料としてお残しになる選ばれたる女性だとおうらやましくさえ感じます。津島比呂史様より、多くの方々の御名をあげられて、「今一度ペンをとって活躍せよ」とお励ましのおことばがあり、その中に私の名をお挙げ下さいました。私ごとき者の拙い作品が、お心にとまっていたというだけで、ありがたいことに存じます。実は、亀岡先生の「女腹切八景」を真似て、

史実の中から作品をと考え、その後あれこれと漁って取りましたようなわけでございませう。ようやくまとまりましたので、採否のほどはわかりませんが、編集部あてにお送りいたすつもりでおります。幸いお目にふれることになりなれば、御批正下さいますようお願いします。中康先生の御作を全くお見かけしなくなりましてから久しうございませうが、再び御教示の機を切望いたしております。

(瀬川泰子)

三月号菅原春夫氏、四月号柴山秋夫氏の御意見に対する編集部の御回答は、実に適正にして明確なる点、誠に当を得たる事と、敬服致しますと共に、充分の満足と感銘を得ました。唯一つ気になりました事は、柴山氏の「読者交際の仲介は邪道である」との御意見であります。此点読者中には、賛否に種々御意見が、おありかと存じます。私も其の一人として、甚だおこがましい事乍ら私の考えを申述べさせて頂きとう存じます。雑誌の刊行が、本来の使命である事に、勿論異論ありません。そして多数読者の為、奉仕機関の一部として、飽迄サイドワーク的な

現在の通信欄の斡旋程度なら、雑誌刊行たる本来の使命を果している限り、邪道とは申せないと思えます。前述の柴山氏の御意見が、この程度の斡旋を指して、申されているとは思いませんが……弊害があるか否かは、善用するか悪用するか、其の個人の問題でしょう。中には悪用する人もあるかも知れない。然し、反面多数の人々は大の恩恵を受け得る事もあるでしょう。私達は読書を通じて、必然的に同好の方々と、善良にして明い交歓を深め度いと常に欲求する事は、自然の人情です。文通に依り、人格的接触に依り、其処に私達の真の友を得る事は、どれ程私達に希望を与え、元氣附ける事でしょう。孤独と寂寥から解放され、明るい希望と自信を持って明日への人生を、出発する事が出来ず。単にプレイのパートナーを求め、善いのみ狭い交際でなしに、善良な明るい視野から、お互に相手と語り合い、理解し、交友を深め知己を得て、各方面に亘り有形無形に、恵み合う事の出来る交際でありたいと思えます。兎角世間から変態的として、色眼鏡で見るとしようが、と言って世間の顔ばかり気にして、自ら卑屈に

なっても始まりません。其処は何んとか良い方法を、案出致したいものです。此の意味から、三月号の菅原氏御提案の、全員名簿の作成、希望者同志の交歓等、全面的に賛成です。尙又文通幹旋機関等も、是非実現さして頂き度いと思ひます。要は以上の機関も大変善い面もある事です。編集部各位の御指導の下に、私達有志一同結束して、実現の爲善処しようではありませんか。(京都 平山春夫)

奇く編集部の方々に抗議させて頂きますわ、四月号の読者通信に私や荒井貞子様の方がマゾの方に書いてありました。男ばかりの読者なら結構ですが、女性の読者も半分以上居る事をお忘れないう様に。私達は断然サドの方に下さい。サドの女性も案外多いのですよ、だって女って生れつき残酷に出来てるんですもの、機会がないだけですわ、神戸の石本完治さん、東京の直木昭さん、お前達は私の奴隷として仕えたいと歎願してるのね。サドの女性は浮気だからいろんな雄を苦しめたいわ、お前達もいずれ私の変態遊戯用のけだものにしてやるわ(中略)荒井さん、戸破さん、長瀬さん、

私と仲よしになつて下さい、三人で組んで男や女をうんといじめ恥しめてやりましょうよ、私の思いのままになる三吉と安と京子はいつでも貴女方の道具としてお貸ししますわ。(森山美歌)

編集部より、颯爽とした近代的な美貌のお写真拝見。原稿は沢山頂いていますが、余りリアルなもので誌上に出せないのです。次回はもう少しお手やわらかなのを願ひ出来ませんか。サジスチンをマゾの項に入れたことについてのオイル・サド女性からの抗議は甘んじて受けます。男性本位の世の中に対する鬱憤に、一つマゾヒストをうんと苛めてやって下さい。

【告知板】○白石氏へ、総目録はいゝと思ひますからお送り下さい。○戸破さん、お便り拝見いたしました。貴女のおっしゃる時を待ちましょう。○真鍋氏へ、貴方宛のお便りをお預りしています。○発行所を突然訪問される方がありますが、どんな用件でも無駄です。すからお断りいたします。最初すべて文書にて願ひます。お会いする必要があれば当方より御連絡します。○モデル志望の方は編集部宛御申込み下さい。詳細につき御返事いたします。

編集手帖



○いつに変わらぬ御愛読、先ず厚く御礼申し上げます。本誌のあり方については、豊富に褒貶いろいろ議論もあるでしょうが、広い日本で二冊位、グループの代弁者としての雑誌があつたつていいと思ひます。

○熱心な読者の方々の御忠告が山積、全く感謝の言葉もありません。せいぜい御期待にそむかないよう努力いたします。いずれ一括して誌上をもつてお礼をかねて回答したいと考えています。

○本誌の石垣を築くような着実な歩みは、本号より新しく開巻國家北原純子女史を迎え、更に多量の新人モデル嬢の威力を加えて、今後の活躍が期待されます。

○投稿作品については、事情の許すかぎり全力を挙げて拝見の上、スピーディーな回答をいたすよう努力しておりますが、なにしろ件数が多いのと、即決出来かねるものが多く保留しているものが沢山ある実情です。ので御諒承下さい。いゝものは逃がさず採用したいという気持は失われつつあります。

○吾妻新先生の「夜光島」は皆さまでに惜しまれつゝ前号で完結いたしました。目下お忙しい仕事の寸暇をさかれて翻訳をしてお下さつて居るそうなので、いずれ、あの親しみのある先生の麗筆で誌上を飾ること

が出来たらうと思ひます。

○かつて「淫火」「私の求めた男」を連載して好評を博しました松井彌子先生が、想を新にして新しい連載小説を執筆下さるよう連絡を頂きました。今迄と違つて、うんとロマンチックなものを手がけたいと言つておられるので、一カ年連載の「淫火」以上の傑作が寄せられるものと思ひます。

○本誌では、口絵、本文共すべてオリジナルなものであると、いさゝか自負しておりますが、今後は諸外国からも、資料として珍重されるようなものを作成すべく努力する考えです。中々完璧のものには程遠いものとは思ひますが、口絵は本誌獨特のものを打ち樹て、ゆこうとする意気込みだけは買つてやつて下さい。

○本誌が一旦発売されるや、数日を出でずして読者通信が殺到します。他誌に見られない十数頁を読者通信に解放を断行して極力、掲載につとめていますが、最近長枚数のものが多くて、通信欄に無理なものが生じてきましたので、こういった文章も適当な誌面を設けて次号あたりで大々的に紹介しようと思つています。

○二、三回で止めようと思つていた特六号が意外にも続いてしまつて、今更減頁も出来なと思案してはいますが、どんなものでしょうか。いつの世でも進歩的なものに迫害はつきものです。本誌も皆様の御協力により難関を突破してゆきたいと思ひます。

(編集子)

課題原稿募集

(皆さまの共同の広場建設のために)

【創作】

異色ある題材を提げて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限る。採用原稿には掲載後相当稿料を支払います。

【異常体験記】

一生に一度あるか、二度あるか、肌に粟を生ずる真実の体験記、或は異常なる人生体験記、幻想や夢はとりません。(二十枚迄、三千円)

【エッセイ】(小論文)

本誌の巻頭を飾るにふさわしい啓発的にして人をうなづかせるに足るもの。(二十枚迄三千円)

【アブ・コント】

告白でも、創作でも、見聞でも、形式はどんなものでもよろしいですが、奇智に富んだ雅味のあるもの、懸案はお断りします。(十枚迄千円)

【ラブ・レター】

送り先はどなたでも結構、猛烈に甘いものをお送り下さい。(十枚迄千円)

【私は訴える】

皆さまの胸に持っておられる諸々の悩みや御意見、主張等を発散して下さい。本誌ならでは取り上げないような内容のもの。(十枚迄千円)

【口絵並に挿絵】

面材はサド、マゾ、浣腸、切腹等御自由です。優秀なる作者には継続的に御依頼いたします。

【ローカル・レポート】

新聞記事の切抜き或は見聞等、皆さまの興味を持たれた事件につきお知らせ下さい。掲載の分につきましては本誌二カ月分乃至半年分贈呈します。

(開放した誌面を御利用下さい)

奇譚クラブ編集部

【編集者或は執筆者への公開状】

適当なものは回答と共に発表の上、(十枚迄千円)モデル嬢に対してでも可。

【映画、雑誌通信】

映画や雑誌の中で特に興味を持たれた事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には、本誌二カ月分乃至半年分贈呈します。

【私のイメージ】

熱烈奔放なイメージをぶっ放して下さい。イメージですからどんな荒唐無稽なものでも、奇抜なものでも歓迎します。(十五枚迄千円)

【実写写真】

御自身写真されたものに限ります。裏面又は別紙に説明とデータをお忘れなく、掲載分は相当謝礼。

【アイデア】

将来本誌にて企画すべきもの一般につき出来るだけ詳細に、優秀なものに本誌半年分乃至一年分贈呈。

【告白、体験、手記】

本月号百三十三頁に懸賞募集中、御参照下さい。

【読者通信】

編集者、執筆者、投稿者への便り、前号の批評、希望、或は編集や雑誌のあり方に対する御意見等掲載分に対する私信は支障なき限り、つとめて御取次、転送いたします。読者通信は封書でなく葉書でも結構です。

○締切は毎月五日、原稿の第一頁に応募の種目を附記して下さい。

◎本誌月極直接購読料◎

一月分一冊(送料共)百四十円
 三月分三冊(送料共)四百二十円
 半年分六冊(送料共)八百四十円
 一年分三冊(送料共)千六百八十円

本誌を毎月号御買洩れのないよう確実に御入手になるため、最寄りの書店へ御予約下さるか、直接購読の御申込みをして下さい。半年分前金御申込みの方には、責め写真二枚一組、一年分御申込みの方には、五枚一組、サビス品として贈呈申し上げます。

昭和二十五年十月五日 第三種郵便物認可
 昭和二十六年一月廿四日 日本国有鉄道特別取扱誌承認

奇譚クラブ

第九巻第五号
 毎月一回一日発行

五月特大号

定価百四十円

昭和三十年四月二十五日印刷
 昭和三十年五月一日発行

編集人 箕田 京二
 印刷人 上田 庄之助
 発行人 吉田 稔

発行所 曙書房

大阪府堺区内菅原通四ノ三〇
 振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。